

2012 年度 徳島大学 総合科学部
社会創生学科 地域創生コース 実習報告書

「災害の地元学：ポスト 3.11 における地域防災」

はじめに

徳島大学総合科学部 内藤直樹

本実習報告書では、科学技術が明らかにした新たな災害リスクにさらされた日本の地域住民が、その状況をどのように認識し、いかなる対処をとろうとしているのか報告する。そして地方の大学が人類学を含む人文・社会科学的なアプローチから地域の防災・減災や地域活性化に貢献する可能性について考察する。その際、「災害」を構成する自然科学的な側面(災害素因)と社会科学的な側面(脆弱性)を識別する視座[アンソニー・オリヴァー＝スミス 2006:7-8]に注目し、地域固有の防災潜在力を活用した防災・減災にむけたアクションリサーチの可能性について検討する。

2012年発表された南海トラフ巨大地震の新被害想定は、さまざまな地域に大きな衝撃を与えた。徳島県沿岸部はリアス式の海岸が多いこともあり、広範囲の地域が巨大津波のリスクにさらされている。この地域は過去数百年間に5-6回の津波に襲われ、そのたびに多くの被害を出してきたことが、古文書・石碑や昭和南海地震経験者の記録などから明らかになっている[cf. 田井 2006, 井若・他 2007, 深井 2008]。

実習の調査対象地として選定した阿部集落は、付近に比較的大きな岬があるという地形的な特性から、これまでに記録されている最大の津波は高さ約3mにすぎず、昭和南海地震の際にも死傷者を出さなかった。それゆえ、これまで住民による津波対策はなされてこなかったばかりか、行政による津波対策事業にも消極的な態度を示し続けていた。ところが本年2月に発表された南海トラフ巨大地震にともなう新たな津波想定では、この集落に徳島県で最も高い最大20.2mの津波が到来する可能性が指摘された。具体的には、南海トラフ巨大地震発生後、わずか12分で1mの津波が到達し、30分後には20m超の津波が押し寄せることが予測されている。そして集落の人家は全て浸水予測域内にあり、最も高い建物でも13mの高さしかない。

3.11以降の新たな基準でなされた南海トラフ巨大地震の予測は、これまで津波被害がほぼ無いであろうと認識されていた阿部住民の災害観に大きなインパクトを与えた。すなわち現在の阿部住民は、この新たな被害想定をうけて、これまでと異なる災害観を形成し、新たな対処を模索せざるをえない過渡的な状況にある。そこではどのような災害観が形成され、いかなる防災・減災の取り組みがなされているのだろうか。

阪神淡路大震災経験者による語りを分析した矢守[2010]は、被災経験について事後的に遡及する際に、それまでになかった「活断層」という場所が実体化した点を指摘した。阿部の場合、集落の背後にある山間部に沿って伸びる海拔20mラインが、人びとの生死を分ける境界線として実体化していった。それにもとづき阿部集落の有志が、集落から海拔20m域まで上がる避難路20本を速やかに整備した。今回の事態は、県や町の行政担当者にも予測できなかったため、2012年11月時点ですら行政による有効な対策は講じられていない状況にある。このようななか、阿部の住民は南海トラフ巨大地震想定後のわずか期間に自主的に避難路を整備したのである。徳島沿岸地域を概観しても、これほど多くの避難路を住民が主体的に形成した例はない。

では阿部の人びとは何故、これほど早く避難路を整備することが出来たのであろうか。阿部は 60 歳以上人口が 60%程度の過疎高齢化が進んだ集落である。避難路整備をしたメンバーもまた 60 歳台と高齢であった。だが彼らは、過去に土葬場への道や材木の切り出し口などに使用されていた廃棄道の位置を記憶しており、それを避難路に再利用していた。また 20 本もの避難路を整備したのは、移動能力が低い高齢者が、地震発生時にどこからでも速やかな避難ができるようにとの配慮に基づく。

彼らの目的は、明日発生するかも知れない津波の来襲に備え、手持ちの資源を用いて可能な限りの準備をすることであった。だが現実問題として地震・津波の発生を正確に予測することは困難である。それゆえ地震・津波は今そこにある短期的な危機であると同時に 10 年後・20 年度に発生するかも知れない中・長期的な危機でもある。ところが阿部は過疎高齢化が進行しており、中・長期的に見れば集落自体が縮小・撤退する危険性さえある。だが防災・減災を目指した住民主体の試みを長期にわたって継続するためには、防災・減災の担い手を将来にわたってリクルートする体制を確立することが重要である。すなわち過疎地域における減災・防災活動は、地域おこしとともにおこなう必要がある。

近年の日本における巨大地震のリスクに対して、自然科学だけでなく人文・社会科学からのアプローチすることの重要性が指摘されている[科学技術・学術審議会 2012]。また近年の地方大学は、地域の実践的な問題解決に対して中核的な役割を果たすことが期待されている。本報告書は、そうした状況のもとで、地方大学の社会調査士資格関連の実習のなかで、人類学の立場からある種のアクションリサーチを実施した事例を報告する。そうすることで、日本の地方大学における防災・減災の実現に向けた実践的研究と人類学教育を兼ねた「災害の地元学」の可能性について考察したい。

第1章 過疎・高齢化地域における住民主体の防災活動に向けて

生杉 笙・野村 佳季美・藤島 慶祐

目的と方法

徳島県美波町阿部地区は、徳島県の最南部に位置し、太平洋に面している。東海・東南海・南海地震発生への危惧が叫ばれている中、2011 年末に発表された南海トラフ型地震の新想定では、この地域に徳島県下で最大規模の津波が押し寄せるとされている。

これに際して、阿部では防災活動が開始されていく。阿部で行われる防災活動において特徴的であったのは、行政の手を借りず、地域の住民が主体となって自主的に活動がなされたことで、迅速で効率的な対応ができたということである。そのようにして、多数の避難路を地域に建造した阿部における防災活動は、多くの報道機関に取り上げられることとなった。

ここでは、徳島県美波町阿部地区を有名にした「マイ避難路」造りがもつ社会的意味を、造り手たちの視点から再考していく。さらに、過疎・高齢化が進む地域における住民主体の防災・減災活動を行う上で、見過ごされがちな要素について考察する。

そのために、避難路作成の経緯および造り手の意識についても検討していく。現地調査は第一回を2012年8月20日、第二回を11月11日に行い、避難路作成者に対する聞き取り調査を実施した。

避難路の位置と数

はじめに、阿部地区における避難路の位置を示した地図を記載する。これは、阿部自主防災会が作成した防災マップを簡略化したものである。各避難路のルートおよび阿部における海拔 20m ライン、県道の位置を示している。

阿部では南海トラフ型地震が発生したとき、予測される津波の高さが 20m 級であると発表されている。地図を見ると、阿部では県道の位置が海拔 20m ラインを超えるように存在している。そのため、阿部ではこの県道へ向かって集落のどこからでも逃げることができるように、道を整備して接続した 20本の避難路が作成された。このようにして、阿部に暮らす住民が集落のどこからでも津波の被害から逃げることができるようにしているため、阿部の避難路は「マイ避難路」と呼ばれている。

また、地図には中央集合地や西集合地といった場所が記載されている。これは、津波から逃れたあとの一次避難場所である。もし津波に襲われた場合、その被害から逃れるために、長時間高台に避難し続けていなくてはならない。そのため、阿部では中央集合地などの一次避難場所を設け、この場所にある程度の備蓄をしている。第一の津波被害から逃れたあとは、この避難場所まで移動して救助や救援を待つことができるようになっているのである。

避難路を県道に接続するという発想は、ここにもう一つの意義をもたらしている。

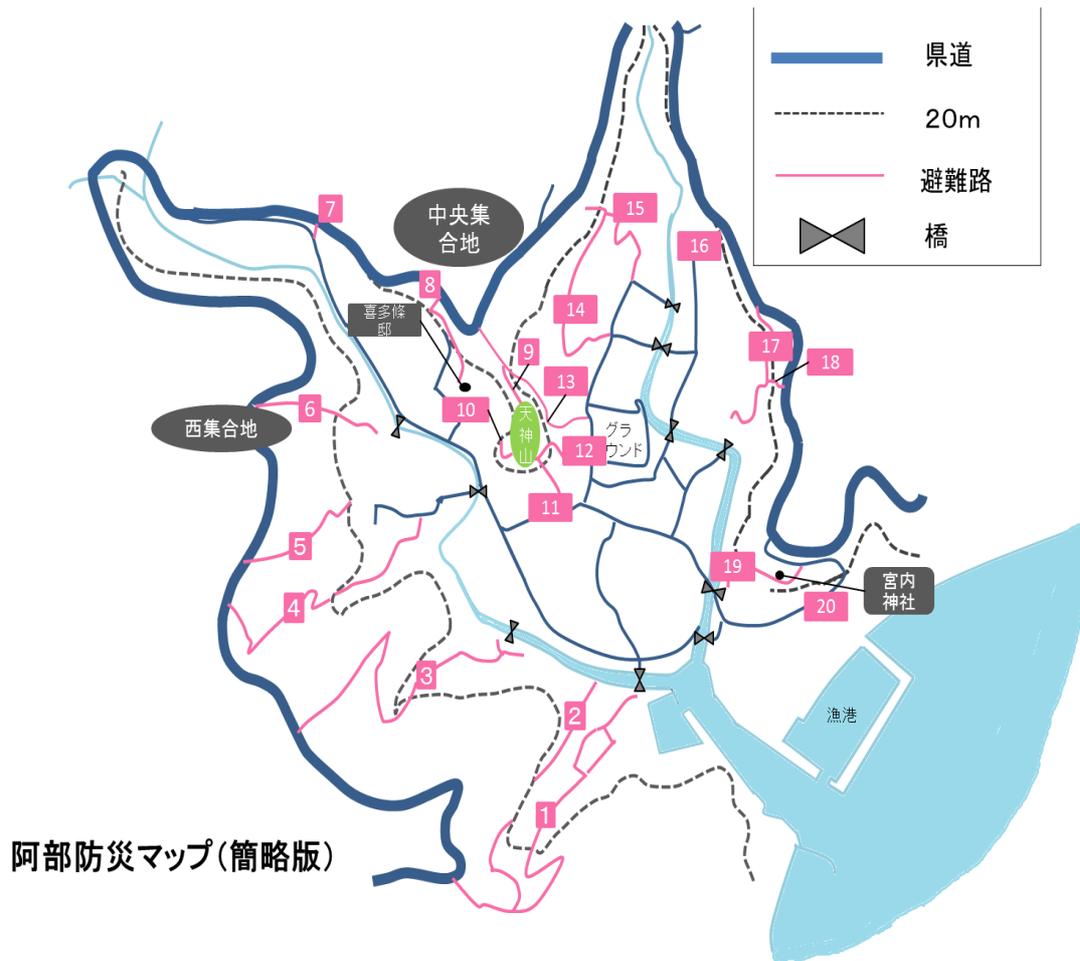


図1 集落における避難路の位置

各避難路の概要

次に、阿部における「マイ避難路」の概要を記載する。一部、明確な作成時期がわかっていないものがあるが、時系列は揃っており、並びもその時系列に準拠している。この各避難路の概要は、避難路作成者への聞き取り調査から得られたデータに依拠して記述したものである。

〈避難路概要〉

亀岡路

作成日は不明だが、阿部の学校を新築した時に作られた工事用の道である。整備者も特にいない。阿部にある学校の新築のために、重機などを搬入する際に必要になったことにより、暫定的に作成された道であり、工事終了後になくす予定であった。しかし、阿部住民の意向により、そのままにされた。しかし、この道は盛土をした上にブルーシートをかぶせて、その上を埋め立てているだけという構造である。そのため、地震がきた場合に崩れて使えなくなるのではないかとこの危惧が住民の間で存在しているようだ。しかし、Sさん自身は大丈夫であると考えている。

また、この道は松下路の予備道その1として設置された。

蔭谷路

2011年の11月末に作成が始められた避難路。初めは現阿部自主防災会長のKさんによって、自主整備が始められた。その後、Kさん、Sさん、Dさん、Mさん、Uさんによって手が加えられ、今の避難路が完成した。

もともとは、土葬時代の共同墓地だった頃に用いられていた赤線（アカセン）と呼ばれる公衆用道路だった。焼場につながる道としても用いられていたようである。ほとんどが公衆用道路であるとされているため、Sさん曰く、地権者はいないといってもいいとのことだった。

Kさんがこの避難路を作成するに至った契機は、3.11東日本大震災が起これ、その惨状を目の当たりにしたことによる。「もし阿部が同じような災害に見舞われたら・・・」と考え、危機意識が変わったとのことだった。また、奥さんが足を患い、あまり歩けないことも気になり、避難路の自主整備に踏み切ったようだ。

この避難路の作成が阿部で一番早いものであり、自主防災が設立する前の段階で、すでにKさんが自主整備を始めていた。

八軒屋路

2011年の12月ごろに作成された避難路。初めはZさんによって自主整備が始められた。その後、Zさんとともに八軒屋の住民が手を加えて、今の避難路が作成された。

昔、陸路があまり整備されていなかった時代、由岐までの移動は、船を使った海上経路であった。その船は町営船で、伊座利・阿部・由岐をつなぐことから、伊座利の「伊」・阿部の「部」・由岐の「岐」をとって「いぶき丸」と呼ばれていた。しかし、海上経路は天候が悪かったり、海が荒れていたりした場合に使用できなくなってしまうデメリットがあった。そのため、陸路として由紀までつづく連絡道（公衆用道路）が作られることとなった。それからは海上経路が使えない場合、この連絡道を用いて由紀へ交通していたという。しかし、自動車道が整備されてからは、この連絡道は使われなくなった。Zさんはこの連絡道跡を用いて、八軒屋路の作成に当たった。

避難路としては2番目に作成されたものであり、時期としては蔭谷路と同じく、阿部自主防災会が立ち上がる前に自主整備が始められていた道である。今もZさんが単独で整備を続けている。

上村路

2011年の12月から2012年の1月にかけて作成された避難路。初めはUさんの手によって単独自主整備が始められた。その後、Uさんに加え、Sさん、Kさん、Dさんが作業を行い、今の避難路となった。

もともとは青線（アオセン）と呼ばれる、田の用水路を点検する道であったところに、上村さんが木の板をはって整備してくれていたようだ。また、この場所の地権者はK'さんである。

避難路としては3番目に作成されたものであり、時期としては蔭谷路、八軒屋路と同じく、阿部自主防災会が立ち上がる前に自主整備が始められていた道である。今も上村さんが個人で避難路の手入れを続けている。また、この道は山賀路とリンクしている。

松村路

2012年の2月ごろに、Kさん、Sさん、Dさん、Mさん、Uさんによって作成された避難路。

2011年12月から2012年1月にかけて、既存の南海地震の想定を南海トラフ型地震に改める新想定が発表され、想定される津波の波高が大幅に上昇した。松村路は、Sさんらが手を加える前、既存の想

定では避難場所にされていた。しかし、その高さは海拔 7～8mほどであり、新想定においてはこの場所では津波を回避することはできないとわかったため、この場所をさらに拓いて避難路を作成することとなった。

地権者は、避難路作成の作業メンバーの一人である M さんである。M さん曰く、この場所にはもともと山林作業道があったそうだ。この道跡を用いて、県道まで避難路を接続した。

避難路としては 4 番目に作成された道である。この避難路から、阿部自主防災会による避難路のボランティア作成が始まった。

家山路

2012 年の 2 月に作成された避難路。この道は Z さんによって単独作成された避難路である。

地権者には無断で作成されているが、S さんは構わないだろうと判断している。避難路の作成に関する交渉において、地権者からの強い反発というものはなかったため、さしあたり問題はないと考えたものと思われる。仮に拒否を示されたとしても、避難路の作成を中止するだけであると思っていたようだ。

この避難路をはじめ、多くの避難路は作成初期に道の位置取りをする縄付けが行われている。縄付けとは、避難路の経路をロープで位置取りすることである。2 月 26 日の阿部全体集会の際には避難路を 20 本作ったと発表した。この時点では縄付けの段階にある避難路がいくつかあったようだ。これには阿部全体集会までに避難路を 20 本作るという言葉を NHK が取り上げてしまったため、なんとでも避難路 20 本の作成に着手する必要があるという背景がある。集会の後、縄付け段階の避難路は徐々に整備が進められていった。

また、避難路の整備や縄付けの際には、延縄漁で使う縄が用いられている。延縄漁の縄は丈夫に作られているため、漁ではもう使われなくなったものであっても、その強度は十分なものとなっている。

八毛路

2012 年の 2 月に作成された避難路。この避難路は S さんが主として作成した。

避難路の途中までは、H さん家の畑の道である。そこから先は藪が覆い茂っていたが、伐採して避難路を作成した。この藪が覆い茂っていた場所は、地権者がいない、もしくはわからない場所になっている。ここは誘導用のロープを配置してあるのみであり、急勾配の場所のみブロックで整備している。なお、道としては危うい箇所がいくつかある。

橋本路

2012 年の 2 月に作成された避難路。この避難路の作成者は S さん、K さん、U さん、k さんである。

この道の地権者は N さんである。作成に際して、断りは一応入れたようだ。作業については、およそ 2 回に分けて、約 2 日ずつ行われたそうである。

また、ここは津波から避難する際のセーフティラインが 20m にはならない場所である。阿部には、天神山を隔てて 2 本の川が流れているが、東側の川は傾斜がきつめで、橋本路がある西側の川は傾斜が緩やかである。そのため、地形的に西側の川の方へ津波が押し込んでくることになる。よって、通常の予測波高以上に高い場所に避難しなくてはならなくなる場所となっている。

喜多條路

2012 年の 2 月に作成された避難路。この避難路の作成は I 期と II 期に分けて行われている。I 期では、

Kさん①、Kさん②、Tさんによって作業がなされた。Ⅱ期では、Kさん、Sさん、Uさん、Dさん、sさんによって作業がなされた。

この避難路では、Kさんの家の敷地内にあるスロープを使わせてもらっている。Kさんはもともと阿部地区における庄屋であり、かなり富裕であるようだ。Sさん曰く、自身の家の裏からその上にあるK家の墓に行くために、1000万円ほどかけてスロープを整備したらしい。なお、土地もかなり保有しており、天神山以北はほとんどKさんが地権者となっているようだ。また、Kさんに交渉して、さらにもう一方、田のあぜ道から山の方へつづく道も整備した。

なお、この道は足が不自由であまり歩けない人や、車椅子を使っている人など、災害弱者が多く通ることになる道であるようだ。そのため、この道では通常は40cm幅であるブロック整備道を80cm幅に拡張してある。

Ⅱ期目の作業は2012年の5月以降に行われ、その補填作業は半日ほどでできた。また、作業をする過程で、この場所は地盤が悪いことが分かったようだ。

西寺路

2012年の2月に作成された避難路。作業者は特にいない。

なぜ作業者が特にいないのかというと、この避難路は英霊塔にあがっていく道を利用しており、避難路作成について特筆するような作業は、業者が手すりを付けたことのみであるからだ。この場所はもともと地権者のいる私有の地であったが、土地の区分が曖昧であったため、寄付というかたちで公道になったそうだ。

西寺とは、天神山近くにある光明寺のことである。この場所にはもともとコンクリートの階段があった。また、Sさん曰く、この道は利用者が一番多い避難路であるそうだ。

東寺路

2012年の2月に作成された避難路。この避難路の作成はSさんが主として行い、Dさんが少し作業を手伝ったようである。

ここにはもともと赤土をとっていた土取場があった。昔は今のように道がアスファルトやコンクリートで舗装されていなかったため、道を整備する際にはここから土を入れて整えていた。

土取場のある場所のみ公衆用道路とされており、残りの場所については地権者の有無は不明である。

山賀路

2012年の2月に作成された避難路。この避難路の作成については、Yさんが単独で作業したようだ。

Sさんがこの場所に避難路を作りたいと言ったところ、Yさんが使わなくなった自分の家の田んぼをパワーショベルを用いて一つ潰し、整備して避難路とした。

今もYさんが個人で手入れを続けている。また、この道は上村路とリンクしている。

五輪路

2012年の2月に作成された避難路。この避難路の作成は、Kさん、Sさん、Dさんによって行われた。

地権者はNさんである。きちんと判明しているわけではないが、昔ここには五輪さんと呼ばれる石塔、もしくは旧英霊塔があったようなので、そこにのぼっていく道があって、これを利用して避難路作成に用いたのではないかと考えられる。

この避難路については、尋ねた時点ではまだ名前がなく、その五輪さんの存在からこの名前が付けられた。

また、この道は松下路の予備道その2として設置された。

松下路

2012年の2月に作成された避難路。この避難路では、Dさん、Kさん、Sさんに加え、この土地の人であるTさんが作業に当たった。

この場所の地権者は複雑で、YさんとY'さんの私有権がまたがっているという。そのため、この場所の地権者はその二人のどちらかであるとされている。

Sさんの記憶によると、この場所の山の方に山賀家の墓があったそうだ。そのため、ここには墓へつづく道があったはずであると推測し、崩れかけていた道の跡を探し出して整備した。また、もともとここにはバキュームカーの入ってくる道もあり、これも利用したそうだ。そのあとは美波町役場に委託して、道を県道まできちんとつなぐ予定である。

また、この一帯は地すべり地帯であり、災害時には土砂崩れなど、二次災害のおそれがある場所である。

観音路

2012年の2月に作成された避難路。この避難路では、Sさん、Kさん、M'さん、S'さん、Y"さんが作業に当たった。

地権者は宮内神社であり、その宮総代は現在Sさんが務めている。

ここは、もともと戦後の食糧不足の時代に、食料を得るために土地を拓いて畑を作った際にできた道である。この道が初めから存在していたため、避難路の整備は上り口の階段のみの作業となった。その際には使い古しのブロックを30個使用したそうである。

地震の際に、もしも天神山へのルートの橋が使用不可に陥った場合は、この道を使う予定である。しかし、崩れそうな足場があり、災害時には不安がある道である。

宮前路

2012年の2月に作成された避難路。町道を使っている避難路であるため、特別な整備は行われていない。

避難に際して問題はないのだが、海に向かっていく道であるため、避難時には心理的なプレッシャーがある避難路である。そのため、地域住民はあまり積極的にこの道を使おうとはしないようである。

御旅路

2012年の3月ごろに完成した避難路。Kさん、Sさん、Iさん、Mさん、Dさんによって作業が進められた。

この道は天神山へ向かう道であり、祭りを行う際に用いられていた道である。阿部の祭りは開催期間が年を経るにつれて短くなってきている。昔、Sさんたちが子どもだった頃は10日間ほど祭りが行われており、それより昔はさらに長く、一か月以上も祭りが行われていたようだ。しかし、今では祭りの期間はかなり短くなっており、2011年には5日間のみ開催となった。そして、2012年からは3日間のみ開催となっている。

また、この御旅路の道が避難路の中でも一番坂が急になっている場所である。

尾鼻路

2012年の3月ごろに完成した避難路。この避難路の作成は、Kさん、Sさん、Dさん、Uさん、Mさんによって行われた。

この道の地権者はOさんである。Oさんの家の田んぼへ向かう道から、天神山へと登っていく道に接続した。

また、この道は西寺路と同じく、利用者の多い避難路である。

天神山路

2012年の3月ごろに完成した避難路。天神山へ向かう尾根の道に名前を付けただけであるため、作業者は特にいない。

地権者はKさんである。昔、Sさんたちが子どものころに走り回って遊んでいた場所であり、それを思い出したSさんがこの道を避難路に使用した。

常陸路

2012年の4月から5月にかけて、Kさん、Sさん、Dさん、Mさん、Uさんによって作成された避難路。

S大学で教授をしているHさんの山の道を使っている。途中までは栗林などがある農林作業用道があり、これを蔭谷路でも用いている焼場につながる道に接続した。そこはもともと木馬道（キンマドウ）と呼ばれる山林作業道であり、林業とまでは言わないものの、薪を切り出して運んでいた。今でこそトロッコなど便利なものがあるが、昔は木製のそりを山に登る際に一緒に上げてきて、そのそりに薪を載せ、2人くらいでブレーキをかけながら山から下ろしてきていたそうだ。そのため、このような道は木馬道と呼ばれている。

この道を作るときには、Sさんの作った避難路マニュアルに載っている山肌の避難路の製法を用いている。この製法の要点は、特に材料は持っていない、現地にあるものを用いて道を作ることである。この時は、山の中にもともと道があったというわけではなかったため、生い茂る木々を切り開いて道を作った。その際に、できるだけ真っ直ぐな木を選んで避難路作成に用いた。その木を倒しておいて、木が転げないように鉄筋だけ打ち込み、その周りに拾ってきた石を詰めて、上から山土を崩してかけて道のようにした。

この道の製作期間は3日ほどで、調査当時（8月20日）にできていた20本の避難路の中では一番遅く作られた避難路である。

この道は、今は避難路以外の用途はなく、避難路の利用者もこの道の地権者であるHさんのみである。Sさんによると、仮に使われることがあったとしても、津波遭遇時にたまたまこの場にいた人、もしくは土地感のない他所の者くらいだろうとのことである。

海沿路

2012年の8月末ごろに作成された避難路。作成者や地権者は不明。

阿部においてはアワビ漁が盛んであるが、もし、アワビ漁をしている最中に地震が来た場合、避難できるように意図して作成された。アワビ漁に携わる人限定の避難路であるため、使用に関しても、アワビ漁の時期限定のものとなっている。

避難路が造られた時期

次に、各避難路がいつ作成されたのか、主要な出来事と合わせて見ていく。阿部地区には大きく海にせり出した岬があるため、これまでの津波被害がほとんどなかった。既存の南海地震の被害想定においても、岬が自然の防波堤となっていたため、大した被害は出ないとされていた。しかし、一昨年の年末から昨年の年始にかけて、南海トラフ巨大地震による被害想定が更新され、阿部に高さ 20m の津波が押し寄せる可能性があることが分かった。

この発表を受けた直後、阿部では 3 つの避難路が迅速に整備される。蔭谷路、八軒屋路、上村路である。これらの避難路は個人が単独で作成した自主整備避難路であり、2012 年 1 月には完成していた。

また、2012 年 1 月 1 日に阿部自主防災が設立した。これ以降、阿部における大規模な避難路作成が始まることとなる。2 月中に 12 本もの避難路を完成させ、2 月末に行われた阿部全体集会では、仮完成のものも含めて 18 本の避難路を作成したことが報告された。つまり、阿部のマイ避難路は新想定発表後わずか 2 ヶ月でその大部分が作成されたということである。

迅速な避難路作成の背景

どうしてこのように素早く避難路を作成することができたのだろうか。それには、次のような背景がある。阿部で作成されたすべての避難路の中で、今回の新想定を受けて全く新しく造られた道は 5 本だけである。そのほかの 14 本の避難路は、これまで別の用途で使われていた道を避難路に転用したものである。

例えば、亀岡路は阿部小学校を新築するときに仮設した工事用道路を使っている。西寺路は英霊塔へ向かう道を転用し、八毛路や尾鼻路は田んぼへ向かう道を使っている。山賀路などはもう使わなくなった田んぼをつぶして避難路に用いられている。

新たに造った道	既存のものを利用した道
家山路	亀岡路
橋本路	蔭谷路
喜多條路	八軒屋路
宮前路	上村路
天神山路	松村路
	八毛路
	西寺路
	東寺路
	山賀路

	松下路
	観音路
	御旅路
	尾鼻路
	常陸路

古道の利用

さらに、これらの転用した既存の道の中には、今はもう使われていなかった古道を改修したものが8件あった。例えば、蔭谷路に用いられているのは、かつて阿部で土葬をしていたころの公衆用道路であり、焼き場までの通り道としても使われていた。いわゆる赤線（アカセン）の一種である。松村路は山の方に昔墓地があったことから、そこまで続く道があったのではないかと考え、その道跡を発掘した。八軒屋路は昔あった阿部と由紀をつなぐ連絡道を使っている。御旅路はむかし阿部の祭りで使われていた道を用いており、東寺路は道路を舗装するための土を取っていた場所の道を使っている。松村路や常陸路では、むかし山で薪を切り出して運んでいた際の山林作業用道が用いられている。上村路は青線（アオセン）と呼ばれる田んぼの用水路の点検道を改修して使っている。

こうした昔の土地の利用形態を熟知して利用できる人々がいたからこそ、阿部では迅速に多数のマイ避難路を作成することができた。普通はいずれ消えゆくはずの古道が、新たに避難路として息を吹き返したのである。

既存の道	使われなくなった古道
亀岡路	
蔭谷路	○
八軒屋路	○
上村路	○
松村路	○
八毛路	
西寺路	
東寺路	○
山賀路	
松下路	○
観音路	

御旅路	○
尾鼻路	
常陸路	○

誰が避難路を造ったのか

では、こうした土地の利用形態を熟知し、素早い避難路作成を可能としたのはどのような人々だったのか。避難路の作成者は、その避難路の土地の権利を持っている地権者、またはその避難路の利用者である場合と、地元の有志である場合の2つに大別できる。地権者や利用者が自分で避難路を造ったのは3例のみであり、ほとんどの避難路は地元の有志（ボランティア）によって作成された。

ここから、この阿部における避難路づくりは、地域住民のボランティア活動としての性格を有しているということが見えてくる。阿部においては、迅速に多数の避難路が作成されたことが特徴として挙げられるが、この阿部のマイ避難路づくりは地元の有志（ボランティア）の協力によって支えられていたのである。

名称	地権者・利用者	地元の有志
亀岡路	公共工事の際に作られた	
蔭谷路	○	
八軒屋路	○	
上村路	○	
松村路		☆
家山路		☆
八毛路		☆
橋本路		☆
喜多條路		☆
西寺路		☆
東寺路		☆
山賀路		☆
五輪路		☆
松下路		☆
観音路		☆
宮前路		☆
御旅路		☆

尾鼻路		☆
天神山路		☆
常陸路		☆
海沿路		☆

小括：阿部の避難路はどのような道か

ここまでを見ると、阿部の素早いマイ避難路づくりは、次の2点によって可能になったものと考えられる。まず、阿部では避難路の作成にあたって、過去に別の用途で使われていた既存の道や古道を再利用したものが多くあるという点である。このように既存の道を転用・改修して再利用するという発想や、かつての土地利用形態に関する豊富な知識が、素早い避難路づくりを可能にしたと考えられる。昔からの土地に関する知識や細やかな情報が頭に入っていると、「あの場所に昔の道があるから使える」ということや、「あの道は地盤が弱いから修復しなければいけない」といったような判断をすることができ、効率的な避難路作成を可能にしたのである。

2つ目は、多数の避難路が地元の有志によるボランティア活動として造られたという点である。土地の地権者や避難路の利用者は、しばしば自分で避難路を造ることができなかつたり、かつての土地利用形態を知らなかつたりする。そのような人々に代わって、地元の有志（ボランティア）が避難路づくりを推進したからこそ、迅速で効率的な対応が可能になったものとする。

避難路作成者の経歴

では、過去の土地利用形態についてよく知っている地元の有志（ボランティア）とは、どのような人々なのだろうか。マイ避難路の作成に多く携わった5人の経歴を列挙する。

この経歴を見ると、彼らはみな共通して、退職後に故郷にUターンしてきた団塊世代の人々であることが分かる。就職に際していったん阿部を離れ、都市部で暮らし、退職後に再び阿部へ戻ってきたという人たちである。このような性質を持つ人々が主体となって、阿部のマイ避難路づくりは行われてきたのである。

〈経歴〉

Sさん

阿部出身で、就職に際して阿部を出、徳島市内で銀行員をしていた。退職に際して阿部へUターンしてきたが、徳島市内にも家を構えている。これら2つの家を必要に応じて行き来している。

Dさん

阿部出身で、就職に際して阿部を出、阿南市内でNTTの現場業務に従事していた。退職に際して阿部へUターンしてきたが、阿南市内にも家を構えている。必要に応じて2つの家を行き来している。

Kさん

阿部出身で、就職に際して阿部を出、大阪の自動車整備会社で働いていた。しかし、バブル崩壊の憂き目に遭い、勤めていた会社が倒産してしまった。その後、阿部へUターンし、漁師として働き始めた。

Mさん

阿部出身で、就職に際して阿部を出、奈良県でJRの車掌業務に従事していた。退職に際して阿部へUターンしてきた。

Uさん

阿部出身で、就職に際して阿部を出、京都の舞鶴で潜水夫をしていた。退職に際して阿部へUターンしてきた。

避難路はどのように造られたのか

こうした人々の活動によって、阿部の避難路は造られたが、その手法はどのようなものだったのだろうか。阿部にはその避難路作成の手法を詳細に記述した独自のマニュアルが存在する。それは、阿部自主防災会事務局長であるSさんが作成した避難路作成のマニュアルである。

マイ避難路作成の手法は、阿部でかつて盛んだった山の仕事等のノウハウを活かしたものとなっている。その特徴として挙げられるのが、避難路を造る際に現地に有る物を有効に活用するという作成方法である。避難路のコース取りにおいても、既存の道を再利用するなど効率的な手法が講じられているが、作成に当たってもその性質は維持される。

たとえば、山肌に避難路を造る際の例を挙げる。現地では、まずできるだけ真っ直ぐな木を探して伐採しておく。そして、比較的山道の傾斜が緩やかな場所を選んで、そこをきれいに刈り分ける。そのあと、伐採した木をその場に倒し、木が動かないように鉄杭を打ち込む。そして、山道で適当に集めた石をそこに詰める。仕上げとして、その上に山土を崩してかければ、山肌の避難路は出来上がる。

また、階段を建設する際には主としてブロックが使われるが、ところによっては運び込むことが難しい場所もある。そのため、状況に合わせて現地のもを効率的に運用する避難階段づくりも考えられている。

また、避難路のところどころには手すりロープが張られているが、その手法も阿部ならではのものとなっている。その特徴的な手法として挙げられるのは、ロープを張る際の基点として、現地に自生する木々を用いていることである。普通の発想であれば、鉄の杭などを打ち込んで基点としようとしそうなものであるが、山の中では鉄杭がうまく利かないそうである。そのため、ここでは山中に自生する木々を鉄杭に沿わせる形で用いて、ロープを張る際の基点として運用している。さらに、ロープを張る際には、木々のしなりを利用して、基点と基点の間のロープの張りを強化している。

また、ロープの結び方も特徴的で、漁村ならではの「とっくり結び」と呼ばれる手法が用いられている。この結び方は強度があり、基点から基点へのロープの緩みを阻止している。また、ここで用いられている手すりロープは、阿部の延縄漁で使われていた縄を再利用してある。もう使われなくなったものとはいえ、その強度は普通のロープより高い。

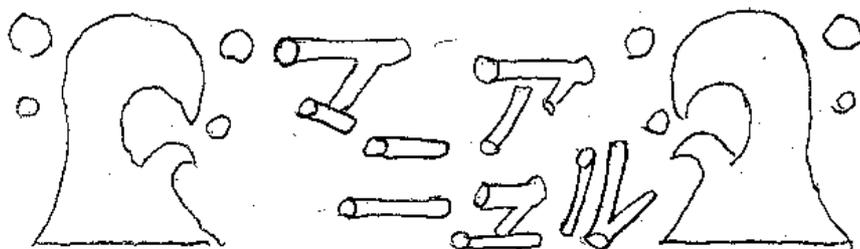
また、もし避難する時間が夜であった場合や日の出ていない早朝であった場合などを想定して、避難路のあちらこちらに蛍光テープが目印として貼られている。これによって、夜目のきかない場合も迅速

に避難できるようになっている。

さらに、避難路入口などの各所に避難の際に使えるように、杖が設置されている。阿部においては高齢者が多く、足の不自由な人も少なくないため、このような避難補助具があると便利である。この竹製の杖や、その杖立も独自に作成されたものである。

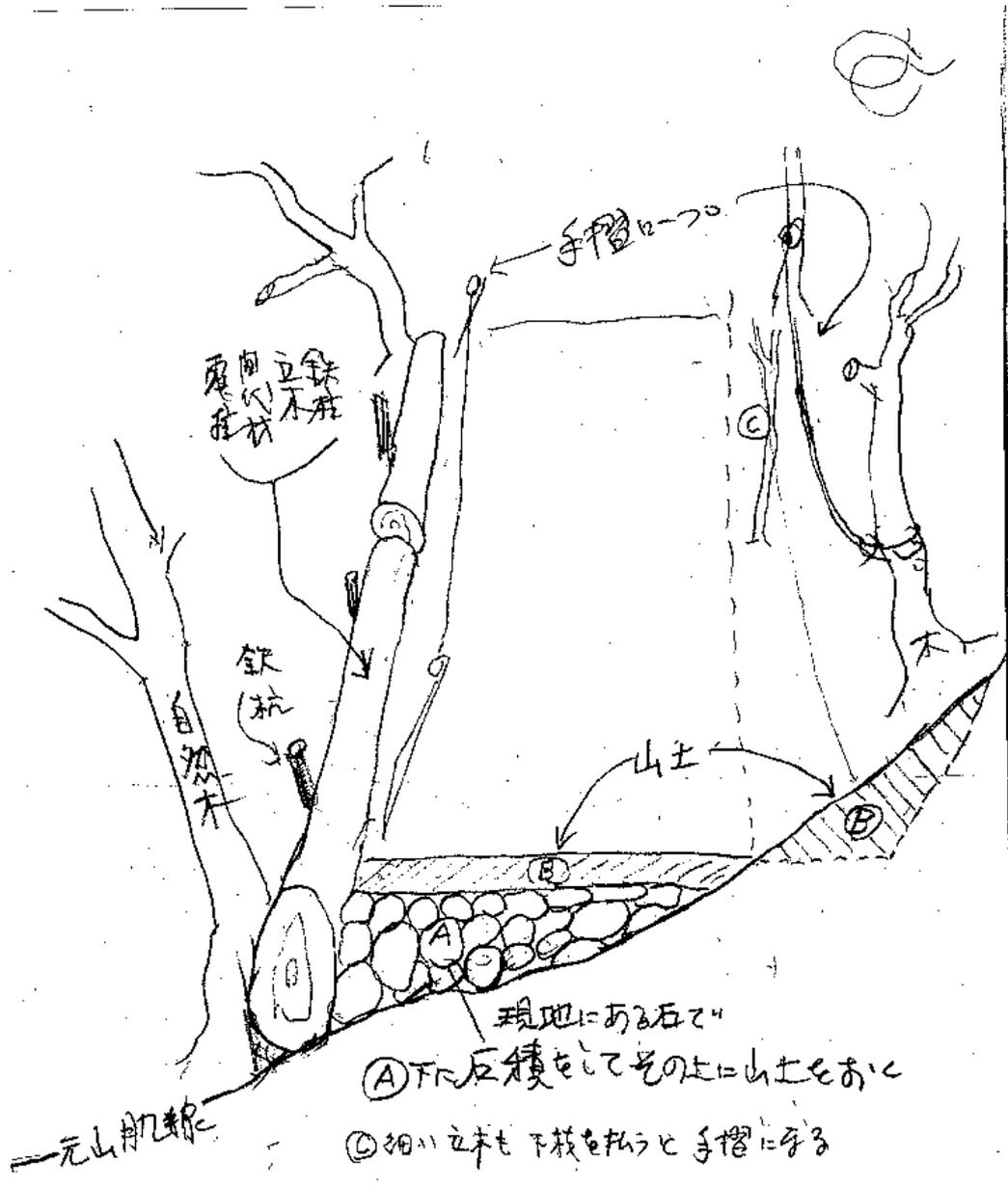
このように、阿部では昔からの土地利用に関する知識や技術が随所に見受けられる避難路作成の手法が展開されている。さらに、地域住民主体の避難路作成であるため、随所に避難する住民への配慮が見られる点も特徴的である。

--避難路の作り方--



阿部自主防災会

図2-1



横勾配が緩やかな山に新しい避難路

山肌の避難路

図2-2

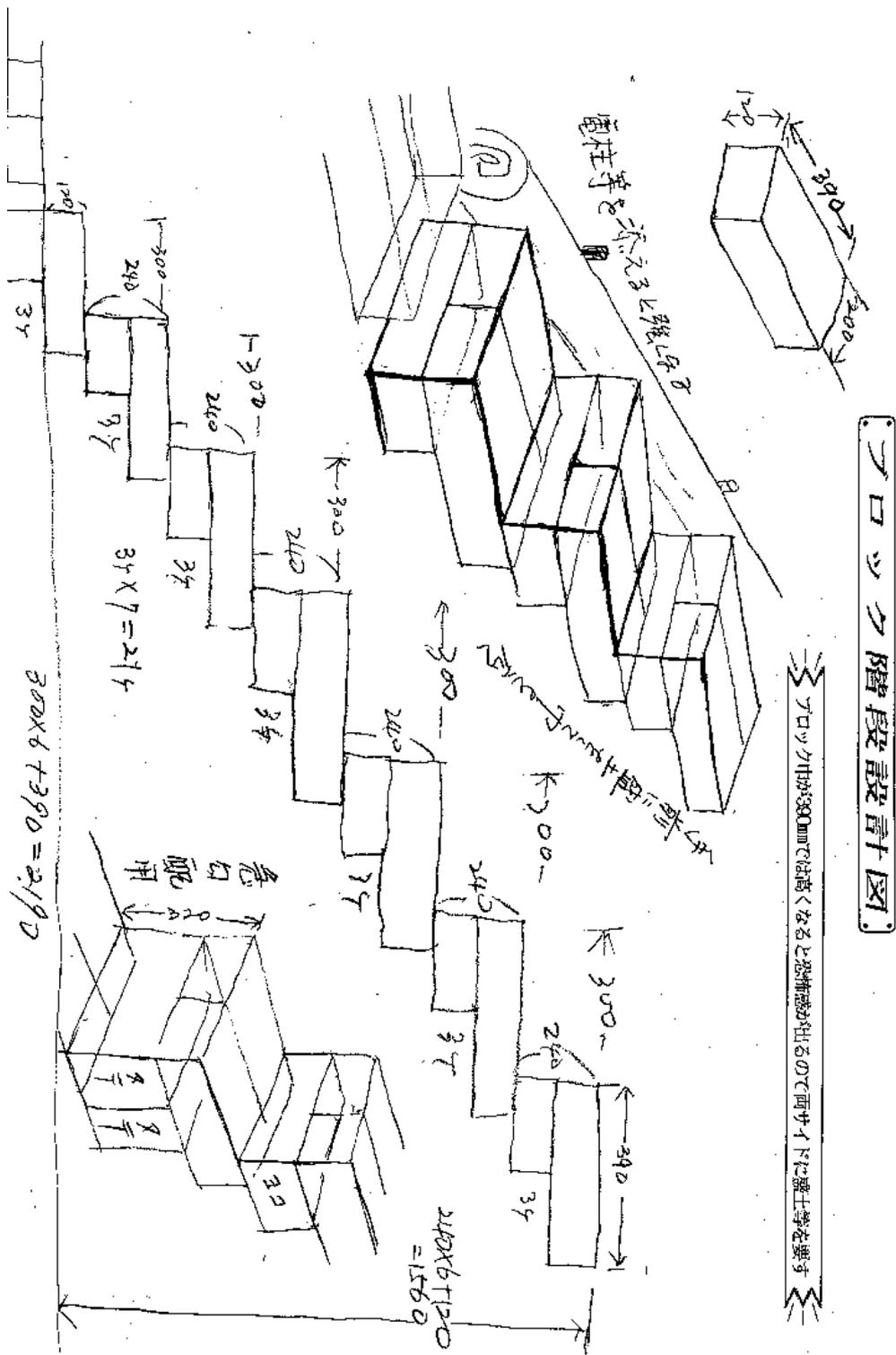


図2-3

色々避難階段

*現地に有る物を有効に生かして活用

コース取り (昔の道、墓への道、水踏良獲の道、控の道)
 畑への道、勾配のゆるい傾斜地、林の中、竹藪の中

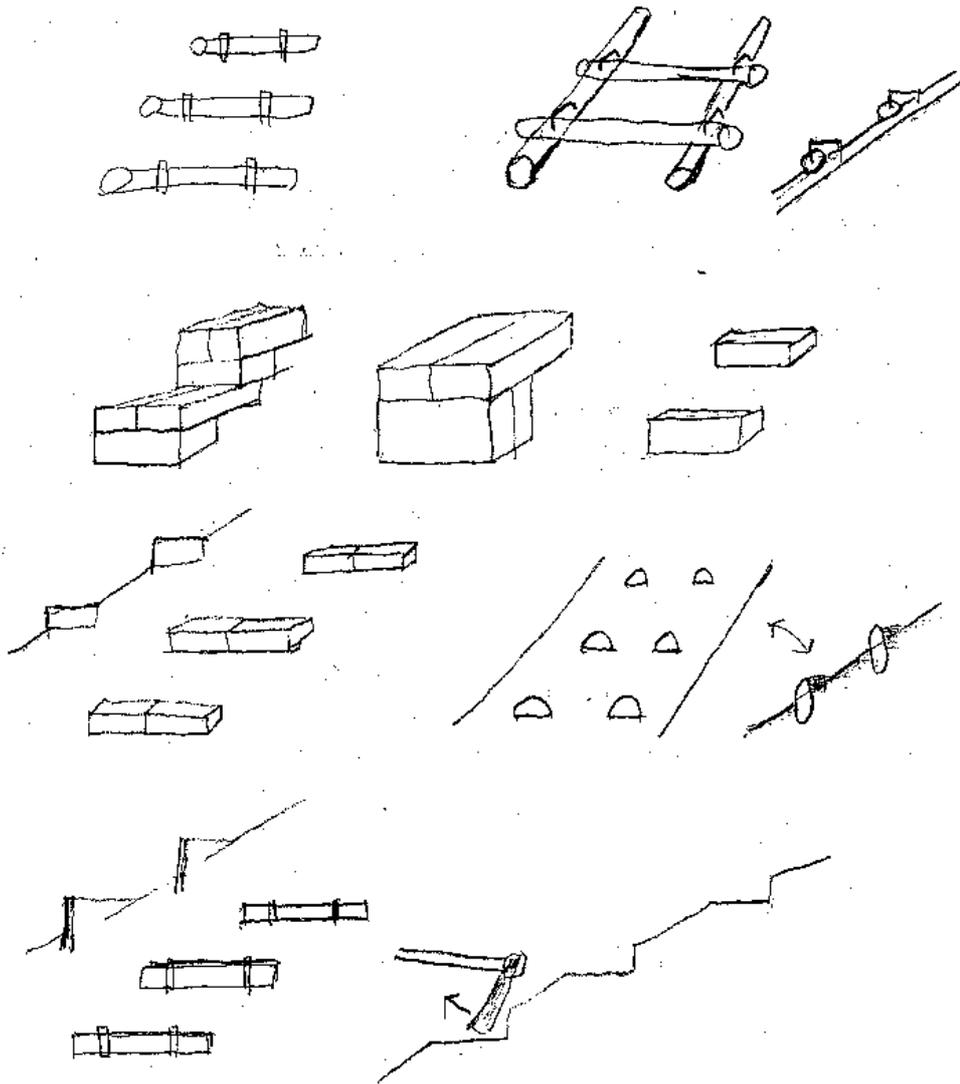


図2-4

手すりロープの張り方

伸びるロープもピンと張れる

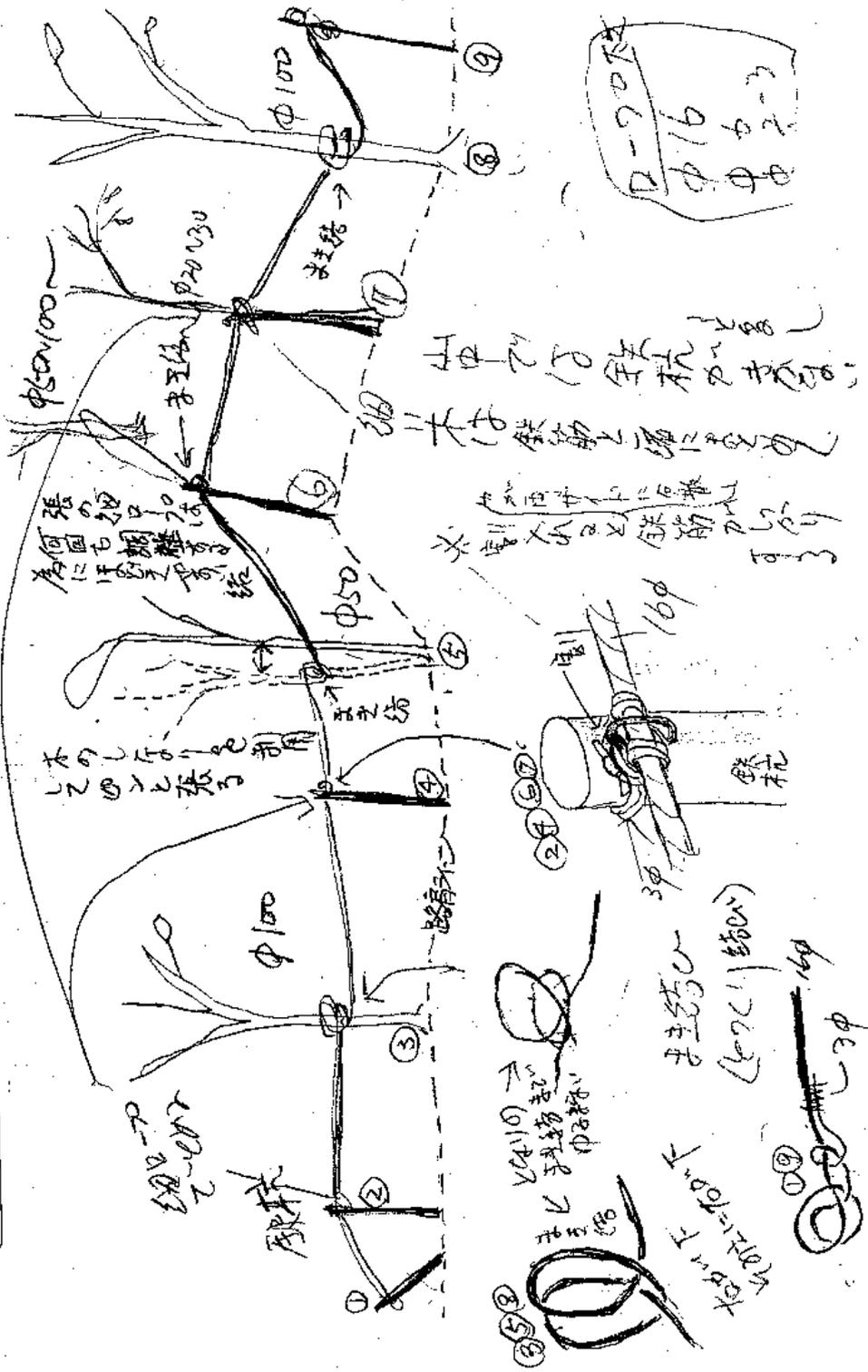
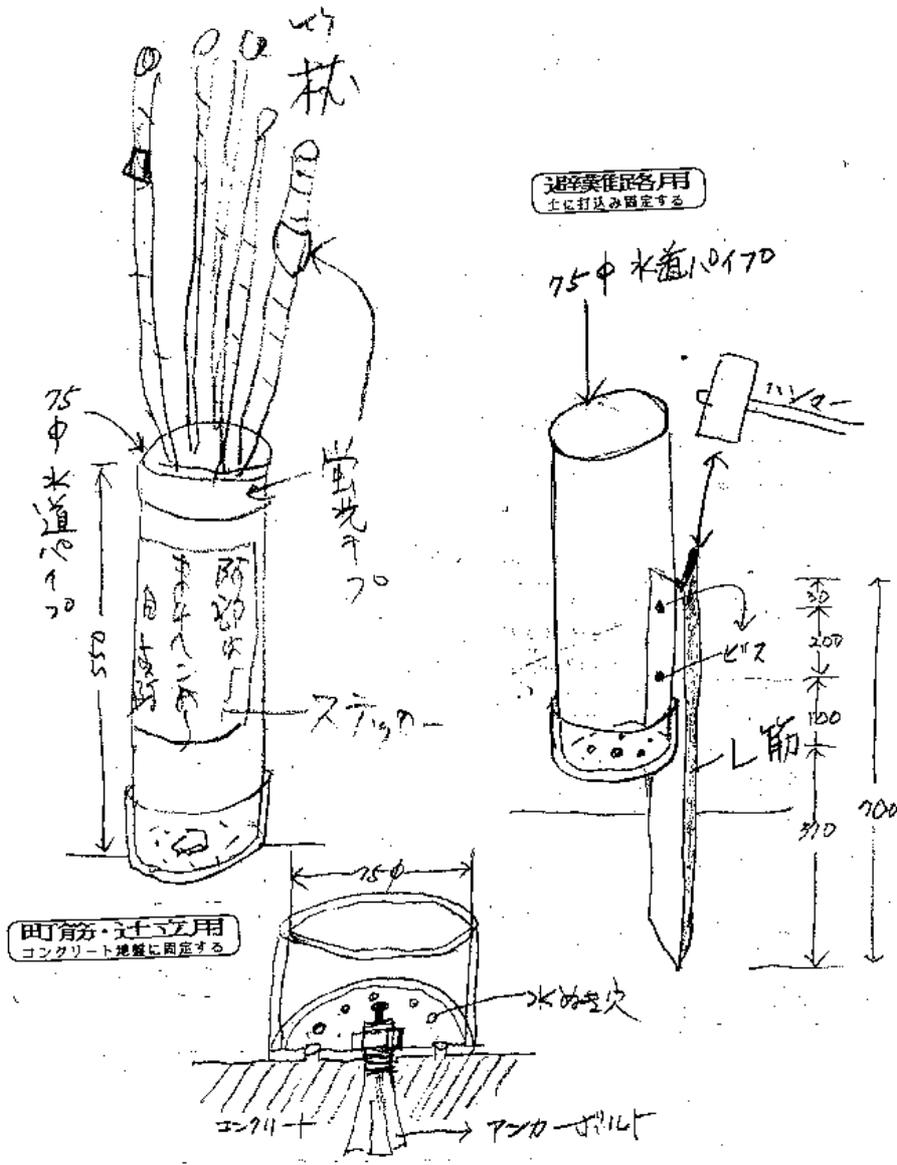


図2-5

避難用竹杖立



*先にキャップをコンクリートに固定して後に75mmパイプを差し込む

図2-6

集田70L

人数が多し

おとこ

組地域の人数を減らす

備

川向の3か所を調整して3か所を

天印

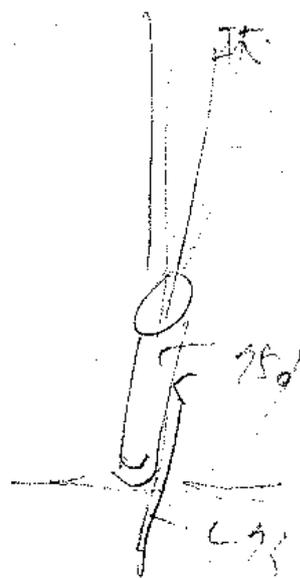
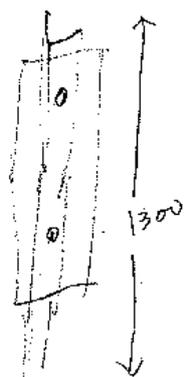
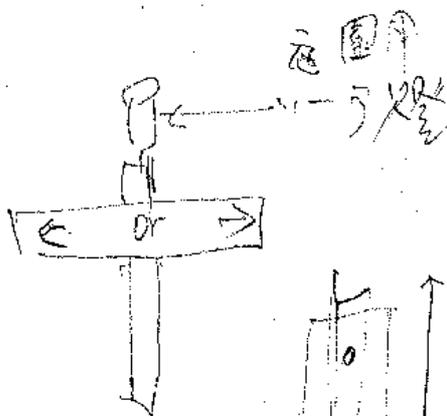
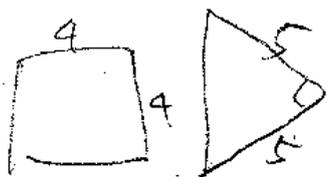


図2-7

行脚

身内の経路が基本 (自前双一)



近所を控える



手に入るものを便つてやる (明日か)



他人に見せる

(摩訶不思議、鉄筋のはた)



何をどうはせよう? (向かい)



手法を教える



手伝をする



行脚隊に控える



X行脚

↓ P.N

図2-8

作業

勤ける者が少く



役件 \Rightarrow 勤める人が少ない
(非常時の組織のこと)



二居宅住民は大半が力に乏し
(13人の精進を助ける)



その人の現役は何にたかえるか
(資料がある)



年齢と経験に乏し人も協力できる
(習いごと)



少人数での作業が主体的
(船頭も(船長)維持)



近所の人が1~2人程度
(担当者が少ない)



大規模土木作業は支那でやる
(元朝の手伝い)

図2-9

災害弱者対応

高齢者

年寄と年寄相出するより、年寄の居る環境
津波かくるまでには時間がかかるから年寄も自分の
逃げ道もあらかじめ手配が必要、(とくに)
エレベーターは使用出来ず、常に杖を711で歩き
自分の体力は自分の責任で保たせよう(自分もよ)

避難者が多い避難路には逃げ道の手配を
怠らねば、家とエレベーターは流されるのを防ぐには
手配が必要だと認識

車椅子等

車椅子は使えないから、エレベーターで背負う
方法あり、負った人を両脇から支える
エレベーターにエレベーター

二輪車等

対応は業者から依頼、訓練要

→ 車いす避難路の林を伐採し
φ75×550 キヤップの支柱で支える

図2-10

避難路作成者の意識

彼らはどのような意識をもって避難路づくりに携わっているのだろうか。ここでは聞き取り調査の内容をもとに分析する。聞き取りの対象は、マイ避難路作成に多く携わった有志のSさんである。

Sさんの語りからは、避難路作成に対しての苦労感があまり感じられなかった。また、終始、避難路づくりの経験を笑顔で語っていたのも印象的であった。

まずは、次の部分に注目したい。「これから(避難路の)管理が大変でしょって言うけど、思いようによっては、最初の思いからすれば、楽なもんじゃありませんか。草刈るって言うたって、一回行ったら全部刈れるじゃないですか。最初一本作るのに何日もかかるとるじゃないですか。」この語りから分かることは、Sさんは周囲の人から発せられる避難路の管理が大変だという言葉を目にして、作成した当時の労力に比べれば、楽なものだと考えているということだ。これはSさんの性格上の性質ということも考えられるが、避難路の作成について、とても前向きな語りをしているといえる。

また、「僕は15分体が空いたら15分の仕事をしに行くんよ。30分空いたら30分に合う仕事をしてくるんよ。」という語りでは、時間を有効的に活用して、自分のできることをしていこうという意識が読み取れる。ここに避難路を作成したときに見られた、自分の持てる知識や技術を積極的に駆使した主体性の裏付けが見られる。避難路の整備はこれからも継続して行わなければならないことだが、Sさんはそれを苦勞する作業としては捉えておらず、自分のできることをやれば良いという前向きな考え方を持っていることがわかる。

次はこの部分に注目したい。「昼帰ってきて、シャワーしてご飯食べて、ちょっと休憩したら、また昼から出て行く。ほしたら、こんな暑い時間から仕事するんかって言うはみな。いや、この時間しかワイは空いてないと。(笑)ほて、今からするいうて。へいちゃら!あつつい最中でも。ほな、熱中症にどしてならんのお?って(みんな)言うでしょ。ふつうは喉が乾くから水を取りたいんちゃん?でも僕は違うんですよ。汗をかくために水分を補給しよんですよ。考え方は。ほでまあ磯へ歩いていてもなんで船があるのにほんな遠いとこまで歩いていくんな。えらあないんか?うん、ほれによってワイは夏場に減量するんじゃ。(笑)ほんでこう、ぐりぐりした足場の悪いとこ歩いていくでしょ。ほんで足のこう、これ、(足の筋肉を見せる。)で、体やって、ワイ事務屋なんで?(二の腕の筋肉を見せる。)ちょ、裸になってええ?(衣服を脱ぎ上半身裸になり筋肉を見せる。)」この語りの部分は、この聞き取りの中でSさんが最も楽しそうに、そして誇らしげに、語っていた部分である。真夏の暑い日でもSさんは朝から仕事に出て汗をかく。周りは真夏の昼間から働いたり、磯へ船を使わずに歩いて行ったりすることを不思議に見ることも多いというが、Sさんは気にした風もなく「減量のため」と笑顔で話していた。そして、私たちに日々の鍛錬の成果といえる、自身の筋肉を披露してくれた。ここには、避難路整備の仕事による達成感や、それにとまなう自信の誇示が表れているように思われる。

これらのことから、Sさんは日々行っている避難路整備の仕事を自身の体作りのためというように位置づけて、仕事に対するモチベーションを確立しているのではないかと考えられる。他の人にとって作業することが億劫になる真夏の仕事であっても、Sさんにとってそれは自身の鍛錬の場としてやりがいのある仕事なのである。そのため、Sさんは普通は苦勞の経験である避難路整備の仕事にも、前向きに取り組むことができるのだと考える。聞き取り調査時のSさんの語りは全体として充実感に満ちており、仕事にやりがいを感じているということがありありと伝わってきた。

以上の聞き取り調査の分析から、Sさんは避難路整備の仕事に対して非常に前向きで、高いモチベーションとやりがいをもって作業に取り組んでいたことが分かった。このことから、Sさんが避難路の作成に乗り出したのは阿部住民のことを考えて、というのももちろん動機の一つにあるだろうが、Sさん自身の「生きがい」を創っているという要素も強いのではないだろうか。退職し、故郷にUターンしてきたとき、避難路を作成するという仕事が舞い込み、Sさんはやりがいを見出すことができた。これにより、退職した今もSさんの日々には充実感が存在している。阿部において迅速な避難路作成が可能とな

った要因には、このような「生きがい」の創出といった側面も考えられるのではないだろうか。

〈聞き取り調査：Sさん〉

これから(避難路の)管理が大変でしょって言うけど、思いようによっては、最初の思いからすれば、楽なもんじゃないですか。

草刈るって言うたって、一回行ったら全部刈れるじゃないですか。

最初一本作るのに何日もかかるとるじゃないですか。な？

ほなけんほんな草刈るんごっつい(しんどい)と思ってないですね。大変大変とは思ってない。

でまあ、それぞれにこのルートだったらノンちゃんあっこ草いっぱい生えとんなあ、とか言うとならええん。また刈っというて。

で、刈ってくればええし、刈ってくれなんだからもうちょつと行ってちょこちょこ合間で。

僕は15分体が空いたら15分の仕事をしに行くんよ。

30分空いたら30分に合う仕事をしてくるんよ。

ほたらもんてきておいて、まだあんたやらが来るんに30分くらい早かったんな、今日の朝だったら。

ほしたらついでに燃料がちょっと残ったからほこの三角、ほの建物の西側の草もついでに刈ってある。

ほんでまだ燃料があつたら学校のグリーンベルトを作ったのを、土が流れてこんように、ほれの芝の上を撥ねに行きたかったんやけどほこで燃料が切れて行かんかった。(笑)

作業服やっぱ一日に二着いるんですよ。つなぎが。

で、朝着替えて、出て行って仕事したら、もうもんてきたら、こう首のタオルな、首のタオル入れて作業着着いとんやけど、つなぎ着いとんやけど首のタオルが絞れるくらい。

んでね、夏場海行く日とほんな作業する日とでしょ。でね、9月のお祭りまでにだいたい僕10キロ近く減量するけんね。ピーク73キロくらいになるんよう。今65キロくらいまで落つとるけんね。

ほんで、昼帰ってきて、シャワーしてご飯食べて、ちょっと休憩したら、また昼から出て行く。

ほしたら、こんな暑い時間から仕事するんかって言うはみな。

いや、この時間しかワイは空いてないと。(笑)ほて、今からするいうて。

へいちゃら！あつつい最中でも。ほな、熱中症にどしてならんのお？って(みんな)言うでしょ。

ふつうは喉が乾くから水を取りたいんちゃん？でも僕は違うんですよ。

汗をかくために水分を補給しよんですよ。考え方は。

ほでまあ磯へ歩いていてもなんで船があるのにほんな遠いとこまで歩いていくんな。えらあないんか？

うん、ほれによってワイは夏場に減量するんじゃ。(笑)

ほんでこう、ぐりぐりした足場の悪いとこ歩いていくでしょ。ほんで足のこう、これ、(足の筋肉を見せる。)で、体やって、ワイ事務屋なんで？(二の腕の筋肉を見せる。)ちょ、裸になってええ？

(衣服を脱ぎ上半身裸になり筋肉を見せる)銀行行つとったときはこんな体じゃなかった。

やから、えらいことしても思いようなんよな。

自分の体のため、こやってな磯やあんな足場の悪いとこなあ、歩いて散歩に行けたあて行けんぞお？

ほなけん運動のために道路をみな歩つきよんですよお。

僕あんなことはようせんのように。なんでアホみたいに歩くん？(笑)え？

歩くんなら、ついでに空き缶でも拾って歩けちゆうんよ。ほなけん空き缶ひろいに行くんだったらよう歩いていくけど、散歩に日に日に歩けつというたらよう歩かん。

小括：避難路を造った人々

ここまでのマイ避難路作成に携わった人々の説明をまとめる。以上で述べたことから、次の3点が明らかとなった。

まず、避難路作成に従事している地元の有志（ボランティア）は、若者ではなく団塊世代のUターン者が中心だということである。就職に際して阿部を離れ、いったん都市部で暮らし、退職後に再び阿部へ戻ってきたという性質を持つ人たちである。

次に、彼らは阿部出身の高齢者であるので、かつての土地利用形態や、山の仕事等の知識や技術を持っているということである。そのノウハウを活かして、阿部のマイ避難路は効率的に造り上げられていった。

そして、彼らは災害への危機感や地域への貢献に加えて、退職後の楽しみや生きがいとして避難路づくりに関わっていた部分もあったということが分かった。阿部のマイ避難路作成に携わっている人々の意識は、防災意識だけということではないということが見えてきた。

考察

以上、阿部におけるマイ避難路づくりを造り手の視点から見ていくと、迅速な避難路づくりの裏には、災害への危機意識だけでは語り尽くすことのできない、「生きがい」としての避難路づくりという側面があることを指摘できる。

同様の事例として、徳島県上勝町の葉っぱビジネスが挙げられる。日本料理に用いられるつまものと呼ばれる木の枝や葉っぱを商品化し、限界集落間近であった上勝町に新たなビジネスを創出した。この事例の独特な点は、葉っぱビジネスに携わっている人々が、上勝町に住む高齢者たちであるということである。

この「いざなり事業」を成功に導いた要因は、過疎・高齢化地域の生き残り策としての単なるビジネス創出だけでなく、地域おこしと高齢者の生きがいの両立への発想転換であることが指摘されている（鈴木 2005）。

これと同様に、阿部のマイ避難路づくりも防災・減災の観点から単に避難の手段をつくったということよりも、防災と生きがいづくりの両立を可能にしたという点が評価されるべきなのではないかと思われる。南海トラフ型地震の新想定発表後、わずか数ヶ月で20本もの避難路を作成したことは、単に防災意識が高いといったような要素だけでは理解することができない。換言すれば、阿部においては「災害のリスクに対処する」という視点ではなく、「生きがいの創出」という側面から避難路作成を行ったことで、結果的に迅速な対応をとることができたものと考えられる。

そして、避難路は地元に戻ってきた団塊の世代と地域に住む人々との関係を結ぶ礎にもなっているようにも思われる。避難路を作成する作業に携わることでUターン者の意識を阿部の地域に根付かせ、地域住民と協力することによって、その関係性を再構築していったのではないかとと思われる。

まとめ

阿部の事例は、超高齢化社会を迎えつつある日本における「生きがいとしての防災活動」を実現した事例として学ぶ点が多いのではないかと考える。近年、定年退職後のI・J・Uターン者の存在が、都市と農村をつなぐ新たなアクターとして注目されてきている。地域の防災においても、これらの都市住民の力を活用することが重要であると言える。そして、防災活動を生きがいとして楽しめるような体制づくりは、過疎地域における持続的な防災活動が実現に寄与するのではないだろうか。若者人口が少ない過疎・高齢化地域は、地域活性化もできず、人の生命にかかわる防災活動もできない「限界集落」であると呼ばれることがある。しかし、発想を転換して防災活動を高齢者の生きがいの創出として見れば、新たな明るい展望も生まれてくる。3.11 東日本大震災以前のように、「災害をなくす社会」を考えるのではなく、「災害とともに生きる社会」をめざすことが、超高齢化社会の防災活動を実現するのではないだろうか。

補遺 S氏に対する聞き取り調査の内容 (2012.08.20)

S：瀬戸さん、N：野村、I：生杉、F：藤島

N：私たちの班は避難路土地班という名前で、主に避難路について質問したいんですけど。

S：大きい声で言うてよ、わい耳が遠いけん。

N：はい。

N：とりあえず避難路の全部の名前と地権者、土地の所有してる方の名前を知りたいんですけど。

S：はいはいはいはい。

地図を広げる

S：どっちからいきましょうか。どっちゃからいきましょうか。こっち側からいこうか、こう。右回りで。陰谷ルートやねえ、一番。陰谷路。これはねえあの一、陰谷さんちがここなんやけど、うちの自主防の会長のね。で、この辺りは今使ってる共同墓地です。で、ほの上に昔土葬してた時代にずっとだんだんとこの辺りまでね、この辺り一帯、土葬したお墓なんですよ。

N：ああ。

S：だから、陰谷路そのものの、あの一、道は赤線だろうと思います。赤線、昔の公道。公衆用道路。赤線でほの一、バンシュンヤドの赤線とも言いますけども、青線っていうたら水路のことね。お墓の道、それと延長がね、延長。この県道に上がってる、つながってる方ね。

N：はい。

S：これは一、元、元、この、この向こうに焼き場があったらしいです。あんま長いこと使ってないんですけども。焼き場に行く道、だったんですね。次、いいですか？

N：はい。

S：ほなけん地権者は、あるん、山はあるんだろうけど、もともとほおいう風な公道だったとこだから、一応ないと言うてもええんちゃうで。山はあるけど。

I：国とか、国とかが持ってたってことですか？

S：いやまあ、そういう一、トウキボジョウを見ると、点点点、公衆用道路なんだろうな。

I：ああ。

S：公衆用道路。

I：公衆用道路。

S：赤線。

I：赤線。

S：ま、例えばここも、ほら赤線なんですよ。この前も。

N,I：ああ～。

S：けん、大体6尺くらいの、一軒。

I：ああ～。

S：くらいのお、幅が三尺道とか六尺道とかいう単位で、公衆用道路、今風に言うと、公衆用道路。

I：そうですねえ。

S：次はねえ、常陸、常陸さんところ。常陸路。

N：はい。

S：これはねえ、全くねえ、あの一、常陸さん、この山ん中ですわ。で、最後にこの焼き場へ行く道に繋いだんですけどね。これは常陸さんところのお、こう、自分とこの裏、裏の山を、今は薪に売ることば

ないんやけどお、少し前までは、薪に山を買うてくれよった。木を。ほなけん常陸さんとこの山林に行く道と、あとはほの一、作業用の道。常陸さんの。常陸マサオ、マサオは日が二つに、夫かな。

I：何の作業の道？

S：ほなけんあの一、山林作業。山林の。

I：あー山の。

S：うんうん。で、ごつついほのなんちゅーかな、杉がうわつとるっていうんでもないから、

I：はい。

S：ほの林業とまではいかんけど、一時的に薪を

I：ああ〜、はい。

S：切るために、あの〜、昔はな、木のソリ、木の馬、

I：はい。

S：木の、キンマって言うんですよ。

I：キンマ。

S：木のソリっぽいやつを、大体山やからソリをかたぎ上げといてソリに木を乗せて下へ引っ張ってこれるで。人間一人くらいで。舵だけとって、ブレーキかけもって。そういう風なキンマ道これくらいのがあったらいいたんよ。で、この頃はちょっとそういうなんもあんま使わずに、キャタピラがついとる運搬車を使うじゃないですか。

I：ああ〜。

S：お墓の仕事するときにはちっさいキャタピラのついた運搬車あるでしょ？

I：はい。

S：ああいう風なものを通してる作業用の道。

I：ああ〜。

N：その木のソリで何を運ぶんですか？

S：ほの一薪にする薪を運んでたんです。木のソリ。キンマ。木と馬と書くんじゃ。木馬でつたって通じんからワイが木のソリじゃて、あんたやにわかるように言うたんじゃ。これはほなけん常陸さんところは完全に常陸さんところから逃げる人はないと思うんやけどね。ここらの前であの一、津波に遭遇しそうな場合は逃げれるかもわからんし、第三者のよそから来た人がここは入っていくことがあるかもわからんけども、地域の人だけで考えると、ここは常陸さんだけが逃げる道。ほんまにマイ避難路っていう感じですね。

N：今はもう避難路以外は使われていないのですか？

S：ううん、使われとる。途中にね、栗林があつたりするから。途中までは自分とこの農作業用の道ですよね。ほれからあとは自分くの山ん中を僕やが勝手に道をね、つけたんですよ。ほんでほのつけるんも、もうほんなとこやから、もう木材を持っていくわけにもいかんでしょ？で、ちょうど杉の木もなかったんで出来るだけ真っ直ぐなような現地にある木を伐採してね。ほれを使つたりして避難路を作つたんやけどな。こんな感じ。これ現地で切り倒した木ですよ。

N：これどこのあたりになるんですか？

S：ここの農作業用の道から上へ繋ぐためにはね。

N：もともと道ではなかった？

S：ないないない。山のちょっと、比較的スロープの楽なところを全部刈り分けて、で、ちょっと道っぽくせんといかんから。これは避難路を作るマニュアル。

I: ああ、あの～。

S: この手法やな。木を倒しといて鉄筋だけ打ち込んで、転げてこんようにしといて、ここに周りに石を詰めて、ほの上から山の土の崩したやつを上にかけてな。道っぽくしたんよな。次は松村路。これはねもともとは途中まではね旧のねえ、避難場所だったんですよ。ここのおうち、ここくらいまでがね。

N: 避難場所？

S: 6メートルか8メートルくらいかな。津波の想定の時はこちらまでで十分いけたのよ。で、ここのおうちの畑があったりするとこね。ほなけんここ裏とか陰谷の裏とかいうんで良かったんよ。で、これをちょっと上がってみましょって上がってみたんやけど。何とか谷沿いに上がっていたんやけどな。で、県道に繋ぐっていう思想は6時間も逃げとらないかんていうから、ほんなあの一、長いこと6時間もじっとしとれんじゃない。雨が降ってるとか寒いとか。夜だとか。けん、この20メートルラインまでは急いで行かないかんわな。ほなけどこっからは急がんでもいい、ゆっくりでもいいから何とか、県道へ繋げんかなーて言いよったら、ここも山をほの一売った時に、山の木を売った時に作業用の道がありましたって言うから、ここ松村エイイチさん。英雄の英に横一。この人も僕みたいに半分阿部において長野におるん。これも裏山まで、裏の畑のところまでは自分くの道、ほれからあとは、あの一、山林作業道。ほれで県道まで繋いだ。けん、これはねずっと使ってなかったからね、ジャングル状態じゃな。シダがこんなに生えててね。ずっと刈り分けて上がっていったんですよ。ほなけど土木工事をしなくていいじゃないですか。蔦とか雑木だけ切ったらいいじゃない。ま何とかできました。次いってええか？

N: はい。

S: 次、八軒屋路。これはですな、僕やが子供の時は港がなかったんで、えー、船でこっから由岐の方へ行ってたんですよ。一番僕やがちっさいときだったら砂浜に上しとって朝おろして、その船に乗って。わかる？ 言いよること。毎回浜へあげる。

N: ああ！

S: やっぱり人が荷物を載せたり段々段々大きくなってきたんで、ほの一、町営のものになったんですよ。由岐町と合併したときにね。で、伊座利と阿部と由岐を繋ぐから、伊部岐丸っていう渡船があったんですよけど、それでも海の上ですので船が使えるときは困るじゃないですか。ほれでこの八軒屋のこの道はね、昔これを歩いて峠を越えて、あの一、オオイってところがあるんやけど、そこを通って由岐の方に抜けていく、ほれは完全に公道だったんですよ。隣の集落に行く連絡路。公道。でもほれ一、自動車が通る道路ができてからは使ってなかった。ほんでここはちょっと畑があるから行くくらいで。ほれを一番最初にサイカさんという人がいるんですけど。ここらにあるうちやな。サイカトシハルさん。利用の利に晴れる。財産の財に賀正の賀。ここのおっちゃんが、おぼちゃんの足腰が弱ってきたんで逃げないかーんとか言うて、まあ自発的にここを整備しだしたわけですよ。で陰谷さんとこもそうなんよな。もともとお墓へ上がっていく道を今の自主防の会長の奥さんが股関節が弱ってきたから、ちょっときれいに掃除しよったんですよ。と、もう一本、自然発生的、先にこうできたところがあるんですね。ほれからねえ次はねえ、えー、この道な点点点が入るとるやろ？ これは公道のしるしやなあ。で、最初はこれを上がっていく道をつけようと思って土地の人に案内してもらいよったらねえ、土地の人がこここうきてここへ連れてきたんよ僕を。こっち側へずっと。ほんだったらもう、これいらんでえっていうてしたんやけど、ほんまはここらに畑があってこれをまたサイカのオッチャンが上上がるように繋げてくれとん。家の山、家、山、家の山路っていう名前にしたんやけど。こおに一軒空き家があるん。20メートルかそれくらいに空き家があるんやけど。ここ、家の山、家の山言うけんね。家の山路っていう避難道が、皆さんにはないな。ないだろ？

N：ないです。

S：点点点が入ってるところあるでしょ？これをこう延長して上へこう県道まで繋いでください。ほんで家の山路っていうんを作ってください。ほれで、ここまではたぶん赤線なんだろーけどほれはもうね、無断でつけてると思う。今ここの地権者おらんもん。

I：なるほど。

S：こっからここまでの道は黙ってつけとる。無断。

I,N,F：ははは。

N：本当は許可はいるんですか？

S：え？え？

N：許可はいるんですか？やっぱり。

S：またほんな大がかりなことするわけじゃないじゃないですか。山の中ちょっと掃除、片付けてあげてるだけじゃないですか。ほなけんほんなにまでやかましいに、いかん！て言われたらほうか！って言うてほおっておいたらまたもとの山に戻るから。ほの一、こころがし良いところなんよなあ。あの、行政任せにして避難路を作るとは地権者の交渉して、大規模な工事をせないかんけど、うちの場合はもう勝手に山の中片付けただけで避難路やし草刈っただけでもう避難路でしょ？ただほれだと作った人はここは道だと思っただけであとから来た人が、まあちょっと時間が経ってからだったら落ち葉もおつとるし道かわからんから、それじゃあ誘導用のロープでも張りましょう。という風なとこからいたわけよ。マグロの縄な。延縄。わかる？ごっつい耐久性が強いわけですよ。それをずっと張っていきよったんですよ。一番最初は。

N：仮で作るときはですか？

S：なんて？

N：仮の道を作っているときは、

S：うん、うん、そうそうそう。今でも磯の避難路いうたらほとんどがスジナオじゃ。これ強いからねほんでね。あの延縄のロープね。ほなけん途中までは赤線。あとは地権者に無断使用。ははは。けんねえ、僕やの場合はねえ、最低の悪いことはしてあるわけよ。地権者に断らんと道つけるとかね。断れるところは断れるけど。ガードレール勝手に切るとかね。

N：この前聴きました。

S：見たな？次、八軒屋。ちゃうちゃう、八毛路じゃ。八の毛。これは、途中までは八毛さんちの田んぼに行く道です。ほれから途中からはねえ、ここも地権者がおらんから無断でねえ、竹藪の中を黙って通ってきてます。ほの隣が僕の山なんやけどね。谷沿いにね。なーんにもしてないもん。しめ縄張ってあるだけ。綺麗に片づけてあるだけ。

N：もともと何か使われてたんですか？

S：ううん、使われてない。ほこに畑があるからほこに上がってくる道が、地権者の畑があったけど、あとは他はもう、藪になってしまったのよ。ほっといたら段々段々竹が繁殖してくるんですよ。ほしたら割と草生えてこんから。杉林入ったことあるん？杉林って保水力が弱いって言いませんか？ほれは下がすつとんとんやからよ。で、広葉樹っていうのは下にもいっぱい小さい木や葉っぱがあったりするけん、あの一、保水力があるんですよ。杉林は下草が生えんから、保水力がないんで山が荒れるんですよ。ただほの、今の雑木林の広葉樹の中も、杉林状態ですよ。もう木が大きいになってしめて、陰になってしめて、下がもうすつとんとんになってるのよ。やからほこらちっさい雑木やを切ってやったり片づけてやったら、十分通ろうと思ったら通れるんよ。これ避難路？て言われたら、避難路って言うだけのこと

で、誘導用の細いロープを張ってあるだけです、ここは。上の方だけはちょっと、きついとこだけはブロックで。

N：全体的に杉林が多いんですか？ここら辺は。

S：いやいや、ここはほとんどはね、雑木林。

N：ここだけですか？

S：どこ？

N：八毛。

S：八毛さん？ここは竹藪の中じゃ。ぼくんちのが藪なんですよ。それが段々段々広がっていったんかもしれんね。けん、竹藪とか大きい雑木林の下は、陰やからね、ほんなに草が生えて生えてしないの。ま、かなりそういうコースが多いんですよ。この場合は。ほうせんとね、管理が大変でしょ。お日さんがかんかん当たるような道だと。

I：あ〜そうですねえ。

S：毎日草刈りに行かないかんじゃないですか。それで次は八毛さん済んでえね、ここは橋本路と書いてあるかな。これはね橋本さんという人の上手にあるんですよ。ここが、オオイさん、カマヤさん、ハケさん。三軒だけがねえ下の方へは逃げてこれんでえな。川下の方へ。こんだけのグループは。川上に逃げささなあかんてえ。ほーするとね困ったことにねえ、ここ 20m と書いてない？

I：そうですね、21m、

S：21か。ここらが、橋渡ったここらが 20m なんです。ほしたら、このポイント以外は 20m はセーフティラインなんです。だからここだけは浸水地域なんです。わかるか？これ谷が二つあるけん、こっち側は短いだろ奥が。こっち側がねえ田んぼがいっぱいあつたりするから、緩いんです。ゆっくり上がっていくんです。やから段々段々津波が押し込んでくるからこの奥まで浸水予告が。おんなし 20m でもここは危険なんです。20m 津波って書いて、危険って僕書いてあるけんね。ほんでほーすると奥へ奥へ逃げささなあかんから、こんだけの家の分は、こっち側の山へ上がらさなあかんのんでここにどうしても道があるんで、橋本さんくの上の道ですけども。これはね地権者はね、ナルセタミコサンさん。成功の成に清い。たみこは人民の民に子供の子。ちょっと通らしてもらってよって言うて。ははは。大掛かりなことはしませんって言うて。ほんで一つは一番下は、電柱を切ったのを階段にして上の方だけブロックで階段積んだかな。ほの次いいですか？ここにねえ、喜多條さんくのお墓があるんです。喜多條さんっていうのは、このおうちやな。もともと庄屋さんなんです。ほんでねえ町長もしてましたから、この自分とこのお墓に行くのに、あの一、スロープのような道をね、1000 万くらいかけて作ってあつたのね。地権者がね。ほれを通らしてもらおうとしとんと。ほれともう一つはこの下にももう一つお墓があつてね、この 20 メーターラインから下にね、ここに家があるじゃないですか、この喜多條さんくのスロープはおうちの中から行くんです。庭先から。ここらの人はこここう回っては行けれんだろ？この家は。できればダイレクトに山へ上がっていきたくて。

N：はい。

S：この下へ、お墓のそこへ、避難路を作れって言うたんよ。あぜ道通ってきてね、こつから上がれるように石垣を取り崩して、階段を作って、上の喜多條のとお墓のそこへ作って、ほれから県道のそこへ繋げえって言うたんじゃ。言うてから日曜日が三回もたつのに工事せんのかよ。

N：どなたに言われたんですか？

S：この家に。

N：あ、ふつうに。

S：お葬式に会ったけん、兄弟の家やけんな。ちょっとこいちょっとこい言うて。おまはんくはどやって逃げるんな？横の田んぼの畔通ってから上のお墓のそこへ上がって上、県道へ上がる道を作れ。って。ほんで喜多條さん、喜多條ミズホさんちゆうんやけど、ミズは王へんに、山書いて、雨みたいなやつ。わかるか？ホは稲穂の穂。ほんでほこのお墓の横を県道を上がる道をつけてもええって交渉はしてあげてあるから作りなさいってここの兄弟に言うたんよ。三週間たってもせんけんな。お前らせんけどわいらがしょーか？て言う多。ははは。そしたら次の週しよった。ははは。

N：ははは。

S：で、とりあえず木でこう段を作って、ほんでここの、ここにも家があるんよな。ここの家の息子が三人おるんよ。三軒で若い子三人でせえよって言うたったら、ここの前のじーちゃんくでロープもらって来いよー言うて、手すりにせーよー言うて、そしたらもろてきて作ってあったわ。で、今は喜多條さんにクレームがついてきてこっち側はコンクリでしてあるのにおんなじうちの山なのになんで木なんですかって。これはボランティアがしたけんしゃーないじゃないですかー。都合が悪かったら直すんやけど、とりあえず都合が悪いっていうことはないけん、ボランティアの顔も立てなあかんじゃないですかって言うたら、いやいやほんなことなりません。ははは。差がついたらいきませんや言う。ほんでまた、ブロック 106 個使って喜多條さんのお墓から県道までは普通はブロックは 40 センチ幅なんやけど、倍の 80 センチ幅の階段を作った。やけくそ、作る側が。おきちゃん、ここはやけくそやなあ、て。ははは。で、ほれは一つは、喜多條の奥さんに言われたクレームのせいもあるんやけども、一番こうスロープ的にも楽なんで、車いすの人やがこう、逃げやすいと思ったんよ。ほなけんちょっとやっぱり災害弱者的な人が一番多くなるんじゃないかなと思ってこの西の集落の内ではここの分についてはちょっと階段の幅を広くした。そういう思いもあつてね。いいですか？ここ地権者は喜多條瑞穂さんっていうて庄屋さんね。

N：はい。

S：ほれから次はねえ、御旅路。これはねえお宮の、祭り期間中に神輿が期間中いとるところを御旅所っていうんですよ。お宮がどこにあるん？ここにあるけど宵宮の日にお宮に、ここに出てきたらずっとおるんですよ。えー、去年までは五日間。ぼくや子供の時は十日間。ほの昔はもっと長かった。今年から三日に変えるんやけどね。御旅所があるから御旅所のこつからこれはいつも僕はお祭り前には草を刈ったりしよったけんええわええわって黙って、ははは。あつこ道つけんかーって勝手につけたんやけど後でいやちゃら言われたわ。ははは。

N：ははは。

S：ここの喜多條はんにな。お前うちの山縦横無尽につけてるなあて。

N：喜多條さんの山なんですか？地権者。

S：ここね。こう正面からこつち側が一人と、こつち側に東のお寺があつてあとは喜多條さんちの山なんですよ。で、ここはあとで奥さんに言われたんやけど、あれ断ってくれなんだですよって言いよったわ。ははははー。ほなけど道つけてしもたけんてえ。というのは前から上がれる、横から上がれる、裏回りで上がっていけるに対して、こちら側、特にこの、このあたりの人が逃げる場所がないのよ。

N：あ〜。

S：な？一時も早く高い場所へ上げささなあかんのに、こんなところ行きよつたら時間かかるでえ。やから少々きつくても急いでここから上がるルートが欲しかった。けん、20 本ある避難路の中でここの勾配が一番急なんですよ。ほなけど車いすで行きよる義足のおっちゃんも行けた言うてましたよ。でもみんな言うんですよ、勾配が急なとか。そんな設計して道つくんよるわけでもないんやけん、命と引

き換えやけん上がれっちゅうて。で、気にいらなんだら前回るなり喜多條行けって。文句はいちいち聞いとられん。文句が出るんも承知で急こう配な道を作りました。それはいろんな角度から上がれるということです。ほんで前のところにきて西寺路で書いてあるね。これは光明寺っていう寺と地福寺っていう寺があるんですけど、こっち側が東群、こっち側が西群っていうんですよ。で西群の方にある寺が、西側にある寺やけん、西の寺。地福寺の方は東の寺っていう県。西の寺から上がれって言うけん西の寺路とした。で、グラウンドの横から入ってくるんが東の寺路。えー、もともとほなけんね西の寺のところは英霊塔に上がっていく道やから、でちょーどねえ地権者が境になつとんよなあ。

N：あ〜。

S：ここが。ほなけん両方が寄付したんちゃうかな、最初に。

N：寄付？

S：ほの〜、英霊塔ってわかるか？戦争に行つて死んだ人の霊を祀つてあるとこ。僕やのとはね、忠魂碑ってのがお宮のところにあるやけどね、ほれをやめてこっちに作ったからか？ほのときに英霊塔を作るときにこの真ん中の境を寄付したんやと思うわ。ほなけん一応公道になつとんでしょ。

I：あ〜なるほど。

S：階段はもう誰のものでもないみたいな感じ。地権者も階段の半分までがうちのとか言わんわ。階段からこっちがうち、階段からこっちが寺とか言うてるけん。公衆用道路なんだと思います。いいですか？御旅路は喜多條さんな。ほれからな東寺の道はね、これはね、途中までね、天神さんの途中のどこまで赤土を取つたところがあるんですよ。というのは今みたいに舗装してないからお祭りのときには青年団が山からモッコで土担いできてね、道路にずっと赤土を入れてた。ほなけん土取り場があつてほこまでは赤線なんです。んであとほちよつとつこう階段ぼくこうしてあるとこがあつたんでそのまま通つとんです。もともと道だったというたら道。山だったというたら山。ほなけんこうあんまり断つて断つて、ふははは。もともと通んりよるところでないかって言うて、言うていた。その次はですな、尾鼻路な。これもね途中までは点点点が入ってるから赤線なんだろうなあ。であとほちよつとねあの、えー、尾鼻さんとこの、尾鼻キヨエさんじゃな今は。キヨエさんかなあ。おぼはんの名前なんだろうな。

N：オバナキヨエさんですか？覚えてない。

S：そこの田んぼをちよつと通らせてもろて天神山へ上がるように繋いでしもた。ほれと天神山路っていうのは尾根の道を一本こう名前を付けとんですけども、これは昔は僕や子供の時はこん中で走り回つてた遊び場やなあ、ははは。事情はわかつとつたんでちよつときれいに片づけて通らしてよつて、ほなけんこれ地権者は喜多條さん。ほの次は、なんだつたかな。

N：サンガ路？ヤマガ路？

S：ああ、山賀か。山賀さんっていうはここのこと。山に賀正の賀な。これはちよつとあの田んぼ、お百姓さんなんですけども、途中まで自分ちの田んぼを補充整備っていうかなあ、田んぼを整備して、作業用の道を、田んぼへ行く道をユンボでこっしやえてあつたのよ。たぶんこのあたりまで。

N：はい。

S：ここらくらいまで。

N：20mの手前、

S：20mの手前くらいまではね。作業用の道、田んぼへ行く農道。農道にしてあつたんやけど、ほっからまあちゃん、まあちゃんっていうんやけど、あれちよつとお前県道へ繋げって言うたんよ。ほおかーや言うて、ほな田んぼ一枚つぶすわー言うて、荒らしてある田んぼの中を今ユンボで道にして、で、上村路の上がり口に繋いでくれた。で、自分くやが逃げる時にこれをこう逃げてええしこつちからこう

来てもええしね。で、次ね、上村路っていうんがあるんよね。これは、えー、途中で水路があるんですよ。青線。青線っていうのは田んぼに水を引くとかいう用水路。その用水を点検するために下りてくるちょっと細い階段みたいなのがあったのよ。用水の点検路。これを上村さんっていう人が僕やが知らん間にちゃちゃちゃちゃと。ははは。してしめたのよ。板で階段こっしやえて。ほなけん、上村路と八軒屋路と陰谷っていうのは自主防ができたくらいのタイミングで先地域の人が仕事してたよね。で、上村路の地権者はね、喜多條瑞穂さん。いい？

N：はい。

S：次は亀岡路。これはもともとの道です。いわゆる公道です。公衆用道路。もともとなかったんやけどこれが学校作るときに工事用の道で作ったのよ。

I：あ～。

S：今の校舎を新築するときに。で、ほのままほれを残してあるんですよ。やけんたぶん一番底にはね、ブルーシートかシートをひいてね、で、盛り土をしてね、仮の道を作って工事用に使うたん。ほれをほのまま残してくれて地域が言うて残したんですよ。だからこの道はあの一、地震が来たら崩れるって皆言うんですよ。

N：あ～。

S：かなり広い道なんやけど。ほなけんあんまりね皆これをあてにしてない。これで今皆さんの地図にはないんやけども、この三差路のところにここの下の家から上がってくるような道が一本できてるんですよ。ここのね、ここ入るところからよ、ここにまた一軒新しい家があるんやけどこの屋敷を通過して、ここの三差路の下へ上がってくる、道。名前なんてしょうか。ははは。名前付いてないけど。で本間は亀岡さんっていう家の屋敷を通るから本間は亀岡路にしたいけど先に亀岡路っていう名前付けとおでな。ほなけんここにオオミスキの五輪塔があるけん五輪さんでもなんかしようかなって思っとなんやけど。で、地権者はね、成瀬民子さん。これもちょっと通らしてもらってよって言うたら、はいはいちゅうた。な、お宅の山綺麗に片づけといてあげるわなって言うた。な？いいか？次、松下路。で、これはねえ、どうしてこの道を思いついたかというねえ、ここの上がっていた 24,1 メートルていうところにお墓があるんですよ。ここの。今は松下さんになっとなんやけど。ねーちゃんが嫁に行つて松下になったんやけど、もともと山賀さんとこな、ここ作った山賀さんくの、元の家がここにあつてお墓がここにあるんよう。

N：山賀さんのお墓？

S：山賀さんのお墓がここにあるんよ。

N：あ～。

S：ほんだらこの道は、亀岡路はもともとなかったですからどんなに考えてもお墓へ行く道あつたはずよな。この道がないときにどなんしてお墓行きよつたんなって言うたんよ。ほら家の裏から上がつて行きよつた道があつたわだや言うけん、ほうかーてほなほれ見に行かんかーて。見に行つたらやつぱりどうにか通れる。ほんで今ちょっとこらねこう、あの一、なんちゅうかなー、土砂崩れが起きそうな、なんちゅうんかな、小石状なんです。岩盤でもないよな。ばらばらばらな地質なんですよ。ほれでちょっと車道工事的な、崩れんような工事をしてくれてあるんよう。で、ほの一ほれも大分経つて、下に水路みたいなんがあるんやけど、フェンスも腐つとるから県の方に言うたら、ほなあちょっと 2 メーターくらいの幅の道を、きれいに県道まで、点検用の道としてな作るよや言うてくれよけん、今はちょっとまあ大々的にせんと昔の道をそのまま草刈つたままくらいで、してますよ。ほか例えばこの、このあたりのおうちな、これ川が曲がった向かいにあるおうち。で、ここがちょっと低いんですよ、こん

だけね。これがはこう上がってきたら一番最初に上がるわね。なあ？だからこっから裏の一段高いところに上がれる梯子をかけたような避難路も枝のところにはあるわけ。ほなけんこの家はどう逃げるのこの家はどう逃げるのって、まああの一、土地勘あるから逃げようがないじゃないお宅わー。ほな新しい道作るかー。ここのおうちに来ると、バキュームカーが入ってくるのに裏の畑にこう梯子をかけてあるんですよ。こうこうバキュームが入ってこれるよおに。でほういう風な道やってバキュームの通る道を避難路に

使ったらええん。ほんでいつも草も刈りよる。ほなけん全部、この家はどう逃げる、この家はどう逃げる。ま、さっき一番最初に案内した家は、この赤のおうちじゃわな、スミジさん、さっきのおうちはな。ここだ、ここだ。この家は基本的にはこっち向いて逃げえやけども例外的に津波が来よるような様子が無かったら橋渡ってこっちへ逃げよって言うたとね。で、松下路は山賀さんく山ばかりではないけど。山賀なんかなあ。地権者がちょっとまたがっとおけど、もともとお墓へ行く道。やけんね田舎へ行くとなあ、お墓にまつわる道ちゅうんわなあ、ほんまに避難路としては最適よ。地権者の交渉せんでもええしな。

I：ああ～、そうですね。

S：もともとあった道やから。昔から通んりょんやけん大きな顔して通れるじゃない。ほれから次はね観音路ね。これはね観音さんのところから上がっていってお宮の森の中をて県道へ上がるようなルートなんですよ。で、これは昔、終戦後食糧不足の時にこの集落から向こう側、みんなが通ってきたところはあの開墾して畑をいっぱい作ったのよ。ほしたら自動車がない時代やから、物を片いで、天秤棒で片いで下りてくるからちょっとでも近い道を通りたいじゃない。やからこういう道を通って斜めにこう下りてきたりしてましたわ。そういうのをもともとこのルートに使ってちょっと新しくもう一本作ったのは、ここの宮内神社の境内地です。宮総代僕やけん僕がええって言うたらええし。ふはは。地権者は宮内神社。観音路はね。で次はお宮の前の町道。関連道言うてますけどね。ずっと港のそこ下りてくる道ね。宮前路としてありますけども。これはまったく町道の公衆用道路です。ただこれは誰もこの道逃げるって言わんわ。十分間に合うと思うんです。ほなけどやっぱ津波の来よる方向に向かって、例えばこの漁業組合の人でもあれを行くって言わんもん、前の道。観音さん行くって言うもん。心理的に。絶対に津波に向かっては逃げんってことじゃわな。ほなけんなぜこんなに 20 本って言う避難路を作ったかというたら地形が、問題は川が二つに分かれとるということなんですよ。

第2章 災害弱者とは誰か：一方向的支援から助け合いへ

大塚諒・岡本万由子・喜来聖奈

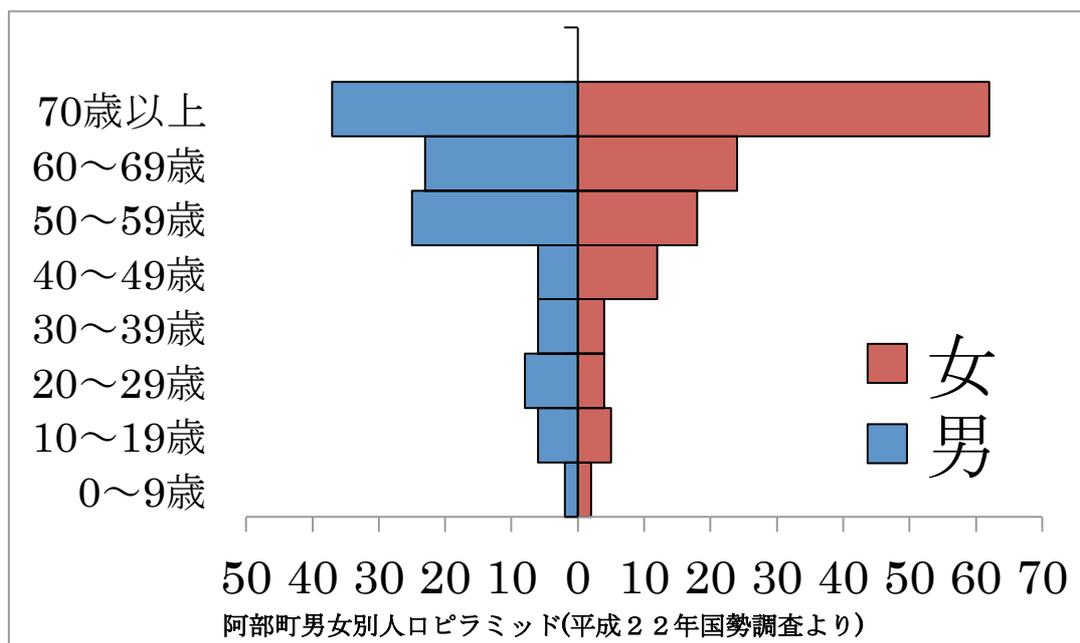
1.はじめに

本章では、災害弱者の支援という観点から、過疎地域における防災・減災において目指すべき方向性について考察する。そのために、災害弱者が避難訓練に参加した経験についての語りをもとに、災害弱者の避難をめぐる支援者－被支援者の関係性についての検討を行なう。

災害弱者(平成3年度版防災白書より)

- ・自分の身に危険が差し迫った時、それを察知する能力がない、または困難な者。
- ・自分の身に危険が差し迫った時、それを察知しても適切な行動をとることができない、または困難な者。
- ・危険を知らせる情報を受け取ることができない、または困難な者。
- ・危険を知らせる情報を受け取ることができても、それに対して適切な行動をとることができない、または困難な者。

以上の4点を定義としており、これを基に具体例を上げると、障害者、傷病者、高齢者、乳幼児・子供（健康でも理解力・判断力が乏しい）、外国人（日本語が分からない）、妊婦、旅行者（その場所の地理に疎い）などが想定されている。



上のグラフは、平成22年度の国勢調査を基に作成した阿部の人口ピラミッドである。阿部では、65歳以上の高齢者の割合が6割を占めており、全国的に見ても高齢者が多く、過疎・高齢化が進行していることが分かる。仮にすべての高齢者が災害弱者であると考えれば、阿部住民の多くが災害弱者ということになる。しかしながら、内閣府による定義が示すように、ある人が災害弱者であるかの判断基準は、その人の災害対処能力がどの程度か検討する必要がある。こうした観点から、私たちは阿部に暮

らす高齢者の災害対処能力についての調査を行った。

2.能動的な高齢者

本研究では、65歳以上の高齢者5名に日常生活や避難に関する聞き取り調査を実施した。以下の表は、対象者5名の年齢、運動能力居住状態についてまとめたものである。

	A	B	C	D	E
年齢	73	81	81	68	77
運動能力	外出しない	散歩ができる	散歩ができる	運動ができる	運動ができる
居住状態	二人暮らし	一人暮らし	三人暮らし	二人暮らし	二人暮らし

本章では、今回聞き取り調査を実施した中から、避難に対して積極的な意見が見られた Bさんと Dさんを取り上げる。

Bさん 女性（81）の事例

家族形態：一人暮らし

近所付き合い：あり。

運動能力：ゲートボールをしたり、散歩したりしている。

行動範囲：畑や学校、浜へ行くなど行動は活発。

《タイム・ア・ロケーション》

7:00 起床。畑を見に行く。毎日畑に行っておくらやかぼちゃを作っている。

朝ごはんを食べる。お墓参りは毎日行く。

学校の運動場にゲートボールをしに行く日がある。

近所に住んでいる姉と話す。

12:00 昼ごはんを食べる。浜まで散歩する。暗くなるまでみんなと話す。

夜ごはんを食べる。 就寝。

若いころは海女さんをしていた。

息子さんが家の裏に住んでいる。

旦那さんは42歳で亡くなった。

家事はほぼ自分でしている。たまに息子さんに手伝ってもらう。

現在Bさんは、一人暮らしをされている。普段から、ゲートボールや散歩、畑をしていたり、屋外で活動されていることが分かる。

《トランスクリプト》

N:ちょっと困ったとしたら、こう、助けたり助けてもらったりってことはあるんですか？近所の方とか、同級生の人とか。

B:まだ、今はまだ、まあ、一人でちょっとな。頑張って子供にも迷惑かけんように思てな。笑

N:それはすごいですねえ。

B:自分でちょっとする間は自分でな。

N:それはいい。

S:ほとんど一人ででしょるな。今度、畑でもしょうかあ言うてな。笑

B:自分がちょっとする間はな。まあ、なんとか。

Bさんの場合、下線部を引いたように、会話の中に一人称の言葉が多く使われている。これはBさんが、自分でできることは人に頼ることなく、自分の力でやりたいという思いを強く抱いていることが分かる。また、そのうち誰かに助けてもらわなければいけなくなると考えていることも読み取れるが、自分で動けるうちは自分だけでやることへのこだわりを持っていると言える。

N:こないだの避難訓練は・・・

B:ほんときは、前おったけど、こないだはおらん。

N:ぼくはそのときは、じゃあ、どうですかねえ、大変ですよ？笑

S:いや、うえまでな上がって、(車で)送ったげる言ったったんよ。上から下へ。いや、かんまんかんまん、別のところから帰る言うて。

B:休みもつてな。車でいきよつたら、なんもならんで、なあ。避難して車が無いなりましたらな、車でもんてきよつたらな。笑 ほんで少々歩くんよ

N:どこからあがったんですか？

B:学校の

S:あの、納屋の

N:おばなの、あれちょっと・・・あの、坂道が。

下線部から、Bさんの避難訓練に対する積極的な姿勢が感じられる。訓練は車でする方が楽だが、実際に避難する時のことを考えると車では意味がないため、歩いて訓練を行っている。この部分からも、避難に際して人に頼ることなく自分自身で避難したいという思いが強くあるように見られる。

このように、Bさんの語りの中には、他人に迷惑をかけたくないという思いや、自分でできることは自分だけでやりたいという思いが強く感じられた。また、避難訓練の段階から、実際に避難する時のことを考えており、地震や津波対策の自分なりの考えを持っており、避難に対して積極的であり、能動的な高齢者である。

Dさん 男性 (68) の事例

家族形態：奥さんと二人暮らし。

近所付き合い：あり。

運動能力：漁師をしているため活発的。

行動範囲：阿部の中だけでなく、阿部以外でも活動している。

《タイム・ア・ロケーション》

4:00 起床。
4:45 天気予報を見る。
5:00 港(浜)に行って海の状況を見る。
6:30 朝ごはん。
体を休める、もう一度海の状況を見に行く。
10:00 海女漁(漁業の方針で3時間)
13:00 海女漁終わり。
14:00 昼ごはん
休む、ゆっくりする。
17:00 夜ごはん。
21:00 就寝。
食料の買い出しは、多いときで週2回程度、阿部の外に出て行く。
食料は買いだめする。山田商店はあまり利用しない。
漁は土曜日と、第1,3火曜日が休みである。
家の裏に避難路を作った。

このように、68歳ですが現役の漁師であるDさんは、起床後に海の状況を見るため2回港まで歩いています。また、この日はアワビの解禁日だったため10時から13時までの3時間は海へ漁に出ていました。このようにDさんは高齢ながらも、屋外で精力的に活動していることが分かります。

《トランスクリプト》

N:個人的なことなんですけど、皆さん判断基準が違うと思うんですけど。どうなったら津波が来るから逃げようと、思いますかっていう質問なんですけど。つまり、地震が来たからって、必ず津波が来るわけでもないですよ。な、何が起こったら、ハッ、逃げようっていうことになるのかっていう、現実問題として、その辺はどうなんですかね？

D:こないだも、えーとアンケートやったかな。一番我々、まあ、やっぱりテレビとか、ほういう風に広報でね、そういう風にしてもらったらええんやと思うんやけどね。自分で、このぐらいの地震が起きたから逃げないかとかいうのは初めてのことやけん分からんでね。ほなけん、ある程度の広報とかほんなんは欲しいなあとは思う。

二重線部の「我々」といった部分に見られるように、Dさんは「一個人として」よりも「阿部全体として」意見を伝えており、代表者としての責任感が感じられる。また、下線部から、どのぐらいの地震が起きたら避難行動に移り、20メートルラインまで逃げるか、という明確な基準が決まっていないため、避難の初動が遅れる可能性について、行政へ迅速な対応を求めている。

N:そうですね、なかなか厳しい所があると思うんですよ。つまり、そのはや、早いですよね、ここにくる、到達するのが。地震が起きてテレビ局が情報集めて、流してまでに一秒では無理なので何分かかりますよね。そうすると、いつもそういうことが心配だと思うんですけど、少し、初動が遅れる可能性もない訳ではないですよ。

D:無いやろね、そんなんもやっぱり・・・訓練がいるんかな、訓練ではあかんかな。

上のDさんの語り部分では、Dさんが少し声を小さくして発言しており、これまでの語りに比べ、控えめで弱気な様子になっていた。これまでの避難訓練のことを思い出し、また、今後の避難訓練をどうしていくか、悩み、Nに対応を求めているとも見られる。この部分でも、自主防災組織の代表者としての責任感が見られる。

(中略)

D:そやねえ、まあ、ほれが一番いい方法かな思て、こういう地域ではね。もし、あんだけの高い、東北の、あの、津波のテレビ見よったら、とにかく高いとこあがとらな助からんっていうような感じで出たもんな。そやから、ここの場合はやっぱり、あの、真ん中の道行くよりは、すぐ山が近くにあるから。高いとこ上がれるんやから、まあ、上がれるようにしてやらないかな、ということで。すぐできる、っていうのがね。やっぱり、さっき言われたように、津波が、あの地震が揺って、津波がくる時間が短いために、ほういうことは思て。

N:もともと(避難路)を作ろうと思ったのは あれですよ。奥さんの、あの、足がやっぱり・・・

D:そやねえ だから あの、こないだも言よったんやけど、ちょうど入院しとってね。あの、小松島の病院に入院しとって。地震が起きた日は、ここ(妻)はテレビで見たんよ。わしはもう帰る途中で全然情報なしで。車で運転して帰ってきたら、警報が出て津波が来るいうて皆、波止のとこで出とった訳ですよ。ほんで初めて知った。ほれから、これはいかん言うことで、まあ、もし、テレビ見よって、もし津波がきたら、うちの嫁はん退院してきててもすぐよう逃げんと。自分でも、あれ、やっぱり連れて逃げるん大変やからいうんで、この近くの山へあがって、ちょっとでも高いとこへあがるんがええんでないかいうことで、ここに道を初めてしだした。

これら、2カ所の下線部が物語るように、Dさんは阿部の地形を見極め、自ら避難路を整備し、防災活動に意欲的に取り組んでいると同時に、避難に際して支援が必要な人のことを考えて生活していることが分かる。

Dさんの語りは、自主防災組織のメンバーとして、全体的に自分のことよりも他人のことを心配しながら話していることが読み取れる。Dさんは、現役の漁師として働いているため自分の体力には自信を持ち、自分の避難の心配はしていない。そのため、自分のことよりも、常に周囲のことを考えているような語りであった。また、自主防災組織のメンバーとしての自発的な意見も多くあり、Dさんの強い責任感が見受けられた。

ここまで見てきたように、Bさんは高齢で一人暮らしながらも、自分でできることは、自分でやるという強い意志を持ち、避難訓練にも積極的に参加されている。また、Dさんは高齢者ですが、漁師を続けており日中は屋外でアクティブに活動している。しかも、自主防災組織のメンバーとしてボランティアに避難路を作るなど防災に関して積極的に行動していることが分かる。つまり、これらの例から、高齢であることは、必ずしも災害弱者とは言えないということである。それどころか、Dさんのような一部の高齢者は地域の防災に積極的に貢献するアクティブな高齢者すら存在することが分かる。

3. 避難訓練の予期せぬ効果

2章で述べたように、高齢者の中にはアクティブに活動する者もいる。しかしながら、すべての高齢者がBさんやDさんのような訳では無く、中には危険を認識したり、対処する能力に何らかの問題を抱えた方もいる。

Aさん 女性（73）の事例

家族形態：旦那さんと二人暮らしである。

近所付き合い：あり。おかずを持って来てくれたりする。

運動能力：足腰が悪い。外出はしない。

行動範囲：ほぼ家の中で過ごす。

《タイム・ア・ロケーション》

- 6:00 起床。
- 6:30 旦那さんが作ってくれた朝ごはんを食べる。
テレビを見たりして、たいがい横になっている。
- 11:00 昼ごはんを食べる。
おやつを食べる。
- 17:00 夜ごはんを食べる。
入浴は旦那さんに手伝ってもらう。
- 19:30 横になる。
- 20:00 就寝。夜はあまり眠れない。
日中特になにもしないので疲れない。
夜中、何回もトイレに行く。

旦那さんは漁師である。

近所の人がおかずを持ってきてくれることがある。

月1回体を見てもらいに診療所行かなければいけないが行っていない。

ヘルパーさんはいない。

足腰が悪いので、ほぼずっと家の中にいる。

買い物は旦那さんが山を越えて町です。その他の買い物は地元で。

体が健康なときは、海女さんや釣り、子育てをしていた。

今まで、娯楽的なことをする暇がなかった。

自分で何かしようという力はない。

調査した時、娘さんやお孫さんがいた。週末は家事を手伝いに、遊びに来る。

Aさんは足に慢性の病気を抱えており、歩行が困難です。6:00に起床し、6:30に朝食を済ました後は、テレビを見たりと、たいがい横になっています。その後、17:00の入浴は旦那さんに手伝ってもらい、19:30には横になり、20:00に就寝します。このように、Dさんの行動パターンとは異なり、Aさんはまったく外出せず一日中横になっており、入浴にも手助けが必要であることが分かります。

《トランスクリプト》

N:こないだ、どうでした？あの避難訓練をしてみて、っていうか。

A:ほら、あれ。道あれ何段ぐらいあるんだろか。

S:50 段ぐらい、あっこまで。上までで 105 段だったんやって英霊塔のとこまで。

A:ほやけんどな やっぱり、身長かいてくれる人、身長がやっぱい違うかなんか
どんぐりこつと、どんぐりって。おとろしかった。やっぱり、くくつてもないし。

S:ああ、くくらなんだんか。

A:おばさん、ここ持っとしてよ、いたってよ。力が、握りしめれんけん、ほれ、こっくりこっくりこつくりして、まあ、落とされんけんどよ。おそろしかったでえ。んでもう、重たいのに、これどうなつて。

S:くくつとったほうがええかな、ほな、腰のほうでも。

A:ほやなあ・・・ただ、もう重たいけん、気の毒ないうんがあるで、みな若いしやけえ、軽いでないけん。

S:6 人かいてくんやけん、いけるでほら。

A:ほなけんどなあ、重たあ。笑 力入れとるつもりなんやけんど、よけ、ほれ、やっぱい力いれとつたらやりにくいんだろな。

この会話は、A さんが避難訓練に参加した時に、20 メートルラインに上るために担架に乗せられて避難した際の経験を語っているものである。3 ヶ所の下線部にあるように、避難訓練から、担架に乗っても落とされる危険があること、担架が安定しなかったこと、を経験した。このことから、避難に際して、素早く避難するために搬送される側にも訓練が必要なことが分かった。それと同時に、安全に避難するため、搬送する側に対する要望も生まれてきたことが分かる。

S:あっこだったら前に消防小屋があるけん、担架もあつて、ええけん。

A:あっこまで出ていけたらな。

S:普通の山っぽいとこいたら、なかなか手伝いがしにくいでえ。

A:山やったら猫が押していけんでえな、猫車が。こっちの道路いたらだ、どこどかが崩れても、真ん中の猫ぐらいは通れるでな。

S:できるだけおばさんやは、公民館の前がええわなあ。

A:まあ、ほなけんどなあ。

S:まあ、がんばつてよ。笑

下線部のように、地震が起きた際に、ある場所まで避難することができれば、助かる可能性が出てくるといふ、見通しが出てきた。しかし、助けられることに対して申し訳なさを感じているようにも見える。この、助けられることに対する申し訳なさは、次の会話に顕著に表れている。

N:そういう、あの・・・同期の人たちとこう、避難、どう・・・

A:もう学校卒業してから、もうなあ。同期生、Tさんと二人が同期生やけんな、ずつとなあ・・・

N:その、そういう方と、話しするときにあの、津波が来たらどうしようとかいう話は。

A:ここ裏はな近所やけんな。もう、自分一人でな、お父さん一人ででけんけんな。まあ、あの、ここの

旦那さん、おるで。旦那さんも一緒にな、一所懸命、助けてせなあかんでえって。もう、いや、すぐ逃げて逃げて言うんやけんどな。あかんあかん、ほって逃げれんや言うて。ほりゃ心配せいでええけん言うてくれよんよ、ほっては逃げえへんでえや言うて。笑 言うてくれよんやけんどな。

N: ああ、そうですか

下線部にあるように「ほって逃げれん」という近所の人が言ってくれたことを2回繰り返している。これは、自分では避難することが困難であるため、近所の人への力添えを期待しているように見える。しかし、最後に「やけんど」と否定しているように、自分を助けることで、他の人が犠牲になる可能性が出てくることに申し訳なさを感じているとも読み取れる。このように、本心では助けてくれることを期待しているものの、災害弱者は自分の意志で避難することが困難であるため、避難に際して近所の人への重荷になってしまうのではないかと気にかけている。周りの人が気にかけて声をかけてあげることで災害弱者が助けてもらえるという心構えを与えてあげられるが、それと同時に災害弱者の人たちは一方的な支援に申し訳なさを感じていることが浮き彫りとなった。

Aさんは、避難訓練の経験を通して、地震が起きた際には自分が助けてもらいやすい状態であろうと考えるようになった。災害弱者も、一方向的に支援されるだけの対象ではなく、自ら避難活動に取り組んでいく。これは、避難訓練を通して、避難に対する一種の能動性が生まれたと言えるのではないだろうか。また、救助される時には、自分を助けるために、若い人や家族が犠牲になるのは避けたいと考えている。そのため、助けてほしい、とは言わないが、もし「ついで」の機会や、助けられるチャンスがあるならば、助けてほしいと本心では思っているように見える。

Aさんの語りは、常に周囲の人を気遣いながら話している印象を強く受けた。一つ一つのことについて、詳しく話して下さり、自分から進んで意見を言っていることが多かった。また、身近な人への感謝の気持ちと同時に申し訳なさが、語りの場面で見受けられた。

Cさん 女性（81）の事例

家族形態：三人暮らし（旦那、娘）。

近所付き合い：あり。

運動能力：激しい運動はできない。足腰が弱い。

行動範囲：近くの商店に毎日行く。娘さんが月に2回デイサービスに連れていってくれる。

《タイム・ア・ロケーション》

7:00 起床。
朝食。
昼まではソファで横になる。

12:00 昼食。
食料の買い出し、夜ごはんの支度。

18:00 夕食。

20:00 就寝。

元気だったころは夏に海女さん、冬に刺し網をしていた。

毎日足腰の痛み止めの薬を服用している。

家族みんな元気で、家事など協力し合って生活している。

洗濯は娘さんが、料理は自分です。
料理が趣味。テレビを参考にしたりする。
ベッドの下には避難するために、靴を常備している。
過去に2度行われた避難訓練には参加していない。

足腰が弱く、補助具がなければ長距離の歩行はできない。しかし毎日、食料の買い出しに商店まで歩いており、少ないながらもAさんよりも運動していることが分かる。

《トランスクリプト》

N:その、逃げる時に誰か、こう助けてくれそうな人というか。

C:まあ、ほら、若いしがみなおるけんなあ。みな行ったらしてくれ・・・

なんや、奥さんあげたるあげたる、ほんなこと言うてくれよる。まあ、ほうなったら、自分の身が大事だろけんとな。

下線部では、周囲に助けてくれる人が居て、その人たちが、助けてあげると言ってくれていることに感謝している。しかし、誰も自分が逃げることに精一杯になってしまう可能性が高いため、強い期待は抱いていないように見える。11月に行ったアンケート調査において、地震が起きた際に近所の人を助ける気持ちについて質問をしたところ、助きたい気持ちはあるものの、実際に地震が起きたら、救助する余裕は無いという意見が多く見られ、Cさんの話されていることと同じ結果となった。しかし、Aさんの話にもあったように、支援する側・される側、両方が、避難に慣れることで避難スピードが向上し、助ける(助かる)可能性がでてくるのではないだろうか。

N:まあ、じゃあそこにいたら、ですよねえ。

C:もう、ほこの橋渡ったらすぐに山やけんなあ。まあ、山登れなんたら観音堂ずうっと手で押して走るわ言うて、よう走るかいな。笑

(中略)

自宅のすぐ近くに避難路があるので、誰かが連れて行ってくれるかもしれないと考えている。しかし、自力で避難路の下まで着けたとしても、Cさんの体ではシルバーカーがなければ坂道が登れないため、それから山を登るのは困難なことである。

N:こないだの12月の、あの津波の発表ありましたよね、あの20.2メートルの。あの時はどういう風に思われましたか？あのニュースというか、発表を聞いて。

C:なあ、もう(津波が)来たら、もうほれこそ、家もなんじゃもうあれへんてこころ低いけんなあ土地が。

もう、逃げるよかほか、しゃあないわい。我が身、ほれこそ、元気でさえあつたらどうでもなるでえ、もう逃げるんが第一じゃ、な。もうほれしか考えてない。笑

下線部は、Cさんの逃げたい気持ちがよく分かる部分である。Cさんも、Aさん同様に助けられることに対して心理的葛藤を感じており、できることならば助かりたいが周りに迷惑をかけたくないという、災害弱者特有の思考を持っている。

Cさんは、これまでの避難訓練には一度も参加しておらず、災害時には避難したいという思いがありながらも、具体的な避難方法を見いだせていないようであった。しかし、Aさんの事例にもあるように、避難訓練に参加することで助かる可能性が見つかるかもしれない。

Aさんと、Cさんの語りから、避難訓練がもたらした予期せぬ効果について知ることができた。まず、助ける側である健常者側は、災害弱者を担架で搬送しながら避難するなど、実践的な避難訓練を実施することで、災害弱者への支援の仕方を学ぶことができた。このことによって、災害弱者を安全に搬送することができるようになり、救助方法に慣れることで、迅速に災害弱者を避難させるようになる。他方、助けられる側である災害弱者の側も、搬送する際のやりかたに関する要望や、逆に支援されやすい体勢などを自分で工夫するといった学びがあった。助ける側だけの考えで救助するのではなく、助けられる側からも適切な支援方法を提示し、自分なりの避難に対する構え、支援される技法について学び・考えを深めることが、より迅速な救助に繋がるのではないだろうか。

避難訓練を経験するまでは、一方向的に救助されることに対して心理的葛藤を抱いていた。しかし、災害弱者の側が支援されるだけでなく、自ら訓練に参加していくことで、助かる可能性が出てきた。つまり、より重要なことは、助けられる側に「支援される可能性がある」という見通しが生まれたことである。このように、災害弱者を実際に搬送する避難訓練は、助ける側である健常者に対してだけでなく、助けられる側である災害弱者にも、ある種の能動性を生み出したと言える。すなわち、災害弱者は必ずしも支援を待つだけの受動的な存在ではなく、支援の受け手として、円滑な避難行動に参加する能動的な存在であると言える。

このように、避難訓練の経験には、避難に申し訳なきを感じていた災害弱者の思考を転換し、ある種、能動的にしていく効果があると言える。しかしながら、救助されることに対する心理的葛藤どころか、避難を諦めている者もいる。そこで、Eさんの事例を紹介する。

Eさん 男性（77）の事例

家族形態：奥さんと二人暮らし。

近所付き合い：なし。

運動能力：筋トレをしている。

行動範囲：阿南まで買い物に行っている。

《タイム・ア・ロケーション》

5:00 起床。

朝ごはんは適当にすませる。

基本的にずっと寝たきりの奥さん(84)の様子を見ている。

奥さんは障害がある。手足が動かなくなって8年目になる。

40年前阿部に来た。

時間があれば脳トレや筋トレ、目の訓練をしている。

買い物は週2回程度。阿南まで行く。

人には頼らない。

散歩はなかなかできない。

娘さんは徳島に住んでいるけど、どうしているかわからない。

このように、Eさんの妻は手足が動かさない重度の障害を患っており、避難することが困難である。
Eさんの妻は自力での避難できないため、Eさん自身には避難する気が見受けられない。

《トランスクリプト》

N:あの、どういう風にこう津波から逃げようと計画されているのかなってというのが

E:うちけ？うちはこれ(妻)な、重度身体障害者で、今もう全然動けん。

おそらく、もう逃げれんとおもとんよ、ほんで、逃げる気もない。

どないてほな、あのなあ、これを連れていくかいうことが、あれ、あの、腕も手も肩一本あかんのにやなあ。

あんなん連れて行っきよつたらよ、骨折するか、誰かもう分かつとんよ。

N:ああ。

E:ほいてもう、どないしても、連れて行く気はない。うちは、避難はない。

N:うーん・・

E:ほやけんだ、こう考えたらなあ、まあ、なんやらのアンケートにいつとるように
まあ、転居しなきゃあない。もう動かすいうことはでけん。

大体、無理して家連れてきてとるけん。

N:あぁー。

E:普通、あの・・・あぁいうねりん(介護施設)とかなあぁいう介護施設でな。

おるいうんを無理して家におる。

一生懸命しよる。

N:あぁー。

E:ほなけん、全然ほんな(避難する)・うん、気はない。

ほんで、津波も、もう、避難のほうなはい。

今のほういう考えはない。

N:はい。

下線部の部分からは、Eさんには避難する気持ちがないことがよくわかる。本心では、妻を連れて逃げたいと思っているかもしれないが、妻の体が動かないこと、動かしてはいけないことから、「逃げることをやめる」ことにしていると読み取ることもできる。介護に努め、もし災害が来たときには一緒に死ぬ覚悟ができています。さらに、逃げる気がないため、津波や地震に対しての対策もしていないように見える。

E:ちゅうことはな、一番のものはなあ、一代で津波に二回あうことあんまり聞かんのよ。

N:ああ、なるほど、何百年かに一回とか。

E:うちもな、今からな、ほりや30年いて30年のうちに60%の確率とか言よつたでえな。

うちはちゃうと思うんよ、100年のうちでほおでないかとおもとん。

ほなってよ、あの、…うちがな、ほやってほら。

東北は知らんじよ、向こうはまた違うけん。

N:はい。

E:こっちやつたらな、ほんなに、一代でえな、津波に二回おうとんは、今まで一回も聞いたことない。

ほなけん、うちは無い!とおもとんよ。

N:はい。

E:ほなけん、おもとんやけん、ほら明日あるか分からん。

ほなけん、地球がな、45億年の間にどんなんなつてこんなんなつたかな。

ほんなこと思うんだつたらな、ほら、明日がどんなんなるやら。

100年先やら200年さきやら分からんのんとちゃうん。

N:そうですね、本当のところはわかりませんから。

(中略)

しかし、先程の下線部とは異なり、この部分では、Eさんは地震について情報を得ており、全く興味がない訳ではないことが分かる。また、地震なんて、いつ来るかわからないというEさんなりの考えが読み取れる。そして、「明日来るかも」とは言っているが、自分が生きている間には来ないと思っているように見える。

E:ほらまあ、想定とかなあ、ほんなこと言いだしたらやなあ。

何百年やら何千やら何万やら何億年前いうたらどないなつとるや分かるでなあ。

N:うんー。

E:ほんなことまで分かるはずないんよな。

だいたい、そうすることすら間違うとるんやないかと思とるぐらい

人間の今までの歴史はほんなんでもなかつた思うんよ。

N:はい。

E:色々やりよつて、ほいてな、ほういう、災害になつてほれをまた復旧しもつて。

ほんなして、今の社会ができとんでないんかとうちはほう思とるぐらいじゃ。

ほやけど、うちは、ほの、今の時点ではあんまり避難する…

来るともおもとらんしな。

N:はい。

E:ほいて、波がきても、こんなところへ来るとも思とらん、ここはほの、昔の想像からいたらな、ほら、分からんわだ。

地球がなあ、どんなんなつとるかやら、どこで地殻変動があるんやら分からん。

ほんなこと、想定で言よつたらうちは分からんと思うん。

下線部では、先のことは分からないので、想定を言つてもきりが無いと思っていることが分かる。また、最後の下線部にもあるように、想定ではわからないという考えがEさんの中には常にあるといえる。この部分では、「津波が来ない」と思っているのではなく、ただそのように思いたいと感じているように見える。

妻が重度の身体障害を患っているため、避難ができないので、自分自身も避難する気がないという考えである。しかし、AさんとCさんの事例で見えてきたように、避難訓練に参加することは災害弱者に避

難に対して能動性を生み出す効果を持っていると言える。すなわち、避難訓練の効果に注目し、Eさんの妻に避難させる訓練を行うことで、妻が避難できる可能性を見出し、Eさん自身も避難しようとする考え方に変わっていくのではないだろうか。災害弱者を一人で助けようとするのではなく、近所の人も巻き込み、災害に対して集合的に対処することによって、災害弱者も避難できる可能性が生まれていくと言える。

4. まとめ

これら5人の事例から言えることは、以下の2点、高齢者の中には、「能動的な高齢者」と、「受動的な高齢者」がいるという点である。

2章で見てきたように、災害時の避難に際して、自分で出来ることは自分でやりたいと思っている者、自主防災活動にあたった者が「能動的な高齢者」にあたる。しばしば高齢者は、年齢故に災害弱者と見なされることがあった。しかし、元々「災害弱者」とは、固有のカテゴリーではなく、「災害に対処する能力」の有無によって規定されるものである。Dさんの事例が示すように、高齢者であることは災害弱者を意味しないばかりか、地域防災の担い手にすらなることができる能動的な存在であると言える。また、危険の認知や危険から自力で避難することが困難な災害弱者も、支援を待つだけの受動的な存在であるとは言い切れない。なぜなら、Bさんの事例が物語るように、災害弱者の避難は、支援するという能動性と、自分で出来ることは自分でするという支援されるための能動性が組み合わさって初めて可能となるからだ。この、支援者にあわせて自らの行動を調整するという意味において、災害弱者もまた能動的なアクターといえるのではないだろうか。

そして、もう一つが、3章で見てきたような「受動的な高齢者」である。AさんとCさんの語りから、災害弱者は避難に対して、救助されることに心理的葛藤を抱いている者や、Eさんのような避難する気すら無い者がいることが分かった。では、この災害弱者の意識を変えるためにはどうすべきか。Aさんの語りにあるように、避難訓練の経験を通して、救助されることに対して意見を持つ、ある種の能動性が生まれた。そして、それと同時に自分に助かる可能性があるという見込みも生まれた。これは、救助する側に焦点を当てていた避難訓練の予期せぬ効果であると言える。つまり、「受動的な高齢者」として見なされてきた高齢者が、避難訓練での経験を通して「能動的な高齢者」へとシフトしていくということである。すなわち、救助されることに受動的であるCさんや避難する気が無いEさんも、避難訓練に参加させ、逃げる意思を持たせることで、避難に対する能動性を生み出すということである。

これまでの支援に関する考え方では、持てるものから持たざるものに対する一方向的な支援に注目が集まっていると考えられる。それは時に資源であったり能力であったりする。今回の場合は、災害への対処能力をもつ者が、対処能力を持たない者、すなわち災害弱者を一方向的に支援するという式である。そこでは持つものは能動的で、持たざるものは受動的という関係が前提視されていると考えられる。しかし、私たちは、このような既存の前提を越え、災害弱者の能動性に注視し、双方向的な助け(かり)合いの考え方にシフトしていく必要があると考える。例えば、災害弱者も始めから避難を諦めるのではなく、玄関までは自分で出てみるとか、大きな道までは自分で出てみるというような、災害弱者側からも能動性を見せることで、助かる見込みが出てくるということである。なぜなら、避難の場面における支援者と被支援者間の相互行為をみれば、健常者による災害弱者への働きかけと災害弱者による健常者への働きかけがあわさって、はじめて共助、つまり集合的な災害への対処が可能になるからである。これまで見てきたように、災害弱者の救援を組み込んだ避難訓練プログラムは、救助する側だけでなく、さ

れる側にもポジティブな効果をもたらす可能性がある。従って、避難訓練に関しては、避難する訓練や救助する訓練ばかりが注目されているが、助けられる側である災害弱者の訓練を組み込んだプログラムを開発することも必要であると考ええる。

また、避難訓練に際しては、阿部の負の災害文化についても焦点をあてる必要があると考える。Eさんの語りにもあるように、阿部は、これまでの大地震において大きな被害を受けていない地形的に恵まれた土地である。それ故に、阿部に津波がくることは無いという考えの方も存在する。東日本大震災が起きた時には、津波警報が出ているにも関わらず、港まで見に行く人たちがいたようである。そのため、阿部住民の奥底には、津波が来ないという考えを持っている者がいると考えられ、つまり「受動的な住民」がいると、その思考を変えるためにも、避難訓練に参加させていくべきであると考ええる。

そして、災害弱者の個人的な災害対処能力にだけ焦点をあてるのではなく、阿部地区住民の集合的な災害対処能力を向上させていくべきである。つまり、災害への対処能力に困難を抱える人びとを単なる支援の対象と見なすのではなく、彼らが持つ能動性に焦点をあて、その能動性に注目した防災体制をつくっていく必要がある。

〈参考〉

統計局 平成 22 年国勢調査結果確定人口に基づく改定数値(平成 22 年 10 月～23 年 6 月)

補遺 Aさんへの聞き取り調査の内容

A:Aさん N:内藤先生 S:瀬戸さん F:お父さん (Aさんの夫)

NHK:NHKの方 O:大塚(学生) K:喜来(学生) M:岡本(学生)

NHK:すいませんこないだあの、ご挨拶させていただいたNHKの野口です。今日ちょっと一緒に・・・

S:こないだきとったで、頼みに

A:ああああ、ほうけ。もうわっせてまうわ

S:はははは

A:おん、なあ。

N:あの、一応あの、徳島大に勤めてます、内藤です。

A:ああはいはいはい

N:それですね、あのー

(お孫さんが来て少し話す)

A:大学の学生さんけ

N:そうです学生です。ちょっと今度の津波の避難のことについて、あの、一応調べていてですね、こないだのあの避難訓練参加されたりしてたと思うんですけど、まあそのときはなしをちょっとお伺いできればなあなんて・・・

A:ああはいはいはい

N:あのーするんですね。えっと、要するに、お年寄りのあのー、みなさんらがですね、あのー、津波がきたときにですね、どの程度こう自力で、避難できるかというですね、

A:あー。わたしがな、やあ逃げきれはようせんなあ。

N:いや、そうだと思います。でもあのーちょっと思うんですけど、こないだの避難訓練もそうだったと思うんですけど、あのー全く自力で避難できないというふうに、避難せんでもいんちやうかとかもしかして思っていたかも知れないんですが、ちょっと避難訓練してみて、ほこまで頑張ったら、ちょっと助けてくれて、避難できるかもしれないような、そういうふうにもう思われたり、されたかも知れないな、と思うんですね。えっとだから、まるまる全部だれかに助けてもらうんじゃなくて、ちょっとは、少し頑張って

A:ちょっとうてもなあ、ほの車いすが玄関だろー、玄関までは杖ついてな、ちょっとまあいけるようになったんよ。足手術したけん。これ人工関節入れたけん。ほなけどほれまでだったらもうベッドからここまでくるんも車いすだった。ほなけん、あの、これ、人工関節入れて、まーあっこまでは杖ついてちょっといけるんやけど、まあ外は、いかんわ。

N:あーそうですか。

A:外はもう車いすで、お医者さんまででもお父さんがおしていつてくれる

N:あーそうですか。

A:ほなけんひとりではよういかなあ。

N:あ、いえいえ、そうやってお父さんがついてきてくれたりしたら普段通りにですね、そしたらまあ、そうやって逃げることになるかも・・・だからですね、その普段、どういうふうに移動とか、あの、されてるのかなというのが、

A:あのな、夜はな、中にトイレしたいんやけどな、夜はもう寝れんけん何回もいくんよ。で、もうベッ

ドの横にポータブルおいとんよ。

N:あああ。

A:でももう自分ではなにをするゆうてもできんなかなか。まあお父さんと普段はふたりやけんな、ほんで、お父さんはなんやかししとってもな、味付けやな、ほんなん炊事やはな、味付けはほら、持ってきてな、醤油が足らんだの命令するよ、口だけ

N:ははは

A:ほやて命令は好きやけどな、自分で切ったり、力がな、握力もないんよもうな、ほなけん、今度もな—この膝関節入れたんやけどなほなけんど足首がまた、もうなひつついとんよ、ちょっと長いことたつとつたらあかん。

N:手術いつされたんですか、人口関節の。

A:もうな、8年位になるかなあ。16年にしたんやけどな。ほれまでもう、ベッドからここまでも車いすでな。ほなけん、これしたらまあ、あの人工関節いれたらリウマチが治るのではない—先生がゆうんやけどな、ほなけんどもあ少々は、歩けるかもわからんのでほれしたんよ。

N:よかったですね。具合よくなって。

A:なあ、ほらしたらなあ、ほこまででも、杖ついてでも家ん中だけでも移動できるけん。

N:はあはあはあはあ

A:ほんな長いことはよお歩かん。ほんで今度足首のほうが、もうひつついとんよ骨が。ほなけん長いことよお立てん。重いだろほんで、体重が。

N:いえいえいえ、そんなことは。

A:食べるんはおいしいけんなんぼでも食べるんよ。うーん、子供にはもう体重減らさなあかんいわれるけどな、ほんなん食べるんだけが楽しみ

N:いや、素晴らしいでうね。食べ物がおいしいのは。素晴らしいですよ。

A:ほんで口だえは達者なけん、ははは。怒られる。

N:あ、今年おいくつなんですか。

A:もう73歳。

N:73か、あー、そうですか。

A:なあ、もう15年なる。こなんなつて。

N:あーそうですか。あ、あ、こちらのご出身なんですか。

S:ふたりとも阿部のひとです。お父さんもお母さんもこのひとです。

N:あーそうですか。

A:リウマチやけん—完全に治るということはないんよな—

N:なかなか難しいですよ。うん。僕の先生もリウマチですけどなかなかね。

A:あー、やっぱこんなに動くんがなんなん(難しいん)。

N:あのね—、電動バイクなのがあるじゃないですか。あれに乗ってますねえ普段。

A:ほなけどあれもなんだろ—。電動バイク自分で動かさなんたらおしてくれんのだろ—。私手があかんゆうけん—。力がな—。またあの握力はかるやつあんで—。一生懸命したって動かん。

N:あーそうですか。

A:うんいっこも動かん。先生がもっと握りしめて—ゆうたつて、これで力いっぱいやけど、いっこもいごかんのに。もうな、こうやるんはいけるやけどな、あれはもう握ったつてびくともせえへん。はは。いっこも動かんのよな。ご飯はどないするかってな、箸持ったりはな、あれは、できるけんども、ほ

んでも一よう落とす、なんでもこぼしてしゃあない。スプーンでいたってスプーンでいけるもんといけんもんがあるでえ。

N:ああはい、そうですね。

A:あの、あんなラーメン類やったらスプーンでいけんし、な。

N:はい。普段はそのお父さん、おじいさんと一緒に、おふたりですか。

A:うんうん。

S:これ娘さん。

N:あ、そうなんですか。

A:娘は大阪のほうの。移動しとる。嫁にいとうけんな。

N:あー、じゃあお子さんはふたりですか。

A:いや子供はようけある。4人もある。

N:あーそうなんですか。

A:4人もおるはは。

S:跡取りはもうおるんだろ。

A:うん亜夜よりはもう大阪へ、やけんな、これはもうおつきなもんやけどな、

S:ほの僕は木岐におる子？（孫の男の子を指す）

A:ちゃうとこれ大阪の。

S:ああ、大阪のな。

N:一番上の方が大阪なんですか。

A:うん一番上がな。大阪で3人おる。

N:そうですか。男のひとが。

A:男ひとりよ。

N:あとはみんな女の方なんですね。

A:おんおん。あのな、教育大ができてほんでないようになつて徳大になつて、ほんで教育大が鳴門にいきしにいたでえ、ほんで先生になったら県内におってくれるおもてな、男ひとりやけん、ほな県内おらんなくても鳴門の教育大1期生でいったんやけどな、

N:あ、大阪のほうで就職されたんですか。

A:おん先生いややゆうて、はは、先生いやーゆうてから

N:じゃあ一番下の娘さんが木岐に・・・

A:一番下ちゃう真ん中が木岐。これ一番下は大阪よ。

N:あーそうですか。

A:みんなよそいでもてなあ。なにもないでえ仕事か。

N:そうですねー。

A:阿部にどっか就職するところがあつたらなあ。ええけんどしゃあない。就職するところがないもん。ほなけんみな出ていってしまう。

N:瀬戸さんみたいに帰ってこられるかたも

A:ほうやなあ。退職してなあもんてきてくれたらええけど、もう退職戻る・・・がないであんた。

N:ああ、ははは

A:もうわたしがおらんで

N:はは、まあたしかに

A:ほいだらもうなあ、

S:なかなか親が元気なあいえだは、いあまな、もんでこれんはなあ。

A:ほらなあ、退職してもんてきったて、もうみな友達やっておらんでえなあ。みなよそいってしてもて。なあ。

N:じゃあ、普段は杖なんかついて、杖で。

A:うん、杖でな、便所と洗面所と家の中な、外はいつももうよういかん。ちょっとしたらなんかつかまらなあかんしな、ふらーつとするんよ

N:外いかれるとき、おじいさんに手伝っていただいて。車いすで

A:おん車いすでな。もー、便利悪いやっぱり。

S:こないだあれ、時間よりはよー出てきとったん。

A:いやーサイレンがな、ここでサイレンがならなあかんってな、まっとったんやけどな、お父さん、サイレンが鳴ってさあいくーゆうてもおめー、みんな待ってくれたら、間に合うもひょっこりもないーてあっこまで出ていとったんよ。あの、昔の会堂のあっこまで。ほたらみなサイレン鳴ったのにはよいかないかんゆうていよったんやけど、いったら、ありやーこれようけきとるなあ。あっこまでだいぶおったんよ。

S:鳴るまでいったらいかんでないかだ。

A:ああああ、やっばあれ鳴ってからいかなあかんやろ家で。

S:ほうよ。ほやのにからな、みな時間までにいっばいきてな、おばはん連中が。

A:ほれ、当たり前や、あんた、なにーしたらさあつてなつたときに家からでなあかんけんな、おもたんやけどな、

S:あれ抜き打ちでもせなんだらほの通りはかれんわ。阿部のひとはな。

A:うーん、先いとつたら、

S:先みなくるけん。

A:みんなでとことこいっきよつたて、あれ、地震やいつくるや津波くるやわからんのに・・・ほなけんまっとなんやけどな、隣の人がもうみなきとうきとうゆうけんな、ほんでいったんよ。ほんでみなようけきとんよ。

S:みなくるんよ、あやつて。

N:それ、本番のときは、本番というか本当に津波がくるときですね、つまり、逃げようかどうしようか、って考えるときって、どう、

A:いや、こんなんやしなー、ほなまたお父さんも、もうなんになるでー、ほんでお父さん一人先な、もうわたしはおるーゆうて、ほんだら子供がな、もし家におつてな、また後でてなつたときにな、ひとり探すのに全部が探すのに困るけん、人のいとるとこいったら、みな探したところでいっくらさでおるけん、ええゆうんやけどな。けど、ほんなん二人がいきよつたら共倒れになる。

N:ああ

A:まあほらみなまたみなんとこいたら助けてくれるやわからんけんど、なー。ほやけど、もう元気なもんは、さーつと逃げなあかんでな。ははは。わたしはおるーゆうんやけどなー、ほなけんど、こんなん助けにいっきよつたらあんた・・・

S:うんほなけどちよつとも間が合つたらおばさんも努力して。ほなけん、この前のでちよつとはわかつただろ。ほんでもあそこまでいたら、速さが

A:ほんでも重たいけんみな重たいし気の毒なであんた、重たい重たい。体重でもへさなんだらこれあん

た。よう抱えんでみな。ほんで、おまんあの西のな、ねえさんがな、帯をおいといてな、3人で運んであの・・せおうたらしいけどお父さん腰が折れてしまうわ、いよって。

S:はは。こないだあのおばはんおんぶしたわ。

A:ねえさんは軽いけんな。半分かしかないわ。

S:おばはんちょっと負われてくれゆうて

A:うちの半分もないだろう、ほんなんおまいなあ、ごつい重いんやけん。体重へしーゆうたってこれへらんわ。

N:こないだどうでした?あの一、避難訓練してみたっていうかその・・

A:まーほらあれなあ、道あれ何段くらいへあれあるんや

S:50段くらい、あっこまで。上までで105段だったんかな。・・のとこまで。

A:ほやけんどなー、やっぱり、身長書いてくれとる、身長がやっぱり違う。・・おとろしかった。くくってもないし、

S:あ、くくらなんだんで。

A:おばさんこもっというよーゆうたって力、握りしめれんけん、こっくりこっくりこっくり、まあ落とされんけんよ。おそろしかったでえ。ほんでもう重たいのに、

S:まあ、ほなくくつといたほうがええかなあ。腰のともも。

A:ほやなあ・・ほでも重たいけん気の毒なでえ、軽いでないけん、

S:いやいや6人がかいて(持ち上げて)いくんやけんいけるよほら。

A:あー。ほなけんどなー。重たーい。力入れとるつもりなんやけど、よけほれ、やっぱ力いれとったら余計やりにくいんだろな。

S:あっこだったら前に消防小屋があるけん、担架もあつて、ええけん。

A:まあ、あっこまで出ていけたらな、

S:うん、ほなけん、ふつうの山つぼいとこいたら、なかなか手伝いがしにくいでえ。

A:なあ。ほて山やったら猫(猫車)はおしていけんもんなあ。

S:ほうようん。

A:ほたらこっちの道路いたらだ、どこどっかで崩れても真ん中猫くらいは通る。なあだろう。

S:ほなけんできるだけおばさんやはあ、あの公民館の前がええわな。

A:まあほなけんどなあ。

S:まあ頑張つてよ。はははは。ひとりだけ、家と一緒に流れたら探すんが大変やけんな。

A:ほうよほれいわれるんよ。みなの後な、探したらな、そのために何人もかかってな、迷惑かけるけん。みなのとこいとつたらどうなつたって・・・・・もう探さんでええたゆうてもほんなわけにはいかんでえな。

S:ほんなわけにはいかんでえな。本人はええけんど、はははははは。

A:やっぱあれみんな見つかるまで探すん。

S:探すわよ。

A:ほんなわけにはいかんけん、みんないくとこに連れていてもらえるけん。よなー。

S:まあ一番ほのほうか、よろしいな、手間がかかりません。ははは。

A:なあ、やっぱり迷惑かけるでえ。

S:地震だけだったらなあ、家のとこ開けたらおるけどなあ、津波やけんもうどこい流されるやらわからん

A:わからんわからへん。なあ、ほなけんややこしい・・・

N:こないだあの一避難訓練のときにあの助けてかいてくれたひと、あの消防団・・・

A:消防団の、なあ、重たいけんすまんなあゆうて、軽かったらなあ、ゆうてひっさげれるけんど、こんな重たいなあ。

N:あとそのちょっと話変わるんですけど、普段の暮らし、生活の中で、お父さん以外、ちょっといろいろなこと手伝ってくれるひととか。

A:あんな、木岐にな、ある娘がいつとうけんなあ、日曜日がきたらくるんよ。掃除したり洗濯したりな、お父さんがまあできんことやばな、してくれるんやけどな、むこやってほれ、お母さんがなあ、親・・・のどこいっとうでえ。やっぱりな、こう度々いうんもな。病院行ったり、木岐由岐の病院いくときはな、保育所送っというてな、病院いてな、洗濯物もってきたり、体拭いたりして、ほて、また洗濯物持っといいて、木岐やけん、車でくるけんはやーいんよ。

N:そうですね。ご近所の方とかは。

A:近所やゆうてもな、裏やてな、おばさんな、おかずこしらえたりな、なんや持ってきてくれるんよ。

S:すまちゃんかい。

A:んー、ほんだらな、ここやって隣やってな・・・ほれこそどこもかも迷惑かかっとなる。

S:ははは

N:いえいえいえ

A:迷惑かけっぱなしよ。

N:じゃあ晩御飯作ってくれたりするんやね

A:うんおかずやな、お父さんもな、しよんやけどな、なんかかわったもんあったらな・・・

N:ああ、そうですか。それはありがたいですね。

A:うん。友達な、同級生もおるんよ。ほなけんなんか式ごとがいたらな、みながな、ごちそうしてな、でほれ、わたしがほれよういかんけんな、やけん、ここへ寄ってきてくれる。今まではな、節句やゆうたらみな、ほれ弁当持っていきよったんよ。

N:お大師さんですか？

A:うんお大師さん行ったりな、でも私がよう出ていかんようになってな、うち寄ってきてくれるん。

N:えーそれはいいですねえ。

A:もーだれもかれものおかげじゃわもう。

N:同期の方って何人くらいいらっしゃるんですか。

A:んー私連れ一ゆうたらな、まあようけおったんやけど、他はおれへんな、よーなにがせんだろ、ほしたらもう連れは3人がな寄るんよ。寄ってな、

S:タケダとほこともいっこは

A:ん、なんと、ここと、ひっちゃんさんとてっちゃん

S:あああ。ヤマナカ、タケダ、サイカとな。

A:あのなあ、みななあ、寄ってきてくれてなあ、

N:そうゆう、同期のひとたちと、どう付き合いを

A:もうな、学校卒業してからやもんな、タケダさんと二人が同期生やけんな、ほなけんなもうずっとなあ、

N:そおゆう方と話するときにも、津波がきたらどうしよう、とかいう話は・・・

A:裏はな、近所やけんな、自分ひとりでな、まあお父さん一人でできんけんな、もう、向こうにやって

旦那さんおるでえ、旦那さんも一緒にな、一生懸命助けてせなあかんでえつてもう、いや、すぐ逃げて逃げて言うんやけんどな。あかんあかん、ほって逃げれんや言うて。ほりゃ心配せいでええけん言うてくれよんよ、ほって逃げえへんでえや言うて。言うてくれよんやけんどな。

N: ああ、そうですか。

S: 横のヤマナカさんていうのはほこのおうちやけど、向こうへ逃げたら川やから、こっちに逃げてくるから、逃げる方向としたら、ここへよって、うん

A: 来るって、寄って来る言うてな

S: 行ったげると、こう言よんやけど。いつも言うてるな、ほうやって

A: 心配せえでもな、助けるや言うて。一人ではでけんけん。ま、わかいしもおるんよ、嫁さんの弟さんも。ほんで、ほの子にも言うとりや言うて笑（逃げるときには助けると）そんなんも、騒動かけたらいかん言うんやけんどな。言うてくれよん。

N: それは、でもありがたいですね、やっぱり

A: ほうやなあ、ありがたい思う

N: そう、普段も助けてくれる。身の回りの方が、そう言ってくれると

A: ほうよなあ。周りかな。いつもほうよ、子供が来てもな。

N: じゃあその、えっと、津波きたらまあ玄関くらいまではでて、その下で落ち合っっていう風のができたらいいですねえ

A: まあ、なによなあ。道さえできたらなあ。

N: それはやっぱり、訓練通りあちらの道で。

A: もうあっこへな出てっとなゆうてくれよんやけど。

N: そうですか。でその、ちょっとあの、普段どうゆうふうに住生活がされているのかな、というのをちょっと教えていただければな、と思うんですけど。あの、たとえばですね、昨日一日、どうゆうふうにご過ごされたかなーというのを。なんとなく思い出してもらって

A: あー。昨日のこと。この子ら子供がきとうけんなあ、もうガヤガヤガヤと。な、普段はもうなんやけん、まあ朝起きて、お父さんがなんや、ほれ、食事して、ほんでこい持ってきてくれたん食べてな、ほんでもうなんもできんもん。テレビ見とるわ。

N: ふっふっふっふ

A: テレビ見とるか、もうたいがい横になつとんよ。もうこの頃暑いけん、ほなけんもう、ちょっとなんしたーりするのもしゃ横になつとった。ほんで子供がきて孫が来てな、ちょうど年頃やけん、ワイワイゆうもんやけん、横にもなれん。

N: はは、まあなかなかにぎやかでいいですね、それは。

A: いやーにぎやかなけど目がまう。ほんで隣近所が騒動やと思う。なあ。

F: え。

N: うるさいですか。

F: ああほんなことないほんなことない。

A: これ奥で寝よったら寝れんのちゃうかと

F: ほんなことあるかい。

A: 声も大きいしなあ。もう耳痛すぎるんよ。

S: 子供の声聞こえよるんええでないか。ははは

A: 普段はなー、もうシーンとしとるでえ。まあ大人ばかりやけん。

N:ああそうですよねえ。

A:学校がないようになったら。子供の声がせんもん、いっこもせんもんな。しずかな。ほらもうにぎやかでにぎやかで、ほんんなったら困るおもて、ほほ。

N:あのう、昨日何時ごろ起きられたんですか。

A:ああもうなには早いんよ。寝るんも早い。

N:9時くらいですか。

A:もうほんなにもならん。8時までには寝とう。

N:ああ、そうですか。

A:ほんで朝が早い。

N:6時とかですか。

A:もう6、5時くらいになったらもう。

N:ああそうですか。じゃあ一緒に起きて、

A:起きとんは起きとるけどな。夜あんま寝れんな。なんも昼してないけん疲れんでえ。

S:ははは

A:もう1時間か2時間とろっとしてまた起きてな、いっこも寝れん。ほやて、起きたって用せんけん、仕事も用事もようせんけん、ほんけんたいがいな、お父さんにあれしいこれしいて命令するんよ。

N:昨日お父さんが料理作って。

A:料理もな味付けやわな、できるときとできんときがあるでえ。ほたらな味の調味して、できたらここに持ってきてな、腰かけ持ってきてほこに座ってな。なにもみる、火もあぶないでえ、みよんやけど。

S:はは

A:なかなかじゃわ。ほら男のひとがな、するいうたらな大変と思う。

N:昨日の朝は何時ごろ朝ごはん食べました？

A:昨日はな、もうこの子らが来てから早い。6時か6時半に食べるときあるし、6時に食べるときある、もうまちまち。

N:ああ、そうですか。昨日は？

A:昨日はな、6時半かな。

N:それもお父さんが、あ、娘さんが

A:うん、娘がおるけん全部娘がな、おる間はお父さんはなーんちゃせえへんのよ。

N:そうですよね。楽ですよお父さんは。

A:けんな、んー、助かるんよおる間はな。

N:それ、お昼は食べますか普段

A:もう3度、3度食べる。おやつも食べるし。

N:お昼は12時に食べるんですか？

A:11時、まあ10時半のときもある。いまこれなんのご飯いうときがある。お父さんおるときは。みな、ひよっときたらこれなにご飯たべよん、いわれる。はは。まちまちよ、できたとき食べる。

N:あー。昨日は何時ごろでした？

A:昨日はこの子らきたらたいがい11時かなあ。11時半くらい。

N:ああああ。・・・。晩は？どうでした

A:晩は4時か4時半、4時半か5時。お父さんとおるときはだいたい4時くらいにもうご飯食べよる。

N:あ、そうですか。昨日は5時くらいですか。

A:昨日は5時ぐらいやな。

N:はあはあはあ。

S:70 過ぎたひとの阿部の生活っていうたらだいたいほんなパターンじゃ。

N:早いですね。

A:うん、早いんよお。

S:朝6時がきたら公式タイムじゃ。

N:ふーん

S:よその家入っていたって。

A:もう早い早いな。晩やでもみなひよつときたら、あの一よそからきたら、7時も8時もでえ。ありゃご飯食べよる一なんのご飯ですか一、

N:ははは

A:早いけん昼や晩な、これなにご飯になるんですか一ゆうて、こりゃ昼や晩やゆうたら、え一って、はは。もう1時半くらいきたら寝とるで。へっ。早いけんな。

N:あーじゃあ昨日も7時半くらいに横にはなるんですか。

A:うん横にはなつとるけどな、寝るんはなあ、昨日8時過ぎたんちゃうんかいな。・・・いつもかも寝とるけんいつが朝やら昼やら。まちまちや。

N:じゃ昨日どっかでかけたりはして・・・

A:いやいやでかけたりせん。・・・もうこの子らきとる間にな、たいがい1回か2回はな、でかけ連れていてくれる、も一やけど今年はやおいかん。

N:あー。暑いし。

A:暑いけんなあ、よおでんのよ。

N:ああ、そうですか。

A:病院や診療所でも先生が月に1回はお顔見せてくださいいよったんやけどな、もう電話して薬頼んどいて、ほて、お父さんに薬もろてきてもらう。

N:あー。

A:よーいかん。

N:あーそうですか。

A:暑いときは車に乗していてもうて、せやけど、もう車出したりニャアニャアで、猫でおしててもらいよんよ。やけど、もう、月に1回がよういかん。

N:あーそうですか。

A:暑くて。リハビリになるけん来てくださいいわれるんやけどな。

N:あ、その診療所に。

A:うん診療所のな。ほなけどな、この手術したときは半年にいつけん見せにいつきよったんよ。小松島の・・・までな。

N:はいはい。

A:もう1年に1回でええな一ゆうてほれから、いっこもいかんようになった。はは。

S:はははは

A:もうなんしにたいそうな動くんがな。

N:まあでも病院に行かなくていいのはなによりですけどね。

A:あーなあー。

S:お風呂はひとりでは入れるん？

A:いやもうあの椅子置いてな、ほてあの一、このごろ夏がきたらええんよ

シャワーで、椅子こやって座ってシャワーやけんな。冬はな一、中に、湯船にいっぱいはいとったら湯船にする一と入れるんやけどな。立ってあがるんがな、なっかなか。はは。お父さん後ろから抱えたって重たいけんなかなかあんた行ったり来たりがな、あげるんが騒動や。ほなけんどもあ、どーなりこーなりな、つっぱってな、あがるんはあがんよんやけどな、やっぱりいっぱいはいらなんだら、はいつとったらちょっとあの水がな、

N:ああ、浮力が、

A:あれな、いけるんやけどな。ん一ほの冬が来たら大変なんよ。

S:ほな今はもうヘルパーはきよらんの？

A:ヘルパーさんは・・

S:もうお父さんだけで。世話してくれよん。

A:自分でできる、あの、なにはな、月にいっぺん来てくれよんよ。あの、年輪のやつは2回な。

S:ほれはなにしてくれるん。

A:いやほれはな、あのな、ほの様子をな、なにするだけでな、車いすのながあるんよ、ほて、車いす自分で買おうゆうたら買わしてくれんよ。まあいうたら買ってくれるんがええんか知らんけど、買ってやいうて。ほんで、もう自分で買うんなんやけん、買うゆうても、買わしてくれん原動なんかなんなんか知らんけど。ほれ見に月にいっぺんな、様子を見に月にいっぺん来てくれよんよ。

N:ふーん

A:ほなけどな一んも、これしてあれしていうんは・・・まあできるとこはな、

S:そろそろあの一手伝いにきてもうたらええんちゃん。

A:まあお父さんようする間は

S:まあいうてくれたらつなぐでよほれは。

A:ほれはあの一来てくれる人というたらいけるけどな。

S:こないだあのオオイのおばちゃんは、ちょっというて、来てもらうように、したんやけどな。

A:ほなけんあんた、来てもうたって、タダちやうで一いわなあかん。はっはっは

S:あれや、あんまり経費かかれへんのんちゃん。

A:あ一ほうけ。まあお父さんがする、するときことはするわよ。

S:以外と阿部のひとは遠慮しがちなんよ。

A:ほうよな。

S:よその地区のひとのほうがよけいいよるな。ま、土地のいろんなことでも阿部のひとはあれしてこれしてって今までいっちょもいうてない。

A:いわんな。

N:お父さんおいくつなんですか。

A:5、75。

N:は一。

S:75。

A:お父さんは、耳が遠いんよ。お一おきな声でいわなんだら耳が遠いけん。声がでんようになつたらどうしように思う。はは。

S:ははは。

N:でもいつも手伝ってもらっていいですねえ。

S:おっさん元気なけんあまだ。

N:あー

N:なかなかいままでほれ、なんもしてないでえ。もう若いときな、私が元気だったときだったらな、ほれから過ぎたら大変じゃわ。

N:お父さん漁師さんされてたんですか？

S:うんもと漁師やなあ。

N:はー

S:1本釣りじゃ。

N:あーそうですか。

S:夏は海女。かつえいっきょんだろ？

A:いっきょいっきょお。

N:じゃあ今日なんかは

A:今日はな、波がな、高いけんな、

S:ちょっと波高いけん

A:・・・波高かったらあかん。

N:はあはあ

A:大海女ちゃうけん。へっへっへっへ

N:ほな船は持ってないんですか

S:持ってる持ってる

N:あーそうですか。

A:私なんやけん朝のうちに時間がちょびつとやけんな。それでも朝のうちちょろーつとな。ストレス解消じゃわ。ははは。ストレス解消にいっきょんじゃろ。

N:あー。あーそうですか。

S:朝のうち釣りいっきょんよ。

A:ちょろーつとってな。

S:普通はな、海女の期間以外はな、

A:1日中はようおらんけんな、おそーに行つてはよーにもんてくる。

N:その、おじいさんが海にでている間は、あの、おひとりで、

A:うんうんひとりじゃ。ほれなんもすることない。はっはっは

N:はっはっは、あーそうですか。

A:だれぞかんぞがほなけど来てくれるけん。話し相手、ひとりでおるゆうことよけないなあ。

N:そうですか。だれかが

A:だれかが来てくれる

N:それはいいですね。だからお隣の方とか、ええええ。あ、あと、お父さん買い物にいかれる・・・

A:うんうんお父さんが買い物に行く

N:毎日いくんですか？

A:いやな、何回もいて、この子らが来たら冷蔵庫いっぱい入れていとうでえ。冷凍できるもんはしとるけん。ほれつこたり。

N:あー。

A:お父さんはたいがい阿南のほうに出て。ほこの山田の店やもいくしな。

N:どっちのほうによくいかれます？あの山田さんの店と

A:普段はちよろっとだったらたいがい山田さんとこなあ、いくけどな

N:あーはいはい

A:こ、お父さんこれが好きでなー

N:あー

A:ほなけん酒やなんやで向こういたりする、ははは

N:あー

A:ほんなんゆうたらいかんなほやけんど、はは

N:あと食べ物とかもまとめて買ったりするんですか？

A:そうやな。

S:だいたいほのパターンのひが多いと思う。主力の買い物は山越えて行って、ちょっとしたものは地元で買うというのは

A:山田さんに悪いよなほんなんゆうたら、ゆうたらいかんなこれ、はは。店屋があるのにな。

N:えーだいたい。まあそうですよね。その、お父さんのほうから、お父さんが海行ったときに、だれかにおすそ分けしたりすることはあるんですか？

A:まあ、魚やだったらな、ほなけんどあわびだったらなあ、あわびだったらもう海女なんだったら、みないっきょうでえたいがい。

N:あ、そうですよね。

A:魚やだったらな、まあ、もう世話になんよるひとにな、あげるや、あげるだけやおせんつらーて。

S:まあこのごろ1本釣りもなかなか漁がないから、あの一、出荷する機会より、もう自家用に使うことのほうが多いっていうことよ。

N:はあはあはあ

A:もうほれこそちょっとずつなにするゆうくらいしかよう釣らんもんな。漁がない。

S:以前のように釣れんのじゃ。やっぱり魚が。ほんで単価も安いからーふふふ。もう持って帰って近所へあげてまた近所からなんかもろてーとかいうな、

N:あげたりもするんですね。はあはあはあはあ。そのあげたりするのもやっぱり山中さんとか・・・

A:ほう、ほうやな。ほらようけあるんよ、あるんやけどな、なかなかほんだけ釣れんでえ。

N:ああ、そうですよね。

A:うんほんだけいう釣らん。ほんでな、あげたいところようけあるんやけどなかなか。釣れんけんな。

N:そうですね。わかりました。えっと、あとですね。だいたいこんな感じなんですけど、あの、こないだあの、12月に、津波の高さについて

S:20.2メートル

N:20.2メートルになったわけです。するとやっぱり驚いたと思うんですけど、正直、どういう気分だったのかな、というのをあの、教えていただけますか。

A:ああ高さに

N:今まで阿部はあれじゃないですか、津波があまりこなかったわけですから。

A:ほんなけくるんだろかーいうて、ふふふ。ほらピーとこんもんな20メートルいたあの、天神山の、前いよっただろ、あんだけきたらあんだ、どこへ逃げたって・・・はは

N:そうですね。うん

A:驚くけど、あんまピンとこんもんな。あんだけきたらもう、どこもかもなんもない。ひっひっひないでない

N:そうですね

S:あれ、東北のあれ見てなかったら全くわからんなあ。

A:あれはもうびっくりした。

S:あれみとうけんあんなんがくるんやなあと思ったけど。なあ

A:あれ、どこへ逃げたであんなんがきたらもう、ひとたまりもないわなあ。あれ、あれな、私家でひょっとテレビみたんよ。あらーこんなテレビもするんじゃなあゆうん。ほたらズンズンきつきよったらほんもんでえ。あれごっついショックなあ。

N:ショックですねー

A:うーんびっくりしたなあ。あれは・・・あんなんがきたらあんだどこへ逃げるん、どこに逃げたってなー、ひとたまりもないでえ。勢いがちゃうでえあんだ。

N:ええそうですねえ。

S:まだほんでも阿部はまだ逃げるところがあって、もういけどもいけども逃げるところがないっていうことようけある。

A:なあ、つまってしもてな

S:うん

A:ほなけどあんなんが

S:高いとこないのな

A:んーーくるんだろか

S:きてほしくない

A:自然のもんやけんな

N:そうですね

A:私らがもうないよなっしてしもてなあ、きたらあとわからん。はっはっはっは

N:はっはっはっは

A:・・・世話ないわなあ、自然のもんやけんなあ。それがいつくるゆうてまっとするわけにもなあ

S:ここの集落ができてな、まだ800年くらいなんよ。

A:ふーん

S:ほやから、1000年に1回とか2000年に1回やゆうんだったら、ほらもう全くわからんわけじゃよ

A:あー、なあ。あんなんほなけんど

S:くるかもしれん。まあできたらな、こんほうがええし、用意したことが無駄になるほうがええんよ。

N:そうがいいですね。

A:無駄になってくれたらな、ほやけんどな。

N:これから、普段準備しようとしていることってありますか。あの、例えばこの間防災無線は整備したんですか？

S:点検をした

N:点検を

S:ここのはもの言うと思う。

A:ほていつくるやわからんけん・・・おちおち寝てもおれん、はは

N:ははははは

A:もうなあ、みな装備自分でしよるいうけんど

S:もう唯一の合図は地震やな、

A:うーん、どれがどないしてくずれるやわからん、ほなけんなー

S:地震が済んだらもうすぐ逃げるといふ、ことしかないと思ふな。放送やってしてくれるやらしてくれんやらわからん、

A:わからんもんな、通じるや通じんやわからんもんな、

N:お父さんとはだんな話をされてるんですか？あの、おじいさんとは。どうしようかぬーいふことは話して

A:一日のなあ、海女になったら海女のことしよったら沖のこととかな、

N:いえあの津波について、あれ地震がきたらどう、

A:ああ津波に、なー、まあ私はまあきたらお父さんひとり逃げよいうんやけどな、やけど、ひとりほつといふ逃げるわけに行かんって、はは

S:置いても行けんわっていうだろう

A:行けんゆうて

S:ほな一緒に行かんかよ。な

A:まあほつてはいかへんゆうて連れていってくける、いくゆうけんどな、ほなけんひとり助かるわけには行かんだろーと思ふんやけど。はは。ほらほんな話するけど、私はもう置いといてお父さんさーつと逃げよいうんよ、二人がいきよったら共倒れになるでえ。ほら置いてやいけんわだーゆいよるけんどな。

N:その、昭和南海のときの、なんていうか、

S:南海地震

N:南海地震です

A:南海地震いうたら

S:あのとき阿部におったん

A:いや私阿部からいっこも外いてないけん、あれあのここの下の川までお父さん、私やはほんなことないけど、向こう、この下まで、こまい船が流れてきとつた入ってきとつたゆうたらな、私らもほんなんあんまり覚えてないわ、もう、ほれこそ港の端やけんどな、波がこう、打ち寄せてきよつたもん。覚えとるけんどな、

S:まだ結婚してないん、な、

A:してないしてない

S:子どもじゃな

A:あれ小学校もはいつとつたかいな、

S:東の端のたもとなんですよ、

N:ああそうですか

S:お里は

N:はあはあはあはあ

A:波がなあこのまだあんな堤防なかつたろ、土手、石だけの土手だったもん。石ふみの。あっこへドーつと打ち寄せてきよつたわ。んでまあほこ覚えとるけどまだあれ学校へいきよらんなんだんちゃうかいな。

N:あ、そうですか

A:ほなけんあんまり記憶にないでなあ

N:ああ

A:お父さんはこの川までな、根がダーっと流れてきとったんやて、あんまり記憶にない。

N:ああそうですか。まあでもそのときそんなにすごい被害があったわけではない・・・

A:なかったな

S:船だけやな

A:根がまあ流れたりなあしたんはあるけど、ほなにどうなったというんはないと思う。

N:だから今度は初めての津波なんですね

A:ほやほやほや、今度やなあ、こんなに言い出したんはなあ、ほんでこんなに恐ろしいという目におうとらんけん、な、あんまりわからんのちゃうかいな。あのテレビであれ見たんは

N:ああやっぱりあれが

A:あれがなあ、これほんものけ、ゆうくらいなあ。あれぐらいやもんなあ。

S:ほんなにあれ、遠くのあれがなかったら20Mゆうても嘘だろうとか、はは、嘘だろうっちゅう感じやな。

A:あれは見てほんまもうびっくりしたもんな。して、あんなんがほんまにきたんかー思うくらい。なにもかもないようになつとったり、あんなんなあ勢いがちゃうでえ。もうなにかから土台からもつてつてなあ。

N:そうですね。

A:ほんまになあ、ほら実際になにあれしていたら哀れなもんやなあ。テレビ見ただけでワーっとなる。

N:見てる間にねえ、流される人もいますからねえ。

A:なあ

N:ええ。

A:ほやけどあんなんが来たらなあ、もうひとたまりもないわなあ、ほりゃ。

N:まああれは教訓になって少しよかったですけどねえ、阿部の人には。ああゆうのがあったから。

A:ほうよ、あんな恐ろしいのは見たことないだろう。だれもな、

N:だれもないと思います。

A:あんなんな・・・

(学生の紹介、徳島大学生について)

NHK:あの、同じ質問になっちゃうかもしれないんですけど、なんか、疑問点とかあったらぜひちょっと・・・

O:あの一、さっきあの瀬戸さんから、こう学校のグラウンドでゴルフ、みたいなものしてる感じのを聞いたんですけど、まあ、なにか運動していたり、こう近所のかたとまあ交流するっていう意味でも運動していたりしていますか。

A:あ、今まで。今まではほんな娯楽ゆうもんはする間なかったわなあ。

N:そういえばリウマチになる前っていうのは、あの、どうされてたんですか？働いてはったですか？

A:んらもう海女いつてな、ま冬は一なに一漁師になってお父さんが漁師になってから一緒に釣りにいきよった

N:ああそうですか

A: な、いきよつたけんな、

N: はいはい

A: 子どもがようけあつたけん子育て中はほらもう家のことと子どものなにでなあ、なかなかなあ。

N: ああそうですよねえ。

A: まあほうして娯楽ゆうもんはする間がなかった。はは

N: ああ。喜来さん、せっかくだから。

K: じゃあ、おうちとかでもし地震がきたときのために備えてあるものとかありますか？

A: い、いま？

N: ああはい、津波がきたときにこう家に置いてるものとか、なんか、避難袋とか、なんか用意いりますよねー

A: 子どもがなー、あのリュックサックはこうてくれてな、頭元おいとんよ。ほなけんどな、なんも、入れるもんゆうても、頭元に電池か携帯か、ほんなんはおいとるけどな、・・あと医療の薬とかもな、日に日に毎日のんみよおんよ。おいとんやけど入れとりはせん。はは。入れれるようにおいとんはしとんやけどな、まだ入れてない、はっは。入れてはないんやけどな。ほた、入れたらまた日にちが経ったら交換もせなあかんし、ほなけん医療のあんな、もうなにはいれとんよ。ひよつとな、いけなんなら私やは動けんでえ。ほなけん一紙もんなーおしめやな、ほんなんもな、おいとんやけどな。まあ日常に入れ替えせんでえええやつはな。そやけんど入れ替えしよつたらまた入れ替えせなあかんよくなるけんな、あれは入れとかなあかんな。

S: 薬はどうしても余ってくるだろ、飲むのを忘れていたら。

A: いやーもう忘れることない

S: わっせへん。飲まないことはない？

A: わっせたら、あら、これ薬やなって、いたーて薬のまな

S: あーほうなん

A: わかる時間がもう

S: ちっと余分はくれんの？

A: いや、月に1回もろとるけんな、ほたら子どもがいうんはな、余分にもうてな、入れとかなあかんゆうんな、余分はもうとらんよ。

S: 10日分はいつぺんかにへん分は余分に年に1回もらうでえ。ほたらちよつと余分がでてくるでえ。

A: んーきっちりきっちりにしとんよ。なくなる・・

S: ほたら、もうてきたやつを、袋入れといて、古いやつを飲んで、というふうに、なんかしていたら、

A: いやほれをしとかないかんっていうんやけどな、きっちり月に1回やけんきっちりもうてきて、なくなつたらいつてしよるけんな、

S: ほなけん余分に、紙おむつ的なものはね、まあ生理用品やは防災倉庫でもとうとおもいよんですよ。

ほのあたりはね、女性専用のもんはね、衛生用品は。ほなけど薬だけは自分の分、合うやつやから、

A: なーほなけん余分においとくけんやゆうて、余分にくれるだろか。

S: うん。ちよつと10日分でも余分くれませんかーゆうて

A: うーん、まあ

S: もうこのごろのこつちやけん、ちよつとはくれるんちゃん。ほんで、年にいつぺんでも余分をもらうように。な。

A: ほれをもうとけいわれよるけどほれが、なかなかよういわんのよ。

S:ははははは

A:なかなか、ほう余分にな、もうといておいとくの。ほなんなつたらくれるやわからんな。

S:先生に、ほなけん、津波がきたときどないしたらええで薬はっていうたら、ほうゆうふうに言いかけたら先生のほうが考えるんちゃん。

A:ほてゆうてみなあかん、

S:ほりゃ、なかつたら困るけん

A:薬だけはな、もう薬きれたらあかんのよ。ほて1時間して、あら、今日ちやこれ痛いな違うな、おもたら薬が、あ、飲むんわせたーやゆうときある忙しいとき。ほなときだけや普通のときだったら忘れへんのよ。ほなけどなんかあって、こうガサガサしよるときな、今日っちやこれ痛いな止まらん、どないしたんだろうゆうたら飲むんわせとるな。

S:ほな絶対いるで

A:ほなけんもうわせたらあかん

N:うーん。あとはなんかあと、おんぶひもとかそういうのは、

S:ん？

N:おんぶひもとか

S:ああ

N:ああゆうのはおいてますか

A:あーなあもうしとらん・・・ゆううんやけどな、ほなけんどう負わんで。はは。ひとりでやよう負わんゆて

S:古い帯やあるけ？

A:あると思うんよ。

S:ほな車いすにでものしといてもうたらな、また

A:ああーな

S:車いすのポケットに、かさばらへんだろ。あれだったら

A:うーん、子ども用のやな、ようけあつたんやけどな、

S:あれはもうみな棄てるわ。

A:ほれもえっとおいとつてもあかんかもしれへんな、

S:ほなけんあの一着物の帯はいけるよだ。

A:朽ちとれへんかいな

S:わりともんもええし

A:んーあれはな。ほらおじいさんのもあるしお父さんのもあるし、あれほないれとかなあかん。

S:あとあれかさばらんで一畳んだら。あれええと思うんよほなけん

A:あれなー。西の姉さんあれで負われとつたでえ。ははははは。あれで負われとつた。

S:あのおばはんちよつとこうせえゆうて、はは

A:ほなけんあれ、あの姉さんもここ悪いけん、ほなけんここがなせこかつたつていよつた。

S:あーほうけ。ほなほれいっぺん聞いてみなあかんまた。

A:こうな、おさえつけるでえ胸を、ほんで腰も悪いんよあの子。コルセットしとうけん。ここがごつついせこかつたつていよつた。

S:あ、ほうかい

A:うん、ほないいよった、骨ばっかりたけんな、はは、軽いんはええけんど。
N:まあ負う人も訓練が要りますし、負われるひとの負われ方も訓練が要りますよね
A:ああ負われるほうもな
N:なので両方慣れないとなかなか、はい
A:あーほれもあるわなあ
N:たら、この前やってみてわかったので、いろんなことが。やってみないとわからないの
で。
A:あーこないだ。わからんもんな。ただ重たいでけーゆうわけにはいかんでえな。ははは。
S:はっはっは
N:別にあの、おもり担ぐわけじゃないですからね。
A:乗り方もあるんだろか。
N:それはすぐ慣れると思います、ちょっとした工夫やと思いますよ。
A:なー
M:避難するときに、なにか求めるものってありますか？こうしてほしいとか
N:負ってくれるひととかに
A:あーこうしてほしいとか。私な、わりとこう、上むいてようねんのよ。どっちか横むかなな、やっば
腰も関節関節やけんな、上向いてしばらくようねんのよ、上だったらひぎたてとらなようねんけん、
あれやったら、あの、担架だったら上向かなあかんでえな。ほやけん、やっばりなんか、こう、足と
かここのこうなあ、縛っといってもらわな、はは
N:はー
A:グラグラグラグラしてな、この横もっといてゆうけんど力がないけん
N:あ、握力が、そうですね
A:うん、こうクラクラした。
S:腰縛って、とかいわなあかんな、
A:んー腹かなあ、まあ足はどないあれやけん、足縛ったらあかん。けん、ここだけな、腰だけな、ちょ
っとしわっとしてもうたらな、まあほんな間はないかもしれんけどな、あれ、ほんで、お父さんに
落ちんように横もっといてよゆうて消防団の人がゆうたんよ。ほしたら早いでえ、行くんが、ほたら
お父さん、ようついていかん、はは
S:ようついていかなんだん、はは
A:ほたら、早いわもっとうっくりいけばいいだ、ほなけど避難のときゆくりいっきよったらあかんでな
いで。はは。ようついてあがらん、へへへへ。
N:はははは
A:もうほんだらなあ、年寄りやけんなあ、
S:ほなまあ、担架もいろいろ稽古せなあかんということやな、
A:あれほなけど、若いしにようついていかんわな、横においてついていけんたら、後ろの人が足踏ん
でばたっとこけるでな、ほなけん横のはあれいらんで、お父さんやようついていかんわ。
S:もう消防団にまかしたほうがええな
A:うん消防団にはな、ようついていかん、もとゆくりいけやゆうてゆっくりいっきよったらあかんでえ、
はよ運ばなあかんで。みなせなあかんでな。ほたら、訓練やけんてソロソロいたら、さあになったら、
間に合わんでえ、ひとりでないんやけんなー

N:そうでね、時間が、短いですからねー。

A:ほて、私と・・・おったらな、ほら慌てるわな、ほで、くくってやゆう間ないでな、乗せたらすぐ立ち上がらなあかんけんな、する間ないと思う。

S:ほな6人がいくところが8人がいけとゆう感じやな。ほのほうがあええかもわからんな。

A:若いしは早いけんな。ほら。年寄りも付いてはよういかなで、はは。

N:うーん、そうですねえ。

A:足取りがな、

N:ゆっくりですよ。逃げるのは早めに逃げる判断をしたほうがいいですよ。だから。

A:ほうやなあ

N:ねえ、時間がすごい短いですからね。5分考えてたらもう駄目ですからね。

A:ほや、ゆっくりーゆうわけにはいかんもんな、

N:そうですね、歩くというのはいいことですけどね、自分のペースで。考えてると考えてる時間がだいぶ無駄ですからね、

A:あーな。

N:そのへんも難しいですよ。判断が。いつ逃げるんやろう、って。

S:こんなもんですか。もうそろそろよろしいか。

N:あ、そうですね。

S:お昼になったので

N:すいません長々と

A:いやいや

S:すんません大勢で。やかましいに言い続けて、はは

A:いや、役に立っただろか。

Bさん トランスクリプト

B: Bさん N: 内藤先生 S: 瀬戸さん

O: 大塚 (学生) K: 喜来 (学生) M: 岡本 (学生)

Bさん

N: ああ、えーっと、普段ですね、どういうふうに住んでいるのかっていうのを、例えば、昨日とか何時ごろに起きたかかっていうのは…

B: 昨日は6時で今日は7時までねとったんよ 笑

N: 早いですね、やっぱり。

S: 今日ゆっくりでー。

B: 今日ゆっくりよ、雨が降ったけん、畑に行かんでいいからなほんで、7時に起きてそれから顔あろうて畑へちよつとな、ちよびつとつくつとんよ。

N: へー、畑ですか。

B:それを見回りにいてきてな、それからご飯食べてな。それからもう何もせんでな。

姉と話したりしてな。

N:へー、畑ってどのへんにあるんですか。

B:この川の向こうにな、ちよびつとつくとんよ。

N:いいですねえ、今は何をしてるんですか？

B:今花、カボチャだけ、かぼちゃとおくらやな。

S:じゃがいもうえるん？

B:どうしようかな…しんどいけんな、どうしようかな。

N:じゃあ、昨日朝ごはん食べてから畑に？

B:うん。畑に。

N:どのくらい、1時間くらいですかね？

B:何時てよーて1時間くらいかな、なんじゃ仕事せえへん。

もう、写すん嫌ゆうんに写すんは嫌ゆうに。笑

写真が一番好かんのかよ。笑

もうとらんといてえよ、すまんけど。笑

N:いやあ、ちょっと質問だけさせてください。学生に。

O:昨日、その、畑仕事をされてから昼ごはんとかは…？

B:あさ、畑言ってからテレビ見てな、それからご飯よ。

お墓行ってテレビ見てな、ご飯食べて。それからもう何もせんの。笑

N:昨日はお姉さん来はったんですか？

B:うん。行くんよ。私があつちに。

N:ああ、行くんですか。

B:学校の前にあるんよ。それでな、話してな、夕方まで。ほんで、昨日はもういかんでここでおじいさんやおばあさんやおのぼさんらあところではなししてな、ここ涼しいけん。

N:いいですよ、ここ涼しくて。

B:家こんなぼろったげやけんな。

ほんで、ここで晩まで涼んでな。

K:中よりも、外の方が涼しいですよ。

B:ほうよ。

N:およなりの方ですか？

B:うん。この、今いった人がな。

N:今って、あの、お一人で…？

B:うん、一人、今いただろ？

N:はい。

S:今、通ただろ？あれ、息子。裏に家がある。

B:うん。そうそう。

N:あーそうなんですか。

お子さんは失礼ですけど、何人いらっしゃるんですか？

B:3人。

N:あー、3人なんですか。一番上の方ですよ？

あとは下に？

B:下は2番目が女の子でな、阿南におるんよ。橘におるんよ。下は海部におるんよ。

N:女の方ですか。

B:うん。

N:そうですか。それで、長男の方が裏に住んでて、いろいろ見て…

B:うん。いろいろしてくれてな。

N:ご飯つくったりとかは？

B:自分で。

N:あー自分でするんですか。

K:選択とかも全部自分でするんですか？

B:うん。自分で。若い衆にまだ迷惑かけんようにな。

N:今、おいくつ何ですか？

B:81歳。まあ、81もうすんどんよ。

N:それで全部出来るのはすごいですね。

S:店のじいさんと一つ違い。

N:あー、そうなんですか。

それで、若いころは海行ってたんですか？

B:うん。海女。

S:去年も行ったんちゃう？

B:去年2回行って、今年も2日行った。

S:あー、今年も行ったん？

B:今年2日行ってなー子供にもう行かないわれたけんもうやめた。笑

行き来が危ないけん。丘がな、行き来が危ないんよ。

N:あー、そうですよね。

お父さんも・・・？

S:おじいちゃんはな、だいぶはよ亡くなったな。

B:うん。42歳でな。

N:あーそうなんですか…。

H:今みたいに自然に話されてる様子をちょっとだけ、取材させてほしいんですけど…。

大丈夫ですか、NHKなんですけど…。

B:もう、恥ずかしいでーほれが一番好かんのかよー笑

H:ちょっとだけでもだめですか？

B:テレビでたらはずかしいで一言よんにもうー笑

S:まあ、ちょっとだけ写してもらえー笑

B:もうーどうなんよー笑

となりのばあさん写してもらいー笑

S:さっきも、裏行つとったん。なちゃんとか。

B:あの人らあなー、もうべっぴんなのにー笑

N:あれですよなー、シルバーカーはスペシャルな感じで。笑

B:うん。あれはな、お墓行ったりするんにあれは軽いけん。

N:2台もってらっしゃいますよね？笑

B:うん。2台も3台も。笑

N:2台も3台もあるんですか。笑

使い分けたりしてるんですか？

B:うん。診療所行ったりな。するときは、大きなほうで。

S:遠いところに行くときはこれで行つとんちゃうん？

B:うんほれはこれで行くんよ。軽いけんな。でも庭の重たいだろ。

ほなけん、診療所上がるときは大きなほうで行くんよ。

あれな、普通に使うんはよう使わんのんよ。普通にだったらな、危ないん。こないだも5へんくらい休まなよう行かんのんよ。

S:杖だけはしんどいだろ？

B:しんどいん。

S:やっぱ。ああやってつけとって、もうあかなんだら、杖だけとかな。

B:うん。いつも、ああやってつけてな、それで畑とか廻るん。

N:そうですかー、でも2種類あるのは面白いですね。

どうですか？つけてみて。

B:うん。ええなー。

N:あーそうですか。

S:ここが丈夫やろ？

B:うん。前やったら、ひもで何や、ややこしいでー。

あれやったら、すぐに抜いてなーさっとできるけんな。

S:いつでも使えると思うだけでもな。

N:そうですよねー。

S:シルバーカーで行けるとこだったら、スピードが速いでーほんで杖でいくところもあるし、やけん、併用考えたほうが…。

O:それじゃあ、シルバーカーを使えばどこへでもねえ。笑

B:まあまあ、休みもってな、けっこう行くんやけどな。笑

あれ使わなんだら、どこへも行けれんのんよ。笑

N:お墓参りは毎日行くんですか？

B:うん。毎日。朝にな。

N:いいですよ。ここの方。僕こっちへ来て初めて知ったんですけど、毎日ねえ、お花も変えたりして。

S:うん。ここの人毎日行くんよ。

B:近いけんな。ほんでなあ。

N:そうですね…。

S:避難路を整備するということで、名目にしてお墓の道を舗装し直したんよ。笑

N:そうですね。

B:うん。きれいにしてくれてな。昔のお墓はあの道のずっと上だったんよ。

ほれが、もうずっとこの下に下げてくれてな。ほんで、もう毎日行けるんよ。

S:ガタガタだったけんな。下も。

N:あれは、いつですかね、最近でしたっけ・・・？

S:あの一お墓の中の道をね、避難路で通っていくからね。

N:そのときですよ？

S:うん。ちょっと、役場に。ここ避難路なのにこんなにガタガタだったら危ないけん、ちょっと舗装しなおしてゆーて。笑

B:もう、この人がな、ようしてくれるん。

ここへ帰ってきてな、みんなが喜んどんよ。ようしてくれるけん。笑

N:そうですね。

B:うん。もう何でも気いつけてな、してくれるん。

N:Sさんみたいに帰ってきてくださった人が何人かいるんですよ？

S:うん。何人か。よーけ手伝ってくれようなあ。この頃。

B:うん。ほんでも、この人みたいなんはできんでー。

S:まあ、いっぺんにはいかんだろー。笑

B:なかなかできんでー。ほれのにようしてくれるん。

N:あの、それで、普段の生活の中でご飯のおかずとかは、あそこの商店とかに買いに行くんですか？それとも、その、誰か買いに行ってくれるとか…？

B:いや、あの一娘のところにいったときにな、買ってきてな、ほんでもう冷凍しとくんよ。ほったら、もう魚はあるし、野菜はあるけんな。

O:近所の人にもらったりとかもするんですか？

B:そんなんは、もうおかずよ。あんまりなあ…

N:なるほど…なんかこう、困ったときとかに助けたり、助けてもらったりっていうのはあるんですか？近所の方とか、同級生の人とか…？

B:まだあんまり。一人でけっこうな。頑張って、子供にも迷惑かけんように思うてな。笑

N:すごいですねー。それは。

B:うん。自分でできる間は自分でな。

S:ほとんどおばさん一人でしょるなあ。

B:うん。

S:畑でもしよか言うてな。笑

N:そうですね。畑もされてるんですからね。

B:うん。自分のことする間はな、自分でできることは自分でして。

N:そう、この間の避難訓練は？

B:このときは…前はおったけどな。こないだはおらなんだ。

N:あつ、じゃあ、6月の避難訓練は。どうでした？あれ…笑 大変ですよ…笑

B:笑 笑

S:いやあ、車で送ったげるいうたんやけどな。かんまんかんまんいうて。笑

B:しわしわ休んでってな。車で行ったら何にもならんでー笑 なあ。

避難してーないなりまた車で持って来よつたらな。笑

ほんで、しわしわ行くゆーて。

N:どこのルートから上がったんですか？

B:学校の…

N:あの…納屋の…？

S:尾花路、尾花路。

N:ああー。あれちょっと、坂道が大変…？

S:あれ、きれいにしたけん。

B:ああほんまー。

S:うん。土入れて。

B:急だったもんな。

S:ほんで、うちの山の土な、持ってきてな。ほんでしたん。ようだったでー。

B:ほんまあ。あれ急でな、後ろから押してくれてな、ほんで上がったでー。

ほったら、そのあとテレビに映ってな。笑　うちの家族が観て、「あれ母ちゃんじゃないん？どしたん？」いうて、ほんで、「後ろから押しでもろうたんよー」言うて。笑

S:笑　笑

ほなけん、尾花のところから、超えたところから、あれずーっと同じにしといたけん。

だんだんとうようなりょうるけんな。

B:ほんまあ。そらありがとう。すまんすまん。

N:でも、ほんとうに津波が来て逃げる時にはどこの避難路で逃げますかね…？

B:さあなー。ほんでも、地震が来たら、もう下敷きになっとんちゃうん？笑

よう逃げんなー。笑

N:まあ、それ、それはしょうがないですよね…。そうだったら…笑

B:ほうよほうよ、よう逃げんだろうなー。

N:でも、あの一、それをのりきったら、どこから…どっかから逃げないと…ねえ。

B:ふん。ここだったらな、学校、そこの…この裏ちょっといけんなー。

S:こっちはいけんなー。おばさんにはな。あの、海のほうに向いてはな。

N:あー、あの神社のところでですか？

S:うん。ここの。

B:してくれとんやけどな、へやけど、やっぱ学校のほうがなあ。

S:こっちがええなあ。

N:ああー。

S:こっちからできるだけ広い道を行っただろうがええなあ。

B:ほやけど、ここだったら、もう行ってしまいうなあ。道がないでー。なあ。

S:まだ、ここのブロック低いけんど、しまやのは高いでー。

B:うんー。

S:あっこのはちょっと無理だろー、なあ。やけん、山中先生んとこ突き抜けていくゆうんもええかもわからんじよ。

B:そうやなー。

S:とっちゃんこのガレッジ抜けてな、山中先生んとこからな。

B:うんー。

S:まあ、あっこ通れるわーぐらいわゆうてくれるわー。

N:そうですね…。

地震が起きた時にこう、まず、何をしようかなと思っってますか？

B:まあー、何しよー。それはもうないだろな。もう。自分の体一本で行くんが精一杯ちゃうかなー。

N:そうですね…うーん、そうですね…。

B:荷物や持ってや逃げる言うたら、ほんなんいうたら…。

N:余裕がね…。

B:うん、ないだろー。もう自分の体で逃げるんが精一杯よ。

S:おばさん、薬飲みよるんで？

B:うん。飲みよる。

S:予備があるんで？

B:うん。いつでも一か月分もらいよるけん。

S:あー、それをちよつこう、持ち出すようにせんといかんな。

B:うんー。お薬だけはなー、どこ行っても薬だけは離せんけんな。

S:ほれは変わりのもんじゃあかんでーなー。ほつたら、なつちゃんが、おしめがいるんよゆーて。ほんなんは貯めといたるゆーて。笑

B:笑

N:笑

S:薬だけ余分をもろうてな。

B:うん。

S:ほんでこの前な、じいさん、前一、公民館の前まで押してこいいうたんよ。

あっこまで、じいさんが。ほな行くわーゆーて。ほんで、あっこから、ちよつと担架で上まで上げたんよ。

B:あー。ほうけー。

S:うん。それまで逃げる気さらさらなかったんよ。ほつたら、またちよつと前へ進んだんよ。

B:あー、ほうけー。

S:うん。ちよつと頑張つたらな、あとは手伝ってくれるゆうんがみな分かったでー。効果はあったと思うなー。こないだの。

B:うんうん。ほんまあ。

S:こないだ手抜きでおったけん、消防団がたまつとったけんな。

B:えーえー。

S:担架で上あげー言うてな 笑

B:笑

B:ほんでも人間はな、殺す言うたらな、逃げる言うたらな、命が欲しかったら誰でも足が痛くても一生懸命逃げるでー、なあ。

N:うんうん。そうですねー。

S:ほなけん、お稽古に来よる人はもう逃げるタイミングは分かるでー。んで一番困るんは元氣でも訓練に参加せん人でー。

B:ほうやなー。

S:ほんで、いつ逃げるかわからんゆーてな。

んで、結局は体の弱い人よりも遅いかも分からんでー。

B:笑 だーなー。

S:なあ。

N:すぐ逃げないと、もう、間に合わないですからねえ。ここの津波は…。

B:ほうよほうよ。

S:揺れよる間に逃げれるような揺れとは違う言うてな。

B:ほうよな。みんな、リュックサック持っていうけど、ほんな荷物持って逃げるのはなー、自分の体だ
ってわからんのになー。

S:もう命だけ持って出てきたらいいんよ 笑

B:ほれよ。笑 命だって持って逃げれるか分らんでー。笑

S:笑

N:笑

N:ちょっとあとであの…畑、見せてもらってもいいですか…？

B:ああ、橋の向こうのちよびつとだけよ。笑

N:あとでちょっと…。

B:笑

S:おばさん連れて行くん？

N:いやいや、勝手に見るだけ…。

S:ほなわいが連れてったるわ。笑

N:あーそうですか 笑

B:橋の向こうな。笑

N:あと、あの…昭和の南海地震ありましたよね…？むかーし。

B:昔な。

N:おいくつでした？十いくつですかね？

B:まだ学校行きよったけんな、天神山へ逃げたでー。あの時分なー。

N:あー、そうですかー。

B:仏さんおうてなー。

N:そのとき、こう、何で逃げようと思ったんですか？まあ、そりゃあ大変でしょうけど…。

B:そう、古いおばあさんがおったけんな、

N:はいはい。

B:古いおばあさんがおったけん、古いおばあさんがはよ逃げな言うてな。あそこに逃げていったんよ。

N:あー、そういう昔のお話みたいなのがあったんですかね？地震が起きたらみたいなの。

B:そうじゃなー。

S:ようけ逃げたん？わいらあんま逃げよらんかったと思うけど。

B:ほうてー。あれ十なんぼだったんだろなー。

N:うーん…。

B:あのときにはな、みなな、漁師の人とかな、スルメイカがようけとれてなー。

N:すごくたくさんとれたんですよね？

B:うん、イカスミとったりなあ。

ほったら、うちの母親はらな、あれでー、昔はかばいというてなー。

N:ランプですよな？

B:うん。そうそう。あれでイカ釣りようたんよ。

N:はいはい。

B:ほって、阿部坂こいでなー戻ってきよったんよー。

S:うんうん。ほー。

N:そのとき、逃げて・・天神山登ってからしばらく上にいたんですか？

B:笑 うーん・・もう忘れてしもうとるわあ。笑

今のこと忘れてしまうけん、もう忘れてしもうとう。笑

N:あぁー…そうですかー。

B:あれ…南海地震は何け？昭和の…。

S:昭和 20 何年？

N:戦後の…。

S:ほんなら 21 年くらいかー。

B:ほうやなー。

N:けっこう大きかったんですよね？

B:ほうよ。けど、そのときのこと忘れてしもうとんで。笑

N:あーそうですかー。笑

K:ずっと阿部に住んでらっしゃるんですか？

B:うん。ずっとな。生れてから。

N:その・・もし、避難するときに心配なこととかありますか？

こう、なんか助けてほしいとか。

B:そんなん、ないなあ、もう。笑

もうなんじゃ、逃げるか逃げれんかだけじゃわなあ。

N:ここのくずれてたら、ちょっと、大変ですよ？

B:逃げるとこないけんなあ。

N:うんー。

B:この下へ行くか、向こうへ行くかなー。

S:この向こう川やけんあー、こっち向いては逃げれんけんあ。

N:あーそうですよねー。

確かに渡れないし…そうですねー。

S:ブロック崩して生垣にするとかせんといけんで一笑

N:ブロックだとそうですよねー。崩れますからねー。

B:地震地震ゆうたって、いつ来るかわからんでーなあ。また来るかもわからんし。

N:いや、もうそれは。

いつ来るかわかったらいいんですけどねー、避難訓練みたいに。笑

B:ほうよー。笑

いつ来るかわかっとならいいけど、わからんけんあ一笑

N:なんか、普段避難の準備されてるものとかありますか？

B:なんじゃしとらん。笑

N:あーそうですかー。笑

S:体のトレーニングだけじゃー。

N:あートレーニングは結構されてるんですよね？

B:笑 うん。

N:ゴルフしたり？

B:うん。ここおったらなー、今はもう暑いけん、行かんけどなー、姉と運動したり。

ほんで、浜行って話したりなあ。暗くなるまで話すんよー。笑

N:集まる人たちって他にもけっこういるんですか？

B:うん。おるおる。笑

N:それでまあ、運動にもなるし、おしゃべりもできるし。

O:毎日そういう散歩っていうのは・・・？

B:うん。しよったんやけどなー。また涼しくなったらなー。

N:浜って、あの…漁協のあたりですか？

S:うん。海が見えるところの。

N:あー。

B:あっこに座ってなー。

S:目の前じゃー。

B:話しよんよー。

S:明日の天気はどんなのかなーとか、明日の海の様子はどうなのかなーとか、なあ。

だいたい夕方になったらみな、こう見にくるんよ。

N:あー、集まるとこ漁村はありますよね？

あー、じゃあ、おじいさん、おばあさんだけじゃなくみんな来るんですね。

B:うん、若い衆も夕方になったら、来るんよ。

私らーもう用事がないけんなー、いんでご飯でも食べて。

N:あーなるほどなるほど。

S:それと昔は浜におったほうが浜風が吹いて涼しかったけんなー。

N:あーそうですかー。

B:私ら子供のころはなあ、もうなんじゃ扇風機もないけんな、晩が来たら浜行くんよー。

ほって、浜行ってなー、砂浜やけんなあ、ジャガイモ持って行ってそこで焼いたりしよったんよー。

N:あー、浜で。笑

B:うん。子供の時そんなんしよったんよー。

もう今はなあ、行く人おらんでー。

N:いやあ、ちょっとその夕方の集まりは見てみたいですねー。

S:今日もやっとするわあ。笑

N:そうですかー。

B:今日もみんな行くわなあ。笑

N:あーそうですかー。笑

N:えーっと、どうもありがとうございました。

B:いやいやなんじゃあ。

N:普段の生活の話を聞かせていただいてありがとうございました。

B:いやいや。暑いのにご苦労さんじゃなあ。大変でー。なあ。

N:いえいえ、すみません、すみません。

どうもありがとうございました。

Cさんへの聞き取り調査の内容

C:Cさん N:内藤先生 S:瀬戸さん
O:大塚(学生) K:喜来(学生) M:岡本(学生)

N:ちょっとですね、あの、こないだ2回ぐらい、避難訓練ありましたよね。津波の、あれも、あの、お手伝いしてたんですけど。6月にやった。

C:あたしあの時ちょうど病院行っておらなんだ。お父さんがちょっとな、手の血管がちょっと詰まってるな

N:静脈の？

C:ほれを手術してな。右の方へな、手術して。

N:もう、だいふ。

C:もう退院してな、こないだ2週間行かないかんのやけどな。なかなかや。遠いけんな。

K:2回あったんですけど、2回とも行けなかったんですかね？

C:うん、2回な、ほいて、足が悪いし腰が悪いし、こんなんつかなんだ行けんしな。車押さなんだらな、あの車押してよ。買い物でも行く言うたらあれ押して行くんよ。

K:お買い物は近くでされるんですか？あの、山田さんの。

C:うん、山田さん。

K:あそこですか。

C:いっぺんか、にへんか一日に行くんよ。

N:あ、一日に2回も？

C:ほれだけや、どこやへ行かんの。

N:あのですね、時間、こう、皆さんが、大体なんですけど、一日にどういうぐらいに行動、どこまで外出しはるのかな、っていうことをちょっと聞いて回ってるんですけど。つまり、お年寄りがどれぐらい歩いてはるかっていう。

C:歩いては行かんのな。ほんで、月に2へんほどデイサービス行くんよここの、あれ、ほれを車で行くのに娘に送ってもうて、迎えに来てもうて。

O:娘さんはどこに住んでらっしゃるんですか？

C:いや、ほら、阿部に住んどんやけどな、ここの漁協に行きよんよ漁協に。ほんでほれ、土地やけん送って5分か6分かあったら行けるけんな。

N:漁協から車でしたら・・・

C:家の車で送ってもうて、ご飯呼ばれてしたら、また迎えに来てくれるん。な、ほれだけじゃ。出ていくいうたら。これまで、旅行やずっと行きよったんやけどな。もうなんもええ行かん。

K:どこまで行かれてたんですか？

C:旅行はもうずうっと行ってきた九州のほうからあっちこっち。

K:いいなあ・・・

N:今おいくつなんでしょう？

C:81歳とナンボやな。もう、やがて2歳になるんやけんど。

N:あ、そうですか、でも元気ですね。

C:元気でない、病院もう、病院ばかり行きよる。もう薬やて血圧高いしな、ほんな薬ずうっと 40

年もあまで飲んみょうで。うち病院にかかってな。

N:たとえばですけど、あの、昨日とか朝からですね、どういう風にこう、行動してはるかなってというのが教えてもらえれば。

C:朝な、7時ごろ起きるでえ、ほた、まだ主人がおるけんな。ご飯こしたえて、食べるだろ、食べてもう・・・

K:自炊は全部されるんですか？

C:ご飯はな、炊事はみな、するんよ。ほなもう、また昼来たら昼ごはん食べ、食べたら、晩のこしらえにな、山田さんへ行ってな、晩のこしらえの、ほの、品物買いをして。わりにな、炊事の方はこまめにするんよ、料理はな。

K:好きなんですかご飯？

C:料理は好きよ。テレビ見るだろ、もう一日中テレビ見とおでえ、テレビ見て、今日は美味しそうやなあ思たらほの、材料控えといて、明日にするんよ。ここらの人でも、皆が言うてくれる、まめっこいなあ言うて。ほんなん言うてくれる。

N:朝ごはん作って、食べた後に、その、お昼までの時間って、どっか畑に行ったりとか。

C:おおかた横になつとる。もうクーラーのなかでソファ置いて、ソファの上に横になって、二人でもう食べて遊んで。ほやって、今まで働いてきとるでえなあ。

N:あの、何されてたんですか？漁師さんですか？

C:夏は海女して、冬は小網やって、蝦瀬網の網やって夫婦でな。

N:はい。ああ、お二人とも？

C:うん、ほんで今もう、あの主人やって86になるんやけんど。ほんで、こないだ手の血管がつまって、ほて、東京で入院しとったんやけんどな。

N:もう戻られて？

C:うん。

K:旦那さんは元気なんですか？歩いたり。

C:お父さんやなあ、元気や言うても年は年やしな。二人は食べた後、気楽なもんやな言いもって。

N:今日、お父さんは？

C:野球見よる、こやって見よる。横になって。

N:お昼食べてからは、また午後は何か？

C:今日はな、カツしようかな思てな、串カツしようかな思てな。

N:材料あれですか？

C:材料もう、鳥は買うてきとんやけんどな、ピーマンからあんなんな。料理はわりにまめなんで、昨日はハンバーグ焼いて、煮込みハンバーグしてな。

N:ハイカラですね。笑

C:もう食べる事だけや。ほれが楽しむだけやもんな。

N:材料は大体、あそこの商店で？

C:あそこいたら揃うんな。ほな、無いもんは頼んどくんよ、明日こうこうするけん。

N:誰に頼んだりするんですか？どなたに頼むんですか？

C:山田のほの、おっちゃんから行きよるで。

K:仕入れてくれるんですか？

C:仕入れに行くけんな、毎日。

K:へえ、寝るのは何時頃なんですか？

C:寝るんは早いよ。寝るんはもう、8時頃がきたら、もう布団はいって・・・

K:みなさん8時ごろには寝ますねえ。

C:テレビ見よる、大概、大体10時頃まではテレビ見るけんどな。娘がもんてきた。

O:今、じゃあ、この家は3人で住んでるんですか？

C:うん。

O:娘さんとかはもう、どっか県外にいったりするんですか？

C:うん、いや、土地に嫁さん行くけんな。

K:何人いらっしゃるんですか？お子さんは？

C:3人。長男と娘二人と。あれ、娘よ。

N:ああ、そうですよね、あの、漁協に。いつもあの、こないだの避難訓練の時もお世話になって、ええ。

C:もう、30何年勤めとおけんな。

OK:みなさん徳島にいるんですか？子供さんは、みなさん徳島にいるんですか？

C:土地におる、みな。一人は、長男は役場のほうへ行きよって、もう退職してな。

N:お子さん何人いはるんですか？

C:3人。娘2人と長男と。

N:もう一人の、あの女のお子さんは今？

C:もう土地のところに嫁さんにいとお。土地い、浜に行きよるよ。しゃあないでえな。

N:じゃあ、ここにいはるんですね。

C:あたしんくの裏へん。気楽な生活しよるは、みな、なあ。働くんは働くけんどな、ほら、女の人でも皆海女いって一所懸命働いて。

N:今、海いったりしますか？

C:誰、あたし？

あかんあかん、もう10年も行ったことない。

N:ああ、そうですか。

K:さっき話、聞いた方には浜に行って、なんか皆で涼んで話す・・・

C:出て行ってな、今では腰がよかったら・・・腰痛いしな腰が痛いけんな、ほとんどもう横になつとんじゃ、うん。

N:グランドゴルフとか？

C:ああ、あかんあかん。ほんなんしたら悪なりする。いかんの。あつこら、のんびりしとるだろ、ここらの人。

N:ま、そうですねえ、まあ・・・全体的に皆。笑

C:若い時はな、ほら、男手以上に働いてきとる女の人が。お金儲けにしたって何にしたって。男士に皆まけとるへん。

N:あ、そうですね。自分で海に入って。

C:女の人が根がいいしな。金儲けはよっぽど女の人やとる。笑

N:やっぱり女の人強いですね

C:ほうやなあ、これ(口)も強い。笑

N:世界中どこでもそうですね。笑

K:世界中。笑

M:ご近所付き合いとかはあるんですか？

C:近所付き合いはみな、な。ここらの人は付き合いええよ。

N:なんかおかずとか、こう、あげたり、もらったりする。

C:あたしんくは身元がここにおるけんな。

N:身元、あ、おうちですか？実家が。

C:身元のな、ここ、二人が現役で働らつきよつるけんな。みな働らつきよるわ。

N:ああ。

K:若いなあ。

N:70 やったらまだまだですね。瀬戸さんも70 ぐらいですしね。

C:ほうやな、あの人もまめなで。一所懸命、阿部のためにつくっしよる。

N:あの避難路も、ねえ作ったりして。

C:ちゃんとしてくれてな。

K:見たことありますか？

C:うんうん、綱引っ張ってくれてな。あがらないかんし。

K:あがれそうですか？

C:あかんわ。笑車ついて観音道ずうつついていかなしやあない。

K:こっち、こっちもあるじゃないですか。

C:こっち行っつたて、町がこうなつたらな、行かれへんで。地震が揺たら瓦がおちたり、こっちやつたら、この前にでたらばつとあがれるけんな。

K:できればこっちがいい、ですね？観音さんの。

N:橋がとれたり。

C:上の橋はな、地震が揺れても・・・

N:新しいですよ？

C:まだ新しいし、上手にしとんちゃん？

K:杖をつかったら歩けそうですか、いつも杖ついて歩いてますよね？

C:杖よかな、車。2本も3本もここへたてかけとんで杖はな。よそ行くときはあれをつけてな。避難の時はこれ、この杖ついて行くんで言うてな。

K:なんか、練習されてたりします？

C:杖はな、なかなか危ない。

K:つるってなつたらねえ。

M:シルバーカーの方が利用頻度高いんですか？シルバーカーのほうがよく使うんですか？

C:うん、まあな、どこに行くんもこれついていくん。ほた、荷物もつめるしな。ほんだもう、これさげとるけん、ちょっとあれしても、なかなかあ持ってこられへんで。この、溝がな、割に穴が空いとおで。ちょっと突っ込んだら、クッなるんよ。

K:そうやねえ、でも、溝無くすことはできんしねえ・・・

N:なんか、瀬戸さんが、あの、何軒かのシルバーカーに、あの杖させるようにねえ。

C:みなこれこっしやえてくれてな、してくれとんよ。んでもう、よそ行くときは向こうの杖ついてな。荷物、背中におうてから歩け言うたって手ぶらでも歩けんしな。ちょっとは歩けるけど、避難の荷物もこっしやえてなんも頭の上へ吊ってしとるんやけんどな。

K:溝が危ないですねえ・・・

N:洗濯とか、食事作るとかは皆・・・

C:洗濯はな、もう、晩に風呂いったら家のほうに洗濯機おいとんよ。こっちは、もう海に行ってきたときに汚れた物洗うのにここに置いて、晩、着いたもんは、もうこっちの風呂場に行ったときにぽっとほりこんだらな。娘が夜中に洗って、ちゃんと干してくれて。んだもう、こっちはもう、要らんようなもん洗うようにこれな置いとんやけんど

N:地震、津波の時って、こう、いつ津波、地震がたぶんあると思うんですけど。

C:ほれがな、いついつ揺るんが分かってくれとったらなあ、安心するけんどな。

N:いつ逃げないと、いけないと思いますか？なかなか判断が難しい・・・

C:ほんでな、寝間の下へな、ベッドだろ、ベッドの下に靴からもうみな揃えて置いてな。

K:ちゃんとしてるんですか？

C:さあ、言うたってな、靴履かな、ガラス割れたらほの上歩いたらな怪我するけん。靴はもうベッドの下へちゃんと揃えてな、置いてしとんよ。

N:それって誰かに聞いたんですか？

C:うん、ほれはもう、みな、ほこらの人がほお言よお。靴やつぱり置いとかな、裸足で行たら、ガラスで行たら足切ったや言うけんな。さあなったら、逃げるとき、出てくるとき、危ないけん。ここの人、割にほんなん用心ええよ

K:そうですね、けっこうまめにやっってはりますねえ。

N:その、逃げる時に誰か、こう助けてくれそうな人というか。

C:まあ、ほら、若いしがみなおるけんなあ。みな行ったらしてくれ・・・

　　なんや、奥さんあげたるあげたる、ほんなこと言うてくれよる。まあ、ほうなったら、自分の身が大事だろうけんどな。

N:まあ、じゃあそこにいたら、ですよねえ。

C:もう、ほこの橋渡ったらすぐに山やけんなあ。まあ、山登れなんたら観音堂ずうっと手で押して走るわ言うて、よう走るかいな。笑

N:で、その、地震とか津波がきたときのその準備ってのは靴と後は何か。

C:リュックサック、リュックサックいれてな。薬とかほんなんは全部いれて、薬でも余分にもろて、20日分余分もうて。ほてこう、交代にいれて。

K:性格がまめなんですね。

C:まあな、いつも、先生に言うたら笑われたけんどな。毎日飲んみょうでえ、血圧と心臓飲んみょうけん、ほんで余分にください、由岐の病院やけんな。もうて、1ヶ月づつもうてくるんよ、ほれをいれかえするん。

N:確かに賢いですね、古くならない。

C:薬は持ったらなんだらな。一日も離れたことないけんな。

N:こないだの12月の、あの津波の発表ありましたよね、あの20.2メートルの。あの時はどういう風に思われましたか？あのニュースというか、発表を聞いて。

C:なあ、もう(津波が)来たら、もうほれこそ、家もなんじゃもうあれへんてこころ低いけんなあ土地が。もう、逃げるよかほか、しゃあないわい。我が身、ほれこそ、元気でさえあつたらどうでもなるでえ、もう逃げるんが第一じゃ、な。もうほれしか考えてない。笑

N:え、あの、昭和南海の頃って、多分、10・・・

C:私らがまだ家におった時分やけん・・・

K:18,9とか、多分。

C:まだ20歳になってなかったと思うでえ。

N:そうですね、18,9ぐらいと思うんですけど。

C:ほれも、母親がな。まあ、さあ、逃げんか言うて、里へ、母親が里へ逃げんか言うて逃げよったら、おおけな、もう石垣ついとった家がみな崩れてな。ほて、ほの間をとおって、ほて山向いて逃げたん。ほんときは津波言うたってな、こなんだけんな。

K:地震だけって感じ、やっぱり、津波の経験がないから怖いですねえ。

C:津波言うてもな、砂場だったしな。私らが子どもの時やけん分からんけんど。なけん、ほんなんだった。逃げ、言うてな、父親が言うて。母親の里が山やけん、山のほうに。ほた、もう途中、石垣は転げるしな、間を通過して逃げたわ。

N:そんなところを今逃げるのって大変ですか？

C:もう、これ(シルバーカー)押さなんたら逃げれんけんな。ほんでもう、こっちい、裏へでて、初めは田へ降りて、田から登ろかって言よったんよ。ほなけど、考えてみたら、田へ降りたって、な。やっぱり街へでたら電信が倒れとったり、瓦が落つとったりしたら、やっぱりこっち、出なあかな、あぶのおてもこっち向いてあかな言うて。ほんなんもう、相談で、家族が相談で。

N:やっぱり、こう、昔の経験を思いだして。

K:活かしたらねえ。

C:町はな、なかなか、行かれへんで、瓦落ちるわなあ。電信はなあ・・・

N:倒れたりとか。

C:狭いところやけんな。

N:塀が崩れたりとかしますからねえ。

C:塀やみな崩れるでだ、地震が揺ったらな。

K:でも、橋があるでしょう、あそこ。橋があるじゃないですか。

C:ほや、橋がああ。橋が壊れたらもうどうしようもないわ。あいじょしとかないけんけんどな、なかなかこっちに向いて出れんと思うわ。元気だったらな、間、間とおって出れるけんど、なかなか。

K:できるだけ早く出て、橋が崩れる前に、波が来る前に行かなあかんのですね・・・

C:大変やな、暑いのに。

N:いえいえいえ、すみません、なんか暑い時に、こんな。

O:あの、前6月、4月の避難訓練に参加されてないってことなんですけど。今後、避難訓練が開催するってなれば参加したいと思いますか？

C:今度、おりさえすればな。

O:やっぱり病院が？

C:ちょうど病院がああ、もう、ほんな時はしゃあないわな。瀬戸さんと気安いんよ。いっつもあの人が、なあ。

N:まわって？

C:まわってな。ああや、こうや言うてな、してくれるんじやわ。年寄り大事にするわ、あの人。

N:まあ、そうですねえ。みんな、あの、瀬戸さんもけっこうお年ですしね。

C:うん、ほうよ、なあ。

N:あの、退職してから戻ってこられたので。

C:自分とこの家、造作してな。なかなかやなあ、ほんまに。

Dさん トランスクリプト

D:Dさん N:内藤先生 Gさん (Dさんの妻)

O:大塚 (学生) K:喜来 (学生) M:岡本 (学生)

N:阿部の人たちが、まあ、あの、どういう風に自分で、あの、災害に。津波ですけど、あの、対応しようとしているのか、という趣旨で調査、聞き取り調査をしていて、お宅お宅、だいたい、回ってるのは80代の人が多かったんですけど。まあ、もう少し若い方に話を伺いたいと思ひまして。あの、ちょっと寄らせていただいたんですが、あの、要するにですね、普段どういう活動をされてるか、特にこう、高齢者になればなるほど、よう歩かない人とかが多いですよ？だから、その、高齢者がどのくらい、本当のところ運動能力があるのかっていうのを知りたいので、普段何してはるんですか、あの、シルバーカーでどこまでで行ってますかとか、そういうこと色々聞いて回ってたんですね。Dさんのあの、あんまりそういうことは・・・

D:ああ、仕事？ほな、わしにもインタビューやな？

N:それでちょっと、年齢関係なく聞いているので、別に何やっているとか、普段どういう行動されてますかっていうのをですね。あの、ええっと伺って、例えば普段と言っても困るので、例えば昨日ですね、朝から夜まで何をしていましたかっていう、ちょっと思い出してもらえたら。

D:昨日？

N:なかなか、こう思い出すのは難しいとは思ひます、僕も・・・

D:昨日カツギあったんやな？

G:うん

D:昨日はね、まあ、朝から、やっぱりあけっぱなしになつとるから、10時から、あの、この、海女の漁に。

N:10時ですか？朝の？10時から何時におきられましたか？

D:うちやは、癖がついとるから。朝4時に起きた。

K:早い。笑

N:質問なんですけど、朝ご飯は、昨日ですけど、4時に起きて何時ごろに食べましたか？

D:そうやなあ、まあ、普通、だいたい6時半か7時頃は朝ごはんやね。

K:朝ごはん食べるまで3時間空いたらお腹空きませんか？

D:やっぱり、時間、朝起きてから目が覚めてからの時間が長いねえ、5時頃からほの、朝、夜があけてから、6時に港へ出て行って、で、港で海の状況を見る。

N:浜って・・・

D:そうやね、浜やね。今日の波はどうかなあとか、風はどうかなあというの。まあ、ほの前にあれかな、朝の4時、4時45分にNHKの天気予報を見る。

N:それ大事ですね。天気とか。

K:もし、その時になんか変な天気やなとか思ったら。

D:そうやな、作戦たてる。

N:で、戻ったら朝ごはん食べられますよね？

D:そうやねえ。だいたい港でグダグダグダグダ言うてやっぱり、そういう人が何人か集まるんですよ。漁協で話したり、他愛もない話しもして。で、帰ってきたら6時30分かほんなもん。

N:昨日は何人ぐらいいました？浜に。朝、朝ですけど。

D:やっぱり、4人ぐらいは必ずおるねえ。4,5人。

N:なんか、あの、さっきまわっていたお宅、お年寄りも、あの、80歳ぐらいの方のお宅でしたけど。えっと、漁協のあの、女の方の、お母さん、とかにも、浜に、えっと、ちょっとシルバーカーでお年寄りが見に行くことがあるって、夕方とか。

D:朝はあんまり出てきとらんかもわからんね。夕方にやっぱり見に行きよる。

N:朝はやっぱり、漁師さんがやっぱり。

D:現役の人が多くみたいやね。海の状況を見て、今日はどうするかいう、計画建てるみたいやな。

N:釣り、一本釣り関係の人ですか？

D:まあ、今の時期でなかったら一本釣りの人も、そういう朝にも、今はもう、海女漁に大方が従事してるから。もうほとんど、一本釣りの人はおそらくおらんと思うんよ。

N:ああ、それで、あの、朝ごはんを食べてから、10時に出るまでは準備とかですか？

D:準備はほとんどないですよねえ。もう身体を休めて、その間に一回海のあるまでの海の状況をもう一回見に行ったり。朝天気予報見とつても、朝起きた時間帯と入る直前の時間帯とで風が吹いたりあの波が来たりという。ちごてくるからね。その間に色々ある。まあ、僕の場合は、状況を見てどこへ行くかを判断する訳です。

N:ポイントを？

D:うん、ポイントを。海女のポイントをね。

K:これ、何時ぐらいまで、漁されるんですか？海女さんの。

D:海女漁は10時から今のところ13時まで。

N:あ、その時間があれですか？一日の中でも13時までしかそれより向こうはやったらいかん。

D:今のところね。まあ、最初のうちは、2時間か、一番最初のあれは2時間やったな。2時間で、2時間半なって、それから3時間。徐々に変わってきてるんやけどね。これが3時間半になるかも分からんし、これは漁協の方針で。出る日数、海女の期間が足りんとかで短くなったら、結局は時間を、伸ばしてやらなんだら、あの、労働時間が短くなるということで、そういう方針をとってるみたい。

N:じゃあもう、1年の中の時間決まってて。

D:大体何日間ていうこと、うん。僕や前、役員しとったからほういう方針でやっとったからほういう方針でやっとなります。

N:それで、もう、戻ったらご飯たべて休まれる。

D:そうやねえ、年のせいかあたしやもうちょっとしばらく、1時間ほど休んで、ほれから食事してほんでまあ、休息の時間やったんやけど。

N:すみません。

K:15時くらいにご飯食べられるんですか？

D:帰ってきてねえ、13時くらいに帰ってくるでしょう今日は特別はやかったんよ。波が高かって、風

があったから。大体 13 時までやから、帰ってきてなんやかしたら 14 時ごろになるね。15 時まででは、ほれがまあ、昼食時間。

N:で、15 時くらいからまた、あの、あれですか、また別の事される？

D:今の時期は他の事は・・・笑 もう・・・せんねえ。よっぽど、明日、これ明日が休みやから、まあ、夕方になったら他のことやるかも分かん。普通の毎日毎日続いている時期やったら。

N:あ、自宅で少し体休めて。

D:僕だけかも分かんけど、他の人はどうしとるかは分かんですけんね。まあ、ふつうそやな、若い人やったらこんなことはないかも分かんね、30 代 40 代の人だね。

N:潜ると体力使いますもんね、潜水は。どれくらい潜るんですか？

D:深さは、しれとる、5 メーターぐらい僕らが潜るんは最高 5 メーターぐらいのとしか潜らん。もっともっと深いところ潜る人もおるけど、最低は 1 メーターぐらい。ここの、ここの漁場というかな、阿部の漁場はこんなところから深いところまで、30 メーターのところまではアワビがおるっていう風にね。

N:あの、沖縄でも、潜水、ちょっとだけしたんですけど疲れますよね。

D:塩水ってのは疲れるみたいやね。なんか、

K:海の中、遊びに行っただけでも疲れますもんね。

D:やっぱり塩水、あんだけ体力吸うんかな。まあ、ほんなとこよう分かんやけど。

N:流れとか、あと、潜ったり、圧力の変化がたぶん体にくるんやと思うんですけどね。

D:人によっては、僕らだったらもう潜って 20 秒ぐらいおったらもうすぐあがってくるんやけんかね。長いこともおれへんのやけん。あそこの、中で仕事をするからね。ほれが疲れるんかなとは思いうんやけど。

N:水圧がけっこう変わりますから、水圧ってけっこう体に負担がかかる・・・

D:なんか言よったね。1 気圧でなんぼのあれがかかってくるとか、言よったねえ。

N:1 気圧であの普通の気圧の倍くらいですから体重分余計に重さがかかるんで。けっこうね、あの負担なんです。沖縄で潜水で、採りすぎでヤコウガイとかあのボタンに使う。ああいうのを採ってたんですけど、採りすぎで。最後は、もう、あの、働きすぎてる人はあの、やっぱり調整しないとだめで。あ、それで、その夜は、晩は早いんですよ？

D:まあ、まあまあ、寝るんはねえ。もうほとんどプロ野球とかほんなん見ることがなかったら、もう 21 時になったら寝とるねえ。

G:もう 5 時、4 時過ぎになったら起きとるけんねえ。

N:あ、5 時過ぎくらいですか？で、その、晩御飯のおかずっていうのは、あそこの、やま、山田さん？山田さんとかで買うんですか？それとも、買いだめするんですか？どっかで？

D:うちは買いだめ。外へ出てこうてきよお。山田さんとは瀬戸さんもほとんど利用せんみたいやね。

N:そうですね、そのほうが安かったりとか。

D:出た時に、ちょっと多めにこうてきて、ストックする。

N:どのくらい、週に。

D:週に、多い時やったら 2 回ぐらいやね。

N:けっこう、これ、あの、お年寄りになってくると、お年寄りになって、山田商店に行っっていう方とか、あと、あの、子どもさんがいらっしゃったら買ってきてくれたりとか。

G:今までやったら週に 1 回とかねえ、車で買いに行ってくれるところがあったんやけん、それもやっぱり 1 年前にちょっと。

D:もう、ほなけどこれも、山田さんとか瀬戸さんが無くなったら、おそらくほういう人がまた入ってくるかも分かんわね。

N:そうですねえ。

D:全部が全部買い出しに行くわけにいかんし。

N:ちょっと恐ろしいところもあって、そういうのがない、まったくなくなっちゃう所もあって、もう、だから買い出しに行くしかないってなっちゃう所も日本には。

D:また、所によったら、ほういう海にでたりするところもあるし、集団で買いにバスで、まとめて。

N:生協さんみたいに、こうまとめて。それも大変ですよ。あ、ほれでですね、ちょっとこれは津波の話とかをお伺いしたいんですけど、何回もインタビューされてると思うんですが。個人的なことなんですけど、皆さん判断基準が違うと思うんですけど。どうなったら津波が来るから逃げようと、思いますかっていう質問なんですけど。つまり、地震が来たからって、必ず津波が来るわけでもないですよ。な、何が起こったら、ハッ、逃げようっていうことになるのかっていう、現実問題として、その辺はどうなんですかね？

D:こないだも、えーとアンケートやったかな。一番我々、まあ、やっぱりテレビとか、ほういう風に広報でね、そういう風にしてもらったらええんやと思うんやけど。自分で、このぐらいの地震が起きたから逃げないかとかいうのは初めてのことやけん分かんね。ほなけん、ある程度の広報とかほんなんは欲しいなあと思う。

N:そうですねえ、なかなか厳しい所があると思うんですよ。つまり、そのはや、早いですよね、ここにくる、到達するのが。地震が起きてテレビ局が情報集めて、流してまでに一秒では無理なので何分かかりますよね。そうすると、いつもそういうことが心配だと思うんですけど、少し、初動が遅れる可能性もない訳ではないですよ。

D:無いやろね、そんなんもやっぱり・・・訓練がいるんかな、訓練ではあかんかな。

K:どのぐらいの地震の揺れがきたら逃げるっていうのですか？

G:揺ったことない揺れがきたらな、上の物が落ちてきたりとか。

D:今我々が言よる、ほの、大地震で、あの、津波が来ると。20mなんぼの津波が来るほればっかり考えとるけど、まあ、ひよっとしたらもうちょっとちっさい地震が揺って何も無いときがあるわね。そんなときが何回か何回か起きてきた場合に、皆がどういう考えをするかっていうことなんよ。その心配はしよんよ。

K:慣れてきたらね。家によってほの耐震も違うから、物が落ちてくる状況とかも変わるから。

G:だから、落ちんようにきちっとしてる人やったら、少々の揺れでも。

K:地震ちょっとの揺れたけど、でも津波がきよおかもしれんし。

N:ま、南海トラフの地震が起こったら、まあ、とんでもない揺れみたいですから、6とか7ですね。もう、逃げるでしょうけど、あの、ちょっと揺れが強いとかそういう話ではないと思うので。

D:よっぽど大きいんかなあ。体験したことがないからねえ。ほんなこと

N:立ってられないくらいだと思いますよ、その、今想定通りの数字やったら、すぐ分かるというか、家がたぶん崩れたりとか、すると思うので、そうなったら絶対逃げるでしょうたぶん。でも、あの時はどうだったんですか？昭和南海の時それはまだ。

D:僕あの、昭和南海で。

N:終戦の次の日くらいですね。

D:生まれてない時。

N:あ、そうですか。

D:そうやな？

D 妻:だから、由岐の辺りでみたら、ここが、津波が、ここまで来てるんかなあと思たんじびっくりした。

D:その頃やったら、わしがちっさい2つの時。港なっていうのは全部なしに、浜まで、今の中の船がとこがため池みたいになつとる。そこへ船たまりがあつて、ほういうとこへきて、やっぱりこう川伝いにいって、だいぶ上まで船が打ちあがつたという話は聞いたね。後でね、実際には見てないし、その次でも人的被害ない、なかったねえ。

N:昭和南海は、あの、今まで、あの5回くらいきてますよね、記録に残っているだけで。でもまあ、今までの地震の中で、津波の中で一番ちっちゃいので。

D:今までの地震からしたらな。

N:記録、いろんな碑ありますよね？あれあの、南海だけでなく、貞観とかもつと昔の地震のほうがもつと津波の高さが高いんで、南海よりはたぶん、もう全然大きいのが昭和のときはくる。

G:ここでは被害がなかったんけ？

D:人的被害がなかったって、人が死んだとかほんなんはない。南海には載ってなかったんやね。安政かなんかの時。

N:安政の時にお寺の過去帳ですか。あそこの手前の寺で一名亡くなつてるといふ、それでも、あの時でも寺までしかこなかった。阿部の場合は地形的に恵まれてますもんね。

D:その時、阿部の場合はその、ほれからずうっと聞いてわしらも思うんやけど入口が小さいから。あの、どっちからでも波が来てもどっかで防いでくれるっていうような、あれがあつて、阿部は心配ないわっていうような考えがあるんやろ。ほんで、ここの前は海が深い。だからあの、浅瀬でずうっと津波が来て、だんだんだんだん波が大きくなってくるような津波はここは絶対こんとおもつたんよ、前が深いからね。ほやから、もう絶対心配ない心配ないって皆言よつた。ほやからあないて、こないだの東北の地震が起きた時、警戒が出とんのに、皆、海向いて港へ向けて皆が見に行つた。ほれまではほんまに警戒心が少なかったなあ。

N:あの時の波ってきたんでしたっけ？

D:うん、まあ見とつたら1メートル4.50ぐらひは差があつたみたいないけど、ザーッとみたいなほんなんは全然無し。ただ、あの、あれが水位が上がつたり下がつたりはしてましたね。だからもう、外へ出しに避難するとかは、全然、せず。

N:それはよかったですね。

D:皆心配ないと思つたから、ほんなんはせなんだね。

N:それがあから余計、大変ですよ。

D:そやねえ、我々、こないだのが出た時にあれから後やったら、皆どないするや考えてくれたからねえ。

N:それで、あの、えっと、Sさんと一緒に避難路を作つたり。

D:そやねえ、まあ、ほれが一番いい方法かな思て、こういう地域ではね。もし、あんだけの高い、東北の、あの、津波のテレビ見よつたら、とにかく高いとこあがつたらな助からんっていうような感じが出たもん。そやから、ここの場合はやっぱり、あの、真ん中の道行くよりは、すぐ山が近くにあるから。高いとこ上がるんやから、まあ、上がるようにしてやらないかな、ということで。すぐできる、っていうのがね。やっぱり、さっき言われたように、津波が、あの地震が揺つて、津波がくる時間が短いために、ほういうことは思て。

N:もともと(避難路)を作ろうと思つたのは あれですよ。奥さんの、あの、足がやっぱり・・・

D: そうやねえ だから あの、こないだも言よったんやけど、ちょうど入院しとってね。あの、小松島の病院に入院しとって。地震が起きた日は、ここ(妻)はテレビで見たんよ。わしはもう帰る途中で全然情報なしで。車で運転して帰ってきたら、警報が出て津波が来るというて皆、波止のところで出とった訳ですよ。ほんで初めて知った。ほれから、これはいかん言うことで、まあ、もし、テレビ見よって、もし津波がきたら、うちの嫁はん退院してきてもすぐよう逃げんと。自分でも、あれ、やっぱり連れて逃げるん大変やからいうんで、この近くの山へあがって、ちょっとでも高いところへあがるんがええんでないかいうことで、ここに道を初めてしだした。ここ昔、道があったからね。ほたら、もうすぐ20メーターのところで上がれるようになるから、それをやって、まあ、あの手入れもできて。したら、ほかの人も、ああこんなことしよるん。ええやないか、いうことで見に来て、ほれを、あの、八軒屋路の人が見に来た。で、他の人が周りの人を巻き込んで、あの、そこの地域の人を巻き込んでやってくれた。それと一緒に上村路っていうんがあの人が、今ほれも、地域の近所の人を巻き込んで近所の人が、うちもほんな、せないかんあ言うたら、あの人がほとんど一人でぼつぼつやったみたい。知らんうちにあの道がでけとったんよ。それも、昔からある道を利用してやったということね。八軒屋の路も、やっぱ昔からあつこへ、あの、八軒屋からずうっとある自動車を通らん、あつこのとつから山を越えて由岐へ行きよたんよ。ほれを利用して、あそこの県道まであがる。

N: ここは、あれでしたっけ？あの、昔の・・・土葬の場所？

D: ここですか？ここはあの、今は墓があるでしょ？お墓があるんは、この上にみなあつたんです。

N: あれ、移したんですか？最近？

D: もう何十年も。

G: 段々と下へ下へと。

D: 最終的に来たんが、もう20年になるかな。一番最後に下まで降ろしてきた人がもう20年ぐらいになりますわ。徐々に徐々に降ろしてきた。

N: でも、なんで、そんな。

D: お参りに行くんが遠いと言うことで、山の上では。まあ、雨が降ったりなんかしたら道が崩れるでしょ。年寄りの人がおつたら上へあがってくんえらい。ほんで、下へ降ろしてきた。ここ、場所は、裏のナルセさんいうて、ナルセさんの土地やったんです。向こうのお墓。ほれをおおかた、ほの人が寄付して集落のために、墓地にしてええということで。

N: なるほど。県道より上ですか？

D: 下、下ここあがっていくとね、あがって行ったことあつた？

N: あります。前に高さ測った時。

D: こういってこういってでしょ。あれを真っ直ぐ行くんです。ほれから、まっすぐ行ったらもうすぐ上へ段々上へ。

N: だんだん石積み、みたいのがあるところ。

D: 今でも墓の跡ありますよ。

N: ああ、そうですか。

D: ほこが遠いと、行きにくいやいうんで、みな下へ降ろしてきた。ほた、ほのころに、お祭りをしよって。ええ、まあ、火葬っていうん、どっからできたか知らんけど。火葬せんか、いうこと土葬でなしに火葬にせんかいうことで。県道から岬のちょっと下へ降りたところ。ここからずつとあがって道つけてあるけど、ほこと一緒に合流するところがあるでしょ？その下に火葬する焼き場があつた、そこへ行く道を利用してうちが県道まで、行く道をつけたんです。なけん、この道が一番遠いねえ。

県道まで行くんやったらね、ここがね。

K:なんか、他の人も使われるんですか？

D:ほれまではいつももつこてなかった。

K:なんか、Dさん以外にも使う人いますか？

D:今？

N:避難する時。

D:うん、まあ、うん、ほなけん、あの、ほこの人ってな毎日毎日、お墓へ来るんよ、お参りしに、花をかえに、もう毎日日課のように来るん年寄りの人が。そういう人がもし、ほの時に、あの、地震があったら、もうよそへ行く訳にいかへん。ここから逃げな行って上へ上がらな仕方がないで。ほのくらい程度の道や、今のところはね。

K:お墓参りにきた時に。

D:ほやけど、まあ、利用する術はあるかも分からんね。うちがこの、2,3軒が逃げるだけでなしに、ほこの、共同墓地っていうのがあるから。

N:お参りの時間やったら。

D:向こうの方に逃げるわけにはいかんからね。ほういうのもやっぱり、噛み合わせて、やっぱい、この道は大事かも分からんねえ。

N:そうですねえ。で、その、これ、ちょっと僕の感想なんですけど、こう、地域の人が自分の避難路を作るってのはすごい、いいと思うんですね。いつくるか分からないんで。とりあえず、作っておくっていうのは素晴らしいと思うんですけど、だんだんこう、落ち着いてきましたよね。一応、避難路もできて。で、例えば、さっきあの、天神さんのとこの、あの、避難路。この2人、あの、初めて来たんで、上がってたんですけど、ちょっと蜘蛛の巣がはってるとか、ロープがたるんでるとか。まあ、要するにですね、整備が大変ですよ？40か所ぐらい作ると、誰が整備するのか。笑 一日一つやっても、40日かかりますよね？ちょっと大変かなというのと。あと、実際80以上の人ってシルバーカー使って移動しますよね？で、あれってたぶんガレキがこう、がらがらって崩れてくるとたぶん大変、誰かの支援が、ちょっと助けるという。ちょっとでいいと思うんですけど。道が細かくなって、人が細かくいろんなところに行くにあんまり、助けてもらえる確率が低くなりますよね。みんな孤独に逃げるといって基本的に、それってちょっと、またそれはそれで問題かなと。

D:そやねえ、あんまりぎょうさんつくっても、ねえ。

N:あったらあったでいいと思うんですけど、ただ、ちょっとこう、メインみたいなのを。ま、こないだの避難訓練も、天神山いちおうあれでしたけど、あれ一個ではどうにもならないと思うんですけど、何個か、こう。

D:重点的に。

N:ここまで逃げてきたら、まあ、みんな逃げてるし、誰かが助けてくれるかもしれんっていうような。そういう風にして。

D:まあ、何本も、まあ、今のとことりあえずっていうことで、何本か作ったけど。この中には、あの、い、要らんのって言うたらおかしいけど、必要、ねえ。こんなとこに要らんなあいうのが2,3本あると思うんやけん。ま、そういう風にしてもっていかんかったらあかんかも分からんね。こないだの避難訓練も、一つのええ、あの、例かも分からんね。

N:あの、7月の避難訓練は、なかなか、あの、自分ではやっぱり動きづらい人も訓練に参加してくれたんで、あの、僕はいませんでしたけど、話聞くと、とてもええなあと思っていて。で、あと、今日もあ

の、えーっと、最初に、Sさんの家の裏の方ですね。お婆さん、担がれて、天神山の上った。あの方に聞いたんですけど、やっぱり、あれもやってみるのはいいもんで。家に座ってるしかないかなあと考えても、まあ、ちょっと助けてもらえるかもしれん。ここまで、ちょっとお父さんに手伝ってもらって外まで出て大きな道まで来たら、誰か助けてくれるかもしれないっていう。まあ、実際どうなるか分からないですけど。そういう、意欲が出てくるっていうのが。そういうのも、とても大事だと思うんですね。

D:こないだ、こないだの訓練、普通やったら、もうほんなようなするような段階でなかったんやね、あれ。町の、まだ、も一つ、こう、のってこなんだような状態やけど、あ、阿部はああいう風な方式でやったんがよかったと、思うわね。

N:よかったと思います。また、あの、要するに、その、助けるほうが助けることに慣れるというか。あの、消防団の人が。これはもちろん当たり前のことなんですけど、助けられるほうも助けてもらうことに慣れるというか。なかなか、人間って助けてもらいづらいというか。

D:ありますよね。ほの、あのちょっと、個人的に言うたらいかんけど、助けようとは思うんやけど、この、向いのご夫婦がおるんやけど。奥さんがもう、脳梗塞で麻痺して、もう、おおかた寝たきり、車椅子で。ほんなんも、旦那さんはもう、もうええわしらほっといてくれっていうような言いかたするんよ。ほら、近所の人ほんな訳にいかんと、とにかく、ほういう心構えしてくれとったら、わしらかて、あの、ただでな、自分らだけで逃げへんのやけんとは言うてるんやけどね。やっぱり、ほういう風な引っ込み思案なところあるわね。ほんな人ってね。やっぱり、こう、ほんなんが出て来てくれよったら、また、違うあれが出てくるかも分からんね。

N:全部Iから、ベッド、起きる、ま、人にもよるんですけど、からっていうんじゃないで、玄関先まででてきたら、とか、道まで出てきたらっていう、そういう、あの、やれることはやってっていうような、風な感じがいいと思いますね。

D:まあ、うちも最初のうちは、もう、総会開いて。あれしたときは、もうとにかく、ほな、あの、元気のええ人だけ助けるような、あの話し合いして。ほな、あの、動けん人はどないするんや言うてほるときからもうほんな話がでてねえ。困ったような状態やったんやけど、追い追いにほんなことをやっていくうちに、またその人らもまた考えが変わっていくかも分からんね。

N:ちょっとこの間、だいぶ、ちょっと変わってきつつあるかなあと思ったんで、話を伺ってみて。それが、よかったなあ。

D:これもまた、うちの事務長がしっかりしとるからな。みな、みな仕掛けてくれよんやけど。笑

N:そうですね、仕掛け人で。

D:まあ、わしはもう、言われたとおりにまあ。

N:今、お二人で暮らされてますよね？

D:うちですか？うちは子どもないんですよ。最初から。

N:そうですね、いや、こう、親戚の方とか？

D:妹とかは、徳島におって、僕は大阪が地元やから。

N:そうですね。あ、そしたら、もうなんか、誰か助けないといけない親戚の人っていうのは。

D:まあおるけど、ちょっと、港の近く。ま、常にはもう、川から向こうはもう、わしは助けに行けんっていうことは言うてあるから。自分では、自分でどっか逃げることを考えていうことやね。

N:やっぱり、さしあたって、例えば、気になるのは向いの？

D:まあ、ここやはね。入ってくる入口に鉄筋の白い建物あったでしょ？あつこの人と、こことここ。

G:この塙の向こう。

D:今度ここへ帰ってきて、定年になったら帰ってくるんだろか。

G:ここだったら自分の屋敷のどこ逃げられるでしょ？この塙の向こうな。

D:ほれも一つ、一つ避難路に入っとるわけよ。こことちごてね。ま、ほやけん、自分とこの山があるから、わしら山へ逃げる言うて。自分とこの屋敷に逃げる言うから、ほな、逃げえいうて。あの、自分で道作れよ言うて、ほの代わりに、あつこの上まであがったときには、ほれも見たことないでしょ、先生？

N:そうですねえ。

D:こっからは、自分とこの屋敷からは、あの県道に行ける道を付けるから言うて、付けてあるんですよ。

N:ああ、そうですか。

D:やから、ほれは話してあるんやけどね。ちょっと、変わった、変わったこと言うたらあかんけど。笑ほこの人は自分で、逃げれるから。もう、ほんだら、自分でやりなさい言うて。

N:ああ、一人で作る？

D:だから、あの、器用な人で。あの、ショベルカーからなんか持ってね。みんな自分で、近所に道つけてまっせ

G:ここの橋渡る手前の所、左にずうっと入ったとこ。

D:四国、四国大学の先生か何かしてる。

N:あつ、そう、なんか、庭の敷地通ってというか。

D:そうそうそうそう。

N:ああ、はい、一回、ちょ、奥、竹藪のほうに。

D:うえ上がりました？

N:いや、あのへんぐらいまで

D:うえ上がる道こないだもみなあがってみたんやけど、まあまあ、行ける道があるからね。

N:ああ、そうですか。あの、こないだの、えーっと、南部県民局のあのモデル村、モデル地区になりましたよね。あれは、どうですか、動いてますか？

D:うん。えーっと、こないだ行ったんがSさんが行ってくれたんやけど7月の何日にやって、6月やったんかな？ほんで今度10月、10月と12月と、ほいで、次の年の3月。4回ぐらい。なんか、ほんな、一応、会議みたいなん開いてまとめるとは言うてましたけどね。まあまあ、動きは・・・あの、大きな、我々がした大きな器のなかでしよるみたいなね。まあ、それに対して皆に啓発というかね。ほれ、進めるためにこっちの、地域作りのあれを、しとるみたいなわ。しよることは大きいもんね。どこまでできるかねえ。

N:そうですねえ、なかなか、ちょっとタイプが違いますよね。支援、支援をしてくれる感じですか？

D:とは言うもったけどね。なんらかの形で支援しますとは言ったけど。まだ形になってはないけどね。まあ、ここあと一言が。立ち上がりは遅かったけど、一言でだいぶ進んだし、モデル地区になってくれって言われたんやと思うんやけどね。

N:だいぶ、あの、阿部に、ここだけじゃなくて、全国的にみても、あの、画期的というか面白い、あの、勉強になる点が多いと思うので。阿部でやってることっていうのは。そういうモデルになるのはいいことだと思います。なかなか、ここまではね、自分でやるっていうのは。笑

D:まあ、自分らの身は自分らで守らないかんということでやったんやけど、段々段々大きくなっていつて。ちょっと、わしはもう仕事しよるけんSさんにまかせつきりやけん。

N:あとはたぶん、続けられる工夫ですね、それができれば。

D:そうやねえ。

Eさんへの聞き取り調査の内容

E:Eさん N:内藤先生

O:大塚(学生) K:喜来(学生) M:岡本(学生)

Eさん

N:えーつとですね…、昔の話もあれなんですけど、今の話を…ちょっと

E:今け?

N:あの、どういう風にこう津波から逃げようと計画されているのかなっていうのが

E:うちけ?うちはこれ(妻)な、重度身体障害者で、今もう全然動けんの。

おそらく、もう逃げれんとおもとんよ、ほんで、逃げる気もない。

どないてほな、あのなあ、これを連れていくかいうことが、あれ、あの、腕も手も肩一本あかんのにやなあ。

あんなん連れて行っきよったらよ、骨折するか、誰かもう分かっとなよ。

N:ああ。

E:ほいてもう、どないしても、連れて行く気はない。うちは、避難はない。

N:うーん・・

E:ほやけんだ、こう考えたらなあ、まあ、なんやらのアンケートにいつとるように

まあ、転居しなきゃあない。もう動かすいうことはでけん。

大体、無理して家連れてきてとるけんな。

N:あぁー。

E:普通、あの・・・あぁいうねりん(介護施設)とかなあぁいう介護施設でな。

おるいうんを無理して家におる。

一生懸命しよる。

N:あぁー。

E:ほなけん、全然ほんな(避難する)・・・うん、気はない。

ほんで、津波も、もう、避難のほうなはい。

今のほういう考えはない。

N:はい。

E:ちゅうことはな、一番のものはなあ、一代で津波に二回あうことあんまり聞かんのよ。

N:ああ、なるほど、何百年かに一回とか。

E:うちもな、今からな、ほりゃ30年いて30年のうちに60%の確率とか言よつたでえな。

うちはちゃうと思うんよ、100年のうちでほおでないかとおもとん。

ほなってよ、あの、・・・うちがな、ほやってほら。

東北は知らんじよ、向こうはまた違うけんな。

N:はい。

E:こっちやったらな、ほんなに、一代でえな、津波に二回おうとんは、今まで一回も聞いたことない。

ほなけん、うちは無い!とおもとんよ。

N:はい。

E:ほなけんな、おもとんやけん、ほら明日あるか分からん。

ほなけど、地球がな、45 億年の間にどんなんなってこんなんなったかな。

ほんなこと思うんだったらな、ほら、明日がどんなんなるやら。

100 年先やら 200 年さきやらわからんのんとちゃうん。

N:そうですね、本当のところはわからないですからね。

E:うん。ほれとな、津波のことやけどな、津波はみなどういふ解釈するかわからんけどもな、あんな台風みたいなのでつかいのは絶対来ん。それはもう全然違う。

N:あーそうですか。どんな感じの・・・？

E:結局な、潮が満ちてくんと一緒よ。潮が満ちてくんが身近になったようなもん。

N:あーなるほどなるほど。

E:じわじわじわーと。

われわれのな、小さいころの記憶ではな、港とはまた違う。

浜だったらな、後ろ向きで歩いていけたくらい。

N:あーはい。

E:じわじわじわーと。

N:あーそうですかー。

E:津波っちゅうんは、そんなものではないんかとおもとんよ。

N:あーゆっくりなんですね。

E:うん、結局な一簡単にゆうたら、潮の満ち引きのはやいようなもん。

ほんで高さもな、そんな 20m も 30m もそんな、想定ゆうんだったら、わからんのんとちゃうん。何百年も何億年も前のことはわからん。

E:あーそうですよね。

そうだと思います。ほんとのところはよくわからないですよ。

E:東北の津波をな、テレビで見ると膨れあがತ್ತるけどな、あっこ浅いんちゃうん？

海が。浅いけん、あんな膨れあがತ್ತん。

N:うんー。

E:うちのじいさんもな日和佐にな、知り合いがおってな、沖行っと思ったけど、波全然感じんかったと。

ひたひたーとする程度とな。

N:うんー。たしかに・・・。

そのー、すみません、今おいくつなんですか？

E:今、77 歳。

N:あー77 歳なんですか。

E:ほらまあ、想定とかなあ、ほんなこと言いだしたらやなあ。

何百年やら何千やら何万やら何億年前いうたらどないなつとるや分かるでだあ。

N:うんー。

E:ほんなことまで分かるはずないんよな。

だいたい、そうすることすら間違うとるんやないかと思とるぐらい

人間の今までの歴史はほんなんでもなかつた思うんよ。

N:はい。

E:色々やりよって、ほいてな、ほういう、災害になってほれをまた復旧しもって。

ほんなして、今の社会ができとんでないんかとうちはほう思とるぐらいじゃ。

ほやけど、うちは、ほの、今の時点ではあんまり避難する…
来るともおもとらんしな。

N:はい。

E:ほいて、波がきても、こんなところへ来るとも思とらん、ここはほの、昔の想像からいたらな、ほら、
分からんわだ。

地球がなあ、どんなんなつとるかやら、どこで地殻変動があるんやら分からん。

ほんなこと、想定で言よつたらうちは分からんと思うん。

K:もし、ほんまにおっきい、東日本みたいなおっきい地震が来たら…?

E:津波け?

K:ほんまに、来るとも思っていないかもしれませんが、

もしきたら、どうされますか?

E:ほなもうしょうがないで。

動かしようがない。もう、ほら、あの、重度身障やけんなあ。

手と足動かん、どないなるやら分からんわだ。

N:奥さんはいくつなんですか?

E:今 84 歳。

N:あー84 歳。

E:ほらもう重度身障やけんなあ。手と足動かん。いつどうなるかわからん。

N:あー、もう何年になるんですか?

E:もう 8 年。

N:あー8 年ですか。

E:ほなけど、もうしわないわ。

N:普段はもうお父さん見てはるんですか?

E:うん。

N:買い物とかはどうされてるんですか?

E:買い物はうちが行きよんやけどな、阿南のほうまで。

N:あー阿南まで。

E:車で。

N:あの、お子さんのほうが助けてくれたりとかは…?

E:おるんやけどな、あんなんもうわからん。

N:笑 ここにいらっしゃるんですか?

E:いやおらん。

N:あーそうですか、徳島市…?

E:うん、徳島のほうにおるんやけどな。

N:あー、男の人ですか?

E:いやいや女の。

N:女の方ですか。

あー、じゃあ、もうお嫁に?

E:ほんでな一、もうわれわれはここ手離せんけん一。

N:ご兄弟とかはいらっしゃるんですか?お父さんの。

E:おるけどなー。関西とかなー、ようけあるんやけどな。
もう会うことはないんちゃうん、もう年寄ばっかやけんなあ。
元気なもんばっかちゃうし。

N:まあ、そうですね。ええ。

E:ただなあ、津波はあんな台風の波みたいなんではないゆん。
じわじわじわーとな。

N:あー、それはご自分の経験で？

E:ちょうど潮が満ちていくのとな同じでな。

N:なるほど。

E:せいぜい来て2mか3mちゃうん？前の南海地震みたいに。

N:前はそうですね。
あと、普段の生活についてちょっとお伺いしたいんですが…。

E:普段の生活？

N:たとえばですね、昨日とか朝何時に起きられました？

E:あさは5時に決まっとる。

N:あーそうですか。みんなはやいですね。

E:ほやって、オムツしとるやろ（奥さん）？
ほなけん、時間は厳守やな。

K:朝ごはんは何時ですか？

E:ごはんはもう決まってない。

K:いろいろですか。

N:買い物は週に1回？

E:2回やな。だいたい。

N:あーそうですかー。

E:で、買い物も危険やで。津波は。

N:そうですね。遠いですからね。

E:家にほかに誰もおらんだろ？

N:はい。

E:誰が面倒見てくれるわけでもないし。
車でなんぼ自分が気を付けとったって、この高齢になったらなー。
ものすごい危険よ。そら津波どころでないんよ。危険なんは。恐ろしいんよ。
ほなけん、その危険は毎日あるんよ。
買い物行って帰ってきたら、もうやれやれよ。

N:買い物ってそこの商店に行かれるんですか？

E:あんまり、何回も行くんはややこしいけんなあ。
おっきいところ行っていっぺんに買っとく。

N:あーそうですか。なるほど。
それ以外に畑行ったりとかお墓行ったりとかは？

E:もう全然暇ない。

N:あーそうですかー。

E:ただなー、今もう、うちは8年目いっとるだろ（奥さんの病気）？

N:はい。

E:それも今まで無事にこれたんがおかしいな思うとるくらい。

N:あーなるほど。

E:だが、ほやけんど、もう年が年やけんな、脳トレとか筋トレとか。

パソコンとか。ああいういろいろなんは間があつたらする。

頭鍛えるんと、運動するんと。

N:あれですよ？脳トレってゲームでいろいろするやつ…？

E:ゲームもあるし、パソコンもある。

N:パソコンもあるんですか？

E:うん、するする。

N:それはすごいですね。

E:脳がくるったらいかんと思うてな、脳トレと筋トレはする。

健康維持程度にな。

N:散歩とかウォーキングも？

E:家でするなあ。

N:あつ、家でされるんですか。

E:もうほなって、自分が亡くなったら、しまいやもん。

出て行って戻ってこれなんたら、もうそれつきりよ。

自分はどうにでもええにやけど、戻ってこれなんたら、家のもんがなあ。

N:そうですね。

E:もうどうもこうもしゃあない。

N:ちょっと助けてくれる方とかは？

E:そんな、もうあんまいつも頼めんけん。

ほなけん、できるだけ脳トレとかはする。目の訓練とかな。

脳トレだっっていろいろあるでー。

N:計算とかですよ？笑

E:計算ともする。何でもする。笑

N:あーそうですかー。

E:目のトレーニングだっっていろいろあるでー。

テレビだっっていろいろしよるけんな、あんなんは取り入れていきよる。

N:あーそうですか。なるほど。

E:ただもう、元気でおらんんな。

N:最後にあの、行政とかNGOとか、どういう支援がサポートがあつたらいいですか？

E:行政は…考えたらいろいろあるけどな、もうしゃあないかなと思うとう。

自分らがこういう運命だつたけんな。

N:あー。

E:そりゃあ、行政にだっって言いたいことはいろいろあるけどな、もうこういう過疎のとこだつたら、行政だっってそんなうまいこといかんだろ。

N:笑 まあ、行政も今力入れていろいろやってくれてますよね。

E:まあまあ、あんま文句言うてもいかんけどな。笑

N:まあ、自宅療養のためのサポートとかがあるといいですよ。

E:そんなもなあ、まあ、今年な主治医がおらんかったんよ。

N:あー、4月からですよ。

E:うん。4月から先生が来てくれるんよ。ほなけん、まあ安心はしとんよ。

N:やっぱずっといてくれるっていうのはありがたいですよ。

E:うん、ほんなんはよかったなとおもとん。

N:看護師さんとか介護士さんとかもいてくれるといいですよ？

E:そんなもなあ、本人（奥さん）がもういやいやゆうて。

N:あーそうですか。

E:初めからあんなんもう人に来てもらうのがいやいやゆうて。
ほんで、できることならしょうかなあとおもとんよ。
行け言うてもいやゆうけんあ。

N:ずっと阿部にいらっしゃるんですか？

E:ここでなー40年くらいになるかなー。

N:あーそうですかー、じゃあ、奥さんが阿部の方？

E:うん。そうやなあ。

第3章 災害とコミュニティに関する意識調査

上野由華・吉田早希・中西崇文

1. はじめに

第1節 研究の背景と目的

2012年1月、南海トラフ大地震による津波被害の新想定が発表され、阿部には20m級の津波が来ることが予測されている。阿部は新想定発表後から短期間で自主防災組織を形成し、避難路の作成や避難訓練も自分たちで行うなどの災害対策を積極的に行っている防災先進地域である。災害は、「ある社会における社会的気候の本質、たとえば親類関係やその他の協力関係の紐帯、回復力といったものを明るみに出す。(中略) 災害状況において、ジェンダーや階級や階層や年齢や職業の異なる集団間の、意見の不一致や、競争ないしは対立や緊張といったパターンがすべての鮮明になる。それゆえ災害は、人々を社会的また文化的に分けることに関して広く受け入れられている知恵を詳細に調べる方法を増やす機会である。(アンソニー・オリヴァー＝スミス,2002:14)」と述べられる。本研究の目的は、災害リスクにおける阿部で調査を行うことで、災害に対する脆弱性を探るとともに、地域の属性やその要因を検討することである。自主防災組織を作るなどの災害リスクに対する適応や住民の意識の変化に注目することで、表面化された地域の内在的な要因を見つけ出したい。

第2節 調査概要

—調査目的と方法—

本調査の目的は、阿部で実際に住民の話を聞く中で、阿部に短期間で自主防災組織が出来たのは阿部の持つコミュニティに関係があると考え、それがどのような属性や要因を持っているのか探るために、災害とコミュニティに関する先行研究である雲仙普賢岳噴火後の長崎島原市の調査(山下祐介 1998)を模範してアンケートを作成した。そのアンケートを単純集計した後、島原市の調査と同様の分析を行った。またそれらの分析を参考にし、特徴的なデータから阿部地域の属性について検討した。

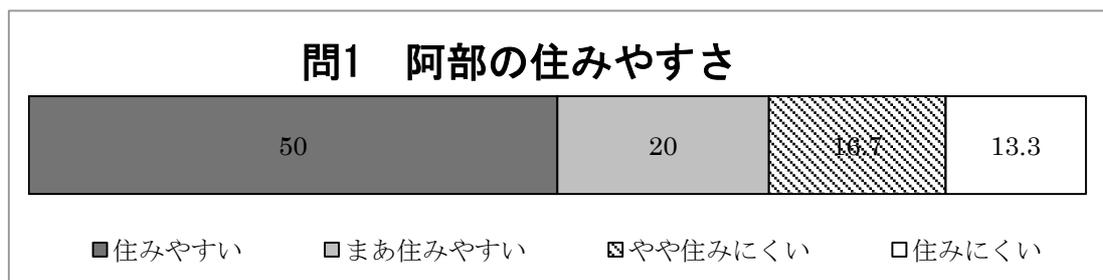
—調査内容—

年齢や性別問わず阿部住民60名に、阿部の防災と町おこしに関するアンケートを面接調査によって行った。

2. 調査結果

以下がアンケート結果を単純集計したものである。

問1 阿部の住みやすさ



阿部住民は阿部に対して半数が住みやすい,まあ住みやすいを入れると7割が住みやすいと考えている。

問1a 住みやすい理由・住みにくい理由

	住みやすい理由	住みにくい理由
No.1	人情が厚い 61.9%	交通の悪さ 66.7%
No.2	魚や野菜が新鮮でおいしい 35.7%	災害の不安がある 50%
No.3	自然環境に恵まれている 33.3%	町に活気が少ない 33.3%
No.4	安心感がある 31%	雇用の場が少ない 22.2%

問2 移住意志

阿部では,約6割の住民がずっと住んでいたいと回答しているが,約3割は住まざるおえないなど,否定的な気持ちを持っている。

問2a 永住意志理由

永住意志の理由としては,阿部への愛着や人間関係,親類関係の結びつきが強いからと回答している。住まざるをえない理由としては,昔からすんでいるからや,他に移るあてがないと回答している。移住意志の理由は,住みにくい理由と同様に,町の不便さと,災害の危険性を挙げている。

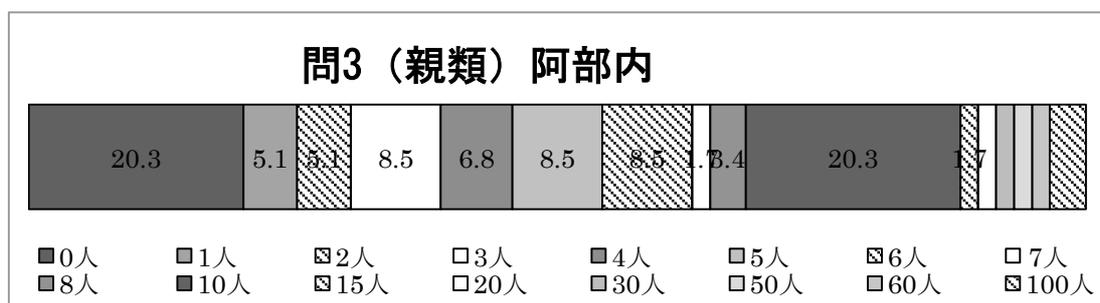
問2b 住まざるをえない理由

1番は昔からずっと住んでいるから,2番ほかに頼るあてがないからと回答している。

問2c 移住希望理由

1番は,人が暮らしに不便であるからであった。2番は災害の危険性にこれ以上耐えられないからと回答していることから,南海トラフでの津波被害予想の影響がうかがえる。

問3 (親類)阿部内



*** 凡例の100人はいっぱいやすごく多いという意味を含んだ回答を表す**

阿部内の親類数を見ると平均した数は,阿部内では7.2人と比較的多い。また親類を持たない人が2割近くいる一方で,10人以上の親類を持つ人も4割近くいることがわかる。阿部の人口を考えると親類の結びつきを持った人が阿部内には多くいることがわかる。阿部地域の年齢,居住歴,家族構成などのデータを見ても,阿部地域が強い土着性による長年の蓄積の上に人間関係が形成されていることがわかる。

問 3a 近所

2割の人が近所づきあいが無い,3割の人が10人以上の人と付き合いがあると回答している。住民によってばらつきのあるようだ。

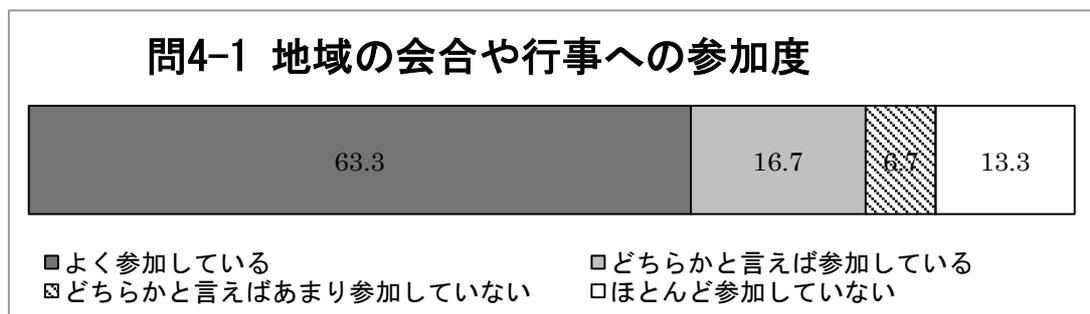
問 3b (職場・仕事)

半数の人が職場関係の人と付き合いが無い,全体を通して仕事職場関係の知り合いが少ない。

問 3c (友人知人)

64.4%が友人知人は阿部内にいないと回答している。阿部以外に住む友人や知人は少ない。

問 4-1 地域の会合や行事へ参加度

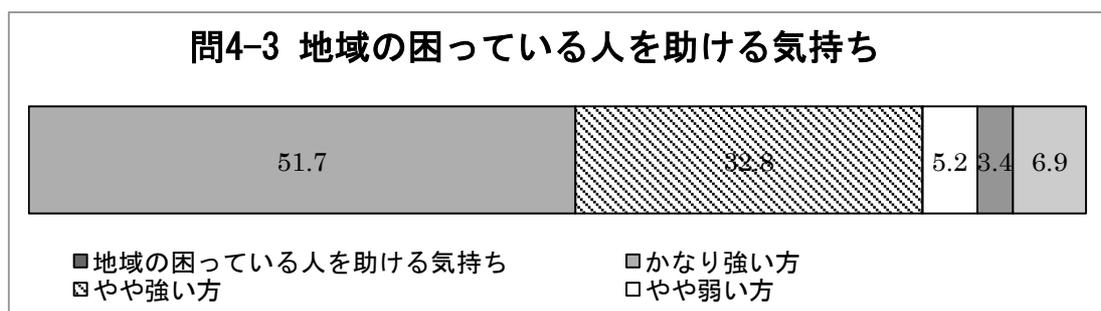


約6割の人がよく参加していると回答している。

問 4-2 地域のことを褒められたとき自分が褒められた気がするか？

約半分の人が「かなりそのような気になる」と回答している。阿部住民は強い帰属意識を持っているということがわかる。

問 4-3 地域の困っている人を助ける気持ち



約8割の人が強いに分布していることがわかる。体の調子や障害から、助ける余裕がないと回答する人がいたが、阿部地域内では年齢層が高いが、人間関係の強さが垣間見える。

問 5 広報誌をよく読むか

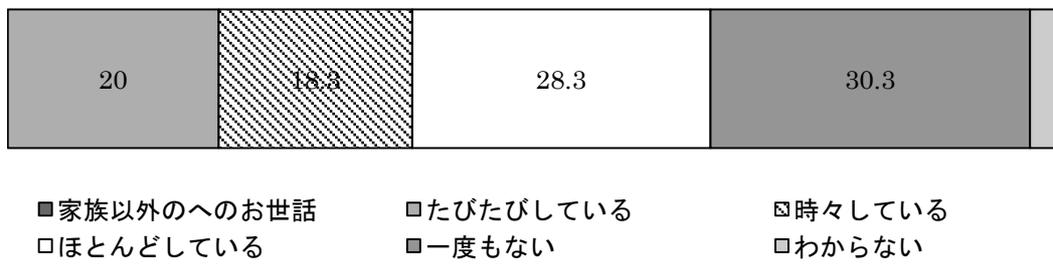
問5 広報誌をよく読むか



半数の人が広報誌を読んでいる。ネットによる情報の取り込みが、比較的少ない阿部地域では、広報誌が最も多く行政内容のアクセス方法としてとられていることが、問 11 の質問からもわかった。

問 6 家族の人以外のお世話

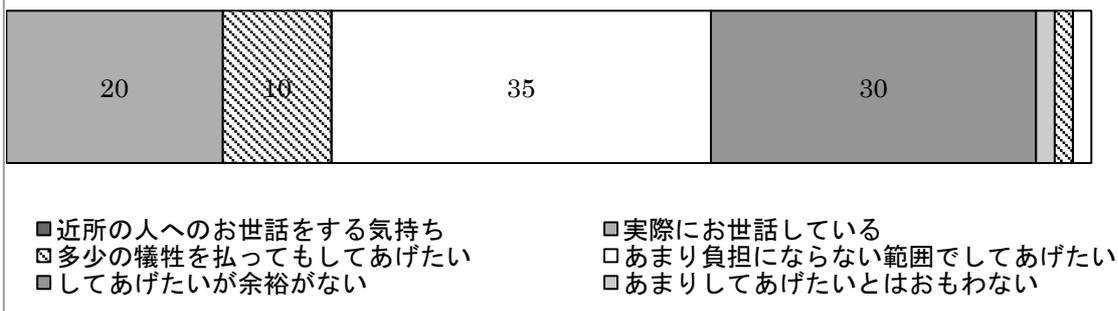
問6 家族以外の人へのお世話



6割近くがしたことがない、一度もないと回答している。

問 6a 近所の人へのお世話をする気持ち

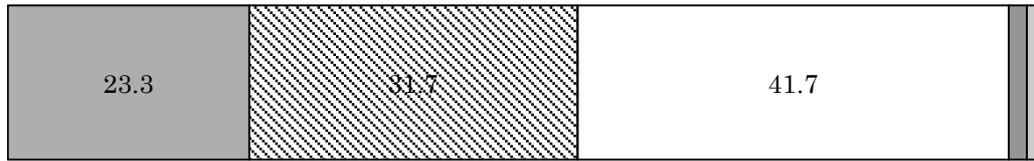
問6a 近所の人へのお世話をする気持ち



約 3割が実際にしたい気持ちがあるものの余裕がないと負担のない範囲でしてあげたいと回答している。

問 6b 大地震発生時の避難の世話をする気持ち

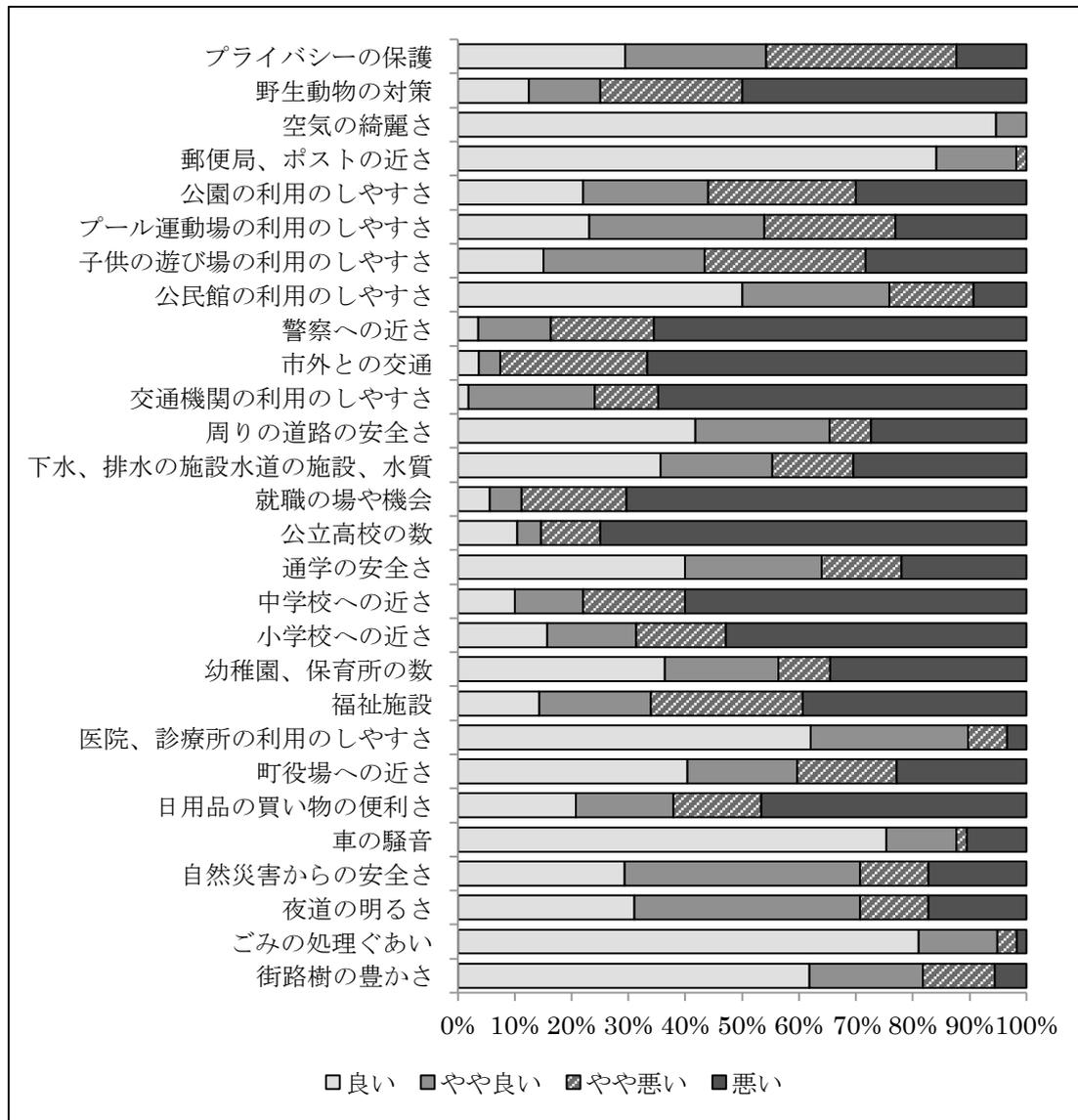
問6b 大地震発生時の避難のお世話をする



- 大地震発生時の避難のお世話をする気持ち
- ▨危険にならない範囲で世話してあげたい
- あまりしてあげたいとは思わない
- 積極的にお世わしてあげたい
- してあげたいが余裕はない
- わからない

4割以上がしてあげたいが余裕がないと回答している。

問7 生活環境について

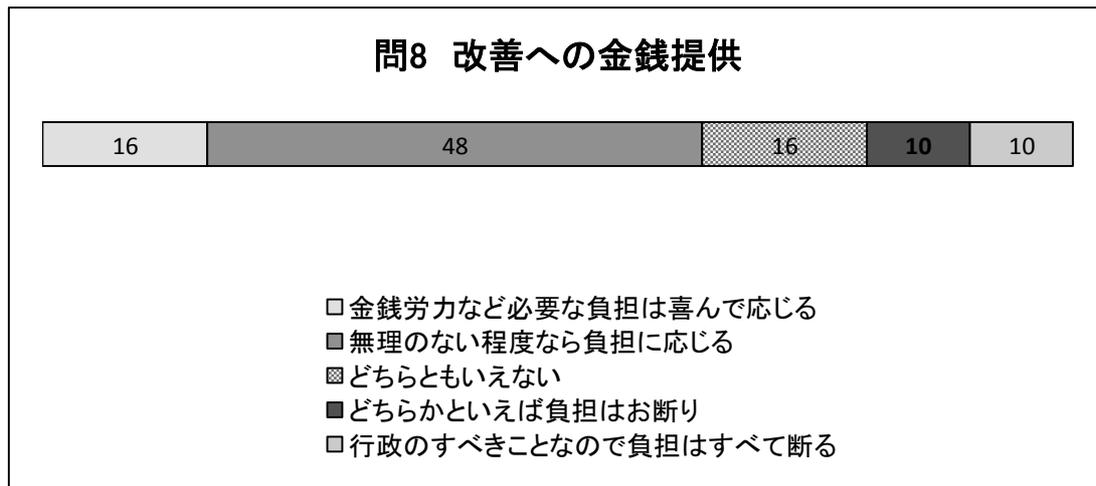


生活環境については不便などと思われる項目が多数あることがわかる。特に多いのは交通関係のもの、もしくは公共施設の利便性についてである。

問 8 問 7 の中で改善が必要だと思われる項目

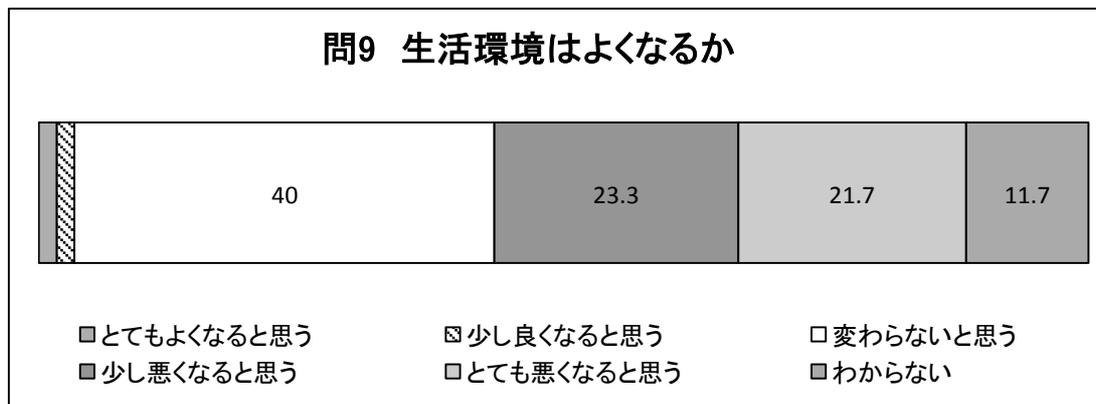
- 1 番が日用品の買い物の便利さ,交通機関の利用のしやすさ,自然災害からの安全さ,
- 2 番が日用品の買い物の便利さ,医院の利用のしやすさ,交通機関の利用のしやすさ,
- 3 番が交通機関の利用のしやすさ,自然災害からの安全さ,日用品の買い物の便利さという結果になった.

問 8 a それらの改善のために多少の労力や金銭なら提供しようと思うか



半数以上が負担に応じてよいと考えている。

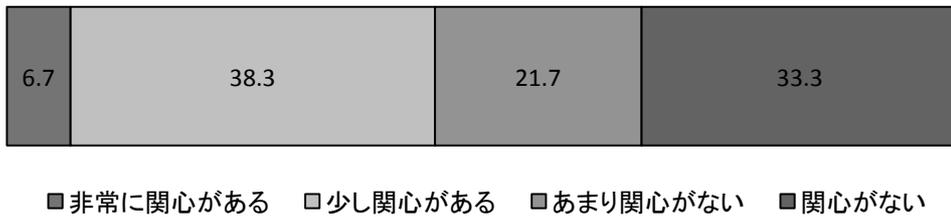
問 9 生活環境はこれから先よくなっていくと思うか



4割が変わらないと思っていて,4割以上が悪くなると思っている。

問 10 美波町政への関心

問10 美波町政への関心について



あまり関心がない人と関心がない人が半数以上を占めている。非常に関心がある人は1割にも満たずかなり少ない。

問11 行政内容へのアクセス方法

1番が広報紙,2番が町役場からの「お知らせ」,3番が近所の人という結果になった。

問12 美波町政への町民意見の反映

3割程度がほとんど反映されていないと回答している。次いで多いのはわからないという回答やどちらでもないという回答であった。町民意見はあまり反映されていないことがわかる。

問13 市政内容についての広報

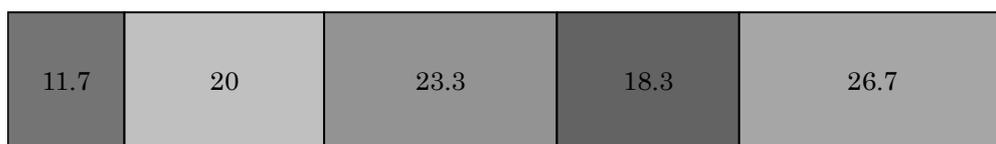
問13 市政内容についての広報



わからないと回答した人が4割程度,次いで多いのがまあまあだ,まったく足りないという回答であった。市政内容について住民にあまり知らされていないことがわかる。

問14 美波町政への満足度

問14 美波町政への満足度



- 満足している
- やや不満である
- わからない
- どちらかといえば満足している
- 不満である

「満足している」という肯定的評価をしている人は 3 割程度で、「不満である」という否定的評価をしている人は 4 割程度である。

問 14a 町政不満内容

不満の内容としては、合併に対する不満、道路や港などの整備や交通に関する不満、何もしてくれなかったり意見が反映されていないことに対する不満が多数であった。

問 15 町政への不満の反映方法

問15 町政への不満の反映方法



- 近所の人たちに相談
- 自分で市役所などに直接交渉
- 町内会長や班長に相談
- 市議員など有力者

よほどのことがない限り黙っていると回答した人が全体の 4 割程度、次いで多いのがわからないという回答になった。近所の人、町内会長や班長に相談に相談という回答もあったが、直接交渉したりする人は少なく、行政に対して不満を抱きつつもあまり不満を反映できていないことがわかる。町政に対して消極的な姿勢が目立つ。

問 16 町民のためによくやっているか

町長、町議会議員、町役場職員、町内会長、地域リーダーのそれぞれに対して、どちらでもないと回答した人が多数を占めている。これらの 5 つの中で比較すると地域リーダーが最も良い評価となっている。自主防災組織を形成し積極的に活動している瀬戸さんや陰谷さんを高く評価しているのだろう。

問 17 移動経験

約半数の人が阿部に生まれてからずっと住んでいるという結果になった。生まれてからずっと住んでいる人が多いため、愛着があり永住希望が強い人が多く、地域の親密性も強いのかもかもしれない。

問 17a 移住経験(追加質問)

問 17 で「阿部出身だが一時よそに住んだ経験がある」, 「よそで生まれて移ってきた」という回答をした人の以前の居住地は, 4 割程度が関西(大阪)方面, 3 割程度が美波町と回答している。意外にも, 以前関西方面に居住していた人が多く, U ターンしている人などもいるのではないだろうか。

問 18 美波町の望ましい将来像

美波町の将来の望ましい性格について, 1 番は農業・漁業・養殖業などを発展させる, 2 番は高齢者が生きがいを持って暮らせる町にする, 3 番は防災対策の先進地域となるという結果になった。阿部の特性を生かすことが望ましいと考えられているようだ。

問 19 リーダーとして最も期待する人

全体的に県会議員や町会議員に期待する人は少なく, 町内会やボランティア組織に期待する傾向が強い。阿部には, 町政に関心がない人や不満がある人が多いため, 議員にもあまり期待せず, やはり積極的に活動している身近な存在である町内会やボランティア組織に期待を寄せているのだろう。

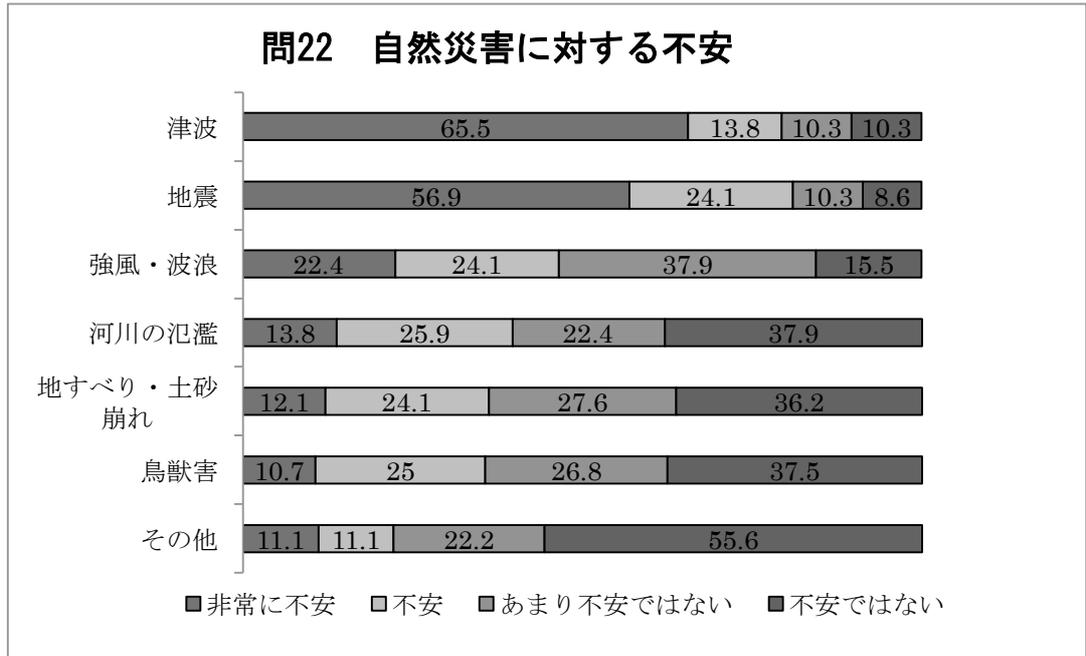
問 20 必要であると思う施設

最も必要であると考えられているのは高台までの避難路の建設・整備である。そのほかには災害弱者への支援や避難場所の設置・整備や自主防災組織や消防団の活性化やヘリポートの設置などが必要だと考えられている。そのためには住民同士の協力や行政とのつながりも重要になってくると考えられる。

問 21 津波被害が予想される県南沿岸部に対する気持ち

4 割程度の人が自宅や職場が津波浸水地域に指定されているのでとても心配だと回答している。新想定で 20m 級の津波が来ることが予想されているので不安を感じる人も多いだろう。次いで多いのが災害対策は十分とはいえないが自分の住んでいるところは大丈夫だと思っているという意見である。阿部は過去に津波経験がないため, 今回も大丈夫だろうと考えている人もいるのかもしれないが, 避難路や標識などの災害対策が完璧だとはいえないという危機意識は持っているのだろう。

問 22 自然災害に対する不安



非常に不安の割合が最も高いのが 65.5%の津波、次いで 56.9%の地震であった。やはり、将来起こることが予想される南海地震や巨大地震による津波に対する不安が強いようだ。

問 23 自然災害への対策が環境に与える影響についての考え方

(甲)自然災害から人間の命や財産や社会を守るために、生態系や景観に悪影響を与えてでも、堤防建設や津波タワー設置などの対策をおこない、自然を管理する必要がある。

(乙)自然災害から人間の命や財産や社会を守ることは大事であるが、生態系や景観にも配慮する必要があるし、そもそも人間が自然を完全に管理することなど出来ない。

これらの設問にたいして、乙に近いと回答した人が3割程度、わからないと回答した人が2割程度、次いで多かったのがやや乙に近いという回答であった。乙に近いという回答が半数を占めている。

問 24 地震津波災害の危険性についてあなたの気持ち

(甲)被災の危機に直面している人たちのことを無視する訳ではないが、正直なところ、自分のことで手一杯で、他人のことまで考える余裕はない。

(乙)今回の災害は美波町全体の問題であり、町民全体の問題であり、町民すべてが一丸となってこの事態にあたらなければならない。そのためには、ある程度自分の利害や要求をおさえるのが当然だ。

これらの設問にたいして、乙に近いと回答した人が3割程度、次いで多いのがやや乙に近いという回答であった。乙に近いと回答した人が半数以上を占めており、地域住民の公助だけでなく自分だけでなく、相手も思いやるという共助も大切であるという考えがわかる。

問 25 地震被害発表後の自身の変化について

ないと回答した人が8割程度であった。危険性公表後、ほとんどの人が住所が変わっていない。変わった人は阿部内での引っ越しであり、危険性公表後職業が変わった人はいない。

住所が変わっていないのは、多くの人が昔からずっと住んでいて愛着があるため「ずっと住んでいたい・住まざるを得ない」と考えているからだろう。職業が変わっていないのは、もともと無職や専業主婦・主

夫の人が多いのと,就職の場や機会が少ないため,別の仕事を始めるのが困難だからではないだろうか.

問 25(A) 行政の姿勢・国の見方・町の産業や経済・景気や雰囲気が大きく変わったこと

ないと答えた人が7割程度を占めている.あると答えた人の中では,自主防災組織により避難路が整備されたり,避難訓練などの活動をするようになったという回答があった.

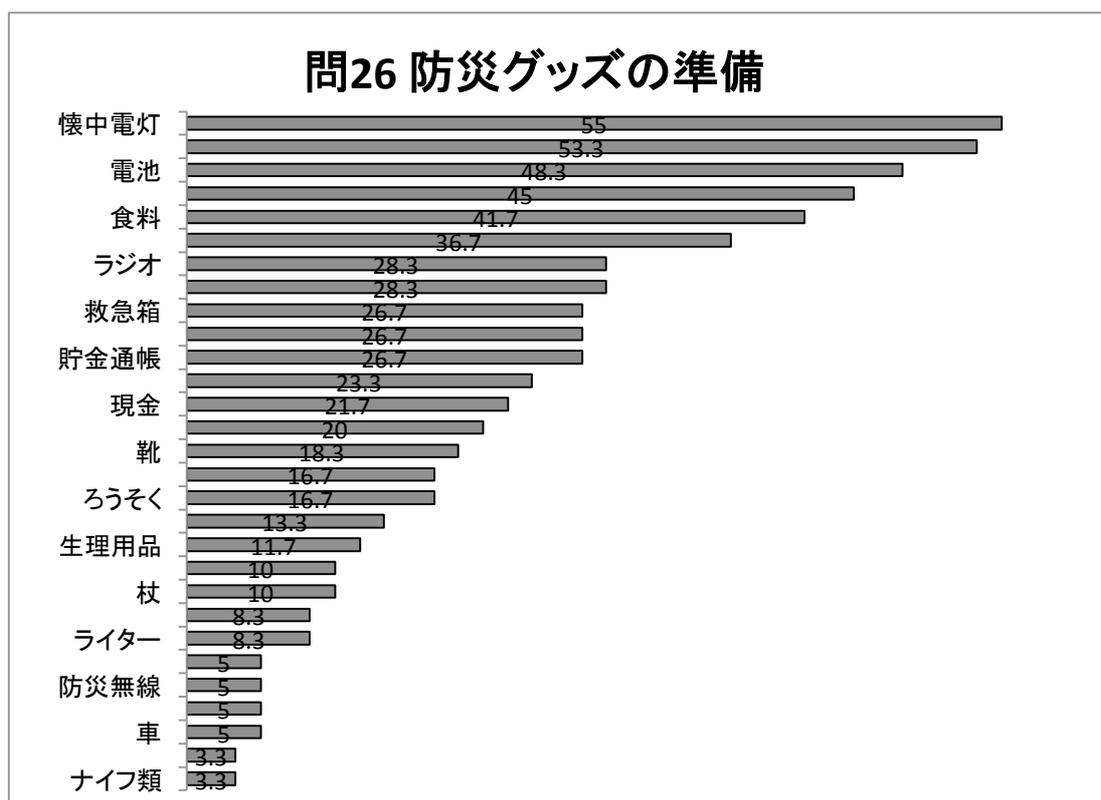
問 25(B) 上記以外で変わったこと

その他の変化として,阿部住民の防災意識が高まったという意見が多かった.新想定発表後,親密性が強い地域で自主防災組織が中心となり活動することで,住民にも防災意識が広まったのではないだろうか.

問 26 防災袋や防災グッズの準備をしているか

約8割が防災袋や防災グッズを準備していると回答した.このことから阿部住民の防災意識の高さがかがえる.

問 26a 実際に準備している防災グッズ



割合が高いのが懐中電灯,衣類,電池,タオル,食料,飲料,ラジオ,携帯電話,薬,救急箱,貯金通帳,ヘルメット,現金,ホトケサマであった.

問 27 家の中でしている地震対策や津波対策について

防災グッズを枕元に置いている人は多数いたが,それ以外はほとんど対策していない.

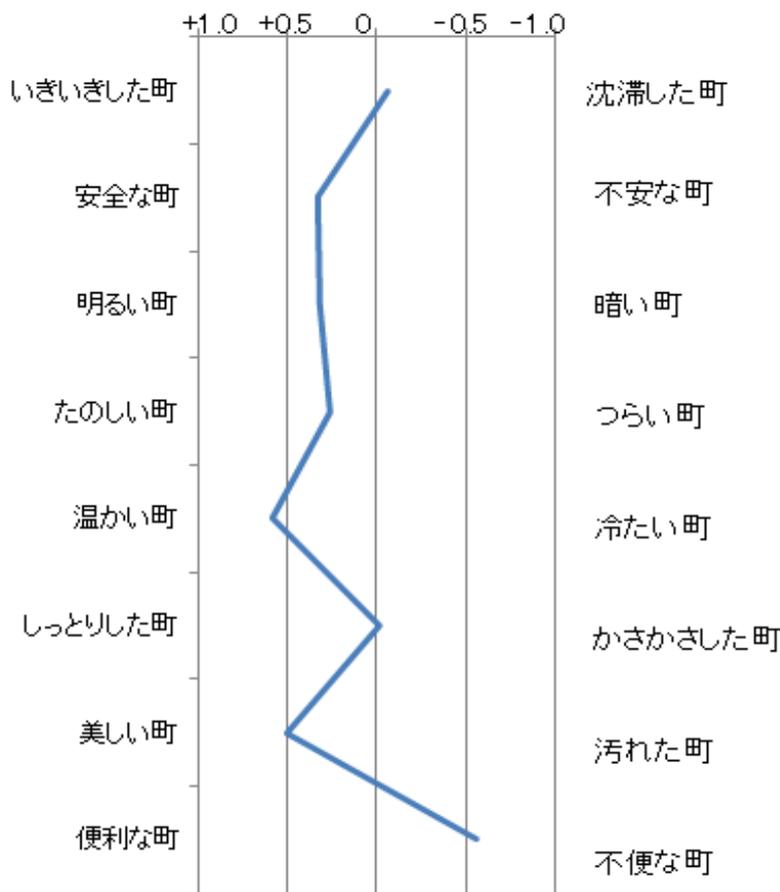
阿部では避難路の作成や避難訓練など津波対策がしっかり取られており,個人でも避難のための準備を

している人も多いにも関わらず、地震対策がほとんど行われていないのが特徴的である。これからは個人で地震対策を進めていくことも必要であると考えられる。

問 28 巨大地震発生時に最も心配なこと

倒壊した家が邪魔になり津波からの避難に手間取るという回答が最も多くであった。ついで、避難路を使うことができず避難が素早く行えないという意見が多かった。阿部ではさまざまな津波対策が行われているが、古い家も多く、避難路も簡易的であるため、地震により家屋や避難路の倒壊が避難の妨げになり、避難が思うようにできないことが心配なのだろう。

問 29 阿部についてのイメージ



このグラフは阿部に対する住民のイメージを表したものである。「安全な町」「明るい町」「たのしい町」「温かい町」「美しい町」など、全体的に肯定的な評価が高い。しかし、否定的な面では「不便な」「沈滞した」という評価もある。特に、「不便な」という評価は大きい。

問 30 “阿部らしさについて”



上のグラフは阿部住民の住民気質について聞いたものをスコア化したものである。阿部住民は阿部らしさについて全体的に肯定的にとらえているようだ。特にプラスイメージとしては「働き者」「親切」「人がいい」という意見が多く阿部の人々の人情の厚さがわかる。一方でマイナスイメージに近いものとしては「消極的」「甘えが強い」「保守的」などがある。以上のことから阿部は伝統的で保守的性格が強いということがわかる。

問 31 10年後の阿部がどうなるかを定める上で影響力のある人

瀬戸さん、陰谷さん、若い人、みんなという意見が多かった。積極的に活動している瀬戸さん、陰谷さんの名前があがっていることがわかる。10年後を決めるということで若い人やみんなと回答した。人も多いようである。

問 32 阿部の防災や町づくりについての考え

8割以上が無回答だった。他には災害に関しては、無事避難できたとしても備蓄品はあるのか、備蓄品はどのように保管するのかといった備蓄品の問題や、災害弱者の対策などの意見があり、若者が少ない阿部の今後に対する不安などについての意見もあった。

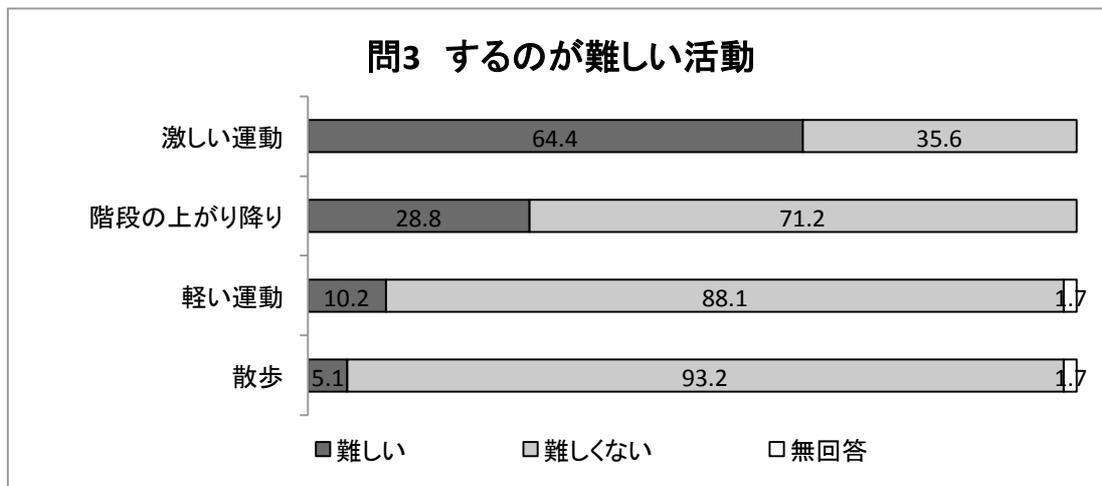
問 1 性別

性別	人数
男性	21 人
女性	39 人

問 2 年齢

世代	人数
10代	1 人
20代	0 人
30代	3 人
40代	2 人
50代	7 人
60代	10 人
70代	17 人
80代	17 人
90代	3 人

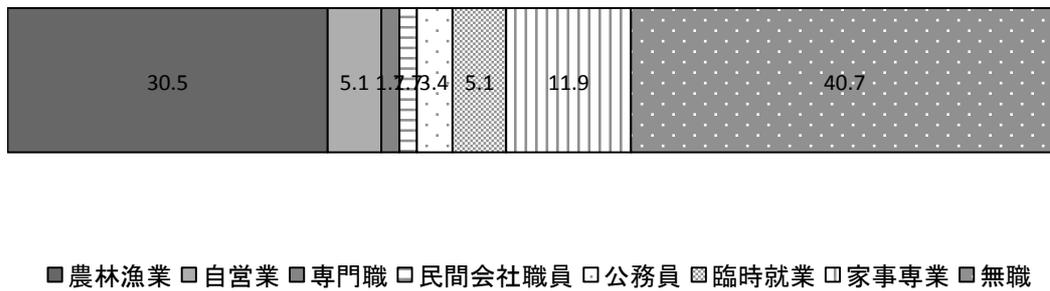
問 3 するのが難しい活動



6 割以上の人激しい運動が難しいと回答している.高齢者が多いためだと考えられる.

問 4 職業

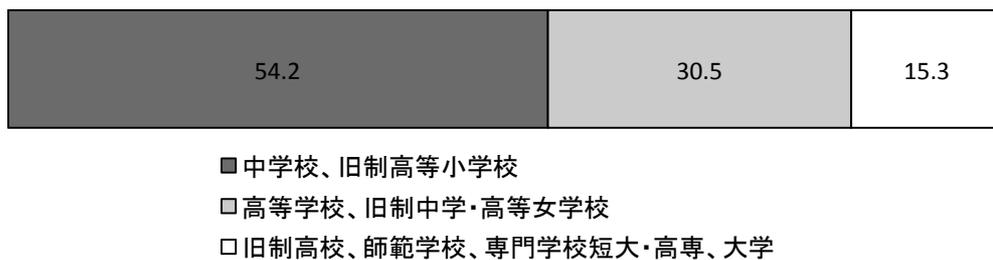
問4 職業



3割が農林漁業,4割が無職であることがわかる.阿部では漁業が盛んで漁師さんや海女さんが多く,また高齢化が進んでいるのですでに退職しているなどで仕事をしていない高齢者も多いのだろう.

問5 最終学歴

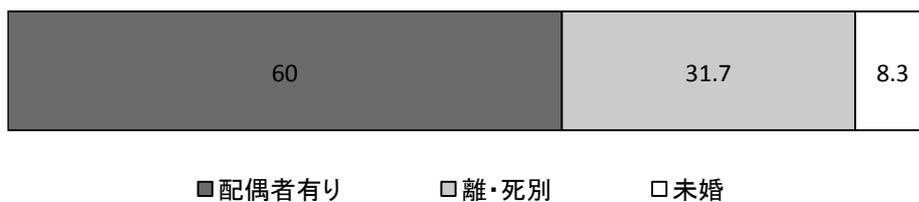
問5 最終学歴



半数以上が最終学歴は中学校である.今と違い昔は大学に行く人が少なかったので高齢者の多い阿部ではこのような結果になったのだろう.また高校や大学に行かず漁師や海女などになる人も多いと考えられる.

問6 配偶関係

問6 配偶関係

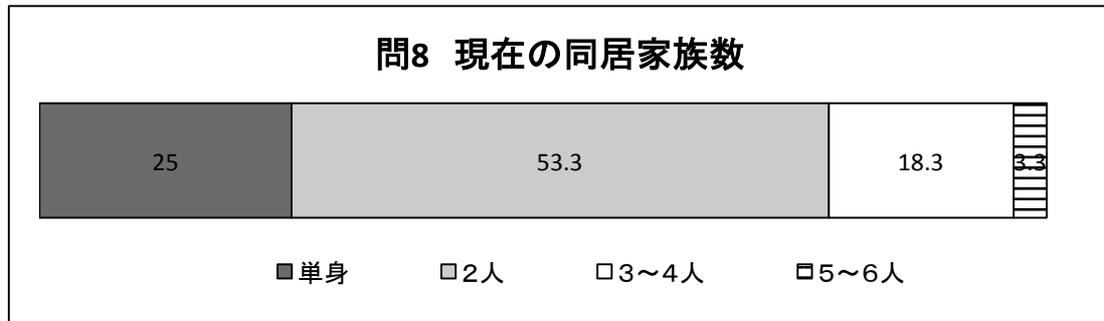


6割が配偶者あり,約3割が離・死別と回答している.阿部は若者少ないので,結婚している人も多く配偶者と死別している人もいるのだろう.

問7 3世代同居しているか

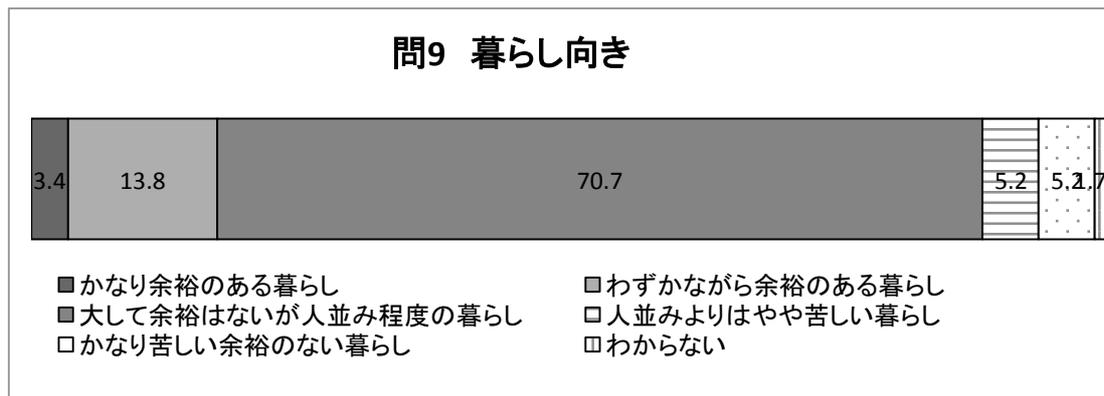
単身と二人暮らしが八割程度を占めていて,三世代住居の割合は 1.7%とかなり低い.小学校などの教育機関などが無いので子供がいる家族が住むには不便なのだろう.

問8 現在の同居家族数



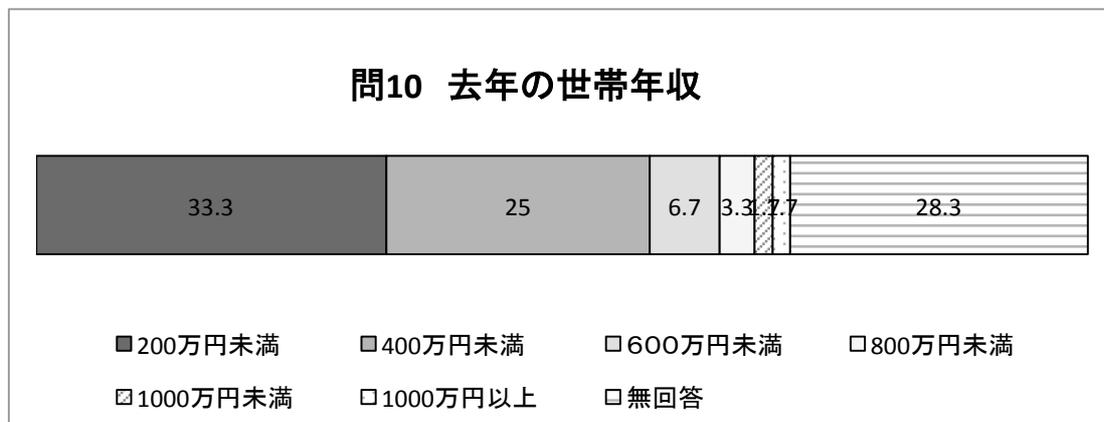
約半数が二人暮らしで,2.5 割が単身世帯である.夫婦や親子や兄弟だけで暮らしているのが多いのだろう.また独居老人が多いことが予想される.

問9 暮らし向き



約7割が人並程度の暮らしと回答していて,阿部には階層的に似ている人が多いということがわかる.

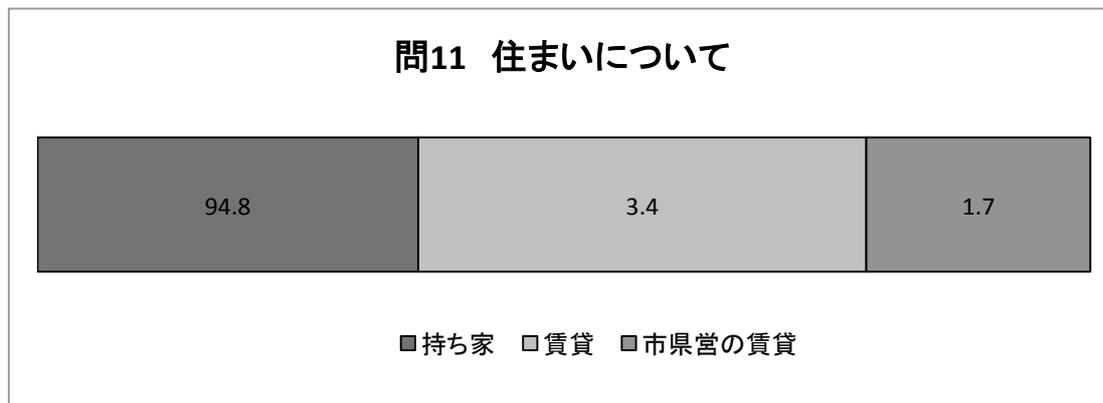
問10 去年の年収



半数以上が去年の世帯収入が 400 万円未満であり,とびぬけて高収入の人が多くないので,このことから

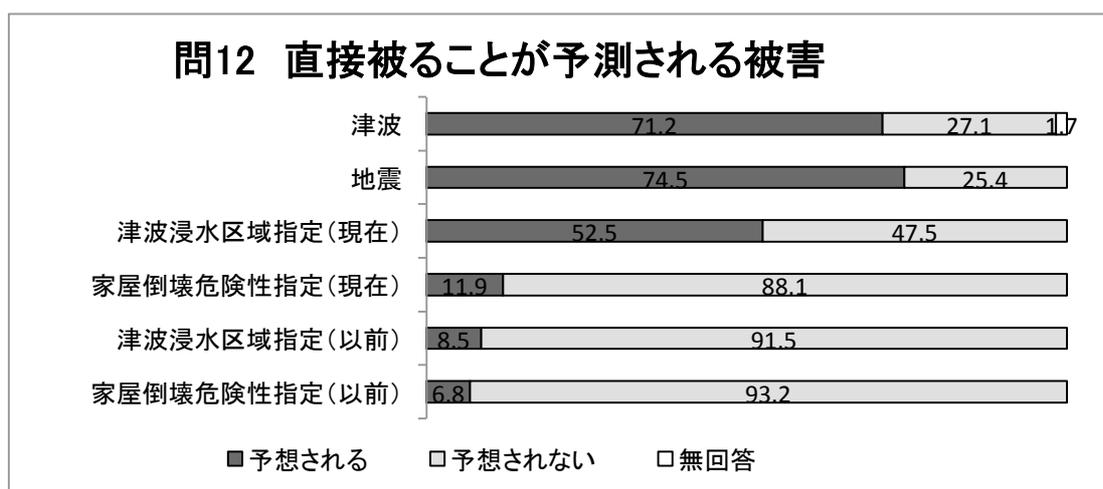
も階層的に似ている人が多く,同じような暮らし向きであるということがわかる.

問 11 住まい



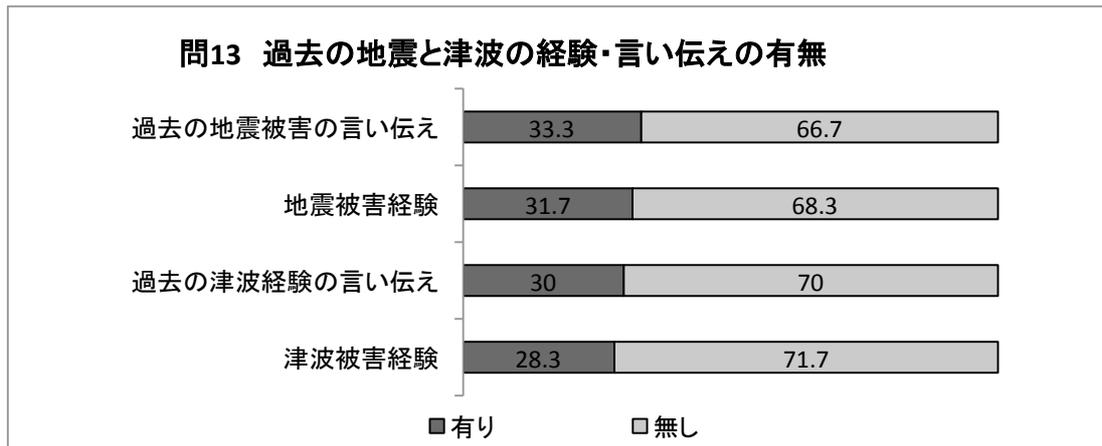
賃貸住宅などで暮らしている人はほとんどおらず,9 割以上が持ち家である.地域に根付いた生活が垣間見える.

問 12 直接こうむることが予想される被害



約 7 割の人が地震と津波による被害を受けることを予測している.特徴的なのは津波浸水区域指定で,危険性公表以前と現在で大きな差が出ていることである.

問 13 過去の地震・津波の経験や言い伝えの有無



約7割が地震・津波の経験がなく,言い伝えも知らないと回答した.沿岸地域であるにも関わらず,穴喰などと違い災害文化がないのが特徴的である.

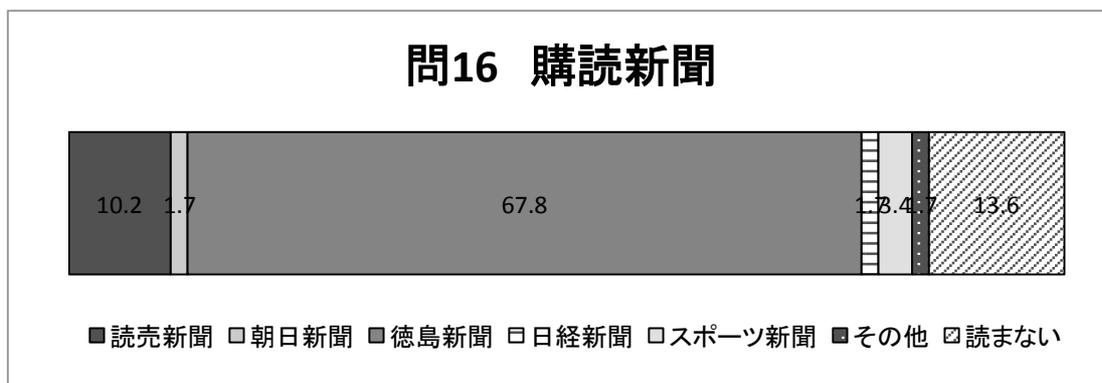
問 14 危険性公表後住所が変わったか

阿部では,危険性公表後ほとんどの人が住所が変わっていない.変わった人は阿部内での引っ越しであり,住所が変わっていないのは,多くの人が昔からずっと住んでいて愛着があるため「ずっと住んでいたい・住まざるを得ない」と考えているからだろう.

問 15 危険性公表後職業が変わったか

危険性公表後職業が変わった人はいない.職業が変わっていないのは,もともと無職や専業主婦・主夫の人が多く,就職の場や機会が少ないため,別の仕事を始めるのが困難だからだろう.

問 16 購読新聞



約7割が徳島新聞を購読している.朝日新聞や日経新聞を購読している人は特に少ない.

問 17 使用する予定の避難路

全体的にばらつきがあるが1番多かったのは西寺路,次に東寺路と八軒屋路が多いということがわかった.

3. 分析

第一節 住みやすさの要因

(問 1)阿部の住みやすさに対する質問では約七割の住民が阿部に住みやすいと回答している。災害リスクや不便な要素を多数もつと考えられているにも関わらず、住みやすいと考える住民が多数いることは興味深い事実である。住みやすい理由で一番に上がるのは「人情が厚い」である。島原市での調査でも、災害後もある程度住みやすさを保っており、その理由として人間関係や情緒的要因をあげていた。また住民の属性では阿部と島原での似た部分があることが分かった。

—住民の属性—

居住歴と親類数

住民の属性について分析すると、(問 17)移動経験に関するデータから、約 7 割の住民が阿部出身者であることがわかる。ほかの阿部以外の出身の住民も、その出身の内訳を見てみると徳島県内の出身者が 54.7%、関西方面の出身者が 35.5%と、全国的に移動して住み移っている人は少なく、移動圏は狭く、住民は土着的な性質を持っていることがわかる。次に親類数に関して平均した数は、阿部内では 7.2 人と比較的多い。またその中で、32.2%が 10 人以上の親類数を持っているなど、多くの阿部住民が親類関係によって結びついていることがわかる。これらのことは島原でも似た傾向にあった。阿部や島原は生まれた時からなど長期間住んでいる人が大半であり、それも親類関係でつながっている住民がたくさんいることがわかる。つまり人間関係は長い時間を経て蓄積された、地縁的、血縁的なつながりも持っていることがわかる。

しかし(問 3)阿部住民に親しい付き合いをする友人の数を質問すると、0 人と回答した住民が 64.4%になった。島原では、ある程度知人や友人数が多く、隣人の付き合いが濃いという性質を持っていた。このような阿部の友人数の結果は、人間関係が濃いと判断したことの矛盾にも思える。しかしながらこのような友人数がすくないことと、住みにくさとの関係しているわけではなく、データからも相関関係は見られなかった。このことから考えられるのは、阿部住民が住みやすいと感じる人情の厚さなどの人間関係は、親しい付き合いの住民間から生まれるものだけではないということである。

地域の会合や行事へ参加度

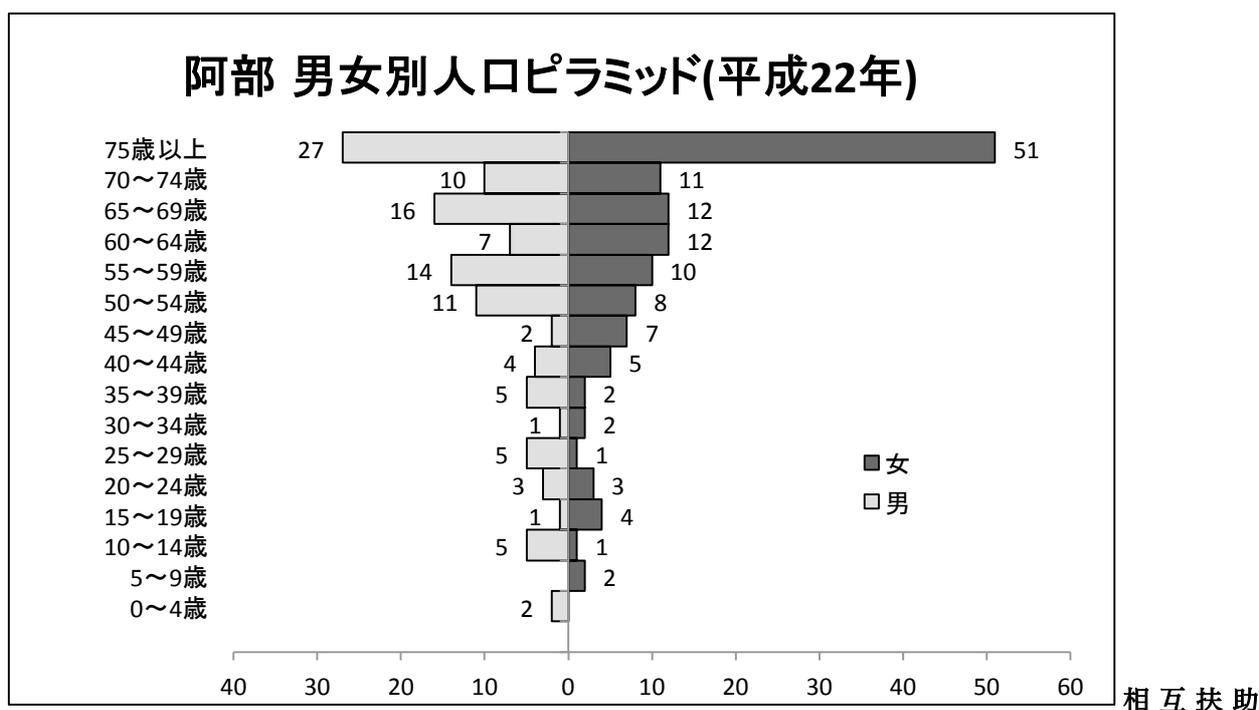
まず阿部住民はどのような場面で地域の住民との交流を持っているか考えた。地域の会合や行事への参加度のデータを見ると 66.3%がよく参加している、16.7%がどちらかといえばよく参加していると回答している。大半の阿部住民が地域の会合や行事へ参加していることがわかる。まず一つの住民同士の接点があるといえる。島原の分析ではこのことを帰属意識と関連させている。阿部のことを褒められたら、自分も褒められた気になるかの質問では 75%がその気になると答えたことから阿部住民も阿部への帰属意識を強く持っていると考えられる。島原の調査ではこれらの帰属意識を、コミュニティを結成する一つの要因と考えた。アンケート結果から住民の意識を、1)感情的要素 2)統合的要素 3)参加意欲的要素に分け、さらにその要素を細かく分けて分析している。住民の意識的調査では、阿部でも似た傾向の結果が出た。阿部では地域内の友人が少なかったことを踏まえて、次に住民の生活環境に関するデータから、阿部でのコミュニティを結成する要因を検討する。

—生活環境について—

同質的な生活環境

阿部住民の生活状態を検討するために、人口ピラミッド、住居環境、収入、暮らし向きのデータを参考に

した。まず下記の人口ミラミッドであるが阿部では少子高齢化社会が顕著にみられるような人口構成であることがわかる。経済状況も年金暮らしとしている住民が大半であり、世帯収入 200 万円未満が 46.5%、400 万円未満の割合が 34.9%と大半を占め、比較的世帯収入は低いほうである。しかしながら住民の暮らし向きに関する質問では、70.7%が人並程度の暮らし向きであると回答している。つまり住民の階層意識は多少低い部分に共通した感覚を持っていることがわかる。また住居環境では、94.8%が持ち家と回答したのだが、約 8 割程度が単身もしくは二人暮らしであった。三世代住居に関してはわずか 1.7%の解答だけであり、家族の縮小化がきわめて進んでいることがわかる。これらのことから、阿部の住民の多くは、年金などで暮らしている単身もしくは二人暮らしの高齢者であるということがいえる。そういった同質性を持った生活状態が、地域の環境に何らかの影響を与えているのではないか。一般的な地域では高齢者は支えてもらう側である被支援者になってしまいがちである。しかし阿部では、高齢者が生活状态的にスタンダードな状態になっているため、高齢者が単なる被支援者としては認識されてはいない。阿部住民に対する困っている人を助ける気持ちに関するグラフを見ると、約 8 割の人が地域の困っている住民を助けたいと回答している。つまり阿部では、大半の人が高齢者であるにも関わらず、支援者としての意識を持っているのである。このような阿部での生活が、一方向的な支援ではなく相互扶助的な支援関係をつくりあげる要因となっているのではないか。



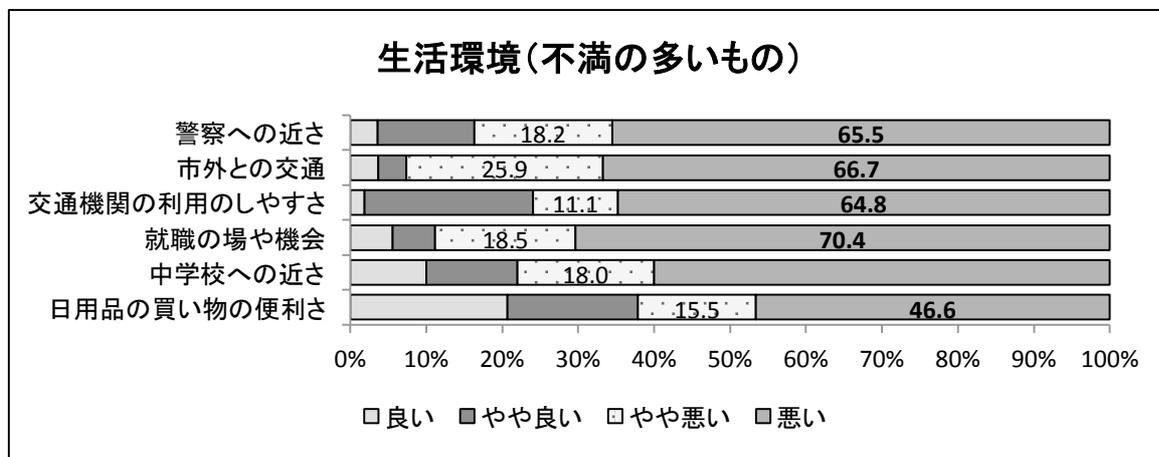
的な関係

阿部の生活環境をもう少し深くみると、実際に阿部でフィールドワークをして分かったが、阿部では家の鍵がかかっていない家が多く、また特に境をせずに隣接した家が多くある。住民同士の出入りが多いことから、単身での住まいが多いにも関わらず孤立的な生活に陥っていないように見える。中根(1981)は、日本では、自然な近隣関係の結びつきが生まれがたいと指摘している。その原因として、日本では伝統的に、家族などの集団や村などの集団は境界に明確な排他性をもっていることを挙げていて、ウチとソトの区別が顕著であるとする。しかしながら阿部では、要因は単純集計から考えると、家族の縮小化や先に述べたような住民の属性などが考えられるが家族間での境が薄くなっている。そのことが相互扶助的な環境をつくりやすくしているとも考えられるであろう。このことをもう一方の見方をすると、単純集計から

も読み取れるが、この境が薄くなっていったことはプライバシーにも影響が出ている。そのような相互扶助的な関係の中には反半ば強制された親密さというものがあるのではないかと清水(1987)は述べる。村八分という言葉があるが、地域での親しさについて「その親しさは、自然発生的なものではなく、共同体から規定され強制されたものにほかならない。表面上、いかに自然発生的に見えようとも、それを行わなかった時には、私的関係にはありえないような強度の非難が村人の間に喚起されるのであって、強制されたしきの性格が根底にあることが露になる」と述べられる。このような環境では、気を使った行動に制限されてしまいそうである。しかしながら阿部ではこのような環境が住みやすさの要因ともなっていることは事実だ。それはこのような環境の前提として、長年の積み重ねによる人間関係など、島原の分析からも述べられるようなコミュニティを結成する要因が地域に備わっており、住民は自然体のまま暮らすことができているからである。

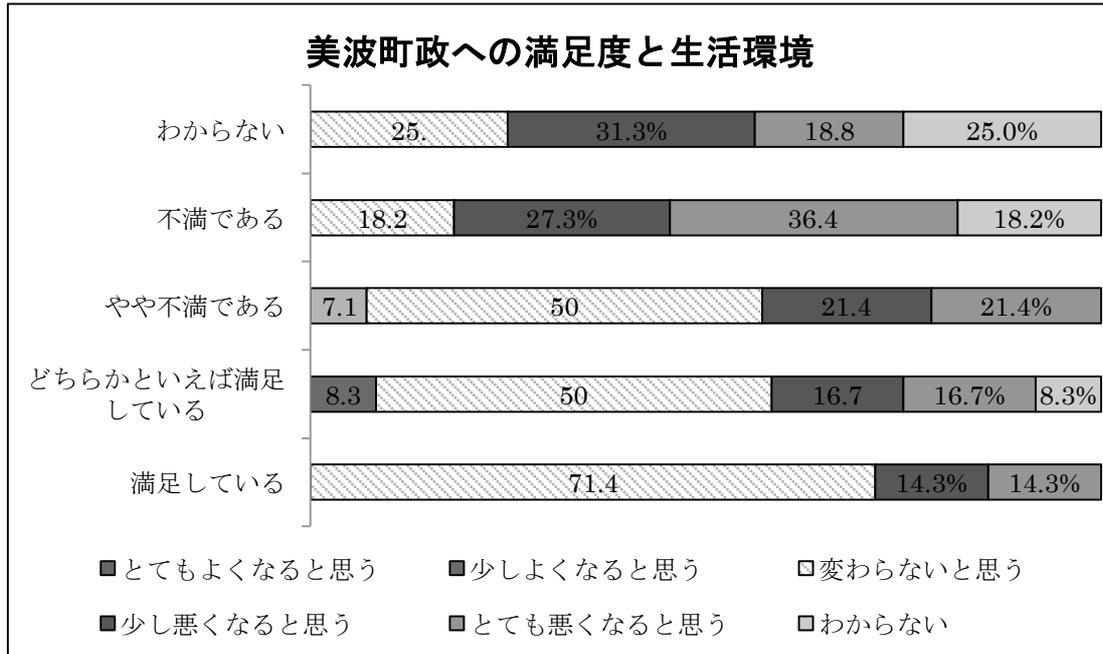
今後の課題

(問 29)阿部のイメージや生活環境のデータからもわかるように、住民は阿部での生活を住みやすいとしながらも、不便であると考えている人が多いようである。下記に生活環境のデータの中で悪いと回答が集めた項目をあげた。さらに改善してほしい項目では、市街との交通と日用品の買い物の便利さに回答が集まった。交通の便をみると阿部は陸の孤島と呼ばれるように、市街地からは山を挟んで離れている。そのために日用品や食材にしても簡単に手に入れるものではなく、阿部住民の中には、たとえば車を運転していない人、もしくは障害を持っている人など、多くの人が自分だけで生活することに大変な苦勞を背負うはずである。相互扶助的な環境が成り立っている阿部でも、町の不便さについては解消されていない点が多く存在するということがわかる。

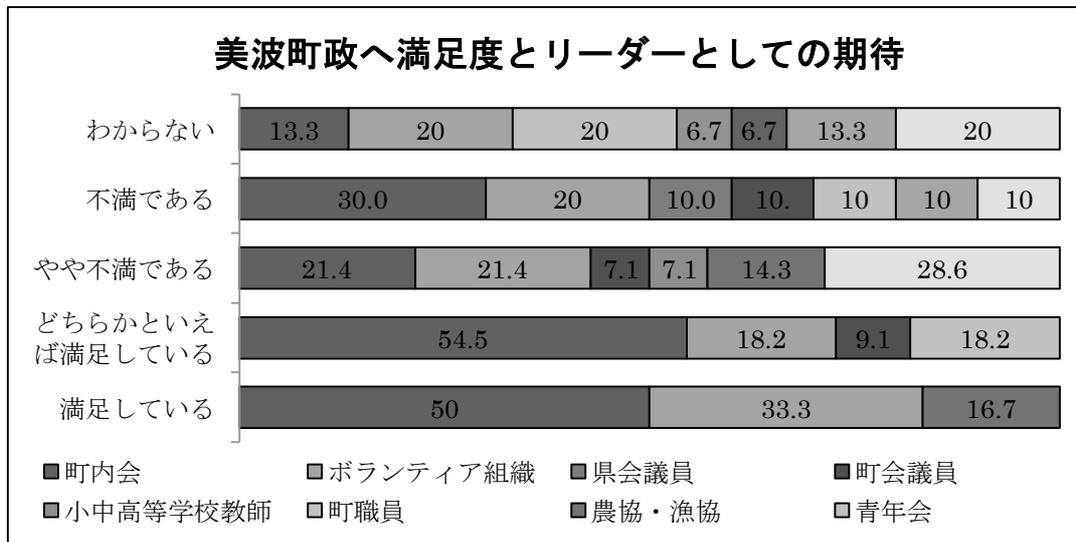


—共助と公助をどうつなげるか—

アンケート結果からわかるように、美波町政への満足度に関して否定的評価が高かった。(問 12)町政への不満の反映方法に関しては、自分で直接交渉する人は非常に少なく、多くの人が黙っているやわからないと回答していた。この結果から、住民は町政に対して消極的な姿勢がうかがえる。



上のグラフは美波町政への満足度と生活環境に関するグラフである。グラフを見ると、これから生活環境がよくなると思っている人はほとんどいないことがわかる。そして注目すべき点は、町政への不満が高い人ほど、これからの生活環境が悪くなると思っている人が多いということである。



上のグラフは美波町政への満足度とリーダーとしての期待に関するグラフである。阿部地域住民の期待は町政以上に町内会やボランティア組織などの地域リーダーに集まっている事がわかる。これらの結果から、阿部では7割程度の人々が町政に対して消極的であり、不満があっても口にだしておらず、また高不満層は、集落の将来に関しても悲観的である。他方、満足度が高い層は、地域リーダーや町内会などを今後の集落運営の担い手として期待していることがわかる。阿部では地域リーダーの役割が高まっているが、町政への満足度と生活環境のグラフからもわかるように、これからの生活環境がよくなるためには、町政との関係が重要であるのである。本調査での分析から今後の阿部として、1)阿部地域の親密性を生かして

地域内での話し合いの場を設けること 2)信頼を寄せる地域リーダーを通して町政とのかかわ組織りを深めていくということが提案できる。阿部の自主防災組織のような地域住民による組織はより実効的であり、またそれは行政と地域住民を媒介することが望ましいが、そのような組織の基盤は、必ずしも町内会に限らず、地域独自のさまざまな組織の基盤となるものを、行政が支援するという体制が出来ればよいであろう。

4. 考察

阿部で注目するのは、公的な支援を受けるだけでなく、住民の中から独自の防災の体制をつくっていったことである。阿部のコミュニティを結成する要因として、島原調査で述べられたような住民の意識からの分析と、生活環境からの分析によって、地域の内在的な要素について検討した。また阿部には地域リーダーとなる人物が存在しており、住民の信頼を集めていることがわかった。これらのことが、阿部でスムーズな自主防災組織を作り上げた要因でもある。地域には、これら自主防災組織などの基盤となりうるものが存在する。阿部は津波という災害リスクに直面した時、自主防災として結成されたが、それらのものは行政に組織化されたものではなくても、より実効的に地域の原動力となる。また、課題としてあがったように行政とのつながりを持つような体制づくりも必要である。阿部では、現時点では住民と町政との繋がりは薄いようではあるが、今後の課題を解消できるような、地域のもつコミュニティと地域リーダーの存在が阿部にはあるのである。

参考文献

- 「災害都市の研究：島原市と普賢岳」 鈴木広 九州大学出版会 (1998)
- 「災害の人類学—カタストロフィと文化」 オリヴァー＝スミス、アンソニー 明石書店 (2006)
- 「近隣社会と人間関係」 島田一男 ブレーン出版(1988)
- 「家・身体・社会—家族の社会人類学—」 清水昭俊 弘文堂(1987)
- 「災害と社会システム」 野田隆 恒星社厚生閣(1997)

第4章 阿部と宍喰の防災活動を比較する

千田佳代子・松山遥・山本貴大

1. 調査研究の課題

まず始めに、私たちが宍喰を調査対象にした理由として、宍喰には、災害についての伝承があり、災害についての記録も十分で、文化的に万全で備えがあり、防災活動にはかなり力を入れているだろうと思ったからである。また、田井晴代さんという方のお宅に古い古文書があって、田井さんも震災記録を現代語に翻訳し、2006年6月に訳書された『阿波国宍喰浦 地震・津波の記録』が刊行され、積極的に翻訳活動をしていて、文化的な活動に関して非常に有名で、昭和南海地震時の記憶や経験なども宍喰時代にまとめられて本にされている。実際に、昭和南海地震による津波を体験している方が多くいて、津波を体験していない阿部の方々とは違った話を聞くことができると考えた。また、『南海大地震』や『震潮記』といった津波体験記が数多く残っており、昔の地震や津波の被害がどういったものだったのか詳しく知ることができると思ったのも理由の1つである。私たちは、実際2回宍喰に調査に行き、昭和南海地震を体験された方々と現在の自主防災の中心となっている方々にお話を聞いた。阿部では、新たに地震想定として最大20mの津波がくる可能性があるとして発表されてから、行政の支援などほとんどなく、住民が自主的に率先して自主防災活動を行っている。さらに、短期間の間に幾つもの避難路をつくり、お年寄りが少しでも避難しやすいように整備し、避難訓練も阿部住民が一丸となって取り組んでおり、阿部住民の防災に対する意識は非常に高い。なによりも過去の津波被害がなく体験者もいない中、津波体験記のような資料さえもない状況で自分たちの力で防災対策をしていることに驚いた。いろいろな方からお話を聞き、宍喰では、意外な程に防災活動が行われていなかったのが現状であることがわかった。そのため、かえって過去の地震や津波に対する体験や資料が負の災害文化になってしまっているのではないかと感じたのである。このことから、宍喰は、昭和南海地震を実際に体験している人や津波体験記が残っており、過去の津波に対する情報や資料が多くあるにも関わらず、なぜ防災活動が盛んに行われていないのか、またそれについて宍喰住民はどう考え、これからどうしていきたいのかについて調査を行い、阿部の比較対象となる事例を集めることにしたのである。さらに、自主防災組合はあるが、うまくいっているところといていないところがあり、地域によって現在結構な差が出てきていると思う。そのため、自主防災組合の取り組みの差となっている理由はなんなのか、宍喰が今どういう状況にあるのかについて注目し、阿部と宍喰の防災意識の違いを明らかにすることを調査研究の課題とし調査を行ったのである。

2. 宍喰の概要

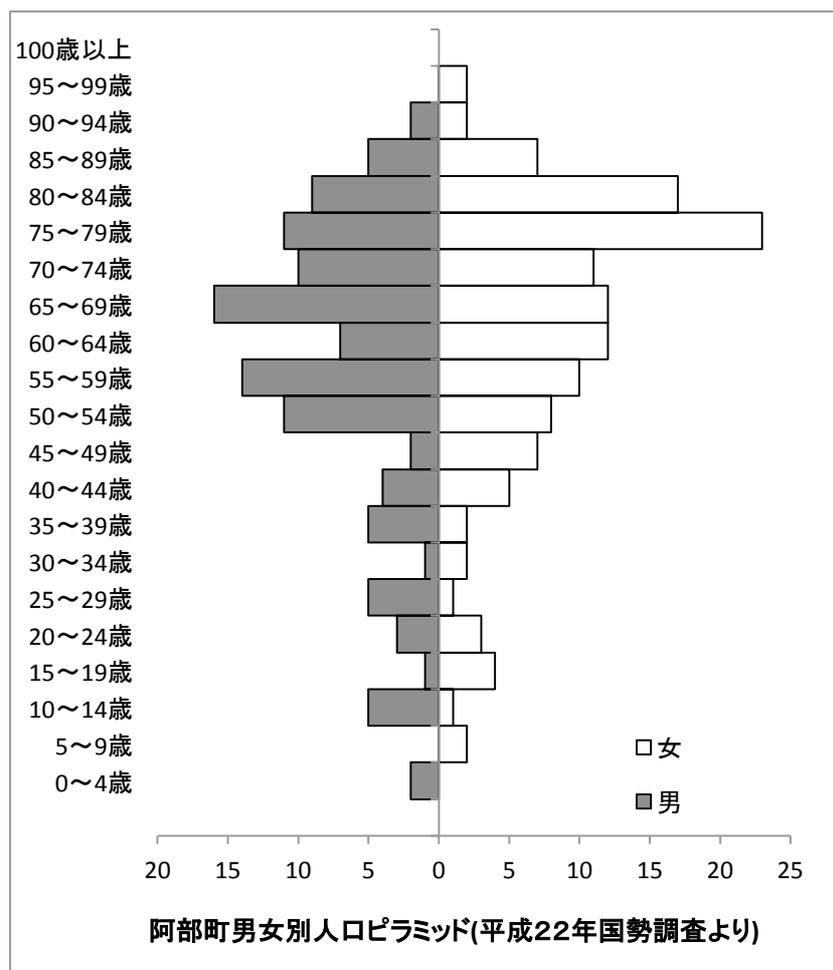
徳島県の最南端にある宍喰町は、緯度：北緯 33 度 34 分 4 秒、経度：東経 134 度 17 分 4 秒に位置している。徳島・高知両県の県境にあり、徳島県阿南市蒲生田岬から高知県室戸岬までの間、ほぼ直線上に約 80 キロにわたって、東北～南西方面に連なる室戸阿南国定公園のほぼ中心に位置する。行政上の町の区域は、東西に長く約 20 キロ、南北約 8 キロの地域を占め、東部は太平洋に面し、西部は高知県安芸郡馬路村、北川村に、南部は東洋町、北部は本県海部町、と接している。面積は 9330 ヘクタール、地形は西高東低の地勢（北西が高く、1000 メートルに及ぶ山地から南東に向かい、次第に低く海岸線に達している）。北面の町界には、鈴ヶ峰標高 394.7 メートル、小谷山標高 69.8 メートル、西ヶ峰標高 923.9 メートル、そして西方奥には

貧田丸標高 1018.5 メートルなどの山が連なっており、国道五十五号で、徳島市へおよそ 90 キロ、高知市へ、120 キロの距離で結ばれている。気候は温暖で南国的な気候帯にある。黒潮の影響で夏は涼しく、冬は暖かい典型的な海洋性気候、アジア季節風帯の典型的な気候で、夏は南東風、冬は北西風が多く、雨の日は夏に多く、冬は晴天が多く、平均気温が 17°である。降水量は 3000 ミリ以上/年で、これは生物の発育に最も適した条件である。「冷谷の雄滝」「石の滝」「人殺しの滝」などの多くの滝があり、また町天然記念物指定の「豊門の大ヒノキ」などの未開の観光資源がひっそりと眠っている。宍喰内には、宍喰小学校がある。1 年生 29 人、2 年生 20 人、3 年生 24 人、4 年生 21 人、5 年生 27 人、6 年生 27 人、計 148 人である。2006 年 3 月 31 で閉校となったが、徳島県立宍喰商業高等学校もあった。宍喰中学校は、牟岐町にある。近年の全国的不況の中、経営は多難なところもあるが、正月、ゴールデンウィーク、夏期、連休及び週末などには賑わいもある。四国巡拝のお遍路にとっても、日和佐の薬王寺から室戸の最御崎寺までの中間地点として、休憩、一泊の利用もある。さらに、宍喰川の河口、太平洋に面した大手海岸は、近年サーフィンなどのマリンスポーツが盛んになり、四季を通じて楽しむ人が増えてきている。正月の行事は、正月祝い、成人式左義長（正月に飾った門松や注連飾りなどを 1 カ所に集めて焼く。送り正月の行事である。サギッチョサンとも言う。）などがある。春の行事は、初午（数え年の六十一歳（還暦）、七十歳（古希）、七十七歳（喜寿）などに、大きな紅白のもちをついてみんなに配り、長寿の祝いをする。）、浜節句（重箱や遊山箱を持って近隣の者や家族連れなど相携えて、浜遊びに出かけ春の一日をのんびりと過ごす。）、端午の節句などがある。夏の行事は、竹ヶ島神社例祭、虫送り（農家はササのついた今年竹で田の稲を払って回り、祈祷所に持ってくる。祈祷が終わると子供たちがのぼりと、ササ竹を持って鉦と太鼓を打ち、呪文を唱えながら田んぼ道を回り、土佐との境にのぼりとササ竹を投げ込んで逃げ帰った。）、井上神社祭礼、八阪神社の抵園祭、みなと祭り、盆踊りなどがある。秋の行事は、八朔のひな祭り、八幡神社の祭礼、各地域の秋祭りなどがある。特産は、寒茶栽培、チョロギ栽培、ウツボ珍味製造、備長炭焼きなど。古い遺跡や古文書によると早くからこの地に人々が住みつき、集落をつくっていたことがわかる。海部郡内でも最も早くからひらけ、阿波国南端の街として、一大集落を形成していたと推測される。宍喰古墳の規模の大きさから、当時この地方に大きな勢力をもった豪族がいたと思われ、愛宕城の城下町として栄えた。高知県甲浦や宍喰浦那佐など天然の良港を利用して、本土と絶えず往来し、産業方面、文化的にも大きな影響を受けた。また海岸近くにあるため、幾多の災害（慶長地震 1605/2/3、宝永地震 1707/10/28、安政南海地震 1854/12/24、昭和南海地震 1946/12/21）にみまわれ、街の状況も変化。永年 9 年(1512 年)の大津波は宍喰浦南町を流失させ、その後の再建で街の中心が当時北町であった宍喰浦へ。

3. 阿部町と宍喰浦の人口比較

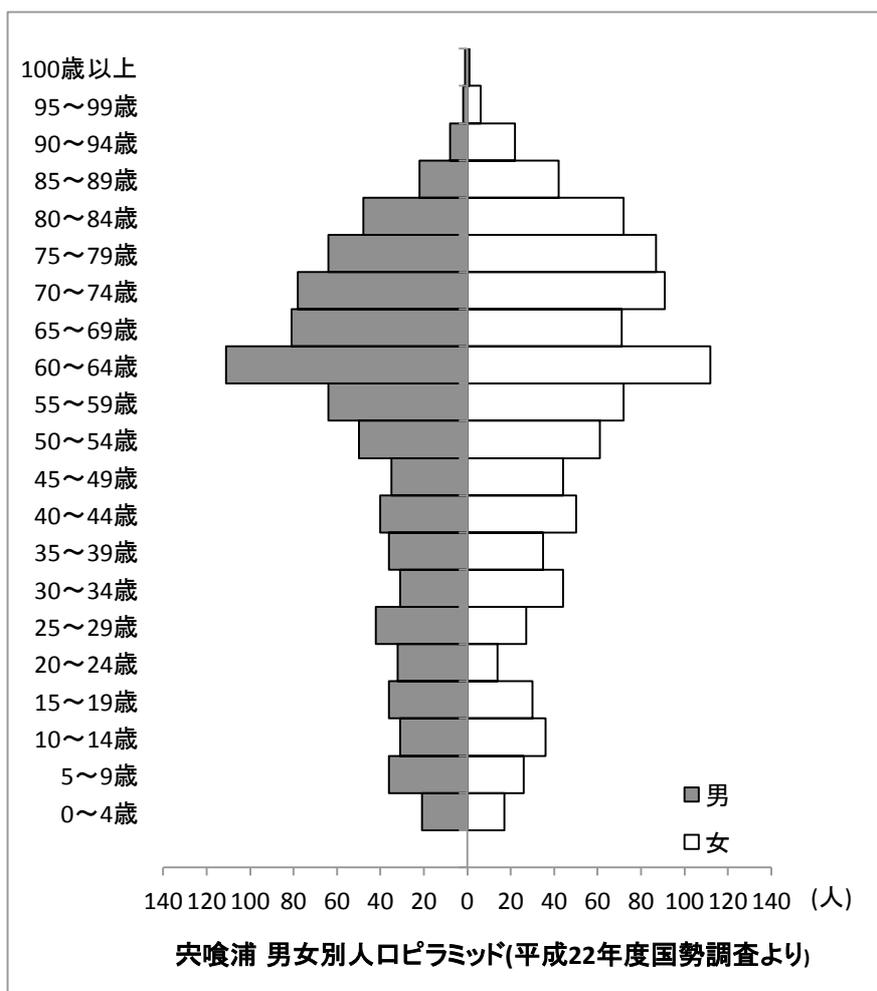
なぜ、宍喰浦と阿部町では防災に対する取り組み方に大きな違いがあるのか。まず、人口構成の面から宍喰浦と阿部町の違いを考えてみる。以下は、平成 22 年度国勢調査の年齢(5 歳階級)、男女別人口(総年齢、平均年齢及び外国人一特掲)を参考にして作成した阿部町と宍喰浦の人口ピラミッドである。この人口ピラミッドを使って、人口構成の面から二つの地域を比較する。

・阿部町の人口ピラミッド



阿部町は総数 244 人のうち男性 113 人、女性 131 人の集落である。上記の図に示されているように、0～50 代の若い人が少なく、高齢者が多い極端なつぼ型の人口構成を示している。また、男性よりも女性のほうが人口が多いことが見て取れる。

・穴喰浦の人口ピラミッド



穴喰浦は総数 1829 人のうち男性 869 人、女性 960 人の集落である。こちらも、つぼ型の人口構成を示している、60 歳以上の高齢者に人口が集中しており少子高齢化の現象を表している。また、男性よりも女性のほうが人口が多いことが分かる。

・穴喰浦と阿部町の比較

穴喰浦と阿部町はどちらもつぼ型のピラミッドであり、顕著な過疎・高齢化傾向を示している。これより、人口構成の面からは大きな違いはないということが分かる。違いとして挙げられる点は、穴喰浦は阿部町に比べると人口が多く、男女の人口比に大きな違いがないということである。大きな集落となると、統率を取ることが難しくなり、町全体の防災活動に取り組みづらくなるのではないかとということが考えられる。

4. 穴喰浦の災害経験についての調査

穴喰は何度もの津波・地震被害を経験した土地であり記録も残っている。また、その経験を鮮明に覚えている方も多くいる。穴喰浦の災害経験、主に昭和 21 年 12 月 21 日に起きた昭和南海地震について、今後の

地震への備えについて平成 24 年 9 月 10 日に 7 名の方に聞き取り調査をした。そして、それをトランスクリプトして分析を行った。

(1)A さん 79 歳 男性

A : A さん B : A さんの奥さん N : 内藤先生

A : 桜の木が揺れてね、

N : 地震でですか？

A : そう地震で。ちょうど台風が来た時のような感じやったね。それからもうね、ちょっと家の中おったら危ないゆうことでて、ちょっと横に広場があつてそこに逃げとったんやけど、余震が、その間も来とったけど、ちょうどね、その逃げとる家族でみな 4 人で逃げとるところを、この通りをね、この通りを浜のほうの漁師の人やろね、大きな声で、大きな津波が大きな津波が来よるからはよ逃げよーゆうて、声かけてその人は逃げよったね。ずーと声をかけながらね。私も初めての経験で、中学校 1 年生で「どないするー」いうて。いまだつたら分かるけど、どないするんかわからんし、親も津波来よる言うけんはやく逃げようか、ゆうて服着かえて、悠長なもんで、服きかえてなんやかんや物もって、・・・何に入れたかな、何かに入れて肩にこうかけて逃げたんやけどね。①そのじぶんは、べつにね道路も何も支障なかったですね。家が崩れとるとか、電柱が倒れとるとかそういうようなあれは全然なかったですけどね。ほんでみな、あのね、愛宕山てところわかりますか？

N : あの、役場のあたりのところですよ

A : あそこがこのあたりで一番たかいところ。②みな、かなりそこへは逃げよったんやけど、我々、ちょっと、うち、奥に、まだ奥に 3 キロぐらいに先に親戚があるからそこへ逃げたんです。だから、結局ね、それが、いいかわるいか、それが今から考えたら問題があるんです。ずっと、町はずれをずっと行きようるときに、道路がかなりひび割れてね、ほんでその前の田んぼは、もう、なんか、ピカピカ光りようるようなん。何が光りよんかないうて見よつたらもう津波が来よるんですね、もう。たんぼをずーと。田んぼはね、なんかちょっとこう段になつとるような田んぼだったんです。

N : どちらのたんぼですか？あの、小学校のある・・・？

A : 小学校のあの、周辺。そこをね、光が・・・わっ、津波が来ようるて言いながら逃げたんですけど、いまだつたら、いまの東北のようなんだつたら、間違いなくやられとんだろうな、って思うんですけどね、年寄りも連れとんし、おばあさんをね、そげん、はやく逃げれるわけでもないし・・・

これは、A さんの災害経験談を一部抜粋したものである。A さんは中学校 1 年生の時に南海地震を経験した。被災時の記憶はかなり鮮明に残っていることが上記の聞き取り調査からわかる。下線部①より、当時、A さんが住んでいた地域ではそれほど大きな津波の被害は受けず、わりと落ち着いて避難を行うことができたようである。さらに下線部②より、A さん自身は親戚の家へ逃げたが、彼の話によると、ほとんどの地域住民の人は愛宕山の方に逃げたらしい。愛宕山は避難場所としては狭くて当時は、階段の方も上の方も人でいっぱいであったという。この愛宕山は標高 25 メートルの突喰の数少ない津波避難場所である。昭和南海地震の時に人が溢れていたという経験がある中、現在も避難場所として活用するにはあまり整備ができておらず、いざという時に不安がある。愛宕山の整備を何とかしようという話は町の中でないのだろうか。また、そのような災害の対策を積極的に行う阿部のような自主防災組織のようなものはあるのだろうか、という疑問が浮かぶ。さらに、A さんの話を挙げて考えてみる。

A:…私らは愛宕山の整備を.あとは備蓄品.ほんな何やらを含めて.あの一,だいぶ前にも町長諸君のおるところで言うたんやけど.もっと愛宕山の整備を良く一,言うて.せやって,年寄りが,逃げれんでないか一言うて.それ以降にね,階段も直してくれて,手すりもつけてくれた.あっちこっち行ったり来たりできるようにしてはくれたんやけど,ほれですべて,良しではない.さっき言うたように,トイレの問題もあるし,備蓄をするために倉庫を建てて,ゆう注文をいうとるんだけど.備蓄倉庫をどこに立てるか,上にたてる言いよんやけど,その前の段階で,神主さんにあの愛宕神社をどうされますか,言うて,交渉したんや.

B: 神主さんが持ち主やけんね一.あれ.

A: ほんでね,神主さんと神主さんの息子と,こんな話をしたんや.あそこの愛宕山,もうみんな,町民の防災に使こうてもらおうようにして,神社じたいも古いからもう,建て直して小さな祠でもいいから小さくして,あそこの上をもっと整地して,みんな使えるようにしたらどうな一ゆうて話ができとんやけど.さあ,今度はその神社を移転?整備?する費用やなったら,もう寄付を集めて.寄付を集めるんに,何人かに呼び掛けてみてるんやけど.難しい話になってくるし.もう,そんな時間も,日にちおいてあるんやけど.とにかく上を,さっき言いよったように上から下から整地して・・・いわゆるね,私は要塞化したいんよ.

N: 要塞化ですか?

A: 要塞化して,城みたいにしたいんよ.そういう念願があるんやけどな.金の問題があるし,単なる机上プランだけで,しゃーないん.ほんで,お年寄りにも乳母車をひきながら,かなりのところまでは曲がれるようにしたいし.

N: そうですね,シルバーカーって使ってる方多いですもんね.

A: だからねえ.これからもそんな人増えるやろしね一.ほんんで,もし・・・足の丈夫な若い人ばっかりが残るってゆうわけにもいかんしね.若いひとも年いってくるし.ほんでねえ,まあ,あれです.そういうような,将来的なものも含めて,その土地,土地によって違いはあるじゃろうけど,海岸に津波が来るいうんは海岸線に住んどるもの,みな共通の問題やけんね.今の海南地震は,あそこは大丈夫やろうけど,あそこの海拔がどーの,こーのいうて,も一どこに住んだらええんかい,思う.山の上いうたって,高い山やいうところあるかどーか.不便さもあるし,年いってきたら高いところに上がることもなかなかできんし・・・まあ,いろいろ考えたけど行き着くところは防災のための資金ゆうかね.それがやっぱり問題かなあ,思います.

以上のことから,突喰はあまり災害対策に対して積極的な活動ができていないように感じられる.町の防災についての考えや,災害への備えに不安を感じる点はそれぞれにあるのにも関わらず,それを実際に声に出して訴え,実行することには移せていないようだ.Aさんが言うように資金不足であることや,そんな話し合いをする場もあまりないこと,町民自体の意識の低いといったことが原因だと考えられる.今まで幾度も災害にあっているのにもかかわらず,近年高い確率で来るとされている南海トラフ地震に対する備えも不十分のようであることがわかる.

(2)Cさん 男性

A: Cさん N: 内藤先生

A ほんでまああの一,ええ一,ほの時の私のちょっと覚えとること言ったら.

N: はい.

A: もう,寒かったっていうことですかね.冷たかった.裸足で飛び出したもんですからね.

N：そうですよねー。あつもう地震があつたらすぐに？

A：飛び出て、すぐ飛び出したんかもうあの一連れられたかはちょっとよう覚えてないんですけど。

N：はいはい。

A：とにかくもうさぶーて震えよつたと、もう足が冷たかつたんはもう覚えてますね。格好ももう寝間着一つでねよつたんで。

N：はい。

A：そうこうしよるうちにね、誰かがあの一、スルメ。当時はね晩あの一スルメがようけかかっとしてね。

N：何か、やたらと、その時はとれたとか。

A：んーというのを後で聞いたのと、その漁にいつとる人があの一何かこだまいうんに何か荷物入れてこう何人か帰ってきよつたんですけど、その人か誰かが津波やというような声を聞いたんですよ。

N：あー。

A：津波でいうても私当時知らなんだんでね。

N：はい。

A：何かは全然知らなんだんです。

N：あっそうですか。

A：津波や声聞いたらずーつと水が上がってきてね。突然その下水からきた。ぎーつときたんじゃないかと思います。ぎーつと上がってきてどんどんどんどん流れてきたように思うんです。ほの水がまた温いんですね。

N：あー。

A：まだほのあつたかいんいうんは印象あつたのを覚えていますね。

N：はい。

A：ほんでその足が冷えてて、今はもう町こら突喰なんかはほとんど氷なんかはらんのんですけど。

N：はい。

A：当時はもう氷がようはりよつたから、今はもう温暖化してぬくなっていますけど、星がようけでてたからよう晴れて冷えこんどつたついでよつたんです。

N：あーはい。

A：ほんでずーつとずつと流されてね。そうしよるうちに水がどんどん増えてきてあれもう胸まできてこれぐらいきて、背伸びしたりしてこう口の中に水入ったりしながら流されてきたように思うんです。家の中に入ろうと思ったけど、とてもガラスも割れてしもとるし流されてくる物も多くて、もう入れなかったんで、ほんでちょっと横いったら割木の積んでいる所があつてほの上に何人かおつたんですね。私も登ろう思ったけど、とてもよう上がらんかったですね。ほしてほれようわからんところきたらほこの四つ角で下水のところにドボンと落ち込んだんですよ。

N：あつここでですか？

A：ええ、ほこももう今はもうちゃんとフタもあるんですけど、当時はもう貧しかったし、フタもなかって、車が通るとこだけ板を置いたり、割木をこう並べてたね。

N：あつなるほど。

A：ほんなん水がきたら全部流されるけどね。ドーンと落ち込んだらもう背が立たんようになってね。

N：あー。

A：顔上げよう思つてもなかなか上にゴミいっぱいであげれんで水がぼがぼ飲んで、何か気失つたようになって、ひよつと気づいたらこの辺りまで流されてたんですね。

(中略)

N: 去年の12月にですね, えーっと津波の高さですね. 想定がだいぶ以前のと違っていると思うんですけど何か対策っていうのは?

A: 対策は一ないんちゃうん. ほんでねー私はあのーあんまりこの辺りでは言わんのやけどね, もうあの高台移転やね.

N: ああーはい.

A: これを考えないかのちゃうんかな. ほなってまたね安政でやられてまた昭和でしょう. ほの前もやられとる. 定期的にやられよるんでね, もうちょっと人間バカとちゃうんやからこの記憶に習ってあのー学んでね. 全体におもいきってもう新しい町の計画をすとかね. であのー移住さすような, するべきやと思うんですけどね. また心配せなあかん.

N: そうですねー. 100年おきぐらいきてますからね.

A: そうでしょう. またあのー堤防作ってももういつまでももつわけやないし, ほんでまあそういう公共財もそうやけど個人の財産も各家建ててね. 30年, 50年でまたゼロになってしまうと. ゼロやったらいいけど, ローンあったらマイナスになるからね.

N: そうですね.

A: ほんなこと思うたらね. もうおもいきってもう今の町の方で県かどっかに力いれてもらって高台移転. 絶対, ほぼもう心配ないというような所に移転さすべきやと思うんやけどね. まあどこの集会行ってもあのー避難所作れとかあのータワー作ってくれとかいよるけど, 移転を考えというのあんまり聞いてない. 遠くの方に移転しとる所は助かつとるしね.

N: はい. そうですね.

A: ほんだけええ手本があるんやからね. 学ばなあかんちゃうかなと.

N: 確かに. そういう意見もありますよね.

Cさんは, 家族とは別の所で地震と津波に合われたそうで, 当時の状況を語ってくれた. 当時は寒く氷が張るほどだったという. 下水にはまってしまった Cさんは, 遠くまで流され気を失ったが, 村の人が引き上げてなんとか助かったらしい. 家族の人は, 愛宕山に逃げて助かったらしい. 定期的に起きている地震や津波の被害に対して, 高台移転の話を熱く語ってくれた. 対策はないとのことで, 個人の対策については話してくれず, 少し行政頼りではないのかと思った.

(3) Dさん 推定85歳 男性

A: Dさん N: 内藤先生

A: 66年かなあ. そしたら19歳やったかなあ.

N: そうですねえ.

A: ほいでねえ. 私もねえ, 経験はしとるけど, あんまり深刻なものにおうてないんですよ.

N: あっそうですか.

A: 地震にはあってるけどね, 津波には, 割とはよう逃げたんでね.

N: あーそうですか.

A: ええ.

N: 当時あのーどうでした? あのー地震起きたのは当時未明でしたよね?

A：未明,4時,4時ぐらいやね.ほんで私はねえ漁師だったからね.あの一ほの晩妙にね,スルメイカとれたんですわ.ほれでとれてね,私もいっとたんです.

N：あっはい.

A：ほれで,押し船やってね,ほなけどねあの時は,やっぱり後から考えるけどね,いつもと違ってね,何や気持ちの悪いねえ,何かねえおかしかったんです.ほいでねえ,錨をやって,こうやっとなるわけ.ほの時に限ってね,潮があっちいたりこっちいたりするんよ.

N：おおー.

A：ほれでその一晚に,普通は変わっても1回や2回やけど,ほの時は,あっちいたりこっちいたりねえ.

N：はい.

A：地震の影響のせいで,ほんなんなるんかなあて.

N：あーそうですね.

A：2階でねえ,何人かで寝よったんです.ほれで地震でおまはん飛び起きて.ほいでまあ,地震が止んでからやけど,ほれからまあ,走ったことは走ったんですわ.家までね.

N：はあ,はい.

A：ほんで,俺が,何分かねえ,2分ぐらいやないかなあ.ほれで家来たら,帰ってきてね,家から出とる人は少なかったですよ.おもたより.

向こうから火事や声聞こえてね.ほれ聞いとる人は何人もいますわ.火事やいうのがあって,ほしたらみんなさんさん出てきて,ほんで妙にねえ,役割が決まっててね.

N：おおー.

A：私が1番下の2つになるのおぶってねえ,ほいで77の,ほんで着物着とんのを,帯つかんでね,ほいで私が連れてきた.

私らのところの近くには,ええ年になるおばあさんがおったんですわ.その人が安政の経験しとんですわ.やっぱほんな人らが,なんせ地震,津波の時はあたごいうん,あたご山ね.

N：はい.

A：ほーゆうのがあって,あたごさんに逃げろ言わずくにみな逃げた.

A：べんてんさんに上がることになっとなんですわ.まあわずかやね.

N：そうですね.

A：距離にしても.

N：ええ.

A：200メートルないですよ.ほれを前訓練の時に,いっぺんやってみたんですよ.

N：どうですか?急じゃないですか?

A：いや,逃げれるねー.時間もね.ほいであのーサイレンが鳴ったらパッと行くんですよ.ほいで,あのーパジャマきいて,靴はいていてね,ほいで訓練やさかい歩いて行ったんですよ.

N：はい.

A：歩いてね,山のふもと行ったらね,4分かかりました.

N：あー.

A：ほんで,地震がきて5分やいうたら,私やもう,ねれとりますわ.地震がきたら,電気やって消えるかもわからんし,今回は4分やけど,ほんならあんたら,地震がきたら,なんやして,逃げ道もふさがれとるかもわからんし,いよったらあんた,5分や6分いうたらあんた,難しいやないですかー?

N: いや、あれーいきなり 20 メーターばつとくるんやなくて、こう最初の 1 メーターぐらいのが、くるところがまあ 5,6 分ですから、まあ実際はもうちょっと時間が。

A: ほいであれー、5 分で逃げーいよんですけど、ほんでここだったら 20 メートル。

N: はい。

A: あれなんですか。三陸の方テレビで見ても、いっぺんにや

N: いっぺんにはこないです。

A: こんなんはこんのんでしょう？

N: まあ、どんどん高く

A: ほいで 20 メートルやろうねえ？

N: そうですねー。

A: けれどまあ、かなりの勢いできよるわねえ。

N: 堤防もいきなりは越さないんですけど。だんだんだんだんって、最後にメーター越すっていう。

A: 第 1 波のほうはやっぱ低いんですか？

N: そうですね。第 1 波より、第 2 波のほうがだいたい高いですね。

A: ほれやったらねー。第 1 波が何メートルで、あそこ越さんかったら、どうにか逃げれますわねえ。

N: たぶんあのー、波がきだして、どんどん逃げて、先にあがるってことですね。

A: けどねー海に向けて逃げるのはねえ、心理的にちょっとねえ。

N: そうですねー。ちょっと怖いですね。

A: ほんでここの奥さんが、若いんですけど、もう車で逃げる。走って逃げるいうてますね。

N: そうですね。海の方ですからね。

N: あたご逃げる時はかなり混み合っていましたか？

A: ある程度混み合っていましたね。ほなけんどのー逃げてあのー、ちょっとおかしいのがね、あたごの正面のとは結構急なんですけどね、じいさんも上がってましたからね。やっぱり年寄でも、上がれましたからね。

N: 火事場のくそ力ってやつですかね。

A: ほうやねー。

A: 炊き出ししてくれたんですよ。

N: それは国がしてくれたんですか？

A: いやーたぶん町がしてくれたんですよ。

N: それってどのぐらいやってくれたんですか？

A: 炊き出しはーかなりやってくれたんですよ。

N: あっそうですか。

A: ええー。1 週間はしてくれたんじゃないんですか。

N: 漁の方は？

A: 漁の方はね、しばらくね。網とかがね流れてしもうたんですよ。全部じゃないんやけどね。

N: どのぐらいですかね？1 か月ぐらいですかね？

A: どのくらいやろねー。1 か月ぐらいはできなかつたんじゃないんですかね。

ほれでそれから、スルメがかかった記憶がないんですわ。

N: あっその後ですか？

A: 津波のあとね。記憶がないですね。

N：網はかけてたんですか？

A：ええ。餌つけてひっかけたりね。その後は他のがボチボチね。

漁師だった D さんは、当時 19 歳の時に地震と津波にあわれた。漁にでたその日は妙にスルメイカがとれたらしい。確信めいたものはないが、何か気持ち悪い感じがしたらしく、潮の流れもおかしかったそうだ。近所の人から、地震、津波の時は愛宕山に逃げろという伝承を聞いていた割には、D さんの家族は行動が遅かったように思える。下線部の語りからは、昭和南海地震の被害はあまり大きなものではなかったこと、そしてそれ以前から避難先は愛宕山とされてきたことがわかります。当時、炊き出しを 1 週間くらいしていた、漁を再開するのに 1 か月くらいかかったなどの情報も得られた。また、実際に愛宕山を見て思ったのが、急であることで、お年寄りや登れるのか疑問に思っていたが、D さんの話から、お年寄りでも実際そのような状況になったら登れることが分かった。防災訓練を行ったりと、宍喰の他の住民と比べると防災意識は高いように思ったが、津波についての知識があまりないようにも感じた。

(4)E さん：男性 89 歳

A:E さん T：高橋先生

T：「漁師宿に居られる時に地震が来たという？」

A：「そうやな。」

T：「宿というのは？」

A：「横町のあさかっていうとこなんやけどな。」

T：「様子はどうでしたかね？まだとくにその時点では...？」

A：「近所の人、打ち込みのポンプやら家のポンプやらで津波がくるか調べよったけどな。川見に行ったり... まあ別に異常もなしに。ほんなんしよったら樽井の前の奥村さん家が潰れたん...」

T：「そういった潰れた家は何軒かありましたか？」

A：「いやいや。」

T：「この一軒だけで？」

A：「うん。地震で潰れたんはこの家だけ。あとはもう納屋とか津波で流したけどな。暗かったし助けもどないもできんかったけどな。ほんで東の方から津波やーって聞こえて愛宕山に逃げた。」

T：「その時何か持って逃げましたか？」

A：「米を持って逃げた。食料が大事だった。」

T：「愛宕山の方は人がいっぱいでしたかね？」

A：「行くまでが... もう家を出た時には水がチャブチャブチャブと波がきよったもんな。下水からも水が出てきよった。コンクリートの溝のふたが外れとった。そんで皆がその穴に入ってこけよった。」

T：「お年寄りの方なんか本当に大変でしたでしょうね。足が不自由な人とか。逃げるにもそんな状況では... 暗い中。」

A：「ほなけど暗い中、割合見えたけどな。」

T：「そうですか。道ははっきり見えた？津波が来たのは何分後くらい...？」

A：「地震から 30 分ぐらい。割合余裕があったで。」

T：「じゃあちょっと時間があつたというか？」

A：「みんなつぶれた家に寄つとったかいな。ほれに時間とられて...。」

T：「津波が来るぞーっていうので皆さん一目散に山の方へと？この時はすでに愛宕山にはたくさんの人

が登っていましたかね？」

A:「うん、もう必死よ。バタバタこけてなあ。側溝のふたが外れとるけん、そこに皆落ちてずぶ濡れよ。」

T:「もう愛宕山に登ることしか考えてなかったですかね？やっぱ一番高い所が...。」

A:「ほらもう昔からの言い伝えやけんな。愛宕山に逃げるということは。」

以上の会話から、当時の昭和南海地震の状況がわかる。住民は、地震の揺れが治まった後、津波が来るかどうか打ち込みのポンプや家のポンプで調べて異常がなかったのにも関わらず津波が来たことがわかる。地震の揺れの被害としては、家が一軒潰れ、納屋が津波で流された。津波の避難場所としては、昔からの言い伝えもあり、ほぼ全員が愛宕山に逃げたことがわかる。側溝のふたが外れており、多くの人が穴に落ちたて避難の妨げになったことがわかる。このことから、言い伝えだけでは津波か来るかどうかを予想するのは難しく、住民の人々の声の掛け合いが非常に重要になってくると感じた。また、避難時に妨げになるものも多くあり、少しでも早く逃げるように改善しておく必要がある。予兆や言い伝えについて以下の会話を抜粋した。

T:「何か予兆のようなもの...例えば、井戸の水が枯れたりなどはありましたか？」

A:「特に予兆のようなもんはなかったな。昔は、井戸の水が引いていく、川は干上がっていくという言い伝えだったけどな。それはなかったはな。」

T:「特になにもなく、突然のことで...？」

A:「何べんもポンプを入れ替わり立ち代わり押ししょったんやけどな、打ち抜きの。けど、ほおいうような川の水も...」

T:「特に変わりなく？見た感じは？」

A:「そやけど、津波やあ一言うた時、ずーっと潮が引いてほいで来たらしい。」

T:「引いてどーんと波が来るという？津波だーと言った瞬間皆さん逃げてるんで...」

A:「ほら皆ごっちゃになって逃げたわな。どこの人やわからん手引っ張ったって、こけたら助けしてくれーや言う人もおつてな。親子が逸れて、よその人が助けて...まあいろいろです。」

T:「はい。そういうさっきの話しにもありましたように、井戸の水が引くとか川の水が干上がるとかこれは昔からの言い伝えがあったですね。」

A:「うん。」

T:「あの...南海地震以前等でも地震があったと思うんですが、その時の昔の言い伝えとかお話しといたことは？」

A:「井戸の水が引いて、一番目か二番目かの波が大きい、そおいう話は聞いたけどな。」

T:「こう山に逃げろっていうのはこれは言いつたえですかね？」

A:「とりあえず高いところへ」

以上の会話から特に予兆はなかったが、潮が引いてから波が来たといった様子だったことがわかる。昔からの言い伝えとして、井戸の水は引いていき、川は干上がっていくや井戸の水が引いて、一番目か二番目の波が大きいといったことがある。いろいろな言い伝えがあるもの実際に地震がおきてみないとわからないのが現状であり、いち早くどれだけ安全なところに避難できるかが大切であると思う。地震後の様子として以下を抜粋した。

T: 「じゃあ、道がふさがってしまうような状態だったんですかね？」
A: 「うん。海岸線一本やったけん。今でも一緒や。」
T: 「今度もし地震が来たら、やっぱ避難路も... 今は道がしっかりしていますが、何が起るかわからないというか、家が倒れたりしたらもう...」
A: 「海岸道路が一本やさかい、ほれが傷んだらもう....」
T: 「そうですね、ここは... この辺の防潮堤の整備などはあまり進んでないんですね...」
A: 「補強、川筋もやっとなけん... 相手がどんだけ来るやわからんけんあ。」
T: 「そうですね。一応避難タワーも街中に... 7メートルでしたかね？」
A: 「うん。」
T: 「あそこも皆さん万が一の時は避難する見込みで... ?それともやっぱり愛宕山にまっしぐら？」
A: 「ほおやなあ。やっぱり愛宕山の方が高いもんなあ。」
T: 「ただ、そんなに広くはないんですかね？上の広場というか...」
A: 「案外あそこねえー、さんぼ階段があるやろ？わりと広いんよ。」
T: 「十分この辺の人が行ってもまあまあ...」
A: 「大丈夫なくらい。」
T: 「あの、竹藪が結構ありますよね？」
A: 「あんな整備せなんだら... 竹がようけ生えて...」

宍喰には海岸道路が一本しかなく、避難タワーも7メートルと新想定 of 津波には対応できそうにないのが現状である。また、防潮堤の整備や補強も行われているものの、実際に来てみないと、津波を防ぐことができるのかわからないといった住民の不安もある。このことから、南海地震の対策として改善していくべき点がたくさんありそうだ。昭和南海地震の経験を踏まえて、今後の対策や防災に対する意識として以下の会話を抜粋した。

T: 「先ほど自主防災の方からっていう話でしたけど、今後対策というか個人個人がしておくこととは何かございますかね？経験を踏まえてまずは山に逃げろといったこともそうですが、あるいは準備をしておくとか... 心得として...」
A: 「あんまり重たい物を持たんと。ほら、今の世の中やもん、食料なんかは必ず援助がある。」
T: 「つい詰め込んでしまいますよね。あれもこれもって...」
A: 「ほんなんはなるべく... 貴重品だけ持ったら...」
T: 「なるほど。まずは、逃げるのが大事... ?」
A: 「うん。高いところへ逃げることやな。ほんで、人よりはよ逃げなあかん。なにがなんでも逃げなんだから...」
T: 「地域の取り組みとしては、こんな活動が必要じゃないかとかそういうふうに思うことはありますか？行政でもこの地域でも...」
A: 「このごろ海陽町に合併してからなああんまり...」
T: 「上の方の行政の取り組みがあまり感じられませんかね？」
A: 「感じんな。うん...」
T: 「自分で自分の身は守るしかないという... ?」
A: 「そうやなあ...。それに限る。」

T:「今後、自主防災への近隣の隣組ではないですけど、取り組みとかどういったかたちで繋がりを強めていこうといったそんな話はあんまり...？」

A:「ないなあ...。前に出てするという人があんまりおらんもんなあ。わしらももの言うん好かん方やしな...」

T:「そうですか。やっぱり個人個人が意識してそこは対応するしかないということですね。」

A:「うん...。もう年寄ばっかやしなあ...」

(中略)

T:「この辺は昔堤防はあったんですかね?」

A:「堤防やなしに石垣があった。」

T:「多少は効果があったんですかね?水を防ぐのに...」

A:「雨降りの水を防ぐだけの...」

T:「もうその石垣の跡は全く?」

A:「ないない。完全に頑丈に...命を守る土台にしとるけんな。」

T:「工事は戦後されて、防波堤なんかもこう...」

A:「今でも川筋は直っしょるけんどな。補強したり...」

T:「震災対策で?」

A:「ほおやろな。津波の高さが倍になったさかい、あれからまた動き出したわなあ...」

T:「これは、県とか国の動きなんですかね?」

A:「うん...」

Eさんは、昭和南海地震を経験されたこともあり、水や毛布など防災グッズを準備されている。また、新想定があつてから再び県も動き出したが、十分な震災対策はまだまでであるのが現状である。さらに、避難訓練は行われているが住民が積極的でないため、必死になり体が覚え込むくらい練習しなければ意味がないのではというのが木村さんの率直な意見であつた。この会話から突喰住民の防災に関する意識が弱いことがわかつた。

(5)Fさん：76歳女性，Gさん：91歳女性，Hさん：92歳女性，Iさん：男性

A：Fさん、B：Gさん、C：Hさん、D：Iさん、T：高橋先生

A:「慌てて起きて表に出た。」

T:「起きてしばらくは、ぐらぐらとなかなか立ち上がれないような状況で?」

A:「ほおやなあ。私ら赤ちゃんがおつたけんな、ほんで慌てて負ぶつたもんな。うちな、ほの日ちょうど結婚式だったん。結婚式で、お寿司や押し寿司ようけこしらえとって置いてあつたんよ。ほんなんなんかどろどろや。」

B:「あん時だったん?」

A:「ほん時、大阪からうちはお客さんがぎとつたんよ。花嫁さんのお父さんとお母さんが来とつたんよ。ほんで、はよ逃げてくれ言うて、その人やはずぐだったんよ(避難したのが)。はよ逃げいうて、その人も一緒にうちと同じ赤ちゃんがおつたんよ。うちはほの子負うてほの人やだけ先な、はよ逃げはよ逃げ、愛宕さんへ逃げなよって言うて...。その人は突喰の人だったけんな、お母ちゃんは。ほの人やが逃げる時はまだ波がきてなかつた。ほいで、ほの人やが行ってから、私もおばあさんがあんたもはよ逃げ

一って言うて、ほいでほの子を負うてな、私が出た時にはもうここまで水が....」

T:「腰まで水が？ほれは地震がきて30分とか40分くらいたってから？」

A:「ほないたていへん。ものの10分やなあ。」

T:「ものの10分で水が？」

地震の揺れは、立ち上がれないような大きな揺れだったことがわかる。また、津波が到達した時間は速く、避難する時間が少しでも違えば水が押し寄せてきた様子がわかる。このことから、地震が起こってからどれだけ早く避難することができるかが重要になってくる。また、その土地を知っていればすぐに避難することはできるが、知らなければ避難場所を言われてもすぐに避難することはできない。そのため、その時々に応じた対策が必要である。

T:「それで急いで愛宕山に逃げたんですね？みなさん。」

A:「私はな、愛宕山に行きよったら間に合わん思てな、ほんで外に出たんよ。ほいで出て行きよったら角から水がゴーっていうて、あそこごつかったわ。」

T:「この道が？」

A:「この道、今のように堤防がない。土をもっとるだけ。ほんでな、私流されそうになって、ほな向こうから布団が流れてきてな、ほんで慌ててほの布団に抱きついた。ほら、ごつつい勢いじゃもん。」

C:「遅かったんやなあ。あんた逃げるん...」

A:「遅おやない。おばちゃんやが出て、じきに出とんじよ。」

D:「北に逃げたらだいぶ高いんよ。」

C:「私遠ざかるように逃げたん。」

D:「北へ北へなあ。」

A:「おばちゃんのところは潮がきてなかったけん、着物貸してもろた。もうほらびちよびちよよ。ほんで、祇園山に行った。ほいだらな、もうあそこ全部海やった。」

T:「じゃあ、しばらくの間、水がひくまで祇園山にいたんですか？」

A:「うん。祇園山にいたらなようけ逃げてきとるん。」

D:「あそこも高いけん。」

T:「愛宕山より祇園山の方が近かったんですかね？」

A:「遠い。愛宕山の方が近いんやけどな、道がな、ほんなどこ通いよったら命ないわおもてな、ほんで向こう通ったんよ。」

C:「私やすぐに愛宕山に逃げた。」

T:「時間がずれたらだいぶ違ったんですね。」

A:「ほんでな、私おばあさんがどないしたか知らんよ。逃げなよって言うて逃げるしかないでえなあ。けどな、多分おばあさん二階におったんよ。」

T:「二階には水はこなかったんですか？」

A:「うん。一階の襖のところで。まあ、揺れようがごつつかった。」

T:「その時は、赤ちゃんを背負って逃げたんですか？」

A:「逃げた逃げた。見たら子供が濡れとんやもん。」

T:「祇園山に行ったらやっぱ逃げてる人は結構いましたかね？山の上には。」

A:「ええ。久保辺りの人がみなおった。私もな、遠かったけんかな知らんけど浄福寺に走ったもん。」

川沿いには、今のように堤防がなく、土を盛っただけのもので、今と昔の対策状況の違いがわかる。また、昔の言い伝えで避難場所が決められていても必ずしもそこに安全に避難できるとは限らず、その時々に応じた判断で避難することが大切である。愛宕山だけでなく、祇園山などどれだけ多くの人が避難していたかがわかる。また、津波は家の一階襖のところまできていたといった津波被害の様子を読み取れることができる。

(6)田井 晴代さん 79歳 女性

A：田井さん B：宍喰町教育委員の方 N：内藤先生

A：・・・だからまあ、なんて言うんでしょう、ちよつとこう、なんかひっかかるんです。むかしのものとか調べていると、いろんな疑問がいっぱい浮かんできて、だから、その時にはすぐ動いていかないと、聞く人がいなくなっちゃうてゆう。あの、その一、なんてゆうんかな、もしこの人たちがいなくなっちゃったら、むかしのこと何にも分からなくなっちゃうなっていう危機感がすごくあるの。やっぱり古文書に触れたことによつてね、そういう意識が自分の中にでたなつて、思つてますけど、だから、なんでも聞いてしまうんで。聞き魔だつて言われちゃう。でもね、大事なことにつながるんでね、すべてね。ちよつと年代が変わると、なんにもそんなん分らないつて人がほとんどになつてしまうんでね。できるだけ調べておきたいですな。

宍喰には「震潮記」という災害記録がある。それは、田井久左衛門宣辰による、嘉永7年(1854年)11月5日の安政南海地震の体験記録と永正9年(1512年)、慶長9年(1605年)、宝永(1707年)に起きた地震・津波についての調査の記録を残したものである。その古文書を現代語訳し、冊子としてまとめたのが今回聞き取りを行った、「震潮記」の著者の子孫の妻である田井晴代さんだ。この「震潮記」は田井さん宅で、古い書類を整理していた時に偶然に発見され、そこをきっかけに様々な資料を用いて現代語訳を行い平成18年に冊子としてまとめた。田井さんはこの「震潮記」を用いて近所の小学生や町民の方に読み語りをするといった防災教育も行い、「文化の面からの防災活動」を積極的に行っている。田井さんがいうように、過去の地震を体験した人達はどんどん減つていく。過去の記録や情報を知り、それを残していくことで同じ失敗を繰り返すことの阻止につながるであろう。避難訓練など実践的な自主防災活動も大事であるが、過去の体験を学ぶことで、災害に対する意識の変化をつけ、前の地震の時の問題点を見直し、今後の活発な防災活動に繋ぐことができるのではないかと感じる。だが、これだけ災害経験や文化があるのに、今も昔も避難場所を「愛宕山」のみに頼っているのは疑問が浮かぶ。また、これだけ災害を経験しているのに、防災活動をあまり積極的にしていない様子も気にかかる。それに関して田井さんは以下のように語っている。

N：・・・ちよつと疑問に思うのが、みんな、愛宕山に逃げられますよね。地形的にそのくらいしかないつてもあるんですが、ぱつと逃げないといけない時に山へ行こうつて言う風に思うのは…その一、前の人からのなんかがあるんですかね？

A：それはね、だから、江戸時代の間代の時代でも、先の3回の地震津波のときでも、みんながあそこに行つて助かったことが多いので、あそこは助命山だと言われているの。

(中略)

B：阿部の地形はね一、裏に山があるから一、ねえ、こうね、避難路もね、自主的にね、作りやすかつたと思う

んやけど・・・だから、こころあたりのそれがね、難しいわけなんですよー。ちょっとこうね、昔からこの町がずーと維持して来とるのが、こうやってあるのが、やっぱりこうゆうなことから・・・逃げたら助かるゆうのが、イメージをもつとるから、・・・

A：だけど、今回みたいな3連動で、文章・・・あれにも書かれてありますように、愛宕山が、山の上が水の底になるような大きなのが来た場合は、祇園山・・・八幡神社の山頂といえど無難ではないと、書いてあります、間代は、ですから、3連動だったら愛宕山25m標高も越えてくると思って。そこだったらもう、鈴ヶ峯のほうに、逃げなきゃいけないっていうんで、私は、それをね、最短コースで街を抜けたら逃げれる道を少し、田んぼなんかは広めて、して欲しいってゆうこと。それと、研究してくださる方に、一番お願いしたいのは、予兆の研究を進めて頂いて、前兆現象を早く周知するというで、そうした時点で、無駄になってもいいから、早く弱者の方を先に逃がすと、安全圏にね、それやったら時間があるからいける、と、無駄になったら、怒らないで、よかったね、来なくってと降りてくればいわけですから、いったん事が起きてからは、年寄りとか幼児とか間に合いませんこの地域は、それを、研究してる方には、そういう予知能力、時々出ますよね？それをなるべく研究してほしいと願いですね。だから我々も、一般住民も空の模様とか鳥の異常に鳴くとか鳴かんとか、漁師だったら、海の異変があるとか感知できる部分があるとおもうんですよ。その時点で、そういう風にとらえた時点でもう逃げようという風にならんと、間に合わない。そう思うんです。そうしたらある程度安心なところまで行けると思うんです。

下線部より分かるように、今までの過去3度の災害では避難者が愛宕山に逃げて助かったということが愛宕山に頼る傾向に結びついている、というのが田井さんの考えである。過去の津波経験が積み重なる中で穴喰町民にとって愛宕山が「助命山」つまり「避難場所」という認識が強くなっていることがわかる。災害の文化があるのにはあるが、その過去の災害によってあまり大きな被害が出なかったことが穴喰町民の心に「今度も大丈夫だろう」という意識を芽生えさせているのかもしれない。次に起こるとされている南海トラフ地震は震度7、津波は20メートルのものが来るということが予想されている。高齢者が多いこの穴喰地区で地震が発生し、パニック状態でみんなが愛宕山に逃げていくとすると、そんなに多くの人は助からないのではないかという不安がある。

5. 穴喰浦における災害文化の特徴

これらの調査結果から穴喰浦における災害文化の特徴を検討してみる、聞き取り調査からわかったことは、①昭和南海地震の記憶に関する語りは鮮明であり、人びとは過去の津波伝承・経験をもとに愛宕山への避難を考えている ②過去の災害伝承・経験の保存・伝承・活用を目指した活動は田井さんを中心に盛んである ③コミュニティによる防災体制は確立されていない ④新想定津波に対しても愛宕山に逃げる以外のアイディアはほとんど無い ということである、避難場所として挙げられている愛宕山は、設備もあまり整っておらず、災害弱者の人たちにとってはとくに厳しい状況にある、なにより地震発生後数分で津波が到来する想定であるため、住民全員が愛宕山に避難できるかどうかかわからない、にもかかわらず、人びとがあまり危機意識を持っていないのは、被災者がまだ生存している昭和南海地震時の津波では、愛宕山に逃げていればとりあえず助かったこと、そしてその際はたまたま被害が小さかったことが災いしているのかもしれない、すなわち、災害文化が、将来の津波被害リスクやそれへの対処を誤ったかたちに認識させる要因になってしまっているといえる、

6. 穴喰浦の防災活動についての調査

徳島県内の自主防災組織(自主防)の組織率が、初めて 90%を突破したことが県のまとめで分かった。各自治体による地道な呼び掛けや啓発活動に加え、東日本大震災を受けた危機意識の高まりも背景にあるようだ。ただ、山間部では過疎化の進行で、自主防の基盤となる集落の活力が落ちており、組織づくりが難しくなっている現状も浮き彫りになった。県防災人材育成センターや市町村の防災担当者によると、各自治体で自主防の活動エリアに入っている世帯の割合を示す組織率は 90.1%(4月1日現在、速報値)。前年より 3.1 ポイント増えた。全国平均は未集計。市町村別にみると、徳島、吉野川両市と勝浦、美波、海陽、松茂の各町で 100%に達している。前年比で最も伸びが大きかったのは 12.6 ポイント増の東みよしで組織率は 79.9%。11.4 ポイント増、67.4%の北島、9.7 ポイント増、61.0%の石井が続く。

(『徳島新聞』2012.11.3 朝刊)

前回の昭和南海地震や過去の地震・津波についての体験・記録についての調査で、穴喰には多くの災害文化や、災害経験があるのにも関わらず、それを生かしたような防災活動が行われていないように感じた。たとえば、愛宕山の整備が不十分なことや、避難タワーがたっているが高さが7メートルしかなく、津波の避難には役に立ちそうにないこと、自主防災組織があってもあまり機能していないことなどである。このような穴が調査によって発見されたが、穴喰は徳島県内のモデル地区と指定されていて、防災に関しては積極的な姿勢が見て取れるはずである。実際の穴喰での防災活動がどのようなものであるのか、といこうとに焦点をあてて、平成 24 年 11 月 24 日に現在の防災活動に関わる 3 名の方に聞き取り調査を行った。

(1)Jさん 男性

A: Jさん N: 内藤先生

A: これはね、私はいまだに印象にのこっとなんですけどね。

N: はい。

A: 災害があるっちゅう予兆があったんですよ。

N: ああー。

A: これはほんまに非科学的なんですけどね。

N: まあでも今でもいろいろ言いますよね。雲がとか。

A: 言いますねえ。科学的かいうたら弱いんですけどね。

N: どんなことがあったんですか？

A: なんかいいますとねー。学校でねえ、小学生が騒ぐんですよ。がいに騒んぎょんですよ。

N: 小学生がですか？

A: ええ。津波があるいうてね。ほれはどういうところから発信してるいうかとね。おばが言うにはね、いわゆる月のところにね、星が近づいて、一つ星がある。これが予兆やと。言うてね、ほの時はわろうてすまじよったんです。ほいだら災害におうたわねえ。ほれがやっぱし、今でも残ってますねー一番。

N: あっそうですか。

A: あっきたなーと。ほらもうその時はテレビや何もないしね。ほの予感がするのが非常に非科学的やけど、ほれがいまだにイメージが強いですね。

N: その中学生が騒いだっていう予兆は地震かどうかはわからないんですね？

A: ええ。何か災害があるっていう。

N: はいはいはい。

A: スルメがようけとれる年は災害があるってそれはよく言っていましたね。

N：あたごやまの管理はJさんがしてるんですか？

A：ええ.

N：昔もそうだったと思うんですけど.昭和南海の時もトイレがないとかいろいろありますよね.

A：今度作るいうてましたね.

N：あっそうですか.

A：ええ.あのーあのあたりの人が,特にご婦人がようけ近所に来てね,作ってもかまんかーってね.

N：何かその他にいうてきてることありますか？

A：備蓄の倉庫を.それは役場がちょっと言うてましたわ.

N：そうですか.

A：しかし今言うてたトイレね.これの管理というのは非常に難しいんですよ.私は災難のことで返事しましたけど,トイレいうんはねー,便利で非常に犯罪が多いんですよ.

N：犯罪ですか？

A：まあ徳島でもね.公園のトイレで女の子が

N：あぁー

A：ありましたねー

N：はいはい.

A：ええ.あぁいう風にトイレっていうのはねー,便利でね

N：密室ですからねー.

A：そうそう.ほれがあるんで,そういうのを気にしますはねー.

N：あぁー確かに.

A：慎重にせんとね.

N：そうですねー.あとなんかあのーあたごさん竹が結構生えてますよね.竹やぶがいっぱい.

A：ほれはね下がね.

N：あっ下の人ですか？

A：いっぱい生えたいうてこまっとんですよ.

N:あっそうですよね.

A：避難路で縦のさんどうと横のさんどう,横さんどうはねスロープでね.手すりおね.まことによくできてますわ.けんど工事で痛めてますからね.

N：あぁー木の.

A：ほんであのー現地にいたらわかるんですけど,手すりが傷んでいますわ.私が直していたんですけどね,やっぱり工事の時にいたんどんですわ.

N：あのへんの木とか草が倒れていますよね.

A：というのはあれかっこうの遊歩道になっとんですよ.

N：あぁーお年寄りの？

A：うんー.ほんでできるだけ直していますよ.

N：あのあれースロープとかをあれ直すのは,町の仕事なんですか？

A：ええ.ほれはーこの災害対策はうちは無言でね,町の対策支援ので受け入れています.

N：あのじゃあ谷岡さんでしたっけ？

A：あぁそうそう.あの人がね.

N：あっそうですか.あのスロープっていつできたんですか？

A：あれはねー10年にもなるかねー

N：あっそうですか。

A：早かったですよ。というのはねー神社でお祭りがあるんでねー前は石垣のね。不便なんじゃったけど、それができてあのー第2の工事で前をまた逃げるのにな、これは急なと、急なんで、これではーあのー上がりにくいいうて、ほんであれ、今改良して、ちょっとゆるくね。

N：あぁー。

A：もっとーみな構想はね、もっとスロープでね、あのーやってもらいたかった。あのー真正面を改良するのは、斜めぐらいに、まあ予算もあつたんだろうね。もっとゆるやかに。

N：なるほど。

A：ほらねー前々から、町当局と神社のふもとにね。道路いれたらというのはありましたわ。

N：あぁー。

A：大きな道路をね。というのはあそこはせまーなつていっとなですよねみな。

N：はいはい。

A：大きな岩があるんですよ。ほれがー難物でね。とるのが。ちょっとできなんだわね。あれはー昔は津波の浮き島浮き島いうてね。かっこうの避難所ですわね。

N：そうですよねー。まあだいたい穴喰の人はあたごかべんでんですよ？

A：そうですね。逃げると思いますよ。

N：何かされていますか？その日常の中で防災というか、例えば避難の練習とか。

A：いやーほれはねーなかなかねー。

N：そうですかー。

A：今はちまん神社のほうでも避難路をこしらえてるんですよ。

N：あぁそうですか。

A：ほれはーまだ詳しいのは聞かんのやけどね、何メートルまでの避難路を作るんかはねー

N：はちまん神社はええと自治体がつっているんですか？海陽町が？

A：ええ。自治体が非常に熱心でね。というのは、やっぱしこの前の昭和南海の経験があるんでね。非常に自治体も予算としては、海部郡なんかがつくってくれよんじゃないんですか。

N：はあはあはぁー。

A：ほんで案外早いですわ。今年のはちまん神社の避難路ですけど、来年度は、これが崩壊せんように山をね、擁壁をずーっと作る予定なんです。ほんで手っ取りばやいのは、南海地震の経験があるんで、県もそうゆうの序列つけとんやないんですか。

N：まあそうですね。県南は今回お金を結構ね。

A：津波に関してはね、自治体がね中心でやってくれてますからね。そこに雑音がはいったらね、スムーズにいかんですわ。

N：じゃあ割と行政が動いてくれるんですね？

A：そうそうそう。工事もやっているんですけど、全然口いれんね。むしろ応援するぐらいやね。そうせんと工事できませんわ。

N：そうですね。外からガヤガヤ言われたらね。

A：ほらもういろいろなことがあるけんねー。

当時の被災者でもある J さんは、まず災難の予兆について話してくれた。J さんの言う通り非科学的ではあるが、重要な情報である。月に星が近いと災難があるということで、実際に地震と津波にあわれ、そのことが一番頭に残っていたらしい。また、穴喰での被災者の話に共通していることが、スルメの大漁があったことである。当時の漁師さんもスルメがよくあがったと話してくれた。J さんの話のなかにも、スルメがよくあがる年は、災難がある年だということだ。愛宕山の管理者でもある J さんは、トイレの建設について話してくれた。防災ということで、認めているらしいが、トイレというのは便利だが管理が難しいとのこと。手すりなどを直したりするのは、町の仕事らしい。また、八幡神社の方にも避難路を作ったり、来年度は擁壁を作ったりと、行政は非常に活発である。それに対して、J さんは、口だしをせず、雑音をいれないようにしているらしい。下線部からもわかるように、穴喰では自治体を中心となって、避難路などの整備といった防災対策に積極的に取り組んでいることがわかる。また、住民が意見を言うとスムーズに工事が進まないため、黙っていることが応援することになっていることがわかる。避難訓練などはしておらず、防災袋の中身も把握していないらしい。行政が非常に活発なのに対して、少し行政に頼りすぎていて、防災意識が低いのではないかと感じた。こうした点に、住民と行政の連携がとれない原因の一端あるのではないかと感じました。

(2) K さん(公民館長)

公民館長の K さんにお話しを聞いた。調査の都合上、トランスクリプトではなく、K さんから聞いた話を以下のようにまとめた。

- ・昭和南海地震発生当時は 0 歳だった。母から地震の話を知ったくらいで詳しく知らない。
- ・行政との連携はあまりないように思う。穴喰が行っている活動の情報が下りてこないから何もわからない。
- ・穴喰は県の防災モデル地域に指定されており、1 度トップの人を呼んだ会があった。
- ・どれくらいの方が防災活動に協力していますか？
- 全く自主防災活動はしていない。
- ・地域住民と共に避難訓練や実際に何か活動をしたことはありますか？
- 予算がないから何もできない。住民との話し合いの場を設けるのも難しい)
- ・合併で損をしたと多くの方が思っており、合併の弊害があると思う。
- ・昔は、文化的な活動が盛んだった（日本三大祇園として穴喰が有名だった）。穴喰間での交流・活動があった。
- ・穴喰地区住民の防災意識はどうですか？
- 防災意識が低い。穴喰住民は、閉鎖的なものがあり、人任せになりがちでリーダーとなる人がいない。
- ・男性がリーダーシップをとってくれないのに問題があると思う。
- ・頼まれたから公民館の館長をやっているが、女なのにといい周りからの目が気になる。女の方がリーダーシップをとって住民に呼びかけ、まとめるのは難しいと思う。だからこそ、男性に動いてほしいし、その方が上手くいくと思うのに男の人はあまり協力的ではない。さらに、穴喰のことをよく知っているはずである旧の町の職員は一切関わろうとしない。公務員ではなく、何をするにしても民間の人たちばかりが中心となって動いている。
- ・災害情報伝達はどのようになっていますか？
- 去年、町内に無線放送設備ができた。

・愛宕山の南側に空き地がたくさんあるからそこを有効利用できないだろうかと考えている。トイレの設備や住民が一時避難できる場所を設けるべきではないか。

K さんからのお話で、宍喰住民の防災意識と行動力の低さがわかった。東日本大震災がおこったことにより、2 度も続けて大きな地震がおこらないのではないかと思っている人も少なくないように思う。他人事だと思わず、住民が一丸となって防災に取り組む必要があると思った。また、国や県からの支援も重要となってくるだろう。

(3)L さん(自主防災組織会長)

A : L さん N : 内藤先生 S : 学生

A : 整備ですか。あの一、えーっと、何年か前に結局この真正面の階段っていうのは新しくなっているんですよ、中段まで。で、えーと、その話も、まあ、僕がちょうどいないときに、自主防災を自分がする前の人なんかで集まった時に、ほういう要望が出るとるいうて、実際は、こう、まっすぐじゃなしに、こういう風に斜めにつけてほしんだ、と。

N : 傾斜をですか？

A : 傾斜を。ゆるくなるようになっていう要望だったんですけど、それが町に持っていったらこうはつけられないからゆるくっていううんでまあ真っ直ぐなんだけどゆるくって、だから、こっちにひいてゆるくしたっていう。で、まあ、それぐらいが、工事としても関の山だったっていうんですね。で、結局、こしかないわけですよ。で、確かにないんだけど、年いった方ですと中段まではそこそゆるやかになったけど、その上なんて、ほぼ、もう、無理ですよ。

N : 厳しいですよ。

A : 上がったとか。ある人がいったんは、そんなん、みんな、ばあーって逃げるんだから、そんなんわたし踏みつぶされて死ぬんやけん私は逃げん、てね。とかいう、形なんで、もうひとつ、その一、どないかっていうんがないんですよ。で、一回、自主防の班長さんに集まってもらってっていうのが今年の 6 月くらいにしたんですけど、結局、上がってもらったらわかるんですけど、神社自体がもう、古いですよ。地震で揺れた時点で倒壊しそうな。なんで、ほれが倒壊すれば、当然上がる人数もよけい少なくなるっていうんで、そういうなんも含めてどないか考えてくれるように、町とか宮司さん、また自主防の代表者みんな集めてやってほしいっていう要望だったんですけど。まあ、あの一費用的な面で、じゃあ、だれがお金出すのっていったら無理な話ですよ。で、結局こういう要望でしたら今度前にも後ろにも進めないっていうね。

N : で、頓挫。

A : 頓挫してしまう。まあ、ね、東日本の震災とかから、話を聞けば、実際的には避難訓練であるとか、また地震が起きた後どうしていくのかっていうことも含めて、あの一、いろいろ、話をせなあかんっていう部分はあるんだけど、そこまでみんなの意識がいつてないから、もう、無理。掛け声だけかけても、無理よね。

(中略)

N : 八幡山のほうは・・・なんかコンクリでその辺の工事をするとか、宮司さんがおっしゃっていて。そういう工事をするとか。そういう予定になってるんよね？

S : らしいですね。一。要塞化するとかみたいな感じでしたよね。一。

A : 八幡神社のほうですかね？えーっと、宍喰として、この南部総合県民局の取り組みに手を挙げてるのは、うちのところと、久保地区が挙げてて。で、久保地区はほかにもジョウフク寺かな？なんかの避難路の整備が計画に入ってるらしいんですけど。

N : こっちはそれに比べると・・・

A: ないですね。

上記は穴喰住民にとっての避難場所である愛宕山についての L さんの話を抜き出したものである。下線部からもわかるように、この山の階段は傾斜がわりときつく作られており、実際に私たちも登ってみたが、結構な山道であった。高齢者を始めとした災害弱者と呼ばれる人たちが一斉に避難するとなると大変な思いをすることになるのではないかと考えられる。また、愛宕山を登った避難スペースとなる空間には古い神社が建っていて、それが広場のほとんどのスペースをとっていた。地震発生時、かなりの人数が愛宕山に集まることが予想される。昭和南海の地震でも人で溢れていたという話があるのだから、ほぼ確実であろう。この地域で今後の津波に備えるためには愛宕山の避難路・場所を改革することが重要な問題となる。だが、下線部に注目すると、お金の問題や町民の意識の問題によってその計画は、ほとんど行われていないということであった。話を聞いていくうちに、なにか自主防災活動に対しての諦めのような感情が L さんの話から伺える。それでは、この町の自主防災組織はどんな活動を行っているのだろうか。

N: . . . その一、避難訓練とか。例えばですけど、鳴門とか率先避難者っていうんですか、逃げろーとか言いながら、あの一、逃げて、避難行動を促進するような役割をわりと若い人に決めて避難訓練してたりとかってまあ、よくいくつかの所でやってるんですけど。そういう避難訓練的なことっていうのは . . .

A: 避難訓練は . . . えーっと、まあ、だから、あの一、実際何も動いてないんですけど、実際、町が年に 1 回とか避難訓練を朝の 6 時とかに . . .

N: 防災の日ですか？

A: いや、そうじゃなくって年中行事で 7 月の . . . 12 月？昭和南海のとき合わせてやっているんです。これも、ほとんど逃げている人いないですね。

N: そうですか。あの一、自主防がいろんな準備とか . . .

A: いや、何もないです。

N: あ、ないですか。

A: 町がサイレン鳴らして、まあ、避難訓練しましょうっていうんで、やってたんですけどね。今もやってると思うんですけど。ほとんど逃げてる人は . . .

N: 見たことがない？

A: ないことはないですけどね。まあ、田井さんとかは逃げてますけどね。

(中略)

N: 地域のほうから、そういうちょっと、避難訓練ですか？っていう意見はあるんですか。たとえば、お年寄りの避難を何とかしましょうとか。そういうのはありますか？

A: えーっとですね . . . 熱心にやろうよっていうのは田井さんが言ってるんですけど。あとはあんまり聞かないですよ。あとは、南部総合県民局のほうの企画に乗れば少しはなんか動きがあって、あるのかなとは思ってはいたんですけど。

N: あんまり、動きがないってことですよ。手を挙げた割には。

(中略)

S: 自主防としての仕事って具体的に何があるんですか。

A: 自主防の . . . 具体的に . . .

S: お仕事みたいになって . . .

N：普段の活動って、もしあればですけど。

A：あー、自主防として、ですよ。自主防を作ったのが多分、平成 17 年だったとおもうんですけど、けど結局なんにも動かないまま、・・・2005 年、に多分作ったままで、その組織図自体も、まあ、そのまんまで、動いてなかったんで、で、何年か前に変わってってなって、その変わったんやけどそれも、それもなんも変わってなくて、そのー4 月か 3 月に町がそういうなんをやりたいたいだけって相談に来て、じゃあ、みんなに声かけますねって言って、そしたら何か動きを出さなんだらっていうんで、そういう段取りにはなってきたんです。

N：はあ、なるほど。

A：で、活動としてっていうのは・・・動いてないんで何とも・・・言いようがないですね。

S：じゃあ、これからの計画とかもとくにはないですかね。

A：ないですね、今のところは・・・

穴喰町では年に一回、昭和南海地震が発生した 12 月 21 日に町が主体となって避難訓練を行っているらしい。ただ、下線部より、それはサイレンを鳴らして避難するように呼びかけるだけのものでほとんどの住民は参加していないのが現状や、それに自主防災組織が関与して避難を呼びかけたり、なにかの協力をしたりということもないことが伺える。これより、この地域の自主防災組織は町や南部総合県民局などの上の組織に依存しているような印象を受ける。さらに、町と住民との連携が上手くいっていないためなのか、避難訓練が「形だけのもの」になっているようである。それでもこの地域は県のモデル地区指定を受けている地区である。指定されているからには何か防災の活動をする必要があるはずである。そのことについて聞き取りを以下に挙げている。

S：あ、あと、県のモデル地区指定受けられてますよね。それってなんかどういうことなんですかね。そのー、どういふのがあから指定を受けれるみたいな規定ってあるんですか。

N：モデル地区になる根拠ですよ。手を挙げるってゆうあれですか。

A：あー、手を挙げて・・・。わかんないんですよ、僕も聞いてないんで。そのー海陽町自体が圏の指定に入ってるんだってゆうんで、で、手を挙げませんかってゆうことを言われて、じゃあ、手を上げましょう、とか、で、まあ、旧の穴喰であげたのが、自分らの所と久保地区だけだった。後のところは挙げてもないから、地震に対する意識も、ようは薄いんでしょうね。手自体も挙げてないから。

(中略)

A：で、そのー、俺も詳しくってゆうか、手を上げるのに詳しいことがいるんやけどってゆわれてもよく教えてくれなくて、で、なんかぼんやりした感じで、せつかく県がしてくれるってゆうのだから、手あげとったら避難路の整備ももうちょっとしてくれるんじゃないのって町に聞いてみたらそんなお金だす話じゃない。といわれて。じゃあ、どうやって逃げるのって。逃げる段階でここが崩れそうならどうにかしてよ、とかもうちょっと逃げるのにここをこうした方が逃げやすいんでお願いします。ってゆう要望出していくでしょって言うたら、うーんとかって担当者は言ってましたけどね。

(中略)

A：モデル地区に手をあげても 4 回の会があるとしか聞いてないんですよ。で 1 回終わったんだからあと 3 回。で、住民の方も来てもらっていいですよーとか聞いたんですけど、じゃあまたそのときに回覧板まわしますねーって話をして、で日の設定とか決まったら早く教えてください。みんな予定とかあるんで、って言うんですけどそっからなんも連絡がないっていう。一回はもう済んだんですけどね。つづけて 2

回,3回ってするのかなって思ったら結構間があいて・・・

N:一回目って点検をしたときですか

A:じゃなしに,新聞にも多分載ったと思うんですけど,町長も出てモデル地区から1人とかでて・・・南部総合県民局とか・・・

N:それって海陽町のやつですよ.

A:海陽町の会ですね.

N:宍喰自体の会ではないんですよ.宍喰地区だけの・・・みたいな.

A:それはないですね.で,一回海陽町でやって次はモデル地区としてやっていくようには聞いてるんですけど・・・.

県のモデル地区への指定は何か活動を行っているから指定を受けられる,というわけではないらしい.もしかしたら,「自分の地域はモデル地区に指定されている」という意識を住民に植え付け,防災に対する意識改革を行うものなのかもしれない.宍喰地区は防災に関する知識も,経験も多くある地区である.なのに,今の自主防災の状況を見るとそれを上手く生かしていないということがよくわかる.また,「モデル地区指定に手を挙げたのだから,南部総合県民局が(町が)何かしてくれる」といったような行政頼りの姿勢も伺えた.今の宍喰には災害に対する危機感も自分たちで何か行動しようという意欲も,どうも感じられない.町の防災活動は町が中心となっていて行われていること.防災に積極的な行政と消極的な町民との間にギャップがある事がわかる.

5.宍喰浦の防災体制の特徴

これらの調査結果から防災体制の特徴を検討してみる.聞き取り調査から分かったことは,①自主防災の組織率は高いが,自主防災を中心とした防災活動はほとんど無い ②町主体で実施されている避難訓練に,町民も自主防災組織さえも積極的に参加している様子は見られなかった ③愛宕山の整備計画があるが,そもそも避難場所の選択肢が無いという根本的な問題への対処が進んでいない ④行政依存体質がみられる ということである.このことを,防災の基本である自助・公助・共助という軸で分析を行う.ここでの,自助は住民による避難行動,公助は行政による支援,共助は自主防災組織のこととする.調査によれば,宍喰浦では,公助はしっかりしているものの,共助については形だけの自主防災組織しか存在しておらず,自助についても町民の防災意識が低いことが分かる.共助が空洞化してしまったことの原因は「地域住民が行政に依存してしまっ」ており,町と地域との連携が十分にとれていないこと」すなわち公助と共助のすれ違いにあるかもしれない.

	公助	共助	自助
阿部	△	◎	○
宍喰	◎	×	△

図1. 阿部と宍喰における防災意識の違い

公助・共助・自助の軸で阿部と宍喰における防災の特徴を比較する。(図 1 参照)阿部は公助もあるが、それ以上に地域住民によるマイ避難路を創ったように共助が充実している点より◎,住民参加の避難訓練が効果を発揮していることから自助も○とした。一方の宍喰は,町や南部県民局などからの支援はあるため◎なもの,実効的な自主防災組織が備わっていないため共助は×,住民の避難意識も愛宕山=助命山から変わっていないため自助も△とした。

6. 県南地域における津波防災上の課題

まず,県南地域では過疎・高齢化のために防災組織の維持が困難であること.宍喰はその一例である.そして実効的な自主防災組織が機能していないために,せつかくの災害文化が,住民主体の防災活動に活かされないという問題点があった.しかしながら,阿部では,高齢者が主体となって自主防災組織の組織化に成功した.すなわち宍喰のように過度に行政に依存するのではなく,下からのつまり住民による防災組織づくりが重要である.このような実効的な自主防災組織(共助)が公的機関(公助)や個人に働きかけたり(自助),両者を媒介することで,地域の防災体制が確立するのでは無いかと考えられる。

7. 「下から」の防災組織づくりにむけて

地域の特徴を踏まえた効率的な防災を実現するためにも,地域固有の災害文化を防災に活用することは重要である.宍喰においては,災害文化は公助・自助に限ればある程度活用されていることが分かったが,共助に関しては,田井さんが積極的な活動をしているものの,自主防災活動に活かされているとは言い難いものであった.それは災害文化を共助に活用しようにも,自主防災組織の多くは上から組織化されたものであり内実がともなっていないものであからだ.すなわち,地域の災害文化を活用した防災体制を構築するためには,実効的な自主防災組織づくりが欠かせないことが指摘できる.日本における自主防災組合は,町内会と重なる形で組織化されることが一般的であった.しかしながら,各地域には町内会とは異なるが実効的な組織や団体が存在するのだ.それらをベースにした実効的な組織づくりが必要である.それは例えば,漁協,農協,神社,お寺,ボランティアな組織等かもしれない.地域における「下から」の防災を実現するためには,これらが中心となって,地域住民間のつながりを育む場をつくることが重要なのではないだろうか。

〈参考文献〉

- ・「宍喰町史 上・下」由岐町教育委員会 (1986年)
- ・「震潮記 阿波国宍喰浦地震津波の記録」田井久左衛門宣辰 著,田井春代 翻訳 原田印刷(2006)
- ・平成 22 年国勢調査 小地域集計 (総務省統計局)
- ・「南海大地震 50 年の記憶と教訓」伊藤和明 宍喰町 (1996)

補遺 穴喰浦における聞き取り調査の内容

(1)A：Aさん(79歳男性) B：Aさんの奥さん N：内藤先生 T：高橋先生

A：桜の木が揺れてね、

N：地震ですか？

A：そう、地震で、ちょうど台風が来た時のような感じやったね。それからもうね、ちょっと家の中おったら危ないゆうことでて、ちょっと横に広場があってそこに逃げとったんやけど、余震が、その間も来とったけど、ちょうどね、その逃げとる家族でみな4人で逃げとるところを、この通りをね、この通りを浜のほうの漁師の人やろね、大きな声で、大きな津波が大きな津波が来よるからはよ逃げよーゆうて、声かけてその人は逃げよったね。ずーと声をかけながらね。私も初めての経験で、中学校1年生で「どないするー」いうて、いまだったら分かるけど、どないするんかわからんし、親も津波来よる言うけんはやく逃げようか、ゆうて服着かえて、悠長なもんで、服きかえてなんやかんや物もって、・・・何に入れたかな、何かに入れて肩にこうかけて逃げたんやけどね。そのじぶんは、べつにね道路も何も支障なかったですね。家が崩れとるとか、電柱が倒れとるとかそういうようなあれは

全然なかったですけどね。ほんでみな、・・・あのね、愛宕山とところわかりますか？

N：あの、役場のあたりのところですよ

A：あそこがこのあたりで一番たかいところ。みな、かなりそこへは逃げよったんやけど、我々、ちょっと、うち、奥に、まだ奥に3キロぐらいに先に親戚があるからそこへ逃げたんです。だから、結局ね、それが、いいかわるいか、それが今から考えたら問題があるんです。ずっと、町はずれをずっと行きようるときに、道路がかなりひび割れてね、ほんでその前の田んぼは、もう、なんか、ピカピカ光りようるようなん。何が光りよんかないうてみよったらもう津波が来よるですね、もう、たんぼをずーと。田んぼはね、なんかちょっとこう段になつとるような田んぼだったんです。

N：どちらのたんぼですか？あの、小学校のある・・・？

A：小学校のあの、周辺。そこをね、光が・・・わっ津波が来ようるて言いながら逃げたんですけど、いまだったら、いまの東北のようなんだったら、間違いなくやられとんだろうな、って思うんですけどね、年寄りも連れとんし、おばあさんをね、そげん、はやく逃げれるわけでもないし。

N：当時何人で避難されてたんですか？

A：1,2,3,4,5人です

N：岡さんとご両親と...

A：私と兄弟と、ほんで母親と、ほいからでおじさんになる人と、おばあさんなるひと。父親はちょっとね、役場に勤めとったからね、逃げるわけにいかんから、こっちかわにおるからみな逃げいうことで逃げたね。

N：荷物の準備とかは地震が終わってから始めたんですよ？

A：ほらもう全然なんにもそんなあれは準備してなかったね

N：その当時って、ま、中学生でしたからあれでしょうけど、どんなものを・・・荷物を準備されたんですか？

A：いやーねー、父の里が奥でしたからね、食べるものはたくさんあるから心配ないだろうと、ほんであのね、持って行ったのはね、冬でしたからね、

吉田さーん、・・・(電話で中断)

A：寒いときやけんね服を着たりねえ、ジャンパーかなんかを、ほんなんかを持って、あと懐中電灯かなんかを持って逃げたんは記憶にあるけどね。ほれ以外に何をもっとたかなんて全然記憶にないね。もう、ほ

んだって、あれから何年ですか.65年くらい・・・

T：みなさん愛宕山に向けて登って逃げて行かれたんですよね。

A：ほとんどの人はね愛宕山か八坂神社の

T：あー、八坂神社の祇園さんのほうへ？

A：あとで聞いた話によりますと、愛宕山の階段の方も上の方もいっぱい・・・

T：そうですか。

A：途中の階段で御座しいて寝たやゆう人もおるし、子供寝かしたという人もおるし。

T：愛宕山に登ってしばらくは山の上に居たんですよね。そこで避難して1,2日はそこに居って・・・

A：いや、もう朝になって9時,10時ごろにはみな下りたんだろうと思うんやけどね。

T：水もそんな下の方には出てなかったんですか？

A：ここらでもね、こっから100メートルあたり。いや・・・50メートルあたりくらいのところまでは来たんだわ。ほんで、そのちょっと下の方あたりにはいわゆる、ろう船がうちあがとったんね。道路に。

A：・・・あれねえ、あんな地震初めてやし、津波の経験はないし、だから、まあ・・・無防備な状態で逃げとるけんね、しかも12月の下旬やし、N：そうですね、寒い時期ですよ。

A：寒いですよ。いまから考えたら、もっと常日頃から準備しとかんといけんのかなあ言うてもう、リュックを2つくらい・・・

A：こういうような案を作りよんです。下から・・・愛宕山自身が小さいから、土台からコンクリートで・・・

N：拡張して？

A：拡張してってどンドン上あげってって、ほれと一緒に木も切って、まあ、全部切る必要はないかもやけど、ほんで、上も整地して、ほんで、愛宕神社の、その一、祠も作って、ほんで、避難してくる人の、雨露しのがなあかんからね、屋根を付けたような上で休むところもつくって、その一、前のときにはトイレに困ったということは、あそこに逃げた人らのおんなじような、共通のあれやったけんね、だから、トイレをどっかへ、きちんとしたトイレを作る。そんな提案しよったら、トイレで、トイレ問題があるんやね。管理にしる、場所にしろ。まあ、いろいろあるけえど、まあ、お腹すくんも、あれやけど、もっと、とにかくは、みな、人間おんなじやろ思うんやけど、人間恐怖心に駆られとったら、トイレ行きたくなる思うんですよ。だから、もう、トイレをなんぼか作らなんだら・・・せやって、突喰の松の裏ゆうたら、逃げるとこあそこしかないんです。防災のあれで決まるとんが、町内で避難場所いうたら、みな愛宕山、愛宕山、いうて、この辺はみな愛宕山。そこへ、何百人の人が逃げよってもうまけでる、思うんです。

N：むかしも、そうだったんですか？

A：昔もそうだったはずですけどね。だから、昔のあのときは、もういっぱいだった、いうてたけどね。ほんでトイレに困って、もう、いや、もう、後になったら足の踏み場もないくらいだったという人もいたみたいやけどね。私もそういうような状況見てないから、又聞きしたはなしやから、はっきりしたようなんは言えんけど。だから、やっぱり避難するんには2,3日の食糧いうけーど、やっぱり、それとともにトイレもね。トイレの問題を何より先に考えておかんとね。ほんで、ここらだったら、次逃げるいうても平地やけんね・・・

N：とくに、その一例え慶長とかでも昔も何回も大地震があったと思うんですけど昔からの言い伝えとか残ってなかったんですかね。こういう風に逃げなさいとか・・・

A：私も詳しくはあんまり、その一、あれや、言い伝えいうんは・・・よくいう、井戸の水が枯れたら津波が起るとかいうような、そのようなことは、言われとつても、そりゃ、体験せんとあかんはな。

T：実際そういうことがあったりしたんですかね。南海のときに。

A：けど、それは一、わたしら、聞いてはないけどね一。やけど、これが昼だったらいろいろな現象がまた、起

こつとるんがみえとるかもしれんね。晩寝ようる間で、朝方、ねてから6時間、7時間・・・何がおこつとるんか、ね、自然のあれが・・・、変わつとるゆんが、わからんけど。その一、あれが、だいたい、私も、地震が、起こされるまでは全然わかってなかったしね。起こされて初めて、何かいなおもうたら、親が地震じゃ、は夜逃げろいうて。昔のひとは、あれ・・・、地震が起こったら戸が閉まったらあかんから、

N：あける？

A：そう、開けるいうてたけどね。ほれと、昔の家の2階の階段いうんは、単に置いてあるだけのようなものだったからね。

N：急ですよ、ね。・・・

A：海岸の状況から家の造りからいうて、いろんな状況を考えたら、まあ一。逃げん方がええかなーで思ったりします。逃げるまでの間にもし、電線が切れて切れとる所に行ったら、感電して、それで、そんなもんで死んだら。あるいは、電柱を、またぎながら逃げなあかんいう、障害もあるかもわからん。避難しょーる途中に余震が来て屋根瓦が落ちてきたらとかいうたらね、またそれで怪我するやかもわからんし。あんがい、愛宕山のほうへ逃げるとこいうんは、細いところがようけ一あるんですね。古い家もあるし。潰れて・・・

B：そこまで行けるかもわからんしねー

N：そういうのも心配ですよ、ね。

B：心配です。やっぱし、店に来るお客さんでも、いろいろ、そういうこと話するでしょ。

N：今度来る津波がもし来たとしたら、時間も短いみたいですよ、ね。

B：6ふんくらいですかね？

A：1波から第2派あたりが一番大きい言うよ、ね。第1波がどんだけの大ききなんかをみて、もっと大ききなを想定せなあかん。想定したから言うたって、2階で居って外の様子を見ながら判定しても、もう、逃がれん。逃げるところがない。

B：こつからね、あの一避難訓練のときにサイレンが鳴ります。5時なんぼかな？

N：早いです、ね。

B：早かったんですよ。お父さん行かなかつたけど。まあ、訓練あります、いうて、心構えしとつたから、まあ、いつも居間のところに置いてある服着て、サイレンが鳴ってから着て、リュック出口に置いてあるんですけど、それを持って、そこまで行くのに7分かかるんですよ。今の、足の状態でですよ。もうちょっと年をとってきたら、そんなにスピード出んけん、ね。今、たつた、たつたと行って7分でした。あそこまで。

N：たぶん6分というのは、1mの津波が来るのに6分なんですよ。それから、かさが上がってくるので、もうちょっと時間があります。

B：じゃあ、それまでに逃げればいいんですよ、ね。

A：・・・去年のねー、台風。去年このあたりで台風が来てうろうろした台風の影響を考えたら、もう、あの一、みとこの湾の防波堤があの一南海地震のときには・・・

B：なかつただろ。

A：なかつたかな？あの一・・・

B：去年のね、台風でね、堤防がずってしまったの。

N：そうなんですか。ずれたんですか。

B：だから、なんか怖いなーいうて。あの一、後ですよ。3月11日の後。去年の夏。

わりと大きき、いや、そんなに大ききはなかつたんだけど。波がごつかった、ね。うねって。

A：人間が100人やそこらかつたって動くものでないやつが、転げとつて、ね。

B：波の力でねー。その一、津波ってどんな程度来るんだらうかっていうて、ね。

テレビみてたらすごいもんね、あれ。

N：そうですね、東日本の。あれは驚きました。

B：ねえ。あんなの来るんだろうかって。

A：そりゃあ、こころもパーセーターでは高くなってるけど。

2,30年の間には来るだろういうて・・・

N：僕ね、美波町の方の阿部ゆうところで

B：阿部？

N：そこ、一応高き的には一番高い津波が来るということで津波対策・・・自主防で割と活発的にやってらっしゃる人も徳島市の・・・

B：あんねー、テレビでも見ましたけど・・・

N：そうですか。よく出てきますよね。あそこは今まで津波は来るには来るんですけど、2,3メートルくらいで、最初地形がよくって、岬が防波堤の役割をして、ほとんど来なかったんですよ。ところが今度は津波の方向が違うみたいで、もろに津波が来て今度20何メートルとかの・・・

B：みな、自主的にして、ちゃんとねー。

N：山にも、こう昔の道で、それやってる方もずっと徳島市で銀行員されていた方で、定年してから戻ってきて、まあ、10年くらい暮らしてから、今度阿部で・・・銀行マンだったからいろんな人脈があって、はい。避難訓練とかをいろいろな人に呼び掛けて、70くらいの方なんです。

A：まあ、あの一。私、伊座利におったんだけどね、阿部の向こうの・・・

N：はい、あ、そうなんですか。

B：第2室戸台風。あの経験があるんですよ。ちょうどあの時に伊座利にいましてね。ちょうど、主人が向こうで、学校に、伊座利の中学校、小学校？中学校やね？？そこへいってって、私も、ちょうど私、嫁に来てすぐだったので、一緒に行って。ほんで、第二室戸台風の時に、伊座利ですごい被害があったんです。あの一、家がない、大きな建物が、こう・・・

A：そりゃあもう、校舎の屋根がもう飛んでいってしもうてねー。津波も川をさかのぼって、津波やない、台風の大きい波が・・・今は港もちょっと作られて、昔とだいぶ様子が変わるとるよね。砂浜で上がって・・・(中略)まあ、自衛隊が道路作ってきれいにしてくれたけど。そりゃあ、あの一あの時分も、第二室戸台風の時も、このへんも、えらいやられとるわね。津波よりも台風に今までやられて来とるねー。このへんは。

N：まあ、やっぱり波が来ましたら浸水とかしますよね。

A：そうねー。増水とかねー。やっぱり、昔から台風大雨の被害を受けよったんよねー。そりゃあもう、海岸沖は・・・もう、ほんとに、あれ、いつ、なにが起きるかわからんあれを考えるとかなあかんね。ほなけん、やっぱり、山が迫って来とるさかいに、土砂崩れとかも、人家を押し流すとかゆうあれは、ほんな、まあ、そうはないけど、だけど、海からのあれと、山からの災害とで、ほんとに多分ね、この突喰あたりは・・・大きな災害を受けるだろうと。波と、山からの土砂崩れと、当然こころ孤立してしまうだろうと思います。それはもう間違いない。ま、救援をして、そんな地震・津波でね、救援をしてくれるだろうけど、まず、ほの一、陸上ではダメ、空以外ではダメゆう形になると思う。ヘリコプターやって・・・おりるところがどんな状態になってるかでは・・・ねえ、わからんし。

N：そうですね。

A：これがすべて来てみなかったら・・・これは、いいだろうと思うとってもダメ。結果をみてみると、いろんなケースを考えてねー。これがダメならこっち、ダメならこっちってねー

B：とっさのことやけんねー。それが、こう、浮かんで来ればいいけど。ねえ・・・

N：自主防て、ありますか？自主防災組合みたいな・・・

A：防災組織的なものは、あるような、ないような・・・。本当はね、その一、なんていうかー。こういうような、防災の話みたいなんは、起きた時のためにいろいろ話す、あーじゃーこーじゃーて注文つけたら、ほな、後で行ってた人らが、よう言うてくれたー、て。言わずにそのまま黙ってもうてしもうてたんやけど。よう言うてくれたー。て言うけんね。どうしてやろうか、自分だけのためにやのうて、ほかの人、町民全体のために言うて、ほんな、遠慮することないのに、そんなこと言う人もおるしなー。どしてやろうか。町民性かな？引っ込み思案。笑

N：みんな、声が大きくないゆうことですね。どんな注文されるんですか。

A：私らは愛宕山の整備を。あとは備蓄品。ほんな何やらを含めて。あの一、だいぶ前にも町長諸君のおるところで言うたんやけど。もっと愛宕山の整備を良く一、言うて。せやって、年寄りが、逃げれんでないか一言うて。それ以降にね、階段も直してくれて、手すりもつけてくれた。あっちこっち行ったり来たりできるようにしてはくれたんやけど、ほれですべて、良しではない。さっき言うたように、トイレの問題もあるし、備蓄をするために倉庫を建てて、ゆう注文をいうとるんだけど。備蓄倉庫をどこに立てるか、上にたてる言いよんやけど、その前の段階で、神主さんにあの愛宕神社をどうされますか、言うて、交渉したんや。

B：神主さんが持ち主やけんねー。あれ。

A：ほんでね、神主さんと神主さんの息子と、こんな話をしたんや。あそこの愛宕山、もうみんな、町民の防災に使おうてもらうようにして、神社じたいも古いからもう、建て直して小さな祠でもいいから小さにして、あそこの上をもっと整地して、みんな使えるようにしたらどうな一ゆうて話ができとんやけど。さあ、今度はその神社を移転？整備？する費用やなったら、もう寄付を集めて。寄付を集めるんに、何人かに呼び掛けてみてるんやけど。難しい話になってくるし。もう、そんな時間も、日にちおいてあるんやけど。とにかく上を、さっき言いよったように上から下から整地して・・・いわゆるね、私は要塞化したいんよ。

N：要塞化ですか？

A：要塞化して、城みたいにしたいんよ。そういう念願があるんやけどな。金の問題があるし、単なる机上プランだけで、しゃーないん。ほんで、お年寄りにも乳母車をひきながら、かなりのところまでは曲がれるようにしたいし。

N：そうですね、シルバーカーって使ってる方多いですもんね。

A：だからねえ。これからもそんな人増えるやろしねー。ほんんで、もし・・・足の丈夫な若い人ばかりが残るってゆうわけにもいかんしね。若いひと年いってくるし。ほんでねえ、まあ、あれです。そういうような、将来的なものも含めて、その土地、土地によって違いはあるじゃろうけど、海岸に津波が来るいうんは海岸線に住んどるもの、みな共通の問題やけんね。今の海南地震は、あそこは大丈夫やろうけど、あそこの海拔がどーの、こーのいうて、も一どこに住んだらええんかい、思う。山の上いうたって、高い山やいうところあるかどーか。不便さもあるし、年いってきたら高いところ上がることもなかなかできんし・・・まあ、いろいろ考えたけど行き着くところは防災のための資金ゆうかね。それがやっぱり問題かなあ、思います。

N：神主さんと神社の地権の話って今年ですか？

A：去年。

N：去年ですか。去年の12月に津波の高さの情報を出したあの後ですかね？

A：私が神主さんの息子と話したんは去年の混乱の前やけどね。やけど、婦人会や一緒に行ってやいうけん、神主さんのところへ行ったんは今年ですね。

N：あー、そうですね。

A: それは、備蓄倉庫を上にあげるのにあげてもいいかどうか、山の上からね、神社のところにあげてもいいかどうかゆうことですね。それやって、そのまえにせなんとあかんこともようけあるんですね。道を整備して、上へあげるのに、あげる・・・まあ・・・ただ単にあげて上のどこでもいいとかやないから。やっぱり、神社の愛宕山の中腹あたりに置くんか上に置くんか。そのあたりの木はどないするんか。そりゃあ、木が折れて倒れたら、備蓄倉庫かてへちやげしまう・・・ね。せやから、順序追ってこなしていかなんだら、あれをしてーこれをしてー、ってみんなが勝手に言うたってなかなかね。そしたら、後になってまた手直しをせないかんくなる。できるだけ、まあ、少なく効率よくできんかな思って。

N: 婦人会と一緒に陳情しに行ったのは何月のことですか？

A:

B: 6月よ、お父さん。6月に議会があるけんてその前に行ったんやないかと思う。

A: あー。まあ、陳情にいて町長は・・・町のほうは承諾はしてくれたみたいなんやけどね。けど、私はそれとともにこの辺の地域の署名をとって、避難塔を作れゆうんを陳情に行ったんは行ったんやけどね。そのへんで・・・町長のところへ。

N: それは今年のことですか？

A:今年やったかな。うーん。それは、あそこの、避難塔見てきましたか？

N: まだ見てはないんですけど。7mのがありますよね。でも、あれでは足りないですよ。

A: あれでは、高さ足りないでしょう。ほらー、全然、大水なんかの時では役に立たんことは無いんやけどね。あれー、あそこへ何人、なんぼ上がれるもんか。雨なんかの時にあそこに避難できるもんか、居れるもんか。どうか。そんなもんもいろいろ、考慮せなあかん。ほんで、ある程度、長時間避難するような状況にしとかなんだら・・・1時間、2時間の避難やないんやから。

N: そうですね。

A: よく見ても、6時間の避難ですよ。そのためには、やっぱりトイレをちゃんと作っとかなんだら、とうてい居れんと思う。もう、ほんなようなこと考えて言いよったら、果てないかもわからんけど、言わんことには・・・実現していかなあかん。

(I) A: Cさん(男性) N: 内藤先生

N: どうでしたかその当時？Aさんはやっぱりその山の手の方に、上に住んでるんであまりその被害はなかったらしいですけど。

A: そこまではいってなかった。しかしねあの昭和29年12月21ですか？早朝ですけどね。未明ね。あの、実はえっとね。ここも行くと思うんよ。垂井いうとこ。ここは私の母のね。実家なんですよ。

N: ああーそうですか。

A: じいさん、ばあさん、祖祖父がおったからね。

N: はい。

A: ほれでまああの、子供もおったしそこに泊まっとったんですわ。ほいでそこでたまたま地震におうて、夜中あのー飛び出してね外に。飛び出してあのー、やりすごしたんですけど、まあその時の印象としたら、この前でね一軒つぶれてね。

N: あっそうですか。

A: ええ。

N: 地震でっていうことですか？

A: そうです。ほれであのー私らと同年代の男の子が一人死んだんですね。

N：あーそうですか。

A：ほんでまああの一、ええ一、ほの時の私のちょっと覚えとること言ったら。

N：はい。

A：もう、寒かったっていうことですかね。冷たかった。裸足で飛び出したもんですからね。

N：そうですよね一。あっもう地震があったらすぐに？

A：飛び出て、すぐ飛び出したんかもあの一連れられたかはちょっとよう覚えてないんですけど。

N：はいはい。

A：とにかくもうさぶ一て震えよつたと、もう足が冷たかったんはもう覚えてますね。格好ももう寝間着一つでねよつたんで。

N：はい。

A：そうこうしよるうちにね、誰かがあの一、スルメ。当時はね晩あの一スルメがようけかかっとなってね。

N：何か、やたらと、その時はとれたとか。

A：ん一というのを後で聞いたのと、その漁にいつとる人があの一何かこだまいうんに何か荷物入れてこう何人か帰ってきよつたんですけど、その人か誰かが津波やというような声を聞いたんですよ。

N：あー一。

A：津波でいうても私当時知らなんだんでね。

N：はい。

A：何かは全然知らなんだんです。

N：あっそうですか。

A：津波や声聞いたらず一と水が上がってきてね。突然その下水からきた。ぎ一ときたんじゃないかと思えます。ぎ一と上がってきてどんどんどん流れてきたように思うんです。ほの水がまた温いんですね。

N：あー一。

A：まだほのあったかいんいうんは印象あったのを覚えていますね。

N：はい。

A：ほんでその足が冷えてて、今はもう町こころ突喰なんかはほとんど氷なんかはらんのんですけど。

N：はい。

A：当時はもう氷がようはりよつたから、今はもう温暖化してぬくなっていますけど、星がようけでたからよう晴れて冷えこんどつたっついでよつたんです。

N：あーはい。

A：ほんでず一とずつと流されてね。そうしよるうちに水がどんどん増えてきてあれもう胸まできてこれぐらいきて、背伸びしたりしてこう口の中に水入ったりしながら流されてきたように思うんです。家の中に入ろうと思ったけど、とてもガラスも割れてしもとるし流されてくる物も多くて、もう入れなかったんで、ほんでちょっと横いったら割木の積んでいる所があってほの上は何人かおつたんですね。私も登ろう思ったけど、とてもよう上がらんかったですね。ほしてほれようわからんところきたらほこの四つ角で下水のところにドボンと落ち込んだんですよ。

N：あっここでですか？

A：ええ、ほこももう今はもうちゃんとフタもあるんですけど、当時はもう貧しかったし、フタもなかって、車が通るとこだけ板を置いたり、割木をこう並べてたね。

N：あっなるほど。

A：ほんなん水がきたら全部流されるけどね.ドーンと落ち込んだらもう背が立たんようになってね.

N：あー.

A：顔上げよう思ってもなかなか上にゴミいっぱいであげれんで水がぼがぼ飲んで,何か気失ったようになって,ひょっと気づいたらこの辺りまで流されてたんですね.

N：あー.

A：ここら辺り.停留所あたりの前まで流されてそのんがひき上げてくれて服をかぶせてくれたんかな.ずぶ濡れのやつを.ほしてその前の三島さんの家の二階で朝まで泊めてもらってたんです.

N：じゃああたご山まで逃げたりせんかったんですか？

A：あーほれはあたご山とか全然知らなかったですね.ほんでまあ地震の方はここで落ち込んでほんでおもいきり水飲み込んで,記憶はちょっと朦朧として,ほの間はようあんま覚えてないんですけど,助けられたと.

N：他のご家族の方っていうのはどうされたんですか？

A：えっとねー,他のは全部あたご山に逃げたと思います.

N：あーそうですか.

A ええー.

N：去年の12月にですね,えーっと津波の高さですね.想定がだいたい以前のと違っていると思うんですけど何か対策っていうのは？

A：対策はーないんちゃうん.ほんでねー私はあのーあんまりこの辺りでは言わんのやけどね,もうあの高台移転やね.

N：あーはい.

A：これを考えないかのちゃうんかな.ほなってまたね安政でやられてまた昭和でしょう.ほの前もやられとる.定期的にやられよるんでね,もうちょっと人間バカとちゃうんやからこの記憶に習ってあのー学んでね.全体におもいきってもう新しい町の計画をすとかね.であのー移住さすような,するべきやと思うんですけどね.また心配せなあかん.

N：そうですねー.100年おきぐらいきてますからね.

A：そうですね.またあのー堤防作ってももういつまでももつわけやないし,ほんでまあそうゆう公共財もそうやけど個人の財産も各家建ててね.30年,50年でまたゼロになってしまうと.ゼロやったらいいけど,ローンあったらマイナスになるからね.

N：そうですね.

A：ほんなこと思うたらね.もうおもいきってもう今の町の方で県かどっかに力いれてもらって高台移転.絶対,ほほもう心配ないというような所に移転さすべきやと思うんやけどね.まあどこの集会行ってもあのー避難所作れとかあのータワー作ってくれとかいよるけど,移転を考えというのあんまり聞いてない.遠くの方に移転しとる所は助かつとるしね.

N：はい.そうですね.

A：ほんだけええ手本があるんやからね.学ばなあかんちゃうかなと.

N：確かに.そういう意見もありますよね.

(3) A：Dさん(男性) N：内藤先生

A：66年かなあ.そしたら19歳やったかなあ.

N：そうですねえ.

A：ほいでねえ。私もねえ、経験はしとるけど、あんまり深刻なものにおうてないんですよ。

N：あっそうですか。

A：地震にはあってるけどね、津波には、割とはよう逃げたんでね。

N：あーそうですか。

A：ええ。

N：当時あの一どうでした？あの一地震起きたのは当時未明でしたよね？

A：未明、4時、4時ぐらいやね。ほんで私はねえ漁師だったからね。あの一ほの晩妙にね、スルメイカとれたんですわ。ほれでとれてね、私もいっとたんです。

N：あっはい。

A：ほれで、押し船やってね、ほなけどねあの時は、やっぱり後から考えるけどね、いつもと違ってね、何や気持ちの悪いねえ、何かねえおかしかったんです。ほいでねえ、錨をやって、こうやとるわけ。ほの時に限ってね、潮があっちいたりこっちいたりするんよ。

N：おおー。

A：ほれでその一晚に、普通は変わっても1回や2回やけど、ほの時は、あっちいたりこっちいたりねえ。

N：はい。

A：地震の影響のせいで、ほんなんなるんかなあて。

N：あーそうですね。

A：二階でねえ、何人かで寝よったんです。ほれで地震でおまはん飛び起きて。ほいでまあ、地震が止んでからやけど、ほれからまあ、走ったことは走ったんですわ。家までね。

N：はあ、はい。

A：ほんで、俺が、何分かねえ、2分くらいやないかなあ。ほれで家来たら、帰ってきてね、家から出とる人は少なかったですよ。おもたより。

向こうから火事や声聞こえてね。ほれ聞いとる人は何人もいますわ。火事やいうのがあって、ほしたらみんなさんさん出てきて、ほんで妙にねえ、役割が決まっててね。

N：おおー。

A：私が一番下の2つになるのおぶってねえ、ほいで77の、ほんで着物着とんのを、帯つかんでね、ほいで私が連れてきた。

私たちのところの近くには、ええ年になるおばあさんがおったんですわ。その人が安政の経験しとんですわ。やっぱほんな人らが、なんせ地震、津波の時はあたごいうん、あたご山ね。

N：はい。

A：ほーゆうのがあって、あたごさんに逃げろ言わんずくにみな逃げた。

A：べんてんさんに上がることになっとんですわ。まあわずかやね。

N：そうですね。

A：距離にしても。

N：ええ。

A：200メートルないですよ。ほれを前訓練の時に、いっぺんやってみたんですよ。

N：どうですか？急じゃないですか？

A：いや、逃げれるねー。時間もね。ほいであの一サイレンが鳴ったらパッと行くんですよ。ほいで、あの一パジャマきいて、靴はいていてね、ほいで訓練やさかい歩いて行ったんですよ。

N：はい。

A：歩いてね、山のふもと行ったらね、4分かかりました。

N：あー。

A：ほんで、地震がきて5分やいうたら、私やもう、ねれとりますわ。地震がきたら、電気やって消えるかもわからんし、今回は4分やけど、ほんならあんたら、地震がきたら、なんやして、逃げ道もふさがれとるかもわからんし、いよつたらあんた、5分や6分いうたらあんた、難しいやないですかー？

N：いや、あれーいきなり20メートルばつとくるんやなくて、こう最初の1メートルぐらいのが、くるところがまあ5、6分ですから、まあ実際はもうちょっと時間が。

A：ほいであれー、5分で逃げーいよんですけど、ほんでここだったら20メートル。

N：はい。

A：あれなんですか。三陸の方テレビで見ても、いっぺんにや

N：いっぺんにはこないです。

A：こんなんはこんのんでしょう？

N：まあ、どんどん高く

A：ほいで20メートルやろうねえ？

N：そうですねー。

A：けれどまあ、かなりの勢いできよるわねえ。

N：堤防もいきなりは越さないんですけど。だんだんだんだんって、最後に20メートル越すっていう。

A：第一波のほうはやっぱ低いんですか？

N：そうですね。第一波より、第二波のほうが高いですね。

A：ほれやったらねー。第一波が何メートルで、あそこ越さんかったら、どうにか逃げれますわねえ。

N：たぶんあの一、波がきだして、どんどん逃げて、先にあがるってことですね。

A：けどねー海に向けて逃げるのはねえ、心理的にちょっとねえ。

N：そうですねー。ちょっと怖いですね。

A：ほんでここの奥さんが、若いんですけど、もう車で逃げる。走って逃げるいうてますね。

N：そうですね。海の方ですからね。

N：あたご逃げる時はかなり混み合っていましたか？

A：ある程度混み合っていましたね。ほなけんどの一逃げてあの一、ちょっとおかしいのがね、あたごの正面のとは結構急なんですけどね、じいさんも上がってましたからね。やっぱり年寄でも、上がれましたからね。

N：火事場のくそ力ってやつですかね。

A：ほうやねー。

A：炊き出ししてくれたんですよ。

N：それは国がしてくれたんですか？

A：いやーたぶん町がしてくれたんですよ。

N：それってどのぐらいやってくれたんですか？

A：炊き出しはーかなりやってくれたんですよ。

N：あっそうですか。

A：ええー。一週間はしてくれたんじゃないんですか。

N：漁の方は？

A：漁の方はね、しばらくね。網とかがね流れてしもうたんですよ。全部じゃないんやけどね。

N: どのくらいですかね?一か月くらいですかね?

A: どのくらいやろねー。一か月くらいはできなかつたんじゃないんですかね。

ほれでそれから,スルメがかかった記憶がないんですわ。

N: あっその後ですか?

A: 津波のあとね.記憶がないですね。

N: 網はかけてたんですか?

A: ええ.餌つけてひっかけたりね.その後は他のがボチボチね。

(4) A: E さん(89 歳男性) T: 高橋先生 S: 学生

T: 「あの一,あの時は朝の早い時でしたかね?午前...」

A: 「4 時...」

T: 「4 時,5 時頃.まだ暗いうちに

A: 「暗い暗い」

T: 「その時,どういう状況でしたかね?いきなりきて,揺れが始まってという...」

A: 「最初緩やかなんがきて,それからぐらぐらぐらと急に大きく...」

T: 「立ち上がれないような感じ?」

A: 「最初はな,ふらつときた時これ地震やと思って.服... 裸で寝よったかいな... 漁師やけん.慌てて立ち上がったら電気が消えちい.ほなもう... 服も何も持ったなりで立ち上がれんや布団の上でうずくまっとったような感じ。」

T: 「しばらく揺れが続いて,おさまってから逃げるような感じ?」

A: 「4, 5 分はあつたんちゃん?立ち上がるまでに。」

T: 「隠れることもできずに,じっとこうしてる感じで?で,その 4,5 分経ってからさあ動こうとして避難ということで服を.... .」

A: 「服入れて服着て階段下りて家に帰ったけどな.50m くらいのすぐ近くに家があつて... .」

T: 「家?」

A: 「家っちゃうか,漁師やけん漁師宿で若い氏が,ほの組が 4, 5 人で一軒の二階借って生活しよつたんよ.寝泊りだけな。」

T: 「漁師宿に居られる時に地震が来たという?」

A: 「そうやな。」

T: 「宿というのは?」

A: 「横町のあさかつていうとこなんやけどな。」

T: 「様子はどうでしたかね?まだとくにその時点では... ?」

A: 「近所の人,打ち込みのポンプやら家のポンプやらで津波がくるか調べよつたけどなあ.川見に行つたり... まあ別に異常もなしに.ほんなんしよつたら樽井の前の奥村さん家が潰れたん...」

T: 「そういった潰れた家は何軒ありましたか?」

A: 「いやいや。」

T: 「この一軒だけで?」

A: 「うん.地震で潰れたんはこの家だけ.あとはもう納屋とか津波で流したけどな.暗かつたし助けもどないもできなかつたけどな.ほんで東の方から津波や一つて聞こえて愛宕山に逃げた。」

T: 「その時何か持って逃げましたか?」

A:「米を持って逃げた.食料が大事だった。」

T:「愛宕山の方は人がいっぱいでしたかね？」

A:「行くまでが... もう家を出た時には水がチャブチャブと波がきよったもんな.下水からも水が出てきよった.コンクリートの溝のふたが外れとった.それで皆がその穴に入ってこけよった。」

T:「お年寄りの方なんか本当に大変でしたでしょうね.足が不自由な人とか.逃げるにもそんな状況では... 暗い中。」

A:「ほなけど暗い中,割合見えたけどな。」

T:「そうですか.道ははっきり見えた?津波が来たのは何分後くらい... ?」

A:「地震から 30 分くらい.割合余裕があったで。」

T:「じゃあちょっと時間があつたというか？」

A:「みんなつぶれた家に寄つとったかいな.ほれに時間とられて... .」

T:「津波が来るぞーっていうので皆さん一目散に山の方へと?この時はすでに愛宕山にはたくさんの人が登っていましたかね？」

A:「うん,もう必死よ.バタバタこけてなあ.側溝のふたが外れとるけん,そこに皆落ちてずぶ濡れよ。」

T:「もう愛宕山に登ることしか考えてなかったですかね?やっぱ一番高い所が... .」

A:「ほらもう昔からの言い伝えやけんな.愛宕山に逃げるということは。」

T:「で,しばらくここにいて,波が引くのを待っておさまるのを山の上で待ってたんですね？」

A:「山の上でおさまるまでって夜が明けるまで... 皆,階段でへたくれとった。」

T:「しばらく山にいて,様子を見に家へ帰ったという方も？」

A:「どうだろなあ.夜が明けてすぐ帰ったけん... .」

T:「山で様子を見るような?木村さん,家に帰ったのは？」

A:「夜が明けたぐらい.夜が明けて波が静まってから家族皆と合流した。」

T:「その時町の様子は... つぶれた家が1軒だけですかね?あと床上浸水とかの被害が出た家とかは？」

A:「川筋の方は1m50 くらい浸かつとったかいな。」

T:「1m50 もあつたら近づけませんね。」

A:「畳やがそのまま浮き上がって布団や濡れてないもん。」

T:「しばらく後片付けなんかも大変でしたでしょうね.水が引いた後も。」

A:「もうあの片づけだけはねえ。」

T:「電気等はすぐに復旧したんですかね？」

A:「一週間くらいかかったやろ〜.もう道路は寸断されたり... .」

T:「塀が崩れたりとかそういったことはなかったですかね？」

A:「塀やいうても昔は塀なかったけんな.今みたいにブロック使えへんかった。」

T:「なるほど。」

A:「塀やいうたら金持ちのものもちのいい人やなかったら....」

T:「しばらく山の上において,トイレなどに困ったことは？」

A:「まあ,山のすぐふもとにみんな家があつたけんな。」

T:「じゃあ,ちょっと下に行つてといった感じで?みなさん夜が明けてから下に降りたということですか？」

A:「瓦礫などが道路に積み重なって歩けへんかった。」

T:「材木などが溢れて？」

A:「材木から船から...」

T: 「船ですか？船が流されて川のほうから？かなり大きい船ですか？漁船？」
A: 「船の漁船が入って来とったもんな。」
T: 「海の方から直接？」
A: 「海の方海の方。」
T: 「完全に海に近い所は浸水？」
A: 「うん。えびす神社から南側。」
T: 「何か予兆のようなもの...例えば、井戸の水が枯れたりなどはありましたか？」
A: 「特に予兆のようなものはなかったな。昔は、井戸の水が引いていく、川は干上がっていくという言い伝えだったけどな。それはなかったはな。」
T: 「特になにもなく、突然のことで...？」
A: 「何べんもポンプを入れ替わり立ち代わり押しよったんやけどな、打ち抜きの。けど、ほおいうような川の水も...」
T: 「特に変わりなく？見た感じは？」
A: 「そやけど、津波やあ一言うた時、ずーっと潮が引いてほいで来たらしい。」
T: 「引いてどーんと波が来るという？津波だーと言った瞬間皆さん逃げてるんで...」
A: 「ほら皆ごっちゃになって逃げたわな。どこの人やわからん手引っ張ったって、こけたら助けてくれーや言う人もおってな。親子が逸れて、よその人が助けて...まあいろいろです。」
T: 「はい、そういうさっきの話しにもありましたように、井戸の水が引くとか川の水が干上がるとかこれは昔からの言い伝えがあったですね。」
A: 「うん。」
T: 「あの...南海地震以前等でも地震があったと思うんですが、その時の昔の言い伝えとかお話しとといったことは？」
A: 「井戸の水が引いて、一番目か二番目かの波が大きい、そおいう話は聞いたけどな。」
T: 「こう山に逃げろっていうのはこれは言いつたえですかね？」
A: 「とりあえず高いところへ」
T: 「こう生活で一番困ったってことは、しばらくありましたかね？津波が来たあと家に戻って」
A: 「水道が... 今みたいに水道やなしに打ち込みのポンプだったけん、塩辛くて使えなかったはな。」
T: 「しばらく使えなかったんですね。その間、お水なんかはどうされてたんですかね？」
A: 「給水や来たようなにはなかったなあ。辛くない井戸水を探して、場所によって辛い水と辛くない水があってなあ。水源によって、まあ、割合水には困らなんだなあ。」
T: 「食料なんかも、まあ家にあるお米とか？」
A: 「あの食糧難の時代にすぐに白飯の大きいにぎにぎしいのが食べたわ。」
T: 「そうですか。それは...」
A: 「婦人会の炊き出しで... 奥の方の婦人会が炊き出しでな...」
T: 「奥の方はなんともなかったんですかね？」
A: 「ないない。」
T: 「奥の方はなにもなく、この辺だけで？」
A: 「国道の県道の橋はあかなんだけどそれ以外はあんまり傷まなんだ。」
T: 「傷まなかったと...」
A: 「傷んだんはこの南町や。」

T: 「この辺のかたは,どっかにしばらく避難というか,住めないですよ,しばらくは...」
A: 「住めない。」
T: 「どっか親戚の家とか... ?」
A: 「学校や行ったけど...」
T: 「学校もやっぱ避難所みたいなんになってたんですかね? 当時...」
A: 「地震が揺って余震が来て寝れるようにならんかったわな。」
T: 「あー,余震が続いて? みなさん,しばらく学校に避難されたり,親戚の家に避難したりというかたちで... 余震はしばらく何週間も何か月も続いて... ?」
A: 「うん...」
T: 「ちょっと落ち着かないですよ. やっぱこう揺れると...」
A: 「うん...」
T: 「完全に普段通りに戻るのには,やっぱり半年とか一年とか... なかなか...」
A: 「ほおやなあ,家の中が片付かなんだら完全に... 戻らなんだわな。」
T: 「役場とか県とか援助物資などは来たりとかは... ?」
A: 「うちは来た。」
T: 「援助物資も?」
A: 「衣料はアメリカ軍がな。」
T: 「あっ,アメリカ軍が?」

A: 「うん.上陸してな,物資いうても軍隊の服,日本軍の服やけどな,皆に配って... アメリカがくれた,毛布。」
T: 「そおいう対応はわりと早かったんですかね? 災害から...」
A: 「早いことはないけど,一週間くらいしてからやな。」
T: 「はい。」
A: 「ありがたいわねー.着るものがないのに。」
S: 「物資っていうのは,服とか食べ物とかですか?」
A: 「うん.それくらいで,後は缶詰めやね.道路がここら一本やろ?」
A: 「ほなけん,ほれが傷んだら通り道がない,物資がこなんだ。」
T: 「じゃあ,道がふさがってしまうような状態だったんですかね?」
A: 「うん.海岸線一本やったけん.今でも一緒や。」
T: 「今度もし地震が来たら,やっぱ避難路も... 今は道がしっかりしていますが,何が起こるかわからないというか,家が倒れたりしたらもう...」
A: 「海岸道路が一本やさかい,ほれが傷んだらもう...」
T: 「そうですね,ここは... この辺の防潮堤の整備などはあまり進んでないんですね...」
A: 「補強,川筋もやっとりけんとな... 相手がどんだけ来るやわからんけんなあ。」
T: 「そうですね.一応避難タワーも街中に... 7メートルでしたかね?」
A: 「うん。」
T: 「あそこも皆さん万が一の時は避難する見込みで... ? それともやっぱり愛宕山にまっしぐら?」
A: 「ほおやなあ,やっぱり愛宕山の方が高いもんなあ。」
T: 「ただ,そんなに広くはないんですかね? 上の広場というか...」

A: 「案外あそこねえー,さんぽ階段があるやろ?わりと広いんよ。」
T: 「十分この辺の人が行ってもまあまあ...」
A: 「大丈夫なくらい。」
T: 「あの,竹藪が結構ありますよね?」
A: 「あんな整備せなんだら... 竹がようけ生えて...」
T: 「逆に竹藪があると水を防いだりとかそんなことはなかったですかね?水を止めてくれるとか竹藪に逃げろとか...」
A: 「昔の人は言よったけどな.竹の方向行ったら地割れがせんとか...」
T: 「でもまあ,津波が来て今度のあれだと10分とかいう話がありますよね?」
A: 「うん。」
T: 「そうなるよ,年配の方や足の悪い方なんかは急いで逃げないとダメなんですけど,その辺はどう助け合っ...?」
A: 「あの南海地震はかなり間があったけどな。」
T: 「30分以上はありましたか?南海地震の時は...まあ30分あれば十分登れますよね,愛宕神社まで...」
A: 「うん.お祖父さんと弟2人は何も言わんぞくに登とったけんな。」
T: 「そうですか.それだけ時間に余裕があれば十分避難できると...」
A: 「津波や一言うた時にすぐに逃げたら逃げれる.常に用意しとったら...」
T: 「そうですね.常に持つものを用意してたら...」
S: 「今は何か地震が起きた時に持って逃げるものとか用意はされてるんですか?」
A: 「うん.もうそこに置いてある。」
S: 「そうですか。」
A: 「水,毛布... .嫁さんが脳梗塞おこしてちょっと足が悪うて走れんけん,ほれを車に積んで走るん。」
T: 「今お住まいは何人で?お子さんも一緒にお住まいで?」
A: 「いや,二人.子供はみな徳島におる3人。」
T: 「そうですか.避難訓練なんかこの辺で何回かやられて,実際に愛宕山の方に荷物を持って登るなども?」
A: 「やるけどなんかやる気ない...」
T: 「そんなに参加者もない?全員参加とった強制参加でもなくて?」
A: 「やっぱり必死にならんんだら... ぐだぐだやっても練習にもならん.体が覚え込むくらい練習せなんだら。」
T: 「いざという時に今一番心配なことっていうのはなんでしょうね?津波の来る心配が一番...」
A: 「今や側溝がよくなったけんな,昔と比べて... .開閉式になつとるやさかい,昔やこん厚いやつが外れてな,側溝が.そこへ皆が落ちて... あれが一番怖いな。」
T: 「今は側溝は安全なようになって...?」
A: 「安全とは言えんだろけど...」
T: 「昔に比べれば問題ないくらいには?」
A: 「うん.ほなけど津波じゃわなあ.どんなけ来るかわからん... 予想がつかん。」
T: 「特に体の弱い方なんかは手助けが必要なこともできますかね.近所で助け合ったりとか...」
A: 「当然よほら手助けしたらなんだら.けどなかなかほこまでまわらん...」
T: 「何か日頃自主防災の方でそおいう練習というか,こんな時はこうしようとかそんなことは?」

A: 「あんまりやっとならんわあ。」

T: 「そうですか.愛宕神社は階段以外にも坂道もありましたかね?シルバーカーとかでこう...」

A: 「いや,手すりが付いとるだけで...」

T: 「結構ありますよね,上まで。」

A: 「うん.北側から上がったら緩いんやけどな.正面はきつつけんど.あそこまで行たらどないかなる。」

T: 「愛宕山まで行ったらあとは... .まずは,あそこまで辿り着くことが大事ですね。」

A: 「ほおやなあ。」

T: 「この辺りは昔と比べて,家の数が減ったりとか子供さんの数が減ったりなどとかいったことは?」

A: 「子供の数は減ってます。」

T: 「家数はみなさん... 昔から住んでらっしゃる...」

A: 「家はまあまあ... ちょっとは減つとるだろうけど... .人口はな減って...」

T: 「やっぱ高齢者の方が増えてるという状況はありますか?」

A: 「うん.高齢者ばっかじゃ。」

T: 「皆さんどうやって避難するかは... どの道が避難経路っていうわけではなくて,近いところを通って山に行くという考えですかね?」

A: 「うん.自分らこの川筋だったかい,ほんで逃げ道間違ったわな.これ横町上がって東本町を愛宕山に向かったらよかったんやけど。」

T: 「はい。」

A: 「やっぱ南町を愛宕山まで行た方が近いと早いと思て... .ほればっかり思て,波に押されて皆ずぶ濡れになりよったわ。」

T: 「なかなかその場で冷静な判断は難しいですよな。」

A: 「ほら脳に叩き込まなんだら,練習以外ないわな。」

T: 「その場だったらどう逃げていいのかもなかなか...」

A: 「わしらもほれが近いと思て行たけどほれが間違い。」

T: 「とにかく川筋から離れて...」

A: 「川筋から一段上がるということやな。」

T: 「一段上がって山に向かうと...この辺りで3メートルくらい3.5メートルといったところですかね? 海拔が,愛宕が25メートルですね.25メートルあれば,今回の予想ではなんとかなるっていうことと思うんですが...」

A: 「うん.昔津波が... 日比原の山に蛸があがとったっていう言い伝えは聞いたことあるけどな... .いつの津波やわからんけど...」

T: 「昔から川の流れはこんな感じで変わってませんか?」

A: 「川やいうんは,川の風雨によって変わつとるけんな.自分らが知つとる川だったら弃天山の方をせつて流れよった。」

T: 「じゃあ,流れが変わってるんですね今と。」

A: 「何べんも変わつとるらしいで。」

T: 「台風,大水とかがあって... この辺って弃天山に逃げるんでしょうね。」

A: 「ほら,弃天山に逃げるわな,正梶(地名)は...」

T: 「この辺は愛宕山で,町の久保の方は祇園さんとか八幡さんの方とかそっちの山に...」

A: 「すぐに山やさかい...」

T: 「町役場も結構低いところにあるんですね。割と町の中心部は平べったい感じですね。それでもやっぱりちょっとの差でここまで水が来て、こっちは大丈夫だっていう...」

A: 「うん。」

T: 「微妙な境目があったんですね..」

A: 「この辺りは、堤防も何もないずっとこう... 診療所の下まで...」

T: 「昔は堤防がなかった？」

A: 「なかった。かわらやった。ほやけんど波がきとらんのやろな..」

T: 「それでも波が来なかったんですか...」

A: 「津波の波は、障害物があったらどーんといくけど、ぎーっと消えていく..」

T: 「じゃあ、かえってかわらだったのがよくて、そこで吸収されて治まったんですかね...」

A: 「うん..」

T: 「じゃあ、意外にもこの辺はそんなに波が来なかった？」

A: 「海からも波が来なんだ..」

T: 「一番この辺が危なそうな感じがするんですけど...」

A: 「低いしね..」

T: 「むしろ、川筋から水が来てこっちにこう溢れていったという感じなんですね... .当時はこっちの由岐さんちの方にも水が... ?」

A: 「うん。港からな..」

T: 「先ほど自主防災の方からっていう話でしたけど、今後対策というか個人個人がしておくこととといったことは何かございますかね？経験を踏まえてまずは山に逃げろといったこともそうですが、あるいは準備をしておくとか... 心得として...」

A: 「あんまり重たい物を持たんとな。ほら、今の世の中やもん、食料なんかはな必ず援助がある..」

T: 「つい詰め込んでしまいますよね。あれもこれもって...」

A: 「ほんなんはなるべく... 貴重品だけ持ったら...」

T: 「なるほど。まずは、逃げるのが大事... ?」

A: 「うん。高いところへ逃げることやな。ほんで、人よりはよ逃げなあかん。なにがなんでも逃げなんだら...」

T: 「地域の取り組みとしては、こんな活動が必要じゃないかとかそういうふうに思うことはありますか？行政でもこの地域でも...」

A: 「このごろ海陽町に合併してからなおあんまり...」

T: 「上の方の行政の取り組みがあまり感じられませんか？」

A: 「感じんな。うん...」

T: 「自分で自分の身は守るしかないという... ?」

A: 「そうやなあ... .それに限る..」

T: 「今後、自主防災への近隣の隣組ではないですけど、取り組みとかどういったかたちで繋がりを強めていこうといったそんな話はあんまり... ?」

A: 「ないなあ... .前に出てするっていう人があんまりおらんもんなあ。わしらももの言うん好かん方やしな...」

T: 「そうですか。やっぱり個人個人が意識してそこは対応するしかないということですね..」

A: 「うん... .もう年寄ばっかやしなあ...」

T: 「昔は,男の人も子供もようけおって...」
A: 「昔はね... .青年もおったけど... 今や青年やおらへん.」
T: 「木村さんは昔お仕事の方は漁業の方で？」
A: 「ええ.」
T: 「今漁師さんの後継ぎってというのはどうなんですかね？若い方で...」
A: 「おらんやろ... .」
T: 「やっぱ不安定な面もあるということですかね...」
A: 「収入が第一不安定やしな.」
T: 「では,仕事を求めて街の方に皆...」
A: 「うん...」
T: 「この辺は昔堤防はあったんですかね？」
A: 「堤防やなしに石垣があった.」
T: 「多少は効果があったんですかね？水を防ぐのに...」
A: 「雨降りの水を防ぐだけの...」
T: 「もうその石垣の跡は全く？」
A: 「ないない.完全に頑丈に... 命を守る土台にしとるけんな.」
T: 「工事は戦後されて,防波堤なんかもこう...」
A: 「今でも川筋は直っしょるけんどな.補強したり...」
T: 「震災対策で？」
A: 「ほおやろな.津波の高さが倍になったさかい,あれからまた動き出したわなあ...」
T: 「これは,県とか国の動きなんですかね？」
A: 「うん...」
T: 「南海地震の家の被害はあまりなかったんですかね？家が一軒倒れたくらいで,あとは浸水がきたとい
ったことくらいで...」
A: 「うん.納屋とかは倒れたりしたけどな.」
T: 「意外にも大きな揺れにも関わらず,被害はあまり... .家の高さを水が来ないように高くしたりだと
か... ？」
A: 「今は皆土台はコンクリやもんな.」
T: 「昔は,石積みで？」
A: 「昔は石並べてその上に柱を立てとったわな.」
T: 「木村さんは昔から代々突喰の方でお住まいに... ？」
A: 「うん.」
T: 「勉強になりました.今日はどうもありがとうございました.」
S: 「ありがとうございました.」

(5) A : F さん(91 歳女性) T : 高橋先生 B : G さん(76 歳女性) C : H さん(92 歳女性)

D : I さん(男性) S : 学生

A : 「慌てて起きて表に出た。」

T : 「起きてしばらくは、ぐらぐらとなかなか立ち上がれないような状況で？」

A : 「ほおやなあ。私ら赤ちゃんがおったけん、ほんで慌てて負ぶったもんな。うちな、ほの日ちょう

ど結婚式だったん。結婚式で、お寿司や押し寿司ようけこしらえとって置いてあったんよ。ほんなんなにかどろどろや。」

B:「あん時だったん？」

A:「ほん時、大阪からうちはお客さんがきとったんよ。花嫁さんのお父さんとお母さんが来とったんよ。ほんで、はよ逃げてくれ言うて、その人やはずぐだったんよ（避難したのが）。はよ逃げいうて、その人も一緒にうちと同じ赤ちゃんがおったんよ。うちはほの子負うてほの人やだけ先な、はよ逃げはよ逃げ、愛宕さんへ逃げなよって言うて.... その人は突喰の人だったけんな、お母ちゃんは。ほの人やが逃げる時はまだ波がきてなかった。ほいで、ほの人やが行ってから、私もおばあさんがあんたもはよ逃げ一って言うて、ほいでほの子を負うてな、私が出た時にはもうここまで水が....」

T:「腰まで水が？ほれは地震がきて30分とか40分くらいたってから？」

A:「ほないたていへん。ものの10分やなあ。」

T:「ものの10分で水が？」

A:「あの人らを先に逃がしといて、はよ行き言うというて、ほいでじきに私も赤ちゃん抱いて負うて逃げた。ほんで、おばあさんが私どないしたか知らんのよ。うちんとこな、お芋さんをようけとってな、さつまいもを。ほいで、畳一畳分の下に入れとった。ほいだら、ほの芋が全部出てきとった。」

C:「襖のところで水がきとったな。」

T:「そうですかー」

A:「家の上がったところじよ。ほんでな、便所もどこも芋だらけ。お米も階段の下に置いとん全部のうなとった。(なくなっていた)」

T:「それで急いで愛宕山に逃げたんですね？みなさん。」

A:「私はな、愛宕山に行きよつたら間に合わん思てな、ほんで外に出たんよ。ほいで出て行きよつたら角から水がゴーっていうて、あそこごつかったわ。」

T:「この道が？」

A:「この道、今のように堤防がない。土をもつとるだけ。ほんでな、私流されそうになって、ほな向こうから布団が流れてきてな、ほんで慌ててほの布団に抱きついた。ほら、ごつつい勢いじゃもん。」

C:「遅かったんやなあ。あんた逃げるん...」

A:「遅おやない。おばちゃんやが出て、じきに出とんじよ。」

D:「北に逃げたらだいぶ高いんよ。」

C:「私遠ざかるように逃げたん。」

D:「北へ北へなあ。」

A:「おばちゃんのところは潮がきてなかったけんな、着物貸してもろた。もうほらびちよびちよよ。ほんで、祇園山に行った。ほいだらな、もうあそこ全部海やった。」

T:「じゃあ、しばらくの間、水がひくまで祇園山にいたんですか？」

A:「うん。祇園山にいたらなようけ逃げてきとるん。」

D:「あそこも高いけんな。」

T:「愛宕山より祇園山の方が近かったんですかね？」

A:「遠い。愛宕山の方が近いんやけどな、道がな、ほんなとこ通いよつたら命ないわおもてな、ほんで向こう通ったんよ。」

C:「私やすぐに愛宕山に逃げた。」

T:「時間がずれたらだいぶ違ったんですね。」

A:「ほんでな、私おばあさんがどないしたか知らんよ。逃げなよって言うて逃げるしかないでえなあ。けどな、多分おばあさん二階におったんよ。」

T:「二階には水はこなかったんですか？」

A:「うん。一階の襖のところで。まあ、揺れようがごつつかった。」

T:「その時は、赤ちゃんを背負って逃げたんですか？」

A:「逃げた逃げた。見たら子供が濡れとんやもん。」

T:「祇園山に行ったらやっぱ逃げてる人は結構いましたかね？山の上には。」

A:「ええ。久保辺りの人がみなおった。私もな、遠かったけんかな知らんけど浄福寺に走ったもん。」

D:「町から見ると浄福寺が一番高いん。」

T:「やっぱり水が来たら高いところに逃げろっていうのが皆さん頭の中にあって、昔から言われてるんですかね？高いところに行けと？」

D:「大体ここの人は愛宕山に... ほこしかないから。」

A:「愛宕山の上はいっぱいでしたかね？」

C:「いっぱいいっぱい。上まで上がれなんだ。階段のところで人がいっぱい上の方は先に逃げた人が行っとった。」

D:「押し合いへし合いだったんちゃう？」

C:「もういっぱいだったなあ。」

T:「何か荷物をまとめる余裕はありましたか？」

C:「子供だけ。」

A:「子供だけ。とにかく子供だけを背負って逃げた。もう外に出た時には水がここまで（膝下ぐらい）来とったけんなあ...」

D:「なんせ、高い方高い方に逃げなな。」

T:「しばらくは愛宕山の上にて、水が引くのを待って？」

C:「夜が明けるまで待ってな、夜があげたら水が引いとったけん帰ってきた。」

T:「後片付けも大変でしたよね？」

A:「大変だったなあ。畳が全部上がってしもとったけん... 布団や何もかも全部濡れてしもとったけん。こんなけ揺ったけどな突喰の家倒れてない。一軒だけ前の家が倒れたけどな。ほこだけ。」

B:「ほこの人がねえ一下敷きになって死んだけど、津波がこんかったらねえ。助けに行たけど、どないもねえ。津波や言うけんほっといて逃げてきたわあ...」

A:「ほいでな、私を感じたことは、2日3日前にな、空が真っ暗になって鳥が飛ぶん。2日ぐらい飛んだ。ほんでな、スルメがよおけ捕れた。」

D:「おっちゃんが言よったけどな、蛙が朝から出てきてな、冬やのに。冬やったら冬眠しとるのにな。」

A:「ほいでな、スルメがあんなに出てくるやいうんはやっぱりおかしかった。」

T:「あと、井戸の水が下がるなど、そんなこと昔は言ってませんでしたか？」

B:「ほなけどほんなんちらっと聞いたな。うちもお祖父さんに聞いたことがある。」

D:「沼田でな、子供入れて9人ぐらいが死んだって言よったな。」

B:「うちや真っ直ぐ南の方に逃げたんよ。ほっち行ったら階段がきついやろ？こっちの方が緩やかやさしい。」

D:「みなほお言うてあっちへ行くやさかい。まあそおいう感覚があるんやなあ。」

C:「私やな、川から遠ざかるように逃げた。」

D：「北の上がり口の方が上がりやすい。」

B：「どうしてもな、年寄りに近いところ行くでえな。割と早く逃げたけどな、年寄りや子供がおったさかい、ここまで浸かったわな...」

T：「でもやっぱり、今だったら愛宕山に逃げるしかないですよねえ？だんだん皆さん足が弱ったり... そういった何か心配はありますか？近所で何か助け合って逃げようといった話はあるんですか？」

C：「今一緒にどない逃げるかやいう話はしよらんなあ。」

T：「そうですか。」

A：「とりあえずはな、避難タワーに逃げてな、水が来たらほれと一緒に流れたらいいわあ、もう... (笑)」

D：「ほない言わんと...」

A：「地震が揺ってみなほれ(津波がどれだけくるのか)もわからんけんなあ。まあ上に上がってみてな...」

T：「じゃあ、まずは何かあったら愛宕山に逃げるってことですね。」

D：「まあ、ほの当時は山へ山へと皆鉄則で... こちら辺の人は皆ねえ。」

T：「川が危ないんですね。川が。」

D：「ほおやねえ、川が横にあるでしょ、この辺はねえ。」

T：「海よりも川からの水が恐い？昔船なんかも流れてきたって聞いたんですけど...」

A：「昔は川に堤防がなかった。」

D：「松林と石を割った低い囲いしかなかった。」

T：「こちら辺の人は普段から袋(防災バッグ)を用意しているといった何か対策はしているんですかね？いつでもさっと持って逃げれるような...」

A：「用意しとらん。」

D：「対策してないですか？家とか... 家具が倒れてこんように... 一時しとったでしょ？」

C：「あーあー」

A：「私持って逃げるん水だけやもん。重いもん他のもんよう持って行けへん。」

D：「懐中電灯とかほんなんは置いとんでしょ？」

A：「あんのはあるんじよ、みな。」

C：「家にはあんのはあるけど...」

T：「普段の対策というのは、そしたら来たら逃げるといったことぐらいですかね？あんまり準備というのもあんまり... ?」

C：「あんまりしとらんわなあ...」

A：「ほおやなあ。」

C：「もう一生こんと思とうわなあ。」

S：「避難の際に心配なこととかはないですか？」

A：「あれ(避難タワー)が7mくらいやろ？高さが...」

D：「あれに何人くらいが上がるか、上に。」

T：「100人くらい？」

D：「うん...」

A：「2回くらい上ったことがある。」

T：「地震の後余震なんかは結構ありましたかね？」

B：「余震あったあった。」

T：「やっぱ恐いですよね。」

C:「余震あんま覚えとらん。」
T:「しばらく落ち着きませんよね。」
B:「ええ。ほらもうおとろしいてねえ。」
A:「余震はおとろしいやさかい。」
B:「横に揺って縦に揺ったもんなあ。」
A:「恐ろしかった。」
T:「そうなる動けませんよねえ。」
B:「動けん動けん。やつのことで逃げた。みな、仏さんや遺灰持って行っった。こけもって逃げたさかい。」
D:「ほんなんやのに持って行っとながすごいな。大事なもんやけんなあ。」
T:「江戸時代とか昔にも大きな地震があったみたいですよええ？そんなこととか皆さんお父さんお母さんに聞いたりとか...」
D:「田井さんの古文書も新しいて、まだほの頃は指定になってなかったけん聞いてなかったんちゃうかなあ。古文書自体はねえ。昔地震はあったけどそういった話は知らんねえ。」
B:「地震があったやいうんはお祖父さんが言よったけどねえ。」
D:「経験しとった人が伝えてきとったらねえ... 知つとるけんど。」
S:「今は何人で住まわれてるんですか？」
B:「うちはもう孫もできてしとるけん3人。旦那は亡くなったけん私と息子と嫁と。孫は皆出ていっとう。」
A:「私は孫と2人。」
D:「子供夫婦と私だけ。」
A:「昔は大変だったなあ。」
C:「ほおやなあ。」

(6) A:田井 晴代さん(79歳女性) N:内藤先生 T:高橋先生 S:学生

A:・・・そしたらこのいわゆるご存知の通りのこれの原書が見つかりました。古い箱に入っていて、それをぱっと見たときの・・・お見せしましょうか、いっぺん。ちょっとあれだけど、時間構わない？ あのー私の場合は昭和南海はそのぐらいですのでね、これが原書なんですけれども。

N:これは装丁しなおしたんですか。

A:これはね、私が原書を見てね、現代文に直してね、自家本です。子供にね、残さなければと思って、これ、自分で、全部、手書きしたんです。これを現代文に、原語で書いてあるのを直したやつにね、これ、平成9年に、書きあげて家に置いとくぶんにして、これでもって最初、町民の方や小学生に話をしてたんです。そのうちに、そういうことが広まっちゃって、あっちやからもこっちからもいろいろご要望が来て、これじゃあとても一人じゃ手に追えないなって、活字化して残しておかないとなって思ったんです。平成7年のちょうど阪神淡路の時にあのー海部郡の由岐からずーと南まで。宍喰は碑文が無いんですけど、他の町には碑文がありますよね。あれを全部写真どりして、どっかにあったなあ、それを、えーと町長のところに持って行って、これ、これ、これを町長のところにもって行って、ちょっと、由岐からずーと来ましてね、それを、写真にとりまして、中身を調べて、聞き取りの所にも中山さんが聞き取りをのところに参加させてもらったりして、そしてこれをもって談判に行きました。他町村にはこういった碑文が残っているけど、私の家にはこの原書はあるけども、それだけではだめだから、原書をどうにかしますけど、それまでの間に災害

で唯一今まで過去4回の地震で唯一この愛宕山ってところが避難路になってるんで、そこをどうにかね、この避難路と家を何とかやってほしいということをそういうことを要望していて、今スロープとかになってるけど、ほんときに私が、吉田さん持ってましたか、それぞれの家庭に一冊ずつ配った

N：あれ・・・、これコピーだけなら。

A：そう、それ、昭和南海のときのね。あの一・・・その昭和南海のね、急いで作って、あれ、やってください、と。そうじゃないと、せめて、碑文ができない。そいで、碑文を読んでみたらね、もう、もうら、磨滅して、風雪にさらされて、読みにくくなってるの。と昔の碑文は意味が分からない。今の人が読んでも全然難しい言葉で書かれてあるんで。これはだめだっていうんで、それでもうむしろ冊子にしてください。ていうんで、してもらったんですよ。それがすぐに明くる年、平成9年ですかね？8年ですか？

N：8年ですね。

A：年末に、すぐにね、してもらったんですよ。それでまあ、穴喰は冊子なんですけど、そういう形で残ったわけです。

吉田さん：すいませーん

N：あ、だれか、どなたか・・・

(高橋先生たち、登場)

A：・・・ですから、これは、手書きの自家本なんですけど、本物はね・・・ちょっとあれなんですけど・・・これなんです。表紙にね、薄くね、

A：震潮記ってね、かいてあるんです。これが、大正の御大典の時に出したから、ここに判子が押してあるんです。私は最初これを古い箱から出して、これだけ読んだんです。あら、これは大変なことだっと思ひまして。これを読んで、これは地震と津波の記録だなんてここで分かって。そんな記録が残ってたんだ一って、読んでみたいな一って思ってそれから勉強しまして、必死になって。うふふふ。ちょうど運よく文書館も、これを発見して1、2年でじきに文書館が、文書館の古文書講座っていうのに応募しまして、あたりましてね、運よく。今も通ってますけど。それで、この、巻末のつまりこの荒れ図面ね、これが最後にあったんを見まして。それを見たところには、もうこれはなんと、ここにほら、藍色とか流れた家とか赤色無難とかこれがあの当時にこういうことをしたんだ先祖がって思ひましてね。見ましたときは、もう、あの一、なんていうんでしょ、すごいことをやってのけたんだなあ、ておもいました。その当時は、その一人員ていうか、その一穴喰浦の人口を全部把握しておりましたかね。その一だから、誰の何兵衛が死んだとか。その名前とか全部分かっていたんです。おひとりだけ不明の方が身元が分からなくて書いてあって、誰かなって考えてたんですけど、もしかしたら四国遍路かな・・・と思ひまして。それはクエスションのまんまだったんですけど。その裏づけを、これをしてからですかね、裏づけをやっぱり追ってましたら、隣町の寺の住職の書かれたものでその裏づけがはっきりしました。やっぱり遍路だったんです。

A：だからまあ、なんて言うんでしょ、ちょっとこう、なんかひっかかるんです。むかしのものとか調べていると、いろんな疑問がいっぱい浮かんできて。だから、その時にはすぐ動いていかないと、聞く人がいなくなっちゃうてゆう。あ、その一、なんてゆうんかな、もしこの人たちがいなくなっちゃったら、むかしのこと何にも分からなくなっちゃうなっていう危機感がすごくあるの。やっぱり古文書に触れたことよってね、そういう意識が自分の中にでたなって、思ってますけど。だから、なんでも聞いてしまうんで。聞き魔だつて言われちゃう。でもね、大事なことにつながるんでね、すべてね。ちょっと年代が変わると、なんにもそんなん分からないって人がほとんどになってしまうんでね。できるだけ調べておきたいですね。

A：これ、震潮記を現代文するときには、私は、やっぱり、あの一慶長の年代碑とか、その一、ダイニチジ、合併

しましてね、大正元年に、町が、一つに合併しましてね、その時にダイニチジにある記録のやつ全部借り出ししてもらいまして、それで調べて全部確認しました。そういった面では、あの一なんていうんですか、私は、この資料によって、私自身が元気に一人で生きていけると、うふふふ。そういう風な気持ちにさせてくれた資料です。

T：さきほどの原本は何年でゆう年号は・・・元号は入っているんですか？

A：これですか？原本はね、だから、西暦ではないんですけどね・・・もちろん。これはね一、永正9年8月8日、慶長9年12月16日、宝永4年10月4日、嘉永寅年、11月5日4ヶ度の震潮記って、このときにね、慶長の時にね、あの一これが最初の慶長の・・・

T：これは写本ですかね？写されたほうの・・・

A：これは原本です。ここにだからもう消えてしまいましたけど・・・はんこが・・・

そういう風なことを、東大の辻先生？がこれをご覧になられて、その解読したのをご覧になられて、慶長の時の「大地震」と書いてあるけどそれは田井さんが訳して「大地震」と書いたのかって、いいえ、原書が「大地震」となっていますって申し上げたら、そしたら、そういう大地震という表記を本に書いたのは西日本では初めてじゃないかっておっしゃりまして、私のほうもびっくりしたんですが。そういう風に、まあ、専門的なものをお調べになれる方はそういうこととか、あと「地盤沈下」とかがこの文字の中から読み取られる、といったことをご指摘いただきました。

N：そうですね、たしか、この記述から当時の地震の状況とかをシュミレーションして・・・したやつがありますよね。

A：ほんでね、なんていうか、これね・・・先祖の記録はね、夜も寝ないでそんなに勘定したのかってくらい特大揺、大揺、中揺、小揺、ほれを何回、何回、何回…って記録毎日の記録ですね。止まるまで、毎日の天気とか状況を。ですからその一聞き取り調査のすごさってのを感じましたね。あんな時代ですから、何にも情報がないじゃないですか、自分が行くか誰かをやるか、馬に乗っていくか、船でいくかして江戸まで・・・。そうでしょ？それでね、私思ったのが、江戸まで遠い記録とるのはね、俳人仲間にね・・・聞いたのではないかって思うんです。・・・(中略)ですからまあ、この記録だけは、ほんとに私は、自分を救ってくれた。これがあるから…夜もね、まあ、みんながいなくなっちゃって寂しかったんですけどね、これに熱中することによって私は救われたんです。ね、こんなことあれやけど、別のことですけどね。日に日に、この間代の墓は参りに行って洗って、必ずあなたのこの大切な記録を私が生きている限りは伝え続けますから、ついていっていつもそういう風に拝んでます。それとね、ちょうどね、あの一、現代文にするとき、ちょっと書き添えましたけど、孫娘がパソコン打ってくれましたでしょ、ちょうど二十歳の時に、それはなぜかっていったら、急に打ってて言うよりも、小学校卒業して中学になる時に毎年海水浴に帰ってくるんですけど、帰ってきた時に、もう中学生になるから夏休みなんか出さにやいかんと、レポートとか、それで、『なんかおばあちゃん昔の話ない？』っていつて・・・

N：それはすごいですね

A：それで言ったときに、わたしはこれで…これを見せて、ほいでいろいろ話をしたんです。それで彼女はこれによっていまの海陽町のあーゆー所にも調べに行きましたしね、あれこれ調べたんです。で、それを出したら横浜市の、その一、初めての、学校の中で二人だけ出展されて、「賞をもらったよ！おばあちゃん！」っていうてから。賞はいいんだけど…それよか、お父さんやお母さんと、大都会でもこれから地震や津波はきつと来ると思うから、だから、あの一、どうするっていうことをちゃんと話し合いしときなさいよということはずーっと言いつけてます。今もそうですけど。そしたら、そういうことが下地にあつて、私がパソコンに打つ際に、そのときは商業学校があつて…商業高校がありましてね、商業の生徒さんやつた

ら、あんなパソコンなんかちゃっちゃとやってくれるけん頼もうかなって思ったんです。だけど、いやー、でもちょっとなあ、でも私が頼んで、ここもう一回直してくれる？っていうんが何回もになると、もうめんどくさいからって向こうも思うだろうし、私の方が気の毒だから我慢しようってこうなっちゃうと困るっておもってね。それで孫にちょっと言うたんです。「なんで、外になんか頼まないで私にやらしてよー！」

ってすごい剣幕で言われて。「あれは絶対、あんな貴重なものは私にやらして！」って言いまして。何十回でもやりとりしてくれてかまわんからって。そしたら彼女もほんとに卒論の時にね、先生に…中国の歴史みたいなのが好きでそっちのほう選んどったそうです。初めに。そしたら、ちょうどこれが出版されて先生がどっかでご覧になったんですね。それで、田井という苗字にだけひっかかって「君ん家と関係あるんか？」って先生に言われたらしいんです。「私の祖母だ」って言うたら「なんでこれを卒論にせんのだ」って言われちゃったって言うんで、急遽、また彼女は卒論に取り上げてくれました。その卒論してくれたやつが、私に非常に役立っていますけど。だからもう、決して彼女はこのことは頭から離れないと思います。まあ、あの一、だから一足飛びで、息子をとんで孫の方に、こっちの方が…ね。息子の方は機械(メカ)の方なんでねえ。ちょっとあれなんですけど。

N：今も、あの一、読み聞かせとか・・・？

A：やっています。毎年、小学校で全校生徒はまあ、2月ごろにしたり、それから、6年生は毎年夏休みの間に文化財めぐりをするときに私は防災の担当でそういう話をしたりしています。こんどまたあるのよね？

N：さっき由岐さんのところお話伺いまして、お元気な方で…おもしろかったんですが、ちょっと疑問に思うのが、みんな、愛宕山に逃げられますよね。地形的にそのくらいしかないってのもあるんですが、ぱつと逃げないといけない時に山へ行こうって言う風に思うのは…その一、前の人からのなんかがあるんですかね？

A：それはね、だから、江戸時代の間代の時代でも、先の3回の地震津波のときでも、みんながあそこに行って助かったことが多いので、あそこは助命山だと言われてるの。それで、ちょうど記事の中にもそろそろ100年周期が近いのでみんな、周りの人にも読み聞かせ、語り聞かせをしていたところ、図らずも、「この度の災害・・・」ってゆう一文が出てきましたから、すごいなって思うんがそういうことね。過去のもずっと調べて毎回100年から150年ぐらいの周期なんだけど、今年ちょうど永正から500年なんですよ。

N：あ、そっか。1512年ですよ。

A：はい。だから、子供に言うときも「今から496年前・・・」「497年前・・・」ってややこしい数字を言ってきましたけど、今年は非常にわかりやすい。500年ですから。だれでもみんな覚えてくれます。だから、その500年の時に、あの一、まあ、こうやって来ることを先祖は知っててそれを住民にさし語りをしていたと…そういうことが大事だから・・・え??

S：あ、いや、明々後日でちょうど500年目ですよ。

A：そうなのよ！うふふふふ。だから・・・私は永正の津波のことを幻と言われたい、年代がきっちり合う方法はないかっていうんはずと・・・そうだ、そのときに・・・ちょうど平成18年の出版した時にですね、これ、国土地理院の方に頂いたのですが、ちょうどアメリカから地震や津波の研究者が海陽町においでになったんです。徳島県に来て、海陽町に。来て、友浦の碑文とかをご覧になったんですね。だからね、あわてて友浦の碑文を説明するんをあれじゃあいかんはな、って思って横の説明版に簡略に文言を書き直したんです。それを前の日の晩に付けてもらったんですよ。ははははは(笑)・・・

A：でね一、余所がないから、ここにあって、それは普通じゃない、偽物なんじゃないかって言われるのは心外なんです。なぜなら、穴喰の歴史はものすごく古くて、昔ほど栄えた町で人口もすごく…今よりかは

ずっと多かったし、それから、京阪神から…履中天皇の・・・后のお兄さんが驚住で、それで開いた街ですので、やっぱり非常に、その・・・あの一、京都や京阪神との交流がすごくあった・・・その時代からなんですので、船の行き来がすごくあったと思うんですよ。ですから、文化も向こうから持ち込まれた、と思いますんで物書いたりする人もいなかったわけではないと私は思うんですね。ですから、今こそさびれてあれですけど、昔の方がずっとね、よかったと思いますので・・・(中略)

この本通りのこの碁盤の目にしたってゆうのは、変わってませんからね。あの時代に、永正の翌年にこれが全部できたんですから。1805 件の家を建てて、神社もお寺も町家も、全部お殿様の力ですね。無償で翌年にも建てとんですからね。すごい力だなんて思います。今の東北の被災の人みたいにね、そんな、いつまでたつたら、仮設から帰れるんかっていうね、そんな思いせんでもすぐにね。まあ、規模は違うといってもそんな犠牲者の力って言うんはすごかったなって思うんですね。その嘉永(安政)の時でも、藩の救援の手厚さと素早さ、もう、5 日目には軍隊が入ってきて視察をして、それであーせー、こーせーと仮設を建てて救い米をくばってしてきてるわけですよ。

N：早いんですよね。

A：早いですよ。だから、お殿さんがお酒を一斗ずつお見舞いにくれたりとか、いろんなことをしてもらってるようですので、ほんとに住民は不満も不平も言わないでできたわけです。ただ、昭和南海のときだけは、終戦の翌年だったもんですので、全国民がどん底の生活をしていましたからね。だから、私なんか子供の時でもよっぽどのことでないと・・・(中略)

A：だけど、今回みたいな 3 連動で、文章・・・あれにも書かれてありますように、愛宕山が、山の上が水の底になるような大きなのが来た場合は、祇園山・・・八幡神社の山頂といえど無難ではないと、書いてあります。間代は、ですから、3 連動だったら愛宕山 25m 標高も越えてくると思って。そこだったらもう、鈴ヶ峯のほうに、逃げなきゃいけないっていうんで、私は、それをね、最短コースで街を抜けたら逃げれる道を少し、田んぼなんかは広めて、して欲しいってゆうこと。それと、研究してくださる方に、一番お願いしたいのは、予兆の研究を進めて頂いて、前兆現象を早く周知するというで、そうした時点で、無駄になってもいいから、早く弱者の方を先に逃がすと。安全圏にね。それやったら時間があるからいける、と。無駄になったら、怒らないで、よかったね、来なくてと降りてくればいいわけですから。いったん事が起きてからは、年寄りとか幼児とか間に合いませんこの地域は。それを、研究してる方には、そういう予知能力、時々出ますよね？それをなるべく研究してほしいと願いですね。だから我々も、一般住民も空の模様とか鳥の異常に鳴くとか鳴かんとか、漁師だったら、海の異変があるとか感知できる部分があるとおもうんですよ。その時点で、そういう風にとらえた時点でもう逃げようという風にならんと、間に合わない。そう思うんです。そうしたらある程度安心なところまで行けると思うんです。

(7) A：J さん(男性) N：内藤先生

A：これはね、私はいまだに印象にのこっただけですけどね。

N：はい。

A：災難があるつちゆう予兆があったんですよ。

N：あー。

A：これはほんまに非科学的なんですけどね。

N：まあでも今でもいろいろ言いますよね。雲がとか。

A：言いますねえ。科学的かいうたら弱いんですけどね。

N：どんなことがあったんですか？

A: どんないいことかいいますとねー.学校でねえ,小学生が騒ぐんですよ.がいに騒んぎょんですよ.

N: 小学生がですか?

A: ええ.津波があるいうてね.ほれはどういうところから発信してるいうかとね.おばが言うにはね,いわゆる月のところにね,星が近づいて,一つ星がある.これが予兆やと.言うてね,ほの時はわろうてすまじよったんです.ほいだら災難におうたわねえ.ほれがやっぱし,今でも残ってますねー一番.

N: あっそうですか.

A: あっきたなーと.ほらもうその時はテレビや何もないしね.ほの予感がするのが非常に非科学的やけど,ほれがいまだにイメージが強いですね.

N: その中学生が騒いだっていう予兆は地震かどうかはわからないんですね?

A: ええ.何か災難があるっていう.

N: はいはいはい.

A: スルメがようけとれる年は災難があるってそれはよく言ってましたね.

N: あたごやまの管理は多田さんがしてるんですか?

A: ええ.

N: 昔もそうだったと思うんですけど.昭和南海の時もトイレがないとかいろいろありますよね.

A: 今度作るいうてましたね.

N: あっそうですか.

A: ええ.あの一あのあたりの人が,特にご婦人がようけ近所に来てね,作ってもかまんかーってね.

N: 何かその他にいうてきてることありますか?

A: 備蓄の倉庫を.それは役場がちょっと行ってましたわ.

N: そうですか.

A: しかし今言ってたトイレね.これの管理いうのは非常に難しいんですよ.私は災難のことで返事しましたけど,トイレいうのはねー,便利で非常に犯罪が多いんですよ.

N: 犯罪ですか?

A: まあ徳島でもね.公園のトイレで女の子が

N: ああー

A: ありましたねー

N: はいはい.

A: ええ.ああいう風にトイレっていうのはねー,便利でね

N: 密室ですからねー.

A: そうそう.ほれがあるんで,そういうのを気にしますはねー.

N: ああー確かに.

A: 慎重にせんとね.

N: そうですねー.あとなんかあの一あたごさん竹が結構生えてますよね.竹やぶがいっぱい.

A: ほれはね下がね.

N: あっ下の人ですか?

A: いっぱい生えたいうてこまっとなですよ.

N: あっそうですよ.

A: 避難路で縦のさんどうと横のさんどう,横さんどうはねスロープでね.手すりおね.まことによくでき

てますわ.けんど工事で痛めてますからね.

N: ああー木の.

A: ほんであのー現地にいたらわかるんですけど,手すりや傷んでますわ.私が直していたんですけどね,やっぱり工事の時にいたんどんですわ.

N: あのへんの木とか草が倒れてますよね.

A: というのはあれかっこうの遊歩道になっとんですよ.

N: ああーお年寄りの?

A: うんー.ほんでできるだけ直していますよ.

N: あのあれースロープとかをあれ直すのは,町の仕事なんですか?

A: ええ.ほれはーこの災害対策はうちは無言でね,町の対策支援ので受け入れています.

N: あのじゃあ谷岡さんでしたっけ?

A: ああそうそう.あの人やね.

N: あっそうですか.あのスロープっていつできたんですか?

A: あれはねー10年にもなるかねー

N: あっそうですか.

A: 早かったですよ.というのはねー神社でお祭りがあるんでねー前は石垣のね.不便なんじゃったけど,それができてあのー第二の工事で前をまた逃げるのにな,これは急なと,急なと,これではーあのー上がりにくいいうて,ほんであれ,今改良して,ちょっとゆるくね.

N: ああー.

A: もっとーみなは構想はね,もっとスロープでね,あのーやってもらいたかった.あのー真正面を改良するのは,斜めぐらいに,まあ予算もあつたんだろうね.もっとゆるやかに.

N: なるほど.

A: ほらねー前々から,町当局と神社のふもとにね.道路入れたらというのはありましたわ.

N: ああー.

A: 大きな道路をね.というのはあそこはせまーなつていつとんですよねみな.

N: はいはい.

A: 大きな岩があるんですよ.ほれがー難物でね.とるのが.ちょっとできなんだわね.あれはー昔は津波の浮き島浮き島いうてね.かっこうの避難所ですわね.

N: そうですよねー.まあだいたい穴喰の人はあたごかべんでんですよ?

A: そうですね.逃げると思いますよ.

N: 何かされていますか?その日常の中で防災というか,例えば避難の練習とか.

A: いやーほれはねーなかなかねー.

N: そうですかー.

A: 今はちまん神社のほうでも避難路をこしらえてるんですよ.

N: ああそうですか.

A: ほれはーまだ詳しいのは聞かんのやけどね,何メートルまでの避難路を作るんかはねー

N: はちまん神社はええと自治体がつっているんですか?海陽町が?

A: ええ.自治体が非常に熱心でね.というのは,やっぱりこの前の昭和南海の経験があるんでね.非常に自治体も予算としては,海部郡なんかがつくってくれよんじゃないんですか.

N: はあはあはあー.

A：ほんで案外早いすわ.今年のはちまん神社の避難路ですけど,来年度は,これが崩壊せんように山をね,擁壁をずーっと作る予定なんです.ほんで手っ取りばやいののは,南海地震の経験があるんで,県もそういうの序列つけとんやないんですか.

N：まあそうですね.県南は今回お金を結構ね.

A：津波に関してはね,自治体がね中心でやってくれてますからね.そこに雑音がはいたらね,スムーズにいかんですわ.

N：じゃあ割と行政が動いてくれるんですね？

A：そうそうそう.工事もやっているんですけど,全然口いれんね.むしろ応援するぐらいやね.そうせんと工事できませんわ.

N：そうですね.外からガヤガヤ言われたらね.

A：ほらもういろいろなことがあるけんねー.

(8) Kさん(公民館長女性)

公民館長のKさんにお話しを聞いた.調査の都合上,トランスクリプトではなく,Kさんから聞いた話を以下のようにまとめた.

- ・昭和南海地震発生当時は0歳だった.母から地震の話聞いたくらいで詳しく知らない.
- ・行政との連携はあまりないように思う.突喰が行っている活動の情報が下りてこないから何もわからない.

- ・突喰は県の防災モデル地域に指定されており,1度トップの人を呼んだ会があった.

- ・どれくらいの方が防災活動に協力していますか？

→全く自主防災活動はしていない.

- ・地域住民と共に避難訓練や実際に何か活動をしたことはありますか？

- 予算がないから何もできない.住民との話し合いの場を設けるのも難しい)

- ・合併で損をしたと多くの方が思っており,合併の弊害があると思う.

- ・昔は,文化的な活動が盛んだった(日本三大祇園として突喰が有名だった).突喰間での交流・活動があった.

- ・突喰地区住民の防災意識はどうですか？

→防災意識が低い.突喰住民は,閉鎖的なものがあり,人任せになりがちでリーダーとなる人がいない.

- ・男性がリーダーシップをとってくれないのに問題があると思う.

- ・頼まれたから公民館の館長をやっているが,女なのにといった周りからの目が気になる.女の方がリーダーシップをとって住民に呼びかけ,まとめるのは難しいと思う.だからこそ,男性に動いてほしいし,その方が上手くいくと思うのに男の人はあまり協力的ではない.さらに,突喰のことをよく知っているはずである旧の町の職員は一切関わろうとしない.公務員ではなく,何をするにしても民間の人たちばかりが中心となって動いている.

- ・災害情報伝達はどのようになっていますか？

→去年,町内に無線放送設備ができた.

- ・愛宕山の南側に空き地がたくさんあるからそこを有効利用できないだろうかと考えている.トイレの設備や住民が一時避難できる場所を設けるべきではないか.

(9) A：Lさん(男性) N：内藤先生 S：学生

A：あの一自主防だけでは話ができないんで、町から、えーまあ、愛宕山神社のほうで神主さんから他の自主防災会の会長さんが集まって話をしてくれてというのが要望だったんですけど。けっきょくまあ、足並みがそろわないで、これはそのまま置き去りになってしまって、で、その一、そういうふうにして、ゆうことだったんで、結局前に進めなくなって、動きは止まってしまったんです。

そのなかで、県が、なんてゆんかな、避難路とかを含めた・・・

N：モデル地区？

A：そう、モデル地区。てゆんで、手を挙げませんかって言うんで、一応手を挙げさせてもらっている状態。それも、一回会議があつて、そのあとはまだ何も無いっていう・・・

N：それたぶん南部県民局が・・・

A：だと思います。で、その一回も平日にしたんで、僕は仕事しているんで出席はできてないんです。

N：それ、誰か代理の方が・・・？

A：はい。てゆうことなんですけど・・・あの一。

N：前には夏休み期間に一回こちらお邪魔して。というのも、突喰ってというのは、田井さんのところに古い古文書があつて、田井さんも積極的に翻訳の活動とかしてらして、全国的に有名っていうか、文化的な活動に関してですが、非常に有名で、昭和南海の時の記憶も経験なんかも、突喰町時代にまとめられて、本にされているんですね。そんな災害についての伝承もあるし、災害についても記憶もちゃんとあって、まあ、そういう意味では、文化的には万全というか、備えがあるというか、まあ、活動的にはかなりなところだなあ、つておもって最初お邪魔したんですけど。あの、意外な程ですね、そっちはいいんですけど、実際の防災活動となると、あれっていうくらいあんまり・・・落差が大きいっていうんですかね。特に何も・・・すごいそれを活用してつてことはあんまり感じとしては・・・そのときはお年寄りの方にお話を伺ったんですね、昭和南海の経験者の方に。で、あんまりなあ、という印象だったので、実際のところ、防災担当の地域の方にどういう取り組みをされているのかということを確認させていただければ、知りたいなあということが、みんなありまして、それでちょっと、お伺いしたつてことがあるんですね。それと、もう一個は、美波町の阿部つてゆう集落があるんですよ。西由岐のもうちょっと南にあるあんまり有名じゃない小さい集落なんですけど。伊座利よりもうちょっと、一個南。そこに、その一、住民が自主的に、行政の支援とかほとんどなしに、つくつて、非常に割と率先してやっているわりと有名な、そちらにも調査に行っていて。その一、自主的な防災活動はどうしたら、こう、実効的につていうんですかね、動くようになるんだろう、と今考えないといけない。自主防はあるんだけど、うまくいってるところといてないところがありますよね。とすると、やっぱりけっこう今、差が出てきていると思うので、その理由はなんなんだろうと知りたいのが、まあ、こちら側の、あれなんですね。それで、率直な感じが今どういう状況にあるのかつていうのを伺いしようと思つて。で、まあ、あんまり動いてないつてゆう・・・ことでしたので、なるほどなつて感じはあるんですけど。まとめきれてないつてゆうところですよ、突喰の内の自主防災組つて街だからたくさんあると思うんですけど、その理由つていうんですか。午前中、多田さんの所にもさっきまでお話をお伺いしてんですけど、Jさんなんか避難路の整備とか基本的にウェルカムつていうか、わりとどンドンやったらいいんじゃないですかつていうタイプですよ。で、よくわかんないんですが個別

にいろんな自主防の突喰のですね、僕が小倉さんに聞くのは初めてなんですけど、聞いたら多分、避難路作ること自体いいか悪いか聞いたら、多分賛成する人が多いんじゃないかなって思うんですが、そうでもないんですか？

A：避難路をつくること??

N：整備です。

A：整備ですか。あのー、えーっと、何年前かに結局この真正面の階段っていうのは新しくなっているんですよ、中段まで。で、えーと、その話も、まあ、僕がちょうどいないときに、自主防災を自分がする前の人がなんかで集まった時に、ほういう要望が出るとるいうて、実際は、こうまっすぐじゃなしに、こういう風に斜めにつけてほしんだ、と。

N：傾斜をですか？

A：傾斜をゆるくなるようにっていう要望だったんですけど。それが町に持っていったらこうはつけれないからゆるくっていううんでまあ真っ直ぐなんだけどゆるくって、だから、こっちにひいてゆるくしたっていう。で、まあ、それぐらいが、工事としても関の山だったっていうんですね。で、結局、ここしかないわけですよ。で、確かにないんだけど、年いった方ですと中段まではそこそゆるやかになったけど、その上なんて、ほぼ、もう、無理ですよ。

N：厳しいですよ。

A：上がったとか。ある人がいったんは、そんなみんなばあーって逃げるんだから、そんなわたし踏みつぶされて死ぬんやけん私は逃げん、てね。とかいう、形なんで、もうひとつ、そのー、どないかっていうんがないんですよ。で一回、自主防の班長さんに集まってもらってっていうのが今年の6月くらいにしたんですけど、結局、上がってもらったらわかるんですけど、神社自体がもう、古いですよ。地震で揺れた時点で倒壊しそうな。なんで、ほれが倒壊すれば、当然上がる人数もよけい少なくなるっていうんで、そういうなんも含めてどないか考えてくれるように、町とか宮司さん、また、自主防の代表者みんな、集めてやってほしいっていう要望だったんですけど。まあ、あのー費用的な面で、じゃあ、だれがお金出すのっていったら無理な話ですよ。で、結局こういう要望でしたら、今度前にも後ろにも進めないっていうね。

N：で、頓挫。

A：頓挫してしまう。まあ、ね、東日本の震災とかから、話を聞けば、実際的には避難訓練であるとか、また地震が起きた後どうしていきのかっていうことも含めて、あのー、いろいろ、話をせなあかんっていう部分はあるんだけど、そこまでみんなの意識が言ってないから、もう、無理。掛け声だけかけても、無理よね。ってあのー、まあ、単純に備蓄倉庫っていうのも一応倉庫は用意してくれるんですけど、中身を自分らでしなさいでしょう？自分らでしなさいって場合にその自分らの地区の避難路・避難場所はここですよって、なったらまとめやすいですけど、いっぱい人が来るのに自分らだけ用意したところで全然足りないですよ。っていうのと、僕が思うのは、実際そんだけの巨大な津波が来たときに、愛宕山ってもの、っていうのと、えーと、南部総合県民局から多分来てたんですけど、あのー、実際の地震が来たときに、愛宕山自身が崩れないかっていう調査をしますっていうのが来てたんですね。

N：なるほど、流されっちゃったりとか。

A：山崩れとかですよ。

N：八幡山のほうは・・・なんかコンクリでその辺の工事をするとか。宮司さんがおっしゃっていて。そういう工事をするとか。そういう予定になってるんよね？

S：らしいですねー。要塞化するとかみみたいな感じでしたよねー。

A：八幡神社のほうですかね？えーっと、宍喰として、この南部総合県民局の取り組みに手を挙げてるのは、うちのところと、久保地区が挙げてて。で、久保地区はほかにもジョウフク寺かな？なんかの避難路の整備が計画に入ってるらしいんですけど。

N：こっちはそれに比べると・・・

A：ないですね。

N：愛宕山崩れてしまうとちょっと・・・あれですよ。

A：そうですね。あの一、一番上で海拔 25 メートルとかなんか行ってたんで、実際こんだけの人が上がるにはどうなんだろうってゆうのが・・・

N：まあ、5分ですのですね。一番早くってというのが。まあ、あの、前の昭和南海のときも全員が登れなかったというのがありましたね。

A：田井さんのお母さんとかは久保のほうまで逃げたとかって行ってましたもんね。

N：みなさんめいめいいろんなところに逃げておられますよね。奥のほうに逃げたって方も。いろいろ、入らないって感じで。高さ的にはたぶん大丈夫。20 は・・・

A：予想的にはね、20 は超えないっていうんで、高さ的には大丈夫なんですけど、人がね、みんな逃げられるかっていうのが。で、年いった方が先に逃げてたら押し飛ばすわけにもいから、多分逃げれないんじゃないんだろうかって。

N：あれ、けっこうあきらめるかどうかっていうのが難しいところですよ。その一、避難訓練とか。例えばですけど、鳴門とか率先避難者っていうんですか、逃げろーとか言いながら、あの一逃げて、避難行動を促進するような役割を割と若い人に決めて避難訓練してたりとかってまあ、よくいくつかの所でやってるんですけど。そういう避難訓練的なことっていうのは・・・

A：避難訓練は・・・えーっと、まあ、だから、あの、実際何も動いてないんですけど、実際、町が年に 1 回とか避難訓練を朝の 6 時とかに・・・

N：防災の日ですか？

A：いや、そうじゃなくって年中行事で 7 月の・・・12 月？昭和南海のとき合わせてやってるんです。これも、ほとんど逃げている人いないですね。

N：そうですか。あの一、自主防がいろんな準備とか・・・

A：いや、何もありません。

N：あ、ないですか。

A：町がサイレン鳴らして、まあ、避難訓練しましょうっていうんで。やってたんですけどね。今もやってると思うんですけど。ほとんど逃げてる人は・・・

N：見たことがない？

A：ないことはないですけどね。まあ、田井さんとかは逃げてますけどね。

N：ああ、田井さん。

A：何人かくらいですね。

N：小倉さんはあんまり・・・？

A：何回かはしたんですけど、まあ、去年・・・？去年は用事があってできてないんですけど。まあ、去年もありましたね。今年もあると思うんですけど。12 月の・・・

N：21 日ですね。

A：とかにやっていますね。

N：そうですか.知りませんでした.形骸化してるんでしょうね.

A：まあ,そんな朝の早いときにやらなくても,とは思うんですけどね.朝の早いときにやるから,みんなよけい寒いですしね.お年寄りのかたですと,もう,それでぼっくり逝きそう.

N：そうですよね.確かに.

A：まあ,当然いつ来るかわからないんで,こういうやる必要はあるんですけど.まず,昼からやればいいのになって.

N：地域のほうから,そういうちょっと,避難訓練ですか?っていう意見はあるんですか.たとえば,お年寄りの避難を何とかしましょうとか.そういうのはありますか?

A：えーっとですね. . . . 熱心にやろうよっていうのは田井さんが言ってるんですけど.あとはあんまり聞かないですよ.あとは,南部総合県民局のほうの企画に乗れば少しはなんか動きがあって,あるのかなっとは思ってはいたんですけど.

N：あんまり,動きがないってことですよ.手を挙げた割には.

A：そうですね.今年の6月に班長さん集めたときにも「こういう話があるんです」っていうときにもその時は,大部分の意見は「こんなんで出て一緒にやん」だったんですよ.でも,どうせこのまま何もしないよりはいいんじゃないのっていうんで,手を挙げるんでお願いしますねっていうんで,もう一度班長さん回してもらってで手をあげますっていう風にしたんですけど.

N：なるほどねー.

S：自主防としての仕事って具体的に何があるんですか.

A：自主防の. . . . 具体的に. . . .

S：お仕事みたいになって. . . .

N：普段の活動って,もしあればですけど.

A：あー,自主防として,ですよ.自主防を作ったのが多分,平成17年だったとおもうんですけど,だけど結局なんにも動かないまま, 2005年,に多分作ったままで,その組織図自体も,まあ,そのまんまで,動いてなかったんで,で,何年前かに変わってってなって,その変わったんやけどそれも,それもなんも変わってなかった,その4月か3月に町がそういうなんをやりたいんだけどって相談に来て,じゃあ,みんなに声かけますねって言って,そしたら何か動きを出さなだらってっていうんで,そういう段取りにはなってきたんです.

N：はあ,なるほど.

A：で,活動としてっていうんは. . . . 動いてないんで何とも. . . . 言いようがないですね.

S：じゃあ,これからの計画とかもとくにはないですかね.

A：ないですね,今のところは. . . .

N：いま自主防の組織として,何人ぐらいいらっしゃるんですか.こちらのほうでは.

A：あの一,まだ. . . . 何人くらいいるんだろう.これが組織図なんです.で,えーとその,6月にしたときにこの人達に来てもらって, 変わってるんですけどね.で,以前の2005年くらいにみんな作ってるんですけど,この人達に来てもらって,ほしたら,変わってほしいんだ,とか,

N：会長とかをですか?

A：はい.ってゆうて,ここまでは新しくなってるんですけど,あの一みんなが結局その時に出てきてないんで,組織図自体も前の人のまま更新がされてない.会も何回かしようとしてた

んで、次の時でいいですよって、言ったまま、一回で会が終わってしまったんで、もちろん進まなくて、ここは新しく、でも、後の所は出してもらったところとないところがある状態ですね。まあ、あの一实际的に何かってゆうふう動いていってたら、あの一、じゃあ出してくださいねって言えるんですけど、それすらまあ、動いてないんで出してもらったところで・・・まあ、まわってないんですよ。

N：これはあれですよ、西南地区の会ですよ。

A：西と南ですね。

N：基本的な事を知らないんですけど・・・穴喰町にはこんなのは何個くらいあるんですか。

A：久保が一個で、で、えーつとこっちが北になるんですけど、北にも2つくらいあると思うんですけど、で、浜地区も2つか3つくらいあるんじゃないのかなっておもうんですけど。

N：なるほど。じゃあ、まあ、6こ、7こくらいあってそのうちの1つってことですか。

A：はい。

N：それ全体で話し合ったことってないんですかね。地区会長会議みたいなのですか・・・

A：それは、ないですね。で、あの一、えーつと、この自主防災の単位自体が分館ってのがあるんですけど、ここは西南分館で、ほれで、その分館ごとに作ってるんとおもうんですよ。自主防災組織を。で、西南分館の分館長で、じゃあ自主防災もねってなって。なんで、分館寄ってのは町の方が声をかけて年に何回かはあります。で、運動会とか、っていうんでほれとかは行ってるんで、そんなんと自主防は違うところがあると思うんですけど、かなりの人が兼任してるんだろうとおもうんですけど、自主防災とかそういうなんで・・・

N：・・・他に何かあるんですか。自主防てゆうのはこれなんですけど、他に広い意味での防災に関わる NGA とか、そんなのは、ほんとに自主発的にやってる活動とか、まあ、あるところもあるんですけど、どこにでもあるわけじゃなくて、もしあればってゆう。

A：自主的に・・・まあ、頓挫する前なんですけど、その何年前はどこまでいったのかは分かんないんですけど、えーつと、(※)防止転倒かなんかつけましようかっていうのは回ってはいったと思うんですよ。それが、ただ、西南の自主防災で回ったのか、それともこういう、一か所、二か所とかで回ったのかってのはわかんないんですけど。田井さんのところとこの通りは回ったと思うんで。ボランティア的に。これも僕の前の方が回ったんでちょっと、わかんないんですけど。

S：えっと・・・ちょっと話戻ってもいいですか？

A：はい。

S：さっきなんか、町主体？の避難訓練があったってゆうのは聞いたんですけど、それって別に町の・・・町政・・・？町長さんが主体だったってことですか。

N：町がお金出して、とかってことですね。

A：お金はなにもいってないと思う。ただ、あの一、朝サイレン鳴らして、逃げてくださいーいうて、主催者、責任者？が町で・・・

S：え、そこの町から自主防災の組織とかにこういうのやってくださいね、とかもなんもなかったんですか。そういう、働きかけとか・・・

A：ない・・・ですね。

S：じゃあ、そんなに町と、ここってそんなに結びつきがない感じなんですか。

N：自主防と、ね。

S：自主防災と・・・

A：ない・・・ですね。ただ、あの一、えーっと、先ほどからでてる南部県民局の会からなんか出てるんだけど、やらない、とか、えーっと、愛宕山のそんな避難路を確認とかってゆう会を持ちたいんだけど、呼んでくれないとか。

N：けっこう、県民局は積極的に窓口とかして、

A：とか、えーっと、町なんですけどね。町役場のほうからこういう風に声がかかってきて、その一津波とかの説明会をしたいんで、その一、住民の人が集まるときがあったら教えてね、とか、そういうのはありますね。

S：実際それ、やったこととかは・・・ないんですか

A：やったのは、だから4月くらいに集めてくださいっていうんで、4月だったと思うんですけど、2月だったか4月だったか・・・

N：2月はあれですよ、新想定が出たのが2月です。

S：それってけっこう人集まられたんですか？そうでもないですか。

A：そこそこは・・・。はっきりとは覚えてないですけど、2,30くらいは集まってたんじゃないかと思いますけど。

N：あの一、愛宕山のところですか。

A：いや、町民センターで会をもって、あと愛宕山のほうについていうんで、しましたね。

N：点検ですよ。改善点とかを・・・

A：そうですね。

S：こういうのお知らせする方法ってどんなことしてるんですか。あんまり・・・その聞いた人がそんながあるのがよくわからないっていった人が多かったんで。どうやって、避難訓練とかにしてもこういう会合があります、ってゆうのにしても、知らせてるのかな。って思っ

S：あ、あと、県のモデル地区指定受けられてますよね。それってなんかどういうことなんですかね。その一、どういふのがあから指定を受けれるみたいな規定ってあるんですか。なんていえばいいんだろう・・・

N：モデル地区になる根拠ですよ。手を挙げるってゆうあれですか。

A：あ一、手を挙げて・・・。わかんないですよ。僕も聞いてないんで。その一海陽町自体が圏の指定に入ってるんだってゆうんで、で、手を挙げませんかってゆうことを言われて、じゃあ、手を上げましょう、とか。で、まあ、旧の穴喰であげたのが、自分らの所と久保地区だけだった。後のところは挙げてもないから、地震に対する意識も、ようは薄いんでしょうね。手自体も挙げてないから。

S：え、これ、指定受けたことによつてなんかあるんですか。例えばお金がもらえたりとか。

N：この間、ほら、阿部に行ってるんですけど、この間阿部でワークショップやったやんか、あれはモデル地区に指定されてるから。

S：あ一、そうなんだ。

N：なんか美波町ではモデル地区でワークショップやってるみたいで。

A：そういえば、聞いたんは、そういうワークショップとか、そんなんをしましょうってゆうことなんですけどね。まあ、ほれには大学の先生とかが来てくれてって、とかは聞いたんですけど。

N：この2人はこの間それに参加してきましたんですよ。

A：で、その一、俺も詳しくってゆうか、手を上げるのに詳しいことがあるんやけどってゆわれでもよく教えてくれなくて。で、なんかぼんやりした感じで。せつかく県がしてくれるってゆうのだから、手あげとったら避難路の整備ももうちょっとしてくれるんじゃないのって町に聞いてみたらそんなお金だす話じゃない。といわれて。じゃあ、どうやって逃げるのって。逃げる段階でここが崩れそうならどうにかしてよ、とかもうちょっと逃げるのにここをこうした方が逃げやすいんでお願いします。ってゆう要望出していくでしょって言うたら、うーんとかって担当者は言ってましたけどね。

N：でも、やるとかならずその話が出てきますよね。

A：ねえ。ほやから、まあ、そんなするときには班長さん地区長さんにはせつかくやから、こういう機会とか場がなければ声がだせないからきっかけがあれば声も出せるんじゃないのって言うて手を挙げたんですよけど。

N：それは、たしかにそうですね。で、県民局の責任者の方が来て話を一応オフィシャルなこととして聞いたってことになるんで、ワークショップやると。聞いたらなんかしないと、怠慢ですからね、あっちの。

A：そう思って手を挙げたんですよけど。

N：今年度はそんなにまだ走り出しで具体的何かをするまではまだ予算がないんじゃないんかってゆう噂ではありますね。

A：モデル地区に手をあげても4回の会があるとしか聞いてないんですね。で1回終わったんだからあと3回。で、住民の方も来てもらっていいですよーとか聞いたんですよけど、じゃあまたそのときに回覧板まわしますねーって話をして、で日の設定とか決まったら早く教えてください。みんな予定とかあるんで、って言うたんですよけどそっからなんも連絡がないっていう。一回はもう済んだんですよけどね。つづけて2回、3回ってするのかなって思ったら結構間があいて・・・

N：一回目って点検をしたときですか

A：じゃなしに、新聞にも多分載ったと思うんですけど、町長も出てモデル地区から1人とかでて・・・南部総合県民局とか・・・

N：それって海陽町のやつですよ。

A：海陽町の会ですね。

S：宍喰自体の会ではないんですよ。宍喰地区だけの・・・みたいな。

A：それはないですね。で、一回海陽町でやって次はモデル地区としてやっていくようには聞いているんですけど・・・

N：すいません、戻ってからまた新聞記事調べるんですけど・・・一回目っていつくらいでした？

A：えー、1か月・・・2か月前だったとおもうんですけど。9月、10月くらいだったと・・・

N：そうですね、それで今年度4回やるってゆう・・・

A：今年度・・・、でも今年度ですよ。僕はもうすぐ続けてやるんかなって思ってたんで、で、はい。何も言って来ないんで。

N：ちょっとわからないですよ。町の単位が違うから海陽町はまた分からないんですけど。でもまあ、今年度でしょうね。けっこう年度末にぎりぎりにやるんですかねえ。

M：あの、アンケートをちょっと・・・

第 5 章 地域の特徴を活かした防災組織の可能性

八木大斗、久喜田彩華、水本駿

1. 調査研究の課題

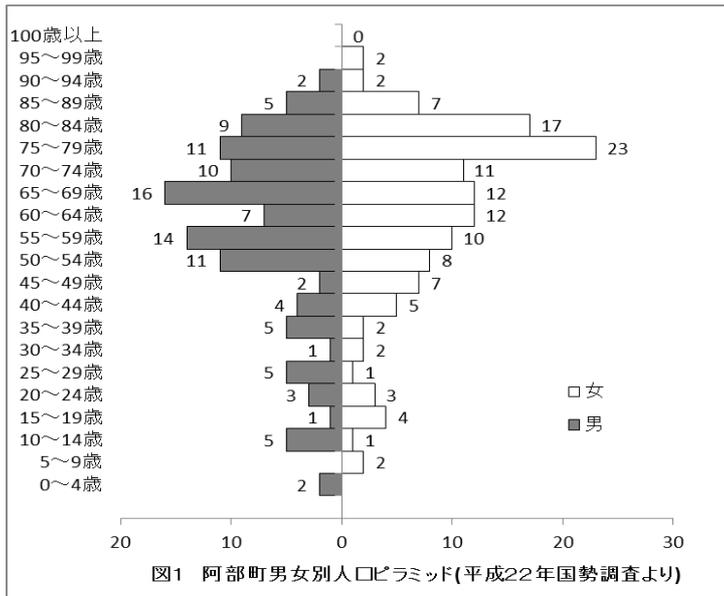
私たちは、地域特有の組織団体を活かした実効的な防災組織づくりの可能性について考察していく。なぜこのようなテーマに着目したのかと言うと、「自主的」とされる自主防災組織の組織化においては、国のテコ入れが強くはたらいて」おり(庄司、2011)、行政によって「上から」組織化されている事例が多く存在する。住民が主体となっていないので、内実が伴っていないのである。そこで重要になってくるのが、地域の特有の組織や団体を活かした、より実効的な自主防災組織づくりである。今回調査対象としている徳島県美波町阿部地区の自主防災組織は、行政によって「上から」組織化されたものではなく、町内会がそれを担っているのでもなく、住民自らが指揮をとり組織された、ボランティアな自主防災組織である。このような「下から」の自主防災組織づくりの可能性を考察していきたい。

そこで私たちは、阿部の生業に焦点を当て調査を行った。私たちがなぜ災害という研究において生業に着目したのかと言うと、「災害は、衝撃の強烈性また復旧や再建のストレスの態様の中に、社会と文化の根本的な特徴を現出させ、何かと何かの間に密接な結びつきがあることや何が中核的な価値であるかということ明らかにする(アンソニー・オリヴァー＝スミス、2002:32)」ため、災害のリスクに晒されている地域の生業に注目することで、地域の特徴を活かした防災組織の可能性が浮かび上がってくるのではないかと考えた。そこで、阿部の生業に着目し、阿部地域がどのように周縁化していったのか、阿部独自の組織・団体を活用した地域づくりの可能性、の2点について検討していく。

2. 阿部の概要

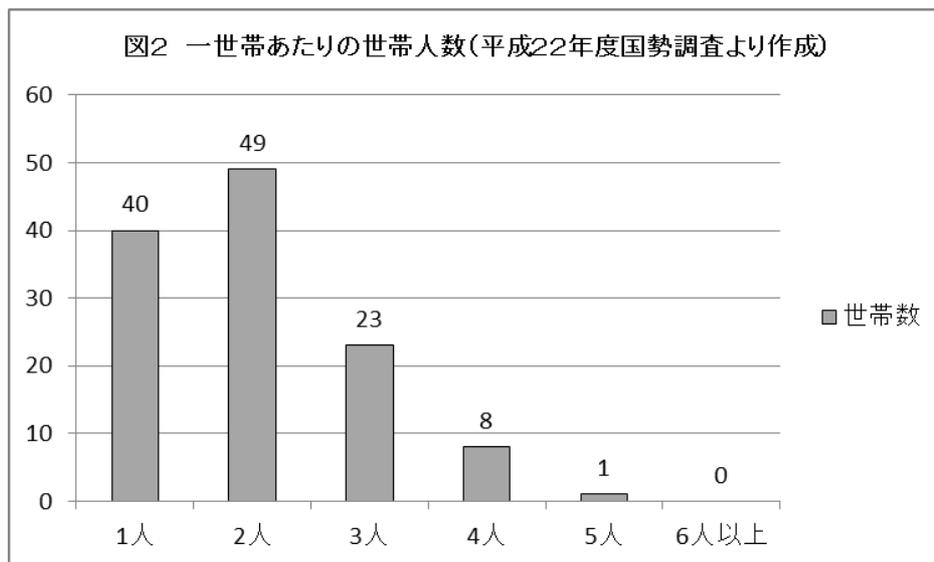
・阿部の人口

現在の阿部の人口は244人(平成22年国勢調査より)、うち男性113人、女性131名となっている(図1参照)。図1から見てわかるように、平成22年の阿部の人口ピラミッドは極端なつぼ型となっている。生産年齢人口が少なく、高齢人口が非常に多い典型的な少子高齢化地域であることがわかる。また、生産年齢人口が少ないことは、自主防災組織の活動力のベースとなる若い力が少ないということである。



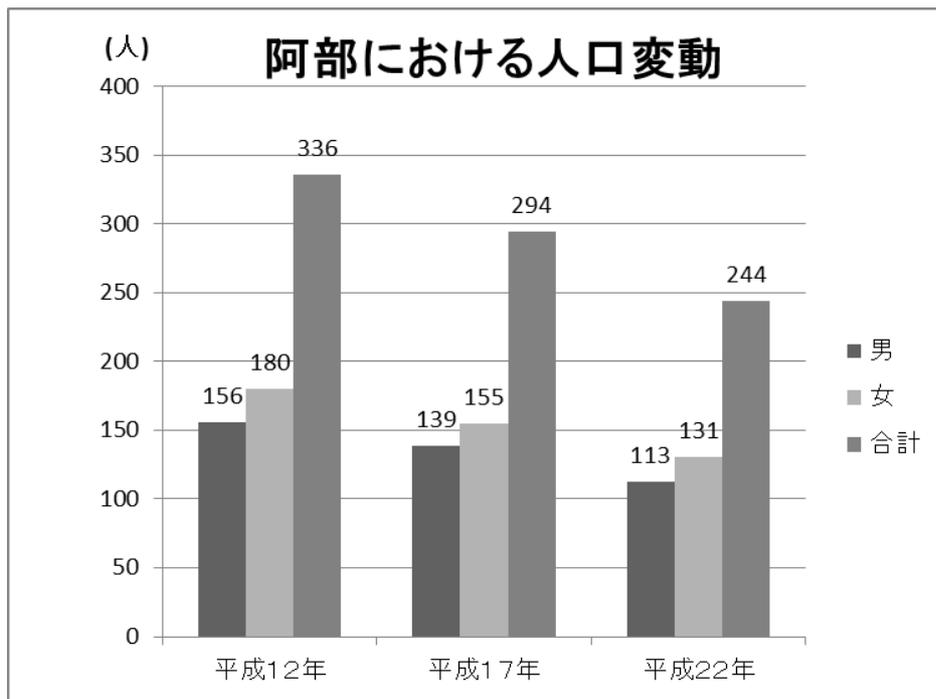
・世帯数

世帯数は人口 244 人に対して、121 世帯である。阿部の一世帯あたりの平均人数は、2.01 人である。また図2からわかるように、一世帯あたりの人数が1人、もしくは2人の世帯が3分の2以上をしめている。阿部は主に、単独世帯または、核家族世帯で構成されていることがわかる。



・人口の移り変わり

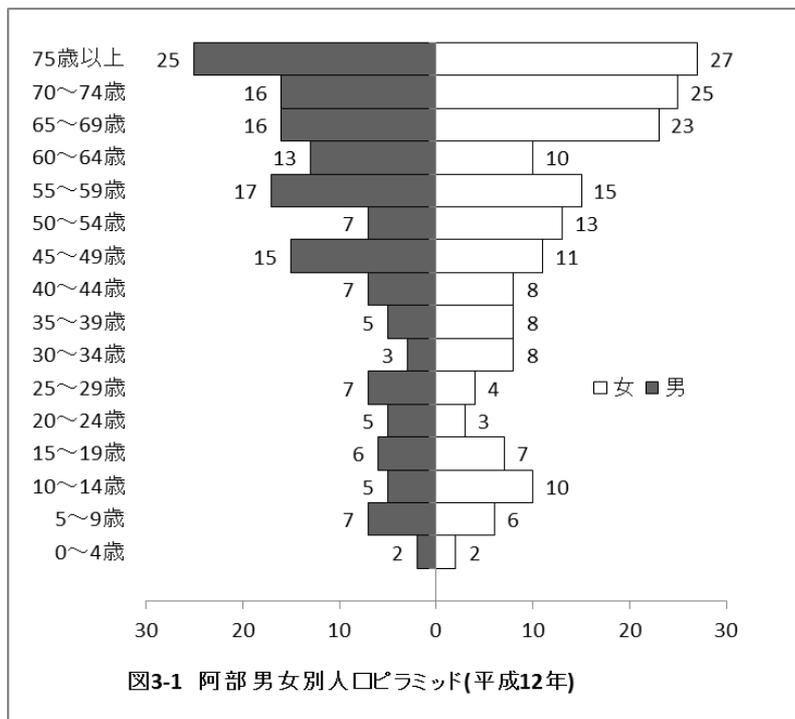
以下は、平成 12 年、17 年、22 年の人口変動をあらわしたものである(平成 12～22 年国勢調査データより作成)。年々人口は減少し、過疎地域となっていることがわかる。

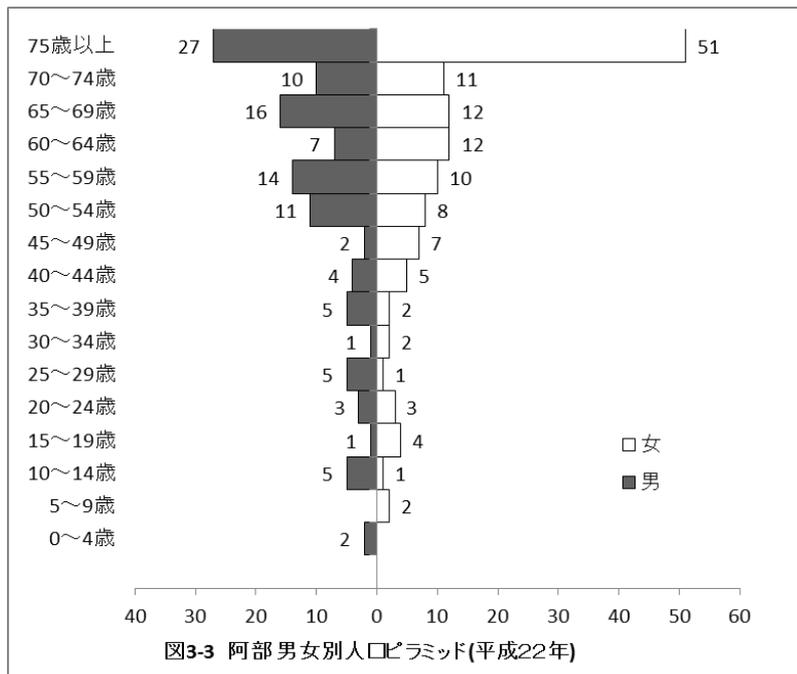
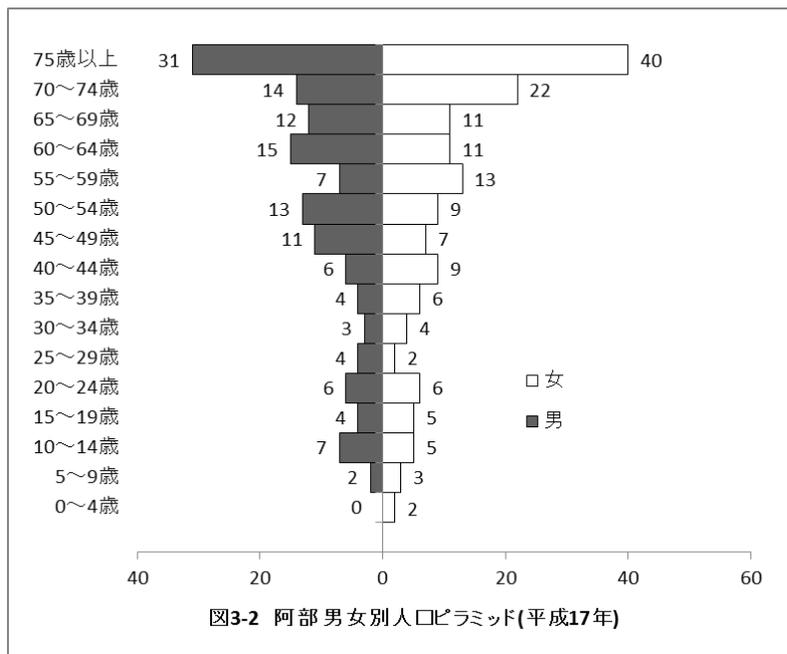


平成 12～22 年国勢調査データより作成

・人口構造の移り変わり（過去のデータとの比較）

以下は、国勢調査が行われた過去 3 年分、平成 12 年、17 年、22 年の人口データを人口ピラミッドで表したものである。ちなみに、平成 12 年度の総人口は 336 人(男 156 人、女 180 人)、平成 17 年度の総人口は 294 人(男 139 人、女 155 人)、平成 22 年度は 244 人（男 113 人、女 131 人）である。





平成 12～22 年国勢調査データより作成

平成 22 年の 10 年前にあたる平成 12 年の総人口から比べると、10 年間で 92 人も人口が減少している。12 年から 17 年にかけての 5 年間における減少人口は 42 人であるが、17 年から 22 年にかけての 5 年間における減少人口は 50 人である。このことは、過疎・高齢化が年々加速していることを表している。人口ピラミッドの形状と、その変化からわかるように、阿部は典型的な少子高齢化地域、過疎進行地域となっている。

(1) 阿部の位置、自然と風土

阿部は美波町の最東端の伊座利から絶壁の荒磯を約 3 キロメートル余り西南へ下った地点に存在す

る。南側は太平洋に面し、集落の背にあたる北側は標高440メートルの明神山を頂点とする海部山脈が走り、西には由岐駅のある本町までの間を372メートルと高山が居すわっており、その尾根を海際まで伸ばしている。東側も同じく明神山の左肩がそのまま海まで張り出している。これらをまとめて言えば、南へ向かって海の近くまで押し寄せた海部山脈の稜線の裾に、小さな阿部湾があり、その湾に沿っている狭い盆地に、こじんまりと固まって阿部の集落が存在している。海岸線の屈曲は少なめだが、海部山脈が直接海に迫っているために、波の浸食を受けて絶壁の荒磯となっているところが多い。気候は黒潮の影響を受けるために温暖で雨が多く降る。積雪はほとんどない。年間の平均気温は19度、降水量は1700ミリメートルと、非常に豊潤である。(由岐町史,1994)

以上に述べたように阿部は背後を山に囲まれ、前には太平洋がひらけており、非常に自然に恵まれている地域だということがわかる。しかし、自然に恵まれていることの裏を返すと、長い年月の間、世間の文化に遠く隔てられていた、ということでもあり、阿部は周縁地域であったということがわかる。それに加えて、地形のために耕地面積は狭く、旱害が多くて農作物があまり獲れなかった。そのため、阿部の住民たちは目の前にひらけた海に出て、生活のための糧を稼がなければならなかったのである。こうして漁業が阿部のおもな産業となり続けられてきたが、経済を支えるのには十分でなかった。さらに副業の農地も少ない。地理的にも経済的にも恵まれなかった阿部の人々にとって、限られた土地で生きていかなければならないという悩みや苦しみがあったであろう。こうした悪条件を打破し、生活の向上を求めるために生まれたのが、「阿部のいただきさん」なのではないだろうか。しかし、阿部地域はもともと周縁だったわけではなく、周縁化のプロセスがあったのである。次の章で阿部の交通に焦点を当てて周縁化のプロセスについて見ていく。

(2)阿部への交通 阿部はどのように周縁化していったのか

現在「陸の孤島」と呼ばれている阿部だが、先述したように、もともと周縁地域だったわけではなく、周縁化していくプロセスがあった。周囲に開けていた海上交通の時代について見ていく。明治25年に徳島市の八木慶太郎が、汽船平辰丸で、徳島～甲ノ浦間の航海を開始したのが海部郡沿岸航路のはじまりである。その後何度か状況変化があつて、大正4年11月に大阪商船の子会社である撰陽商船会社が設立され、大阪～甲ノ浦間の航路の権利を引き受け、1日1往復の航路が確立し、昭和13年まで続いた。この航路は当時の阿部にとって唯一の生命線といってもよく、人の出入りや主要食糧、生活必需品のすべてをこれに頼るしかなかったという。撰陽商船の船は300トン級の蒸気船で、3隻が交替で運航していた。大阪の天保山棧橋を夜の10時に出航し、朝の4時から5時前には阿部湾に到着していた。昭和13年頃には、土佐商船会社の150トン級の貨客船にかわり、1日1往復の便はなんとか続いていたという。一方で昭和12年6月に国鉄牟岐線が阿南市福井駅まで開通し、昭和14年12月には日和佐まで通じた。このために沿岸の貨客の多くを鉄道にとられてしまい、土佐商船も同じ年に欠航に至った。これよりも以前には、阿部の松村敏夫さんが昭和7年から10トンの機帆船で徳島－伊座利－阿部－由岐間の荷物運輸を行っていたが、土佐商船の欠航と同時に昭和14年より阿部～由岐間の定期連絡船の運航を開始し、昭和22年まで継続した。昭和33年9月まで町営渡船として続けられたが、阿部～由岐間の道路開通により徳島バスの運行が開始し、廃航となった。(由岐町史,1994)このように廃坑してしまうまでの間は海上交通が栄え、大阪などの都市と繋がった地域であったことがわかる。海上交通が盛んだった時代は、阿部は周縁地域ではなかったと言えよう。

次に阿部が周縁地域化していくきっかけとなった陸上交通について見ていく。先述したように、阿部の人びとは、大阪などの中央と繋がっていた時代（周縁化以前の時代）は、生活のほとんどを海上交通

に頼って暮らしてきた。しかし、海が荒れて船が出ないときには、由岐まで12キロメートル、阿南市福井町まで10キロメートルの険しい坂道を2時間もかけて歩かねばならなかったという。しかし、昭和33年12月に当時の県知事である原菊太郎の政治的英断によって、陸上自衛隊の協力のもとに県道が開通した。これがいわゆる「自衛隊道路」である。阿部地区の住民から要望を受けた原知事は人道上的問題から「やる」と言ったものの、県は財政再建団体に陥っており、余裕がなかった。そこで、自衛隊に協力を求めて道路の建設工事をスタートし、住民も手伝い、工事開始からわずか半年後に阿部地区から由岐町の中心街までの10キロに及ぶ道路が開通した。そして、昭和33年9月には徳島バスが一日一往復、35年の2月には伊座利まで運航されるようになった(由岐町史,1994)。陸上交通が栄えておらず、県内地域へのアクセスが悪かった阿部地域の人々にとってこの「自衛隊道路」の開通は念願だったのであろう。道路開通の喜びや感謝の気持ちを表し、「原知事さんありがとう」という言葉が記された「開通記念感謝の碑」が建っていることからその喜びはよほどのものであったのだろう。しかし、この自衛隊道路の開通により、阿部と中央を繋げる役目を果たしていた海上交通は終了するに至った。自衛隊道路の開通で県内地域へのアクセスが少しは改善されたとはいえ、山越えが必要なうえ、屈曲した道路で、道路整備も遅れているのにも関わらず、陸上交通に頼らざるを得ない状況になり、阿部地域は周縁地域になっていったと言えるだろう。また、それに高度経済成長期が重なり、都市への人口流出が顕著になり、阿部は、現在に至る過疎・高齢化地域になっていったのである。

<小括>

以上で述べたように、阿部地域は中央と繋がっていた海上交通の時代から陸上交通への転換期にアクセスの悪い「陸の孤島」になり、周縁地域化していった。また、それ以降、自衛隊道路の開通に、高度経済成長期の影響も加わり、都市部への人口流出が継続してみられ、阿部の過疎・高齢化が進行していったのである。

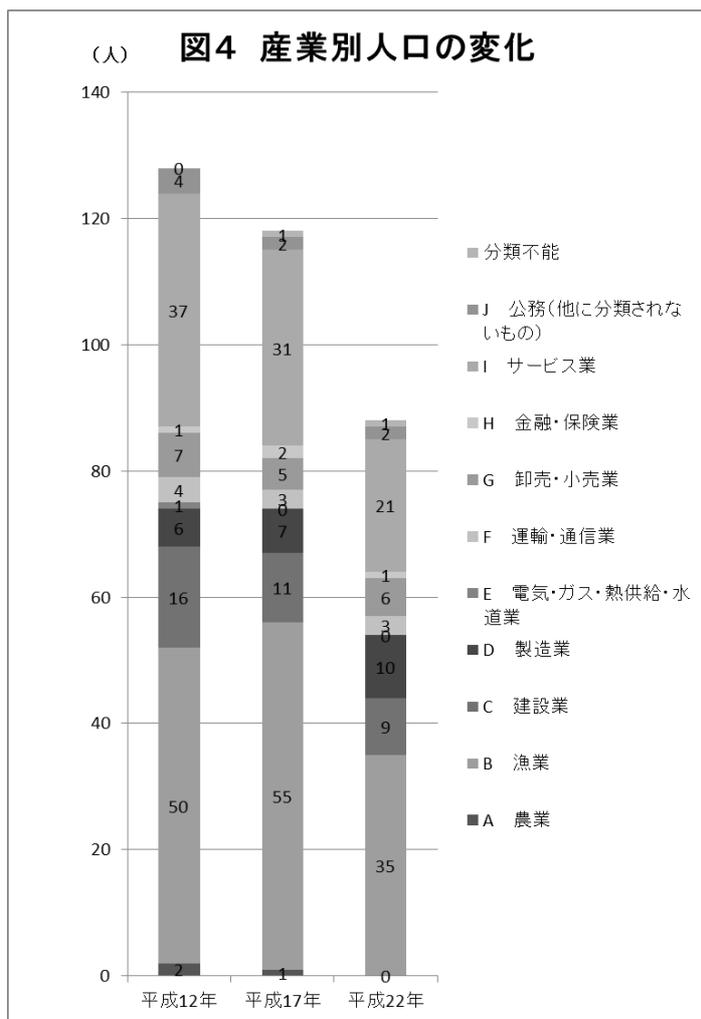
そこから私たちは、阿部のように周縁化してしまい、過疎高齢化が進行した地域において、いかに自律的な防災と地域おこしを継続できるかが大きな課題ではないか、と考えた。

生産年齢人口が少ない過疎・高齢化地域において、自主防災組織の活動力のベースとなりうる若い力が足りないことは、防災組織の維持は困難になってくる。過疎・高齢化地域において持続的な防災活動を行うためには、担い手の確保が大きな課題となってくる。村から排出された人々の再還流が、今後可能になるのかどうか、これが集落再生を占うための最も重要な案件となる(山下、2012:212)、とあるように集落再生には、生産年齢人口を確保するためにいかなる取り組みを行うのが重要になってくる。防災組織の維持においても同じことが言えるだろう。また、山下は、こうした還流がベースとして確立されることで、むらは安定し、そうした安定したむらの人口状態があればこそ、今後の地域再生の力につながる可能性も見えてくるはずだ(山下、2012:212)と言っている。しかし、その還流をどうつくっていくのが課題となる。自主防災組織の活動力の担い手の確保については、地域特有の組織の活性化や、地域おこしによってその還流をつくり、継続した防災活動の維持に繋げていくことが重要なのではないだろうか。

(3) 阿部の漁業

・産業別従事人口の移り変わり

阿部の就業者はどのような産業に従事しているのかを見てみると図4のようになる。ここでも国勢調査が行われた平成12年、17年、22年の過去3年分のデータを比較している。



平成 12,17,22 年国勢調査 小地域集計 (総務省統計局) より作成

グラフから、阿部は第一次産業従事者が多いことに加えて、阿部の主要産業は漁業であることが明らかである。漁業従事者が圧倒的に多く、概要のところ述べてのように、阿部は三方を山に囲まれ、一方は海に面しているという環境の地域である。伊勢海老やアワビなどの海産資源の豊富な場所であるため、このように漁業を中心に生計を立てている人が多いのである。平成17年から22年にかけて漁業従事者の数は減少しているが、これは人口自体が減少しているためである。三方を山に囲まれているということで、農業も発達していそうだが、過去に干ばつなどの被害があった記録があり、農業を主な生業とするための環境が整っていない(由岐町史, 1994)ということが、農業従事者の少なさから再確認することができる。

3. 漁協における自主防災組織の可能性

・阿部漁協について

阿部漁協には、平成24年8月現在、68名の正規組合員、66名の準組合員がいる。規律の改正により、以前に比べると組合員数は25人減少した。準組合員は、組合員の家族にあたる人で、現在阿部に在住していない人もいるようだ。組合員にある漁業権は家族単位で代々受け継がれている。組合の中にある青年部には12,3名所属しており、平均年齢は30代~40代で、一番若い人でも29歳である(阿部漁協組合長への聞き取り調査より)。ここで、阿部の1世帯あたりの組合員数を計算してみる。(正規組

合員+準組合員) ÷ (平成 22 年の阿部の総世帯数) で計算すると、(68+66) ÷ 121 で、1 世帯当たり約 1.1 人の漁協組合員がいることがわかった。このことから、ほとんどの世帯に組合員が存在していることがわかる。阿部のコミュニティは漁協を中心として構成されていると言える。阿部漁協の組合長からも、「阿部は漁村であるため、組合員は漁業の組合員としてだけでなく、阿部を支えるというよろず屋のような役割をも担っている」というお話を伺うことができたように、このように阿部漁協は阿部地域のコミュニティの中核的な存在であると言えるだろう。

2012 年 8 月 31 日に阿部漁業協同組合の組合長に聞き取り調査を行った。

A: 決め事が好きだっていうところもそうですもんね。

B: ほんとやろ？ ただしな、他の人が入ってこよう思ったら、けっこうガード固い。お前や入れたらんわ言うて(笑) 人数も減って限界集落になってきよるわ。ほなけん漁協がちょっとした買い物、出荷しに行ったついでになんか買うてくるわ言うての。雨が降りよったりしたら、おばあさんから電話かかってきて、あれ買うてきて言うて、若い衆がカッパ着て買いに行くんじゃ。

A: あれですね、よろずやみたいですね。

B: ほうやなあ。漁業組合=漁村やけんなあ。

A: 生活の基盤ですね。

B: みな生活担つとる。役場やって向こう行ってもうたしの。

この組合長の話から伺えるように、おばあさんの買い物を漁協の組合員が手伝うなど、漁協が阿部地区のよろず屋のような役割を担っているといえる。このように漁協が生活の基盤となっているため、阿部漁協は阿部地域のコミュニティの中核的な存在であることがわかる。そこで、近隣漁村である伊座利漁協と阿部を比較してみよう。

・阿部漁協の特徴と伊座利漁協との比較

阿部漁協の特徴としては、主に個人漁であるということ、決め事が好きであること、よそ者へのガードが堅いということが挙げられる。阿部組合長への聞き取り調査から、そのような特徴が伺える箇所を抜き出した。

A: 今日ちなみに何時から？

B: 10 時から 13 時まで。これはずーっと。解禁日やったら 2 時間やなあ。

A: ああ、最初 2 時間で、あとあと 3 時間に。

B: そうそう。4 時間にせんかっていう話もあったけどなあ、やっぱし採りすぎたら来年困るし、自然のことやけんなあ。じきになくなるでえなあ。

A: 由岐のほうは構わずに採ってますねえ。

B: そう。波あるうが何しようが自由に採って、んで阿部は決め事多いって言われるんよ。阿部は何でも自分らでルール決めるんよ。何月何日は休まんか、とかこれ以上はとつたらあかん、とかな。決め事好きになって笑うんよ。伊勢えびにしたって網数制限するしな、いろんなことをとにかく自分らで決める。ここを禁漁区にせんかよ言うて、あの 3.11 のときやって、禁漁区のエビとってから義捐金送ったりのお、ほんなとこ他にあれへん。

A: それは阿部だからこそできることですね。

B:ほういうことや。決め事するけんな。ボランティアでな。ほんなとこないでよ。

聞き取り調査を行った日はアワビの漁を行っていた。この話から伺えるように、阿部はアワビ漁の操業時間を他地域に比べて短くしており、「決め事が多い」と揶揄されている。阿部漁協は決め事が多く、ガードが堅いということを他地域から指摘されるだけでなく、阿部漁協自体も認めている。

では、近隣の漁協である伊座利漁協と比較してみよう。伊座利漁協は、定置網が主流で団体漁である点、よそから来る人を受け入れるIターンを推奨しているという点で、阿部と対照的である。決め事が好きという特徴については、後に、阿部の主要産物であるアワビの資源管理を事例として取り上げ、さらに見ていきたいと思う。よそ者へのガードが堅いという特徴についてだが、これに関しては、阿部の東側に存在する、美波町の伊座利漁協との漁業の跡継ぎ問題の比較から明らかにすることができる。阿部漁業の跡継ぎについてだが、2011年に阿部の小・中学校が廃校になってしまったことが少なからず影響しているという(組合長への聞き取り調査より)。阿部はこれまで、漁業の跡継ぎは世襲で担ってきたために、学校の廃校による阿部からの若者の流出は、痛手であったという。これは、昭和33年の自衛隊道路の完成に重なった高度経済成長期を契機とする人口流出にさらに拍車をかけるものになった。一方、伊座利漁協では、漁業の跡継ぎとして、Iターンが推奨されている。このIターンの特徴として注目したいのが、外部の人間も共通の目的や関心をもってさえいれば参加できるという点である。この点から、伊座利漁協は外部の人間も参加しやすいアソシエーション的な性格をもっていることがわかる。しかし、阿部漁業は、世襲でしか漁業の跡継ぎを担ってきておらず、それに加えて組合員のよそ者に対するガードが高いため、伊座利漁協と比較すると、地縁的・血縁的なコミュニティの性格が強いと言える。

・アワビの資源管理体制

阿部は決まり事が好きということであるが、阿部の主要産物であるアワビの資源管理に着目してその特徴について考察しようと思う。

阿部では、現在主に行われているのは夏季にアワビを採る海土漁業、冬季にイセエビを採る蝦網漁である。イセエビ漁・鮑漁で有名な阿部であるが、鮑の資源管理についても様々な取り組みを行ってきている。

“トーラン捕れば滅びる阿部の海土 部落の栄えだトーラン守れ”

阿部に伝わる言葉でこのようなものがある。トーランとは、殻長9cmに満たないアワビのことを言う。徳島県漁業調整規則にはアワビの採捕制限が定められており、9cm未満の貝の漁獲を禁じている。このようにアワビの資源管理が行われる以前の経過を辿ると、いただきさんの時代にはアワビを資本としていたが、次第にそれだけでは不十分であり、多くの青年部はマグロ延縄漁へ出た。しかし、昭和29.30年では豊漁であったが、その後の凶漁により延縄は中止に追い込まれた。昭和35年には県道の開通により、稚貝の販売が容易になり、さらに大規模な磯焼けなどに見舞われアワビの乱獲に陥ることとなった。このような経緯があり、アワビの乱獲を食い止めようと昭和37年2月の通常総会で“当年度より抜本的保護対策を講じる”と決議され、以下の6項目の決定を行った。

(1) アラメの採取禁止

→アラメはアワビの飼料であることから採取禁止となる。

(2) 投石の推進

→アワビの住み場作りとして投石を推進。25年間継続され、昭和50年に中止される。

(3) タコ・ウニの採捕奨励

→タコがアワビを食害するので、タコの採捕を奨励。タコは市価の3倍の価格で買い上げる。

(4) 磯建網・イサリによるアワビ採取の禁止。

→網にかかったアワビはその場で放し、イサリは禁止。

(5) 操業期間、時間の短縮

→昭和36年までは5月下旬から6月上旬に解禁、9月24日まで操業（操業時間は朝6時から夕方まで）だったのが、操業期間6月15日～9月24日となり、操業時間は午前9時～午後3時までとなる。さらに、昭和55年からは操業期間が7月1

日～9月24日に短縮される。現在は、6月中旬の大潮のころに解禁、9月下旬の祭りの前々日ごろまで操業している。操業時間は午前10時～午後1時までである。（大潮の時は午前11時～午後1時までの2時間。）

(6) 漁業監視

→密漁防止のため、昼夜にわたって漁場を監視する。現在では監視船を出している。

[小島博・山中幸夫 1983「アワビ資源の管理について-徳島県阿部漁協の管理例」『ocean age』166号;20-26.]

以上のように細かく様々な規則を定め、アワビの資源管理を行ってきた。この規則に加えて、阿部独自のアワビの採取サイズ規制が存在している。阿部で採取可能なアワビのサイズは、黒アワビは9.5センチ以上、赤アワビは11センチ以上、トコブシは4センチ以上である。県の条例による採取可能サイズは、黒アワビは9センチ以上、トコブシは3センチ以上となっており、阿部は県の条例と比較すると明らかなように、独自に厳しいサイズ規定を行っていることがわかる。他にも、阿部の貴重な資源であるアワビを守るために、大規模な藻場の設置を検討していたり、禁漁区を作ったりとアワビの資源管理には余念がない。さらに、阿部のもう一つの貴重な資源ともいえる伊勢エビについても、禁漁区を定め資源管理を行ったり、網の数を制限したりするなど阿部独自の徹底した資源管理の様子が伺える。東日本大震災の際にはイセエビの禁漁区から水揚げをし、その義援金として50万円を被災地に送ったそうだ（阿部漁協組合長への聞き取り調査より）。

このような厳しい管理システムが可能である背景には、先述したように阿部地域の住民のほとんどが漁協の組合員であるということ、よそ者は受け入れず、地縁的・血縁的な結合だけで、漁協を含む阿部全体としての漁村が運営されてきたことが大きく関わっているのではないだろうか。阿部という地域に根付いている、まさに地域の特徴を活かした産業である漁業を、自主防災組織の活動の要として考えることはできないだろうか。そう考えるのも、「下から」の防災組織の確立を目指すには、住民が主体となることが絶対条件であるからである。阿部地域において漁協は地縁的・血縁的なコミュニティ的性格を備えており、中核的組織に近いものを担っているが故に、地域住民が主体となった自主防災組織になりうるのではないだろうか。

・漁協中心の自主防災組織の可能性

では、漁協を自主防災組織の中心とした場合にどのような点において優れているのだろうか。繰り返しにはなるが、阿部世帯のほとんどに漁協の組合員が存在していることが明らかになったことから、阿部イコール漁協コミュニティといえる。その点において漁協中心の自主防災組織の確立をすることに

よって、より住民主体的な「下から」の防災活動を行うことができる。

阿部地区では、東南海地震発生の際、津波による浸水20mの予測が出ている。しかし、その想定が出た後、阿部を離れようと思った人はほとんどいないという。

2011年の東日本大震災による津波で大きな被害を被った地域の一つに宮城県気仙沼市の舞根という地域がある。阿部と同じ漁村で、ずっと海と共に暮らしてきた地域である。津波被害の2週間後、舞根の住民は集団移転をする計画を立てた。その条件の一つとして挙げたのが、海が見える場所であることであったのだ。津波被害に遭って海へ帰るのは非合理的なものに見える。海へ帰る理由として、舞根の住民は「津波襲来時や時化といった非常時と平常時、穏やかな内湾と荒い外洋、地先の海であるイソとオキ、といった多様な性格をあわせもつ海を使い分け(植田、2012:74)」、いくつもの海をのりこなして暮らしてきており、舞根の人びとにとって海は、「集落の一部として切り離されることなく所有されている(植田、2012:77)」ものであるということである。

阿部地域にとっても、漁業を中心産業とし、海と共に暮らしてきたことから、海は切り離すことのできない集落の一部なのである。非常時の海への対処方法は漁村である阿部住民はよく知っている。そのようなノウハウを知っていることも、漁協を自主防災組織の要として考えるにあたって、非常に有効なのではないだろうか。

4. もうひとつの可能性 祭組織を活用した地域づくり

漁協のようなコミュニティ的な性格の強い組織に祭り組織がある。阿部では毎年9月に宮内神社祭りというものが開催されている。例年9月25日から9月30日に開催されており、祭り5日目の29日には「浜祭り」と呼ばれるものが行われ、神輿を浜に据えて、海の神に対して豊漁と安全操業の祈禱をおこなう。昭和30年ごろまでは9月21日から9月30日までの10日であった。これは各地で出稼ぎを行っていた時代、他国で苦労した人たちが年に一度寄り合って互いの無事を祝い、再開する機会であったためこのように期間が長く行事が盛大になったのである。しかし、年々深刻になっていく過疎・高齢化の影響や他地域に流出する人口の増加により祭りの実行にすら支障をきたす危機的な状況で、祭りの存続も厳しい時期があった。そこで、阿部では祭りの活気を取り戻そうと自主防災組織のリーダーでもある瀬戸興宣さんを中心に様々な取り組みが行われた。具体的には阿部から出て行った人たちが参加しやすいように57年ぶりに休日をはさむ9月21日～24日に変更したり、手紙などで全国各地に散らばる阿部出身者に呼びかけをし、阿部出身者のネットワークの再生に努めたり、町外の出身者にも積極的に声をかけ、祭りに参加してもらおうと呼びかけた。この試みは功を奏し、数多くの人が祭りに参加し、2012年9/25付けの徳島新聞には「休日開催で祭り盛況 美波・宮内神社、日程変更が奏功」という見出しで紹介され好評を博した。

A:阿部は今潜水漁と9月の伊勢エビ漁と、伊勢エビは4月くらいまでですか？

B:5月の15が県条例9月の15から5月の15まで。ただうちは9月はとらんでな、祭りせないかんし、アワビとりよるしな。祭りでいっぱい飲まないかんし、祭りこいよ。瀬戸さんのところに神輿搔く着があるけん、レンタルしてくれるけんこいよ。若い氏がおらんけん。搔き手がおらんけん。今年から3日あったん、5日あったんが。

A:連休にあわせてですか？

B:そうそう、搔き手がおらんけん。限界寸前やけん。若い氏がおらんけん、宮総代が若い氏に「み

こし搔きにこいよ」って皆に声かけよんよ。

A:そうですね。はがきもいろんなところに出したり。

B:そうそう。こないしてな、どないかして活気取り戻さんと。

A:わりと皆さん年齢層が高い割には元気ですよ

B:皆元気、思う。比較的、回りの漁村みたって、ちょっと若いように思う。組合員の年齢層みてな、皆「合併せえ合併せえ」とか、県から指導も言うてくるんよ。やけど、そんなことない平均とつたらな。若い氏も手伝ってくれよるだろ、出荷とか。

組合長への聞き取り調査からも、阿部の宮内神社祭りの若者不足である点、それを改善し活気を取り戻そうとさまざまな取り組みを行っていることがわかる。

こうした限界集落での祭りを通じた地域づくりは他の場所でも行われている。例えば、山下祐介著『限界集落の真実-過疎の村は消えるか?』(ちくま新書,2012)の中で紹介されている青森県弘前市にある沢田集落の「沢田ろうそく祭り」である。この集落は弘前市相馬地区に所属する小さな村で、高齢化率も50%のいわゆる限界集落である。こうした現状も相まって祭りの存続が危うくなってきた時期があった。そこで、沢田町内会・氏子組合を中心に相馬村農協、農協婦人部、青年部、役場OB、村会議員OBなどが実行委員会を組織して2010年には実行委員会によるろうそく祭りを開催した。そこでは社殿までの雪の回廊作り、軽食、飲み物の販売を行うなどし、2年目の2011年には合併後最大の約1000人もの参拝者が訪れ、新聞やマスコミなどにも多く取り上げられるほど好評であった。

このように、祭り組織を通じて地域が主体となった取り組みが様々な場所で行われていることが分かる。こうした、祭りなどの伝統行事を地域主体となっていくことにより、山下が述べる「見失われてしまっていた地域の力、地域の誇りを、今一度確認」(山下2012:250)することができるのではないだろうか、そしてこの確認こそがこれからの地域づくりにも繋がっていく大きなファクターとなりうるはずである。

5.おわりに

これまで私たちは漁協や祭り組織といった地域の特性、伝統を活かした組織による自主防災組織の可能性、「下から」の防災について考察してきた。そもそも自主防災組織というものは町内会を基盤として結成されている場合が多い。しかし、その基盤である町内会をみると、担い手の高齢化、地付き層の減少、単身世帯の増加などによりその活動は停滞し、町内会自体が弱体化してきている現状である。さらに、住民たちにとって地域空間を共有ということが生活意識や生活協働の共有には結びついていないという現状もそこには存在する。こうした町内会が主導で行う自主防災活動に関しては国のテコ入れが大きく作用していることも指摘されている。国は自主防災組織＝町内会を通し、国民一人ひとりを集約し、防災コミュニティともいえる状況を創り上げようとしている(庄司,2011)しかし、町内会が弱体化し、機能が停滞している現状である今、こうした国のテコ入れが働いているいわゆる「上から」の自主防災組織の組織化ではなく、地域主体の「下から」の自主防災組織の構築が必要である。それは庄司の「生活意識や生活協働の共有に結び付かないという現状」という表現に顕れるように、地域の特性、伝統を活かした自主防災組織の可能性である。阿部にあてはめれば今回考察してきた漁協という1つの生業を基盤とした組織、祭りといった伝統行事を通じての組織などが挙げられる。そうした地域の

生活意識や生活協働を共有した集団こそがこれからの「下から」の防災へつながっていく可能性をはらんでいることを指摘したい。また今回、一見防災とは関わりのなさそうな生業や伝統に焦点をあててきたが、昔から脈々と受け継がれた地域の特性や伝統こそが地域の活性化、ひいては地域主体の「下から」の防災へとつながっていく可能性を秘めている大きな要因であるということ、決して無視できない要因であるということをも指摘したい。

<参考文献>

- ・『磯漁業地帯』阿波研究叢書 第一集 阿波研究叢書刊行会 (1956年)
- ・『ocean age』「アワビ資源の管理について-徳島県阿部漁協の管理例」小島博・山中幸夫(1983、december)
- ・『由岐町史』由岐町史教育委員会(1994)
- ・『環境社会学研究』「なぜ被害者が津波常習地へと帰るのか」植田今日子(2012)
- ・『限界集落の真実-過疎の村は消えるか?』山下祐介 ちくま新書(2012)
- ・『防災コミュニティの基層-東北6都市の町内会分析』吉原直樹編 御茶の水書房
- ・平成12,17,22年国勢調査 小地域集計 (総務省統計局)

K=組合長さん N=内藤先生および学生

N:これ、あの僕らが個人で録音…。

K:ああ。

N:今日って何人くらい漁に出てたんですか？

K:おそらく90人くらい。

N:全員アワビ採ってたんですか？アワビとサザエと…

K:サザエはないわ。サザエ安いけんなあ。サザエはないなあ、水揚げしたん3、4つくらいかなあ。サザエはどうしても安いもんやけん、時間3時間ゆうたらな、みんな他のもん獲るんよ。昔みたいに弁当持って行って朝から晩までなあ、船の上で火炊いていうて、ほんなんでないでえ。ウエットスーツOKにしてな。

N:昔はダメだったんですか？

K:ダメだったけど、寒さ。寒気がきて船に上がるんよ。船の上で火炊いてぬくもって、また入るんよ。女性はフカ脂肪で…

N:ああそれで、90人の男女比っていくらですか？

K:ちょっと多いと思うわ。男が。

N:けっこう丘から行ってる人が多かったですよ？わりと自転車もあって、言い方悪いですけどめんどくさいですよ？

K:めんどくさい！船でいくんも管理が大変やしなあ。

N:今日、アワビ採ってるの見に行ったんですけど、マゼが、南風が吹いてたらいいんですか？

K:あかんあかん、ほんまに。

N:反対側に一人いたんですけど、瀬戸さんでしたね。

K:大した海士でないけん、遊びでやっとなるけん、ははははは。

N:いつもはそっちにも行くんですか？

K:みんな散らばって、パーっと。得意分野とかあるし、この前あっちやったからここ行ってみよか、とか。

N:良い風の時っていつですか？

K:風。風が止まって、んで、潮が引いてなあ。

N:今日はちなみに何時から？

K:10時から13時まで。これはずーっと。解禁日やったら2時間やな。

N:ああ、最初2時間で、あとあと3時間に。

K:そうそう。4時間にせんかっていう話もあったけどなあ、やっぱし採りすぎたら来年困るし、自然のことやけんなあ。じぎになくなるでえなあ。

N:由岐のほうは構わずに採ってますねえ。

K:そう。波あろうが何しようが自由に採って、んで阿部は決め事多いって言われるんよ。阿部は何でも自分らでルール決めるんよ。何月何日は休まんか、とかこれ以上はとつたらあかん、とかな。決め事好きになって笑うんよ。伊勢えびにしたって網数制限するしな、いろんなことをとにかく自分らで決める。ここを禁漁区にせんかよ言うて、あの3.11のときやって、禁漁区のエビとってから義捐金送っ

たりのお、ほんなとこ他にあれへん。

N:それは阿部だからこそできることですね。

K:ほういうことや。決め事するけんな。ボランティアでな。ほんなとこないでよ。

N:義捐金、いくらくらいになったんですか？

K:40万目標にして50万いった。51万かな。

N:いつですか？

K:4月の22日。早かった。んで時期が秋だったらもっと送ったるのにお言うて。

N:ルールを破る人はいるんですか？

K:昔はおったわ。例えばアワビは大きき決めとる。黒（アワビ）で9.5、赤で11cm、ナガレコ（トコブシ）で4cm、な。県条例ではアワビで9、ナガレコで3cmや。台の上で調べて、小さいんあったらイエローカード出す。何度かあってレッドカードになったら家まで行くわ(笑)言い訳してなあ年寄りだったら分からん言うても、レッドカード出したら次からキレーにはかってくるわ(笑)

N:今日やってた秤の上に乗せるやつ、あれはなんなんですか？

K:ははは、あれはサイズ分け。出荷のな、注文あるんよ。何百グラムサイズ何グラムサイズゆうてな。

N:なんかこう、箱に色テープ貼って分けてたじゃないですか。あれは、大きさのあれなんですかね。

K:そう。白が小とかな、赤が400、500アップとかな。

N:あれは、どこに卸してるんですか？

K:ほとんど関西。大阪、奈良、京都。ああ徳島も少々言うてきます。赤アワビが主やな。

N:好みがあるんですか？

K:ちゅうかな、黒アワビは高級品やけんな。

N:安いほう(笑)

阿部からどうやって持って行ってるんですか？

K:トラックでな。冷水、冷たいのお願いします言うてな。

N:全部トラックなんですか？

K:そうそう、一回大阪まで持って行って、大阪から奈良、京都…

N:ずっと冷やしたままですか？

K:そうやの一、いっぺん行ったらもんでこんしなあ、経費かかるし。東京も。

N:東京から発注来るんですか？

K:おお、静岡、築地あたり…3年前くらいからかいな。

N:冷水につけるのはいつくらいから？

K:平成の12年。深夜電力で蓄熱した海水を冷やしておいて、四国初かな。視察とかよう来た。ほんなにええもんでもないけどな(笑)

N:それできる前だったら…

K:もうみなその日のうちに出荷せにやいかんかった。

N:何度に冷やすんですか？

K:18.5から19.5度の間で自動で調節します。

N:今、旗が立ってあった、潜水中ってなんなんですか？

K:あれはな、保険でな、事故があったんよ。船が潜水しとる人に当たってなあ。潜水しとる人がおるんで気を付けてくださいよって。保険の会社がな。

N:浜にもあったのは？

K:あれは避難路(笑)漁の途中で地震きたらな、逃げる目印に。

N:今日、登ってみました。

K:ほうですか。きつかったやろ。きついつちゅうことは、はよ上に登れるってことや。な。

N:漁協としてはどうですか？

K:地震来たら船の上で充分分かるらしい。自分で。やけん漁協としてはなんもないって言う。あってもな。ありますって言い切ったって責任とれんしな。

N:漁協から災害対策でこれだけはもっとけっていうものありますか？

K:漁業無線があったけんどなあ、みな携帯もつとるし、ほとんど使わん。ライフジャケットも漁師って嫌うでえ。

N:靴を乗せておくって言う人もいたんですが？

K:ええ考えやなあ！

N:漁協のほうから言っていないんですか？ライフジャケット。

K:言よるよ！海上保安部もいうてきよるけんど。けんどプライドっちゅうかなあ。

N:じゃあ、国から阿部漁協に援助ってあったんですか？

K:昔はけっこうあった、んで今も藻場計画が決定しとる。(計画の資料を見せてもらいながら)ここに作る。ここが女郎ばえかな。藻場っちゅうことは漁場じゃわ。藻を生やすんが目的。けどおそらく、エビがついてアワビがついて禁漁区になると思う。

N:ああ、そうですか。

伊勢えびは4月ぐらいまででしたっけ？

N:阿部は今潜水漁と9月の伊勢エビ漁と、伊勢エビは4月ぐらいまでですか？

K:5月の15が県条例9月の15から5月の15まで。ただうちは9月はとらんでな、祭りせないかんし、アワビとりよるしな。祭りでいっぱい飲まないかんし、祭りこいよ。瀬戸さんのとこに神輿搔く着物があるけんな、レンタルしてくれるけんこいよ。若い氏がおらんけんな。搔き手がおらんけん。今年から3日にあったん、5日あったんが。

N:連休にあわせてですか？

N:そうそう、搔き手がおらんけんな。限界寸前やけんな。若い氏がおらんけんな、宮総代が若い氏に「みこし搔きにこいよ」って皆に声かけよんよ。

N:そうですね。はがきもいろんなところに出したり。

K:そうそう。こないしてな、どないかして活気取り戻さんと。

N:わりと皆さん年齢層が高い割には元気ですよ

K:皆元気、思う。比較的、回りの漁村みたって、ちょっと若いように思う。組合員の年齢層みてな、皆「合併せえ合併せえ」とか、県から指導も言うてくるんよ。やけど、そんなことない平均とったらな。若い氏も手伝ってくれよるだろ、出荷とか。

N:今日若い人いましたよね？

K:あれは青壮年部よ。

N:ああ。それは実際に組合員の息子さんとかお孫さんとかが…

K:ほうやな、担い手やな。組合っちゅうんは出資しとるかどうやけん、家族単位でやな。

N:組合員でないのがサザエとって捕まってきましたね。

K:密漁があるんよ。うちの船50馬力で、向こう250。早すぎてレーダーで映れへん。ほんでうちののが怒って乗りこんでくる言うんやけど、ほれだけはやめいよって。向こうどんなことしてくるかわから

んでえ。ほんで、警察もちゃーんと知っとう。どこの国が密漁に来るかも。なにかあったら言うてく
ださいよ言うて。現行犯やけん。ほれからはもう来んわ。

N:アワビと伊勢えび以外の漁獲はありますか？

K:主はやっぱアワビと伊勢えびやな。昔は太刀魚じゃのアラメじゃのおったけんとな。

N:頂いた昔の資料ではサザエ、ウニ、あと海藻系が多かったんですけど、今もそういう感じですかね？

K:海藻はもうなくなったやろ。アラメや採ったらあかんって決めたく。昭和何年かなあ。アワビが枯
渴しと言うんでなあ、エサになるけん。とっくにやめた。

N:じゃあアワビと伊勢えびと、あとウニ、サザエが主ですか？

K:うーん、ウニは自分らで食うためにやな。こんなうまいもん人に食わせれるか一言うて。

N:アカウニと、ちっちゃいバフンウニと、あとムラサキウニですよ。

K:うまいわな確かに。磯で焼いて食うんがまたうまあてなあ。

N:さっき岬を歩いてたんですけど、砂浜にめっちゃエビの殻が落ちてたんですけど、あそこで食べてる
んですか？

K:砂浜で？あれはたぶん捨てたやつやなあ。蓄養したりもしよるし。

伊勢えび、蓄養してるんですか？

K:うん、ある程度たまったら宍喰にある問屋に卸しよる。

N:ああ、宍喰にあるんですか。宍喰から注文が。

K:うん、ほかに通販やな。伊勢えびは通販もしよいわ（しやすいわ）。女性部の活動な。

N:女性部とかいろいろあると思うんですけど、組合員の数っていくらですか？

K:全部で92名。

N:じゃあ今日漁に出た人ほとんどですか？

K:いや、準組合員もおるけんあ。家族が多いんよな。夫婦で行ったり。な。法的には除名な人も、田
舎のことやけんって、いつ帰ってきても除名せんとおいとくわって。ほとんど。

N:ほとんどなんですか？

K:うん、夏休みに孫や息子連れて帰ってきたらやっぱり海行ってうまいもん食べたいでえ。せっかく阿
部来たのに海水浴だけやかわいそうでえ。ほなけん許しとんよ。

N:海士と、なんていうんですか、船を持って、その、魚を採る人って割合どれくらいですか？

K:漁船で60隻くらい。ほなけん、一人で複数もつとる人もおるけん。実際は伊勢えびだったら漁
船でいうたら20トン。

N:海士の方は老年の方が多いですね。

K:ほやなあ。2、3年前の敬老の日に80何歳の方がアワビ80何杯といよったわ。

N:みんなすごいなあって思って。

K:90歳いっとるしなあ。

N:すごいなあ。年取って平均的にどのくらいなんですか？

K:どやろなあ。1000万いっとる人もおるしなあ。

N:ええ、1000万か…

K:うちの特徴は、小さい船で沿岸漁業や。船がでかいほうが稼ぎええけど、小さい方が小回りきくし。
大きかったら経費かかるしなあ。組合長会議になったらみな燃油のことばかり言う。要望あったら
言うてくさいって言われたらみな燃油のことばかり。あと、TPPやめてくれとかな。安いもんが
売れたらうちみたいな高級品売れんのや。

N:なるほど…伊座利はけっこう、大型定置網ですよ？

K:ほうやな。海士やって4日しか行かん。裕福やのお言うて。20人、いや13人か14人か。

N:組合員がですか？

K:うん。法定解散いうてな。20人きったらそうなるんよ。正組合員がな。阿部と伊座利合併せえとか
な、ほんなんこのごろ色々…

N:準を入れての組合員数はいくらですか？

K:えー、合計で134人やな。正組合員が68で準が66。

N:だいぶ多いですね。

K:阿部は多いな。アワビやし。体さえあればいけるしな。船なくても。

N:阿部も昔、定置網やってましたよね？

K:そう、今も個人でしよる。小型定置。小型大型は引く場所の水深で決まる。

N:へえ…伊座利と阿部の違いっていうのは、わりとこう、伊座利が大型定置、団体に協力プレイってい
うんですかね、そういうところがあるんですけど、阿部はわりと個人操業とか夫婦で、共同作業をす
るのは得意じゃないって言われてた方がいて…

K:ああ、ほう言ようけどな、わしはほうでもないと思うけどのお見よったら。

N:決め事が好きだっていうところもそうですもんね。

K:ほんとやろ？ただしな、他の人が入ってこよう思ったら、けっこうガード固い。お前や入れたらんわ
言うて(笑)人数も減って限界集落になってきよるわ。ほなけん漁協がちょっとした買い物、出荷しに
行ったついでになんか買ってくるわ言うての。雨が降りよったりしたら、おばあさんから電話かかっ
てきて、あれ買ってきて言うて、若い衆がカッパ着て買いに行くんじゃ。

N:あれですね、よろずやみたいですね。

K:ほうやなあ。漁業組合≒漁村やけんなあ。

N:生活の基盤ですね。

K:みな生活担つとる。役場やって向こう行ってもうたしの。

N:そうなんですか。やっぱり後継ぎの問題があると思うんですけど、これからの展望みたいなものってあ
りますか？

K:学校が今ないでえ。休校や言うて復活するか？

N:あれは痛いですね、学校がないのは。出て行っちゃいますもんね。

青壮年部は何人ですか？

K:12、13人じゃな。青壮年部は。

N:年齢層はどうですか？

K:若いんは30になったんかいな、29か。

N:30から40代くらいですか。一番下で29。だいぶ若いですね。

K:な。ほんでああやって手伝ってくれるだろ？あの時間に来た人は、阿部は若いなあ言うてくれる(笑)

N:なんか、業者さんかと思いました(笑)

K:ああやって手伝ってくれるんよ。

N:そういうふうに、その人たちの子どもみたいに再生産して行ってほしいですよ。

K:そうやなあ。このごろ景気がなあ。バブルの頃は「アワビ御殿」って言われよったのに。

N:そうなんですか。でも普通に、細々と暮らしていくのには。

K:充分じゃわな。うん。

N: I ターンってどうですか？

K: ええと思うんやけど、ガード固いし、資格がきついで。

N: じゃあ、世襲単位でつないでいくのが良策ってことですね。

K: そうやな。けっこう伊座利は I ターン推奨しとるな。たまに県のほうから就労希望言うてくるんやけど、どちらは難しいわな。

N: すいません今日はお時間いただいて。

K: おお、また電話でも。なんでも聞いてよ。

N: ありがとうございます。

災害の地元学にむけて

ポスト3.11の地域防災

自然と文化の交点としての災害

- * **ハザード** [アンソニー＝オリヴァー・スミス 2006: 8]
 - * 社会や環境に損害を及ぼす可能性のある諸力
 - * ハリケーンや地震や土石流であることもあれば、原子力施設や、殺虫剤の使用といった社会経済的活動であることもある
- * **脆弱性** [ブレイキー 1994: 34]
 - * ハザードの衝撃に備え、対処し、立ち直る能力
- * **災害＝ハザード（自然）＋脆弱性（社会・文化）**
 - * ハザードと脆弱性が結びつくことで、既存の物理的状態や社会・文化的秩序が混乱／中断したと認識されるに至った事象[アンソニー＝オリヴァー・スミス 2006: 8]

3.11の経験が露わにしたもの

- * **災害の複雑化**
 - * 福島原子力発電所事故
 - * 自然のハザード（地震・津波）とテクノロジーのハザード（炉心溶融）の相互作用による新たな災害（放射能汚染）
- * **科学技術のリスクや限界**[ベック1998]
 - * 科学技術をめぐる政治
 - * 「原子カムラ」、「御用学者」、「市民による放射線測定」
 - * 地震・津波の被害想定、放射線と健康、活断層と原発
 - * 「科学技術と社会の関係」について再考する必要

→災害への人文・社会科学からのアプローチの重要性

南海トラフ巨大地震と地域社会

- * **災害リスク認識の転変**
 - * 科学技術をめぐる政治のなかで、人びとの災害リスク認識が一夜にして転変

→秩序の攪乱と再構築

- * **地域社会における災害リスク認識と脆弱性の変容**
 - * 地域の人びとはリスクをどのように認識し、それは地域生活にいかなる影響を与えているのか、そのことによって脆弱性はどのように変化している（いない）のか？



「災害の地元学」にむけて

- * 災害へのローカルな対処方法[脆弱性]の比較研究
 - * 複数のハザード（自然・テクノロジー）と複数の脆弱性（政治・経済・社会・文化...）が絡まり合うなかで、ローカルな「災害リスク」が構成される複雑な過程をひとつひとつ解きほぐす
- ローカルな知恵に学ぶ
- * 災害は地域の特質を露わにする
 - * 「災害は・・・（中略）・・・社会と文化の根本的な特徴を現出させ、何かと何かの間に密接な結びつきがことや何か中核的な価値であるかということを明らかにする[アンソニー＝オリヴァー・スミス 2006: 32]」
- 災害研究は地域社会・文化の特質を理解するためにも有効

徳島大学 総合科学部 社会創生学科 社会調査実習

- * メンバー
 - * 2年生13名、3年生2名
 - * 5班編制（各班3名）
- * 調査地・調査内容
 - * 徳島県 海部郡 美波町 阿部
 - * 災害への対処に関する民族誌的研究
- * 調査日程
 - * 4月-予備調査
 - * 6月-防災ハイクング企画・実施
 - * 7-9月-第一回調査実施（各班一回×5）
 - * 10-11月-第二回調査実施（各班一回×5）
 - * 11月-防災ワークショップ参加
 - * 12月-防災に関するアンケート調査実施



避難路づくりはどんな意味をもっていたのか？
過疎・高齢化地域における住民主体の防災活動にむけて

避難路班
 生杉 藤嶋 野村

本発表の目的と方法

目的:

- 阿部を有名にした「マイ避難路」造りがもつ社会的意味を造り手たちの視点から再考する。
- 過疎・高齢化がすすむ地域における住民主体の防災・減災活動をおこなう上で見過ごされがちな要素について考察する。

方法:
 「マイ避難路」作成の経緯および造り手の意識について検討する。

調査内容: 避難路作成者に対するインタビュー調査
調査時期: 2012年8月20日, 11月11日

「マイ避難路」の位置と数

県道はほぼ20mラインを越えている
 〓
 だから県道にすべての避難路をつないだ!

阿部防災マップ(簡略版)

集落のどこからでも逃げることができるように
 県道につなぐ20本の避難路を作成

「マイ避難路」が造られた時期

時期	出来事	避難路の名称
2011年末から 2012年初にかけて	南海トラフ新想定発表 自主防災が設立	蔵谷路 八軒屋路 上村路
2012年2月	阿部全体集会(2.26)	松村路 家山路 八毛路 橋本路 喜多條路 西寺路 東寺路 山賀路 五輪路 松下路 観音路 宮前路
それ以後	避難訓練など	御旅路 尾鼻路 天神山路 常陸路 海沿路

新想定発表後2ヶ月以内に大部分の避難路を作成

素早い「マイ避難路」作成の背景

新たに造った道	既存の道
家山路	亀岡路
橋本路	蔭谷路
喜多條路	八軒屋路
宮前路	上村路
天神山路	松村路
	八毛路
	西寺路
	東寺路
	山賀路
	松下路
	観音路
	御旅路
	尾鼻路
	常陸路

- ・ 今回の避難のために **新たに造られた避難路は少ない**(5例)
 - ・ もともと他の用途で使われていた既存の道を避難用に転用・修復(14例)
- 既存の道の転用が素早い作成を可能に**

「忘れられていた道」の再利用

既存の道	使われなくなった古道
亀岡路	
蔭谷路	○
八軒屋路	○
上村路	
松村路	○
八毛路	
西寺路	
東寺路	○
山賀路	
松下路	○
観音路	
御旅路	○
尾鼻路	
常陸路	○

- ・ 転用・修復された道のうち **半数(7件)**は、その時点では廃棄されていた「**忘れられていた道**」
- 例: 蔭谷路
阿部でまだ土葬をしていた時代に、埋葬地までの往来に使った公衆用道路(アカセン)

→かつての土地利用形態に関する豊富な知識が素早い避難路造りを可能に

誰が「マイ避難路」を造ったか？

名称	地権者・利用者	地元の有志
亀岡路	公共工事の際に作られた	
蔭谷路	○	
八軒屋路	○	
上村路	○	
松村路		☆
家山路		☆
八毛路		☆
橋本路		☆
喜多條路		☆
西寺路		☆
東寺路		☆
山賀路		☆
五輪路		☆
松下路		☆
観音路		☆
宮前路		☆
御旅路		☆
尾鼻路		☆
天神山路		☆
常陸路		☆
海沿路		☆

- ・ 作成したひとは地権者や利用者(3件)よりも **地元の有志(ボランティア)(17件)が多い。**
- 「マイ避難路」造りは、地域住民によるボランティア活動としての性格を有している。

小括①:「マイ避難路」はいかなる道か？

1. 過去に別の目的で使われていた「忘れられていた道」を、**避難のために再利用した道**
2. 地元の有志による **ボランティア活動**として作られた道

地元の有志(ボランティア)はどのような人びとか？

・ Sさん

阿部出身だが、徳島市内で銀行員をしていた。退職後、阿部へUターンしてきたが、徳島市内にも家を構えている。必要に応じて二つの家を行き来している。

・ Oさん

阿部出身で、阿南市内でNTTの現場に従事していた。退職後、阿部へUターンしてきたが、阿南市内にも家を構えている。必要に応じて二つの家を行き来している。

・ Kさん

阿部出身で、大阪の自動車整備会社で働いていたが、バブル崩壊に際して会社が倒産。その後、阿部へUターンして漁師として働き始めた。

・ Mさん

阿部出身で、奈良県でJRの車掌業に従事していた。退職後、阿部にUターンしてきた。

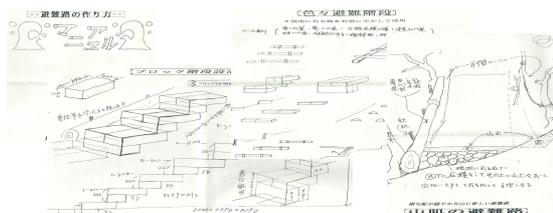
・ Uさん

阿部出身で、京都の舞鶴で潜水夫をしていた。退職後、阿部へUターンしてきた。

農村部出身だが都市部に就職し、おもに定年退職後に故郷にUターンした団塊世代の人びと

どうやって避難路を造ったのか？

・【独自の避難路作成マニュアル】



山仕事のノウハウも活かし、マニュアルを作成
—阿部出身の高齢者であるが故に、かつての土地利用に関する知識・技術がある。

どういう意識で避難路を作っているか？

【S氏の語り】

S: (作業時に)首のタオルして作業服着いとんやけど、首のタオルが(汗で)絞れるくらい。

んでね、夏場海行く日とほんな作業する日とでしょ。

でね、9月のお祭りまでにだいたい僕10キロ近く減量するからね。

ピーク73キロくらいになるんよう。今65キロくらいまで落つとるけんね。

ちよ、裸になってええ？

(衣服を脱ぎ上半身裸になり筋肉を見せる)

銀行行つたときはこんな体じゃなかった。

やから、えらいことしても思いうんなんよな。

いっけん避難路作成時の苦労話に聞こえるが
どこか楽しそうに誇らしく語る特徴

小括②:「マイ避難路」を造った人びと

・ 地元の有志は、**団塊世代のUターン者**に多い

・ 地元出身なのでかつての**土地利用形態や山の仕事のノウハウ**がある

・ **楽しみ**としての避難路づくり



考察: 生きがいとしての避難路づくり

- ・ **地域おこしと高齢者の生きがい**[鈴木 2005]
 - ・ 上勝町における「葉っぱ ビジネス」の創出という過疎地域の生き残り策としての産業振興の試みにおける発想転換
 - ・ 高齢者および彼らをケアしてきた人びとのくらしの豊かさにつながった
- ・ **リスク管理から生きがいへ創りへ**
 - ・ 新想定直後に20本もの避難路が造られたことは、リスク管理(災害への対処)という観点だけでは理解できない
 - ・ 避難路は、Uターンしてきた高齢者と地域の人びとを結ぶ道にもなっているのではないか？

ビジネスの創出から生きがいの創出へ

生きがいとしての道づくり

提言: 生きがいとしての防災活動の実現

超高齢化社会の防災活動では(都市-農村関係の再構築)をすべき

- 定年退職した都市民による**ボランティアな防災活動の重要性**
- ・ 定年退職後のI・J・Uターン者
 - ・ 二拠点居住者

→ 彼らを地域防災の担い手として認識・支援すべき
内外のアクターによるゆるやかなネットワークづくり

- **生きがいとしての防災**
- ・ 「楽しみ」として防災活動に参加する体制づくり

→ 3.11以前のような「災害をなくす社会」ではなく、「**災害とともに生きる社会**」[マツケイブ 2006]を目指す。

災害弱者とは誰か？ 一方向的支援から助け合いへ

大塚 諒
岡本 万由子
喜来 聖奈

発表の目的と方法

目的：災害弱者の支援という観点から、過疎地域における防災・減災において目指すべき方向性について考える。

方法：災害弱者が避難訓練に参加した経験についての語りをもとに、災害弱者の避難をめぐる支援者―被支援者の関係性を検討する。

調査期間：第1回8月20日（聞き取り調査）
第2回9月22日（聞き取り調査）
11月14日（アンケート調査）

災害弱者とは誰か？

- 〈災害弱者の定義〉[内閣府 1991]
 - 自分の身に危険が差し迫っていることを察知することや、危険に対して適切な行動をとることが困難な者。
- 〈災害弱者の具体例〉
 - 高齢者、障害者、傷病者、乳幼児・子供、外国人、妊婦、旅行者

阿部は災害弱者のムラか？

阿部町男女別人口ピラミッド(平成22年国勢調査より)

65歳以上人口＝高齢者、高齢者＝災害弱者の三段論法では、阿部住民の多くが災害弱者となる

高齢者の災害対処能力

氏名	A	B	C	D	E
年齢	68	77	81	81	73
運動能力	運動ができる	運動ができる	散歩ができる	散歩ができる	外出しない
居住状態	二人暮らし	二人暮らし	三人暮らし	一人暮らし	二人暮らし

- 65歳以上の高齢者5名に、日常生活や避難に関する聞き取り調査を実施
- 今回は運動能力の差に注目し、A氏とE氏を比較
 - A氏：高齢だが漁に従事し、自主防災活動も行っている。
 - E氏：5人の中で最も避難が困難である

Aさん(68)の日常的な行動パターン

《2012年8月19日の行動》

4:00	起床
5:00	<u>港(浜)に行って海の状況を見る</u>
6:30	朝食
	体を休める、 <u>もう一度海の状況を見に行く</u>
10:00	<u>潜水漁開始</u>
13:00	<u>潜水漁終了</u>
14:00	昼食
	休む、ゆっくりする
17:00	夕食
21:00	就寝

Aさんの防災活動に関する語り

A:インタビュー対象者 N:内藤先生

A:もし、あんなだけ高い東北の、津波のテレビみよったらとにかく高いとこあがってらな助からんっていうような感じで出たもんな。

ここの場合はやっぱり、真ん中の道行くよりはすぐ山が近くにあるから高いとこ上がれるんやから上がれるようにしてやらないかな。

ということですくできる、っていうのがね。

やっぱり、津波が、あの地震が揺って津波がくる時間が短いために。

ほういうことはおもて。

・・・(中略)・・・

N:もともと(避難路を)作るうと思ったのはあれですよね。

A:そうやねえ。

だからこないだも言ったんやけど、地震が起きた日は、わしはもう帰る途中で全然情報なしで車で運転して帰ってきたら、警報が出て津波が来るいうて波止のところで皆。

ほれから、これはいかん言うことであ、もし、テレビみよって、もし津波がきたら

すぐよう逃げんと自分でもやっぱり連れて逃げるん大変やからいうんで。

この近くの山へあがって、ちょっとでも高いとこへあがるんがええんでないかいうことで。

小括 能動的な高齢者

- A氏は高齢者ではあるが、漁師を続けており、日中は屋外でアクティブに活動している。
- 自主防災組織のメンバーであり、避難路を作るなど防災に関して積極的に行動している。

- 高齢者＝災害弱者とは言えない
- 地域の防災に積極的に貢献するアクティブな高齢者すら存在

Eさん(73)の日常的な行動パターン 《2012年8月12日の行動》

6:00 起床。
 6:30 旦那さんが作ってくれた朝ごはんを食べる。
テレビを見たりして、たいがい横になっている。
 11:00 昼ごはんを食べる。
 おやつを食べる。
 17:00 夜ごはんを食べる。
入浴は旦那さんに手伝ってもらおう。
 19:30 横になる。
 20:00 就寝。
 夜はあまり眠れない。
 日中特になにもしないので疲れない。
 夜中、何回もトイレに行く。

Eさんの避難訓練の経験についての語り

E:「おばさん、ここ持っってよ」いっ
 たってよ。力が、握りしめれんけん、
 ほれこっくりこっくりこっくりして。
 まあ、落とされんけんだよ。おそろし
かったでえ。んでもう、重たいのに、こ
 れどうなって。
 S:くくったほうかええかな、ほな、腰
 のほうでも。
 E:ほやなあ・・・。ただ、もう重たいけん
気の毒ないうんがあるで、みな若いし。
 ーやけえ。軽いでないけん。
 S:6人でかいてくんやけん、いけるでほら。
 E:ほなけんどもあ、重たあ 笑
 力入れとるつもりなんやけんども。
 よけ、ほれ、やっばい力いれとったらやり
 にくいんだるな。
 S:あっこだったら前に消防小屋があるけん
 担架もあって、ええけん。
 E:あっこまで出ていけたらな。
 S:普通の山っほいとこいたらなかなか手伝い
 がしにくいでえ。
 E:山やったら猫が押していけんてえな。猫車
 が。こっちの道路いたらだ。どどこかが崩
 れても真ん中の猫ぐらいは通れるでな。

避難訓練の予期せぬ効果

○助ける側（健常者）
 ・災害弱者を担架で搬送し
 ながら避難するなど、実践
 的な避難訓練を実施（2012
 年7月29日）
 ・災害弱者への支援の仕方
 を学ぶ（どのようにすれば
 安全・早く搬送できるか）

○助けられる側（災害
 弱者）
 ・搬送の仕方に関して、
 助ける側への要望がで
 てきた。
 ・支援されやすい体勢
 などを工夫する
 ・「支援される可能性
 がある」という見通し
 が生まれた

**助ける方だけでなく、助けられる方にも避難
 訓練は大きな影響をあたえていた**

小括 「災害弱者」の能動性

- Eさんの語りから、
 心理的葛藤、避難に対する能動性を見ることができた。

自分でできることはしたい

助けてもらうことを申し訳なく感じている

助けられやすくするための工夫をする

助かる可能性がある

- 避難訓練を通して、一方向的な支援に申し訳なさを感じて
 いる災害弱者の考えが浮き彫りとなり、災害弱者なりの避
 難に対する構え、支援される技法について考える機会と
 なった。
- 災害弱者は支援を待つだけの受動的な存在では無い。支援の
 受け手としての適切な行動をおこなう能動的な存在である。

まとめ：＜災害弱者＞像の転換

- 高齢者≠災害弱者
 - 高齢者であることは災害弱者を意味しないばかりか、地域防災の担い手にすらなることができる能動的存在である。
- 災害弱者≠受動的存在
 - 運動能力等の理由から自力での避難が困難な災害弱者も、支援を待つだけの受動的存在であるとは言い切れない。なぜなら支援行動と支援されるために適切な行動が組み合わさって初めて、避難が可能となるからである。支援者にあわせて自らの行動を調整するという意味において、災害弱者もまた能動的なアクターといえる。

考察と提言

- 一方向的な支援から助け（かり）合いへ
 - これまでの支援に関する考え方
 - 持てるものから持たざるものに対する一方向的な支援
→能動的な健常者が、受動的な災害弱者を支援
 - 助け（かり）合い
 - 健常者による働きかけ（支援）と災害弱者による健常者への働きかけがあわさって、はじめて共助（＝集合的な災害への対処）が可能になる。
- 今後に向けて
 - 避難する訓練、救助する訓練ばかりが目されているが、助けられる側である災害弱者の訓練も必要。
 - 災害弱者とされる人びと持つ能動性に注目した避難訓練や避難体制づくり

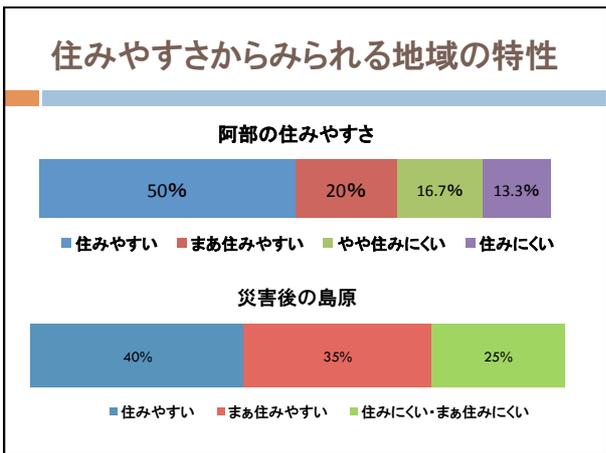
災害とコミュニティに関する意識調査：阿部と島原市の比較をもとに

上野由華 吉田早希 中西崇文

調査概要

目的: 災害リスクにさらされている地域における、住民の災害観および地域や行政に関する意識調査
調査内容: 雲仙普賢岳噴火後の長崎県島原市の先行研究を模範として分析を行った
調査方法: 面接調査によるアンケート
調査対象: 阿部住民

回収数: 60部

住みやすさから見る地域の特性

阿部

- 災害の不安がある 50.0%
- 交通の悪さ 66.7%
- 町に活気が少ない 33.3%

災害後の島原

- 災害の不安がある 72.5%
- 自然環境に恵まれていない 62.1%
- 交通の不便 39.6%
- 雇用の場が少ない 34.6%

住みやすさから見られる地域の特性

阿部

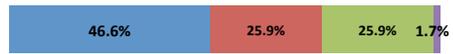
人情 61.9%
 自然環境 33.3%
 魚や野菜が新鮮でおいしい 35.7%
 安心感 31%

災害後の島原

水が豊かでおいしい 80.3%
 魚や野菜が新鮮で豊富 52.5%
 人情 37.7% 安心感 33.6%

居住歴・親類数

阿部住民の居住歴について



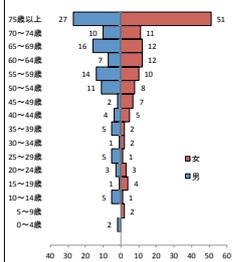
- 生まれてからずっと住んでいる
- 一時よそで住んでいた
- よそで生まれてきて移ってきた
- その他

阿部地域住民の地域内の親類数

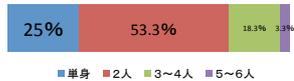
親類数は平均すると、阿部では7.2人、島原では5.0人でした。また地域内に十人以上の親類を持つ住民が4割以上いました。

阿部地域の同質性

阿部 男女別人口ピラミッド (平成22年)



現在の同居家族数



三世帯住居の割合 島原 21.7% 阿部 1.7%

暮らし向きに対する回答



阿部地域における支援一被支援関係の特性

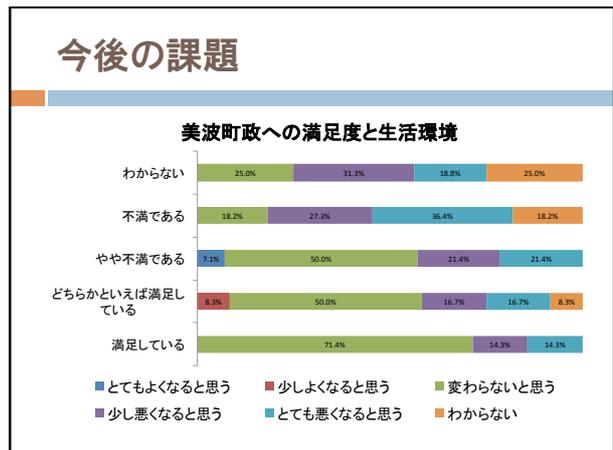
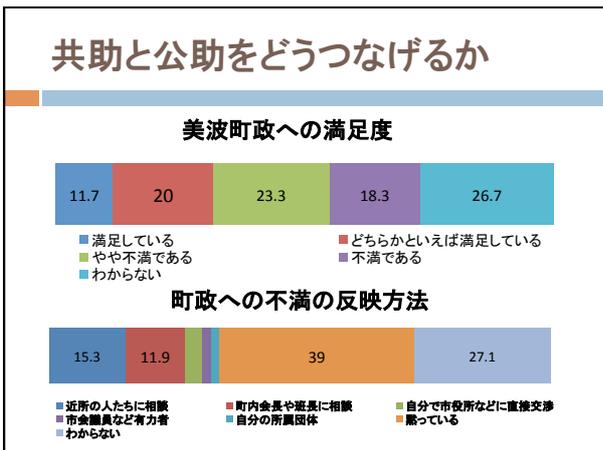
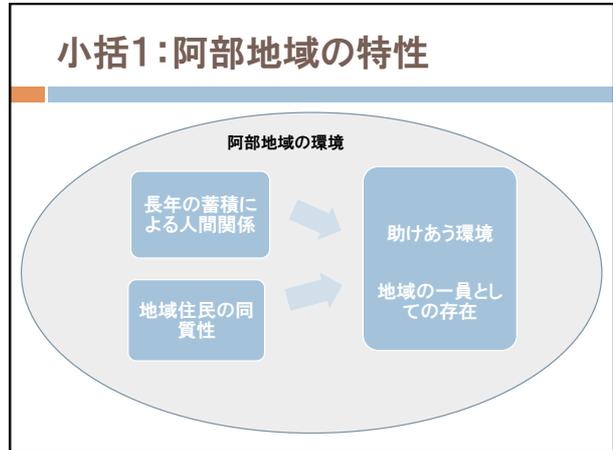
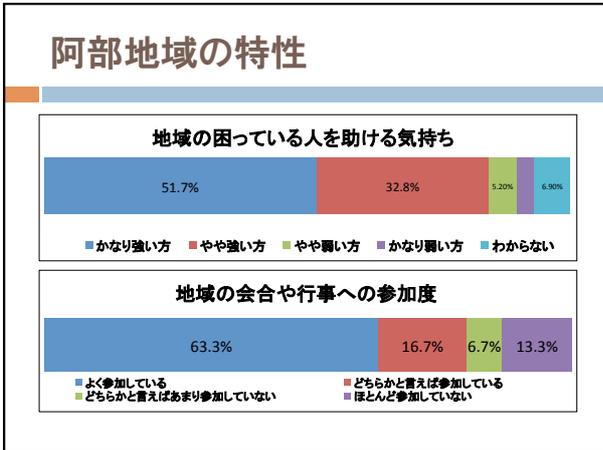
地域の人々の経済的状態が同質であるということは...

余裕のある住民A → 助ける → 余裕のない住民B

一方向的な支援関係は成り立たない

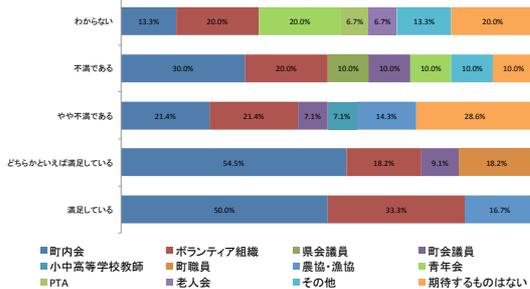
住民A ← 助け合う → 住民B

相互扶助的な支援関係が成り立つ



今後の課題

美波町政へ満足度とリーダーとしての期待



小括2

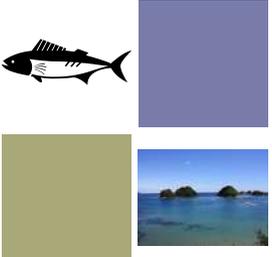
- ・阿部では七割程度の人が町政に対して消極的であり、不満があっても口にだしていない。
- ・高不満層は、集落の将来に関しても悲観的である。
- ・他方、満足度が高い層は、地域リーダーや町内会などを、今後の集落運営の担い手として期待している。

おわりに：行政と地域をつなぐ住民主体の組織づくりの必要性

- ・阿部地域の親密性を生かして地域内での話し合いの場を設け、信頼を寄せる地域リーダーを通して町政とのかかわりを深めていけば良いのではないかと。
- 地域住民による実効的な自主防災組織を形成し、それが行政と地域住民を媒介することが望ましい
- ・そのような自主防災組織の基盤は、必ずしも町内会に限らない
- 地域独自のさまざまな自主防災組織の基盤を、行政が支援することが望ましい

+

「阿部と穴喰の防災活動を比較する」



穴喰班
松山遥
千田佳代子
山本貴大

+

発表の目的と方法

- 目的

災害の記憶や伝承（災害文化）の有無が、現在の防災活動をすすめるうえでどのように影響しているのか検討

地域の災害文化を活かした防災のあり方について考察
- 方法
 - 災害の記憶や伝承がほとんど無い阿部と良く残されている穴喰における防災意識・防災活動を比較
 - 穴喰住民の災害観・防災意識に関する聞き取り調査
 - 第1回目（平成24年9月10日）
昭和南海地震の体験談と過去の地震の記録
 - 第2回目（平成24年11月24日）
穴喰住民の防災意識と防災体制

+

穴喰—災害の記憶や伝承が残る町

- 災害の伝承

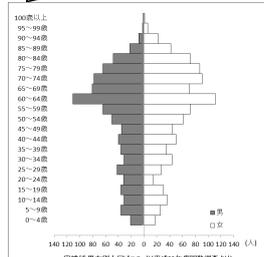
(『震潮記』[田井 2006])

 - 1605年02月03日 慶長地震
 - 1707年10月28日 宝永地震
 - 1854年12月24日 安政南海地震
- 災害の記憶
 - 1949年12月21日 昭和南海地震

調査の課題

- ①穴喰における災害文化の特徴はどのようなものか？
- ②それは現在の防災にいかにかかされているか？

穴喰浦人口ピラミッド
= 少子高齢化傾向



100歳以上
95~99歳
90~94歳
85~89歳
80~84歳
75~79歳
70~74歳
65~69歳
60~64歳
55~59歳
50~54歳
45~49歳
40~44歳
35~39歳
30~34歳
25~29歳
20~24歳
15~19歳
10~14歳
5~9歳
0~4歳

140 120 100 80 60 40 20 0 20 40 60 80 100 120 140 (人)

■ 男
□ 女

穴喰浦男女別人口ピラミッド(平成22年度国勢調査より)

+

災害（昭和南海地震）の記憶

N : 内藤先生 A : Yさん (85歳男性)

A : …ほいでねえ。①私もねえ、経験はしとるけど、あんまり深刻なものにおうてないんですよ。

N : あっそうですか。

A : 地震にはあってるけどね、津波には、割とはよう逃げたんでね。

N : 当時あの—どうでした？あの—、地震起きたのは当時未明でしたよね？

A : 未明、4時、4時ぐらいやね。ほんで私はねえ漁師だったからね。あの一ほの晩妙にね、スルメイカとれたんですわ。

ほれでとれてね、私もいっとたんです。…(中略)…私らのところの近くには、ええ年になるおほあさんがおったんですわ。②その人が安政の経験しとんですわ。やっばほんな人らが、なんせ「地震、津波の時は愛宕」いうん、愛宕山ね。

N : はい。

A : ③ほ—ゆうのがあって、愛宕山に逃げる言わんずくにみな逃げた…

+ 災害伝承に基づく避難行動

N : 内藤先生 B : 田井晴代さん

N : ちょっと疑問に思うのが、みんな、愛宕山に逃げられますよね。地形的にそのくらいしか無いってのもあるんですが、ぼっと逃げないといけない時に山へ行こうって言う風に思うのは…その一、前の人からのなんかがあるんですかね？

B : それはね、だから、江戸時代の間代の時代でも、先の3回の地震津波のときでも、みんながあそこに行つて助かったことが多いので、あそこは助命山だと言われているの。

→**津波の時は愛宕山=助命山という意識**

■**文化の面からの防災活動**

- 自宅の古文書を整理している際に『震潮記』を発見。平成18年に現代語版を出版。近所の小学生や町民の方へ読み聞かせの活動を継続
- 穴喰の昭和南海地震の経験をまとめた体験記の作成
- 災害の記録や記憶を掘り起こし、地域の防災へ役立てようという積極的姿勢がうかがえる。

+ 昭和南海地震経験者の防災意識

T : 高橋先生 C : 木村さん (89歳男性)

T : 今後、自主防災への近隣の隣組ではないですけど、取り組みとかどういったかたちで繋がりを強めていこうと、いったそんな話はあんまり... ?

T : そうですね。やっぱり個人個人が意識してそこは対応するしかないということですね。

C : うん...。⑤もう年寄ばっかやしなあ...。

C : ④ないなあ...。前に出でるといふ人があんまりおらんもんなあ。わしらももの言うん好かん方やしな...。

+ 小括① 穴喰浦における災害文化の特徴

■ **聞き取り調査からわかったこと**

- 昭和南海地震の記憶に関する語りは鮮明であり、人びとは過去の津波伝承・経験をともに愛宕山への避難を考えている。
- 過去の災害伝承・経験の保存・伝承・活用を目指した活動は盛ん
- コミュニティによる防災体制は確立されていない
- 愛宕山に逃げる以外のアイデアはほとんど無い

■ **災害文化の負の影響？**

- 過去の災害伝承や経験が、将来の津波災害リスクやそれへの対処を誤ったかたちに認識させる要因になってしまっている？

+ 自主防災組織の高い組織率

県内の自主防、組織率初の90%突破 大震災で危機感高まる
2012/11/3

徳島県内の自主防災組織(自主防)の組織率が、初めて90%を突破したことが県のまとめで分かった。各自治体による地道な呼び掛けや啓発活動に加え、東日本大震災を受けた危機意識の高まりも背景にあるようだ。ただ、山間部では過疎化の進行で、自主防の基盤となる集落の活力が落ちており、組織づくりが難しくなっている現状も浮き彫りになった。

県防災人材育成センターや市町村の防災担当者によると、各自治体で自主防の活動エリアに入っている世帯の割合を示す組織率は90.1%(4月1日現在、速報値)。前年より3.1ポイント増えた。全国平均は未集計。

市町村別にみると、徳島、吉野川両市と勝浦、美波、海陽、松茂の各町で100%に達している。前年比で最も伸びが大きかったのは12.6ポイント増の東みよしで組織率は79.9%。11.4ポイント増、67.4%の北島、9.7ポイント増、61.0%の石井が続く。

徳島新聞 http://www.topics.or.jp/localNews/news/2012/11/2012_138192074308.html

+ 穴喰浦における自主防災活動

A: Oさん(自主防災組合長) B: 内藤先生 C: 学生

B: 普段の活動って、もしあればですけど、そういう避難訓練的なことっていうのは・・・

A: あー、自主防として、ですよ。自主防を作ったのが多分、平成17年だったとおもうんですけど、だけど⑥結局なんにも動かないまま・・・(中略)・・・で、活動としてっていうんは・・・動いてないんで何とも・・・言いようがないですね。

C: じゃあ、これからの計画とかもそこにはないですかね。

A: ないですね、今のところは・・・

B: ...その一、避難訓練とか。例えばですけど、そういう避難訓練的なことっていうのは・・・

A: ⑦避難訓練は・・・えーつと、まあ、だから、あの、実際何も動いてないんですけど、町が年に1回とか避難訓練を朝の6時とかに・・・

B: 防災の日ですか?

A: いや、そうじゃなくって年中行事で7月の・・・12月?昭和南海のときに合わせてやっているんです。これも、⑧ほとんど逃げていない人はいないですね。

+ 穴喰浦での自主防災活動(つづき)

B: そうですね。あのー、自主防がいろんな準備とか・・・

A: ⑨いや、何もありません。町がサイレン鳴らして、まあ、避難訓練しましょうっていうんで、やってたんですけどね。今もやってると思うんですけど。ほとんど逃げてる人は・・・

B: 見たことがない?

A: ないことはないんですけどね。まあ、田井さんとかは逃げてますけどね。



+ 穴喰浦の防災に対する行政の支援

N: 内藤先生 D:Tさん(地域の宮司)

D: 今、八幡神社のほうでも避難路をこしらえてるんですよ。

N: ああそうですか。

D: ほれはーまだ詳しいのは聞かんのやけどね、何メートルまでの避難路を作るんかはねー

N: 八幡神社は、ええと自治体がついているんですか?海陽町が?

D: ええ、自治体が非常に熱心でね、というの、やっぱりこの前の昭和南海の経験があるんでね。非常に自治体も予算としては、海陽町なんかがつくってくれよんじゃないんですか。

N: はあはあはあー。

B: ほんで案外早いですわ。今年は八幡神社の避難路ですけど、来年度は、これが崩壊せんように山をね、擁壁をずーっと作る予定なんです。ほんで手っ取りばやいののは、南海地震の経験があるんで、県もそゆうの序列つけとんやないんですか。

A: まあそうですわね。県南は今回お金を結構ね。

B: 津波に関してはね、自治体がね中心でやってくれますからな。そこに雑音がはいたらね、スムーズにいかんですわ。

A: じゃあ割と行政が動いてくれるんですね?

B: そうそうそう。工事もやっているんですけど、全然口いれんね。むしろ応援するくらいやね。そうせんと工事できませんわ。

+ 小括② 穴喰浦の自主防・行政による支援

- 自助・共助・公助
 - 自主防災組織=共助、行政による支援=公助
- 聞き取り調査でわかったこと
 1. 自主防災組織の組織率が高いものの、自主防災組織を中心とした防災活動はほとんど無い。
 2. 海陽町主体で実施される避難訓練に、自主防災組織が積極的に参加している様子はみられなかった。
 3. 愛宕山の整備計画があるが、そもそも避難場所の選択肢が無いという根本的な問題点への対処が進んでいない。
 4. 「南部県民局が言ってくれば・・・」といった行政依存体質
- 共助の空洞化と公助とのすれちがい
 - 形だけの自主防災組織
 - 町と地域との連携が十分とれていない
 - 地域住民の行政依存体質

+ 阿部と宍喰における防災の違い

	公助	共助	自助
阿部	△	◎	○
宍喰	◎	×	△

- + まとめ：
県南地域における津波防災上の課題**
- 過疎・高齢化のために防災組織の維持が困難
 - 宍喰浦はその一例
 - 実効的な防災組織が機能していないために、災害の記憶や伝承があっても、住民主体の防災活動に活かされていないのではないか？
 - 阿部は高齢者による防災組織を組織化
 - 「下から」の防災組織づくり
 - **住民自身が組織した実効的な防災組織**による集落点検・個人への日常的な働きかけによる集落の活性化やコミュニティ形成を行う

- + おわりに：**
「下から」の防災組織づくりにむけて
- 地域の災害文化を共助に活用する
 - 災害文化は公助・自助に限れば、活用されている。
 - 共助に関しては、田井さんが積極的な活動をしているものの、それが実際の自主防災活動に活かされているとは言い難い。
 - 災害文化を共助に活用しようにも、自主防災組織の多くは「上から」組織化されたものであり、内実がともなっていない。
 - 実効的な自主防災組合づくり ※地域ごとの組織・団体を活かす
 - 自主防災組合は町内会と重なる形で組織化されることも多いが、各地域には町内会とは異なる組織や団体が存在する。それらをベースにした実効的な組織づくりが必要
 - 【例】 漁協・農協・神社・お寺・ボランティアな組織等
 - ➡ **地域住民間のつながりを育む場をつくる**
(防災コミュニティの成立を目指す)

地域の特徴を活かした防災組織の可能性

八木大斗
水本駿
久喜田彩華

発表の目的と方法

- 目的
 - 地域特有の組織・団体を活かした実効的な防災組織づくりの可能性について考察
- 方法
 - ①阿部地域が周縁化した過程
 - ②阿部独自の組織・団体を活用した地域づくりの可能性

について検討

“陸の孤島”としての阿部

- 伊座利から約3 km余り西南へ下った地点
- 南側は太平洋
- 北側は海部山脈
- 海部山脈の稜線に阿部湾
- 湾に沿った狭い盆地に集落
- 海岸線は荒磯が多い
- 温暖多雨



[由岐町史、由岐町史教育委員会、1994]

➡ 中心部からのアクセスが悪い周縁地域
ただ、昔から周縁だったわけではなく、
周縁化のプロセスがあった。

交通手段の変化と阿部の周縁化

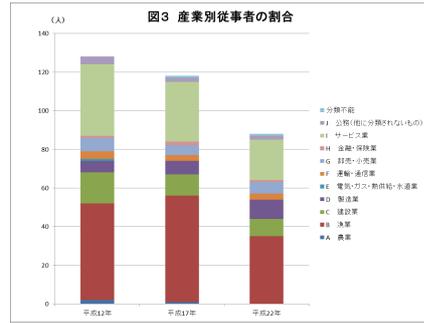
- 海上交通の時代
 - 明治25年 徳島～甲ノ浦航路開通
 - 大正4年 大阪～甲ノ浦航路開通
 - 海上交通によって、中央と繋がっていた
- 陸上交通主義への変化
 - 昭和12年 国鉄牟岐線 開通
 - 昭和13年 航路の廃止
 - 昭和33年 阿部～由岐間の道路（自衛隊道路）開通
 - 山越えが必要なうえ、道路整備も遅れているのに、陸上交通に頼らざるを得ない周縁地域に
- 高度経済成長期の都市への人口流出
 - 現在に至る過疎・高齢化の進行

[由岐町史、由岐町史教育委員会、1994]

防災活動としての地域おこし

- 小括①：阿部の周縁化と過疎・高齢化
 - 阿部は、海上交通から陸上交通への転換にともない、アクセスの悪い「陸の孤島」になった。
 - それ以降、都市部への人口流出が継続し、過疎・高齢化が進行した。
- 過疎・高齢化地域における防災と地域おこし
 - 生産年齢人口が少ない過疎・高齢化地域において、防災組織の維持は困難
 - 過疎・高齢化地域における持続的な防災においては、防災活動の担い手確保は大きな課題
 - 地域特有の組織の活性化や地域おこしによる生産年齢人口の確保は、防災組織の維持に繋がる重要な活動

阿部の主要な産業



阿部漁業協同組合の構成員

- 阿部漁協の組合員
 - 正規組合員・・・68名
 - 準組合員・・・66名
- 漁協青年部
 - 30～40代の組合員で構成
 - 12～3人
- 漁協≒コミュニティ?
 - 1世帯あたりの組合員数 = 約1.1人
 - ほとんどの世帯(あるいはすべての世帯に最低ひとり)に組合員が存在



【阿部漁協組合長への聞き取り調査】

阿部漁協独自の厳しい資源管理システム

阿部漁協における漁業資源管理システム

1. アラメの採取禁止
 2. 投石の推進
 3. タコ・ウニの採捕奨励
 4. 磯建網・イサリによるアワビ採取の禁止
 5. 操業期間・時間の短縮
 6. アワビの採集サイズ規制
 7. 漁業監視
- アワビの採集サイズ規制
 - 阿部の採集可能サイズ
 - クロアワビ 9.5センチ以上
 - アカアワビ 11センチ以上
 - トコブシ 4センチ以上
 - 県の条例では・・・
 - クロアワビ 9センチ以上
 - アカアワビ 9センチ以上

阿部漁協は、独自の厳しい資源管理システムを構築

【小島・山中 1983「アワビ資源の管理について-地島阿部漁協の管理例」Ocean age」号より】

阿部漁協と伊座利漁協の比較

阿部

- 世帯のほとんどに組合員
- 外部の人間は組合員になれない

→地縁・血縁によるコミュニティ的な性格

伊座利

- 組合員20数名
- Iターンを推奨

→外部の人間も参加できるアソシエーション的な性格

[阿部漁協組合長への聞き取り調査]

小括②: 漁協の活性化による地域づくり

- 阿部の主要産業は漁業である
- 世帯のほとんどに漁協組合員が存在
- 独自の厳しい資源管理を行っている
- 伊座利と比べてもコミュニティ的な性格が強い

漁協の組合員≒阿部を支える役割

➡ 漁協を地域づくりや防災の要として考えることは出来ないか？

もうひとつの可能性: 祭組織を活用した地域づくり

- 宮内神社祭り
 - 毎年9月に開催
 - 阿部出身の出稼ぎ者が帰郷する機会
- 過疎・高齢化と祭り存続の危機
 - 祭りの実行に支障をきたす危機的な時期があった
- 祭りの再活性化
 - 過疎や高齢化などの影響で失われつつあった、かつての祭りの活気を取り戻そう
 - 平成24年休日はさむ4日間に日程を変更
 - 阿部出身者ネットワークへの呼びかけ
 - 町外の出身者にも参加の呼びかけ



[2012/9/25日付 徳島新聞より]

地域が主体となった外部とのネットワークの(再)創出

考察: 「下から」の防災にむけた地域づくり

- 自主防災組織としての町内会 [庄司、2013]
 - 自主防災組織は町内会を基盤として形成されている場合が多い
- 「上から」の防災
 - 「自主的」とされる自主防災組織の組織化においては、国のデコ入れが強くはたらいている
- 町内会の弱体化
- 「下からの」防災の重要性
 - 地域住民を防災の主体に
 - 住民が自らの地域の可能性について気づき、主体性を持って地域おこしや防災活動に取り組んでいくことが必要
 - 地域の特性を生かした防災組織の構築
 - 地域生活に密着した組織が、自主防災組織の基盤となるべき
 - そうした組織は、必ずしも町内会ばかりではない
 - 漁協・祭り組織・ボランティア組織等…も自主防災組織の基盤になりうる